

ぼくは、世界が公平であると言う事を守る為に、弱き者を叩く事にした

Sub Sonic

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界恐慌により、国家が連鎖破綻した。

それを端に発した企業のクーデターは、やがて国家解体戦争と呼ばれるようになった。

企業側の使用した新型兵器、ネクストの登場により、圧倒的多数の軍事兵器を持つ国家軍は、僅か数週間で企業側に敗北した。

だが、依然として世界には火種がくすぶっていた。

これは、生き残るために故郷を焼いたネクストに乗る少年の物語である。

目次

始まりの歌

第一話	Head On	1
第二話	In Fight	6
第三話	ユメ	9
第四話	RTB	14
第五話	ボクラノ・ネガイ	18
第六話	Lorelei	24
第七話	財団	32
第八話	コロニー大阪	35
第九話	Mission Sarajevó	44
第十話	Scavenger	52
第十一話	HELIX	58
第十二話	Alicemestra	67
第十三話	Hot scramble	79
第十四話	廃墟	86
第十五話	Underground	99
第十六話	電気羊は人間の夢を見るか1	109
第十七話	電気羊は人間の夢を見るか2	116
第十八話	Intruder	127
第十九話	機械と人間	139
第二十話	Play Weasel 01	153
第二十一話	Play Weasel 02	165
第二十二話	Re:boot / 再起動	173
第二十三話	Steel Beasts / 鋼鉄の猛獣	184

設定集

ソラの歌

扉を閉じる者達1

扉を閉じる者達2

Shoulders of Titan

役立たずの人形1

役立たずの人形2

嘘は真実となる

七番目の天使 / 七つのラツパ

神の杖

嵐の夜に

空を支配する者

Eye of God

箱入り娘

傷んだ林檎

宵の明星

漂流

Gravity 1 / 2

Gravity 2 / 2

Reentry / 再突入

落日の獅子

アフリカの赤い大地

Fox in the henhouse

Aggressor

地上戦

414

制圧戦

422

マツサワ港急襲作戦1

432

マツサワ港急襲作戦2

439

マツサワ港急襲作戦3

449

始まりの歌

第一話 Head—On

昔、ある人が言った。

人の本性は殺し合う事では無く、慈しみ合う心であると。

それでも殺し合いをしてしまうのは、それが内面に閉じ込められており、発揮できていないだけであると。

でも、ぼくは知っている。

そんなのは嘘っぱちだと言う事を。

昔何処かで偉い人が言っていた気がする。

努力は何時か報われると。

でも、ぼくは知っている。

そんなの嘘っぱちだと言う事を。

眼下で焼ける街並みはそれを肯定するかのように何処までも広がっていた。

地面に倒れたビルの残骸から見える鉄骨は、まるで朽ちた蛇の骸の
様だ。

ここが、地獄だと言われて肯定する人は居ても、半年前まで綺麗な街並みをした、島国有数の観光地であつたと覚えている人はどれだけ居るだろうか。

燃え落ちた瓦礫は所々金色の装飾が見え隠れする。

世界遺産に登録されていたであろう残骸は見るも無残に焼け焦げており、残骸のあちこちに弾痕が見え隠れしていた。

僕以外の人間が見れば只の瓦礫でしか無いだろう。金色に輝く神々しいその姿は、僕の記憶の中にしか存在しない。

『キャンサー^S1、高度が高い。頭を上げると地対空ミサイル^Aに狙われ
ますよ』

感傷に浸る僕の考えなんかお構いなしに戦域オペレーターの声が頭の中に割り込んできた。

脊椎に取り付けられた神経接続^{ニューラ・リンク}によって脳髄に直接鈴の音のよう

な澄んだ高い声が響き渡る。

「解ってる。それでいい」

オペレーターの抗議の声を打ち消すように、電波警戒機^{RWS}の警告音が鳴り響く。

眼球に直接投影された機体情報が更新されているのか、データログの流れが急激に早まっていく。

機体の戦術電子戦システム^{TES}は、電波照射が索敵では無く、攻撃用の連続的な物に変化した事を察知したようだ。

同時に機体各所に取り付けられた紫外線センサーが、ミサイルモーターの発する光学エネルギーを探知した。

脳髄に鳴り響くミサイルアラートの音。

「——今回の任務は只の偵察任務の筈です。交戦は許可されていませんよ」

「先に撃ったのは向こう。これは只の自衛処置。上の許可は必要ない」

オペレーターは未だ何か言いたそうであった。だが、それを無視して思考を機体制御システムに集中させる。

機体の制御システムは即座に反応した。

『ジェネレーター戦闘出力、臨界状態へ移行。戦闘モード、起動します』

戦闘用AIの無機質な声が通信に混じる。それと同時にジェネレーターから鳴り響く共鳴音が鋭さを増していく。

そこに混じる声。

『あなたと言う人は——』

オペレーターである彼女は呆れたように吐き捨てた。

それを無視して火器管制装置^{FCS}に指示を送る。量子コンピューターは即座に兵装システムを自己診断、問題ない事を僕の脳髄に告げてきた。

「これは只の殺し合いだよ。殺そうとしてきたんだ。殺されたって文句は言えない」

彼女は未だ何か言おうとするが、それを飲み込むようにして言っ

た。

『——分かりました。念のため、本部に応援を要請しておきます』
「要らない。それに、どうせ来やしない。企業が欲しいのは単騎での
戦闘データ。応援を寄越したら意味がなくなる」

そう言いつつ、僕は戦いが数分で決着するだろうと踏んでいた。
殺し合いは秒単位で動く。だから交戦中の敵が、新たな応援を呼ぶ
前に移動する必要があった。そうして、敵が再集結する前に各個撃破
していく。

数における劣勢に立たされた軍勢が好む戦法を僕は使っていた。
だから、余計に足の遅い通常兵器ノーマルの支援は足手纏いであった。

「そもそも相手は通常兵器ノーマル。次世代型兵器ネクストの相手じゃない」

コックピットに鳴り響く雷鳴にも似た音、それは鋼鉄の人形が
微粒子装甲プライマルアーマーを纏った事を意味していた。

『それなら、何故企業はこんな使い捨てみたいな——』

「キャロル、時間切れだ。君の抗議は基地に帰ってから聞く事にする」
彼女の抗議を遮ると同時にRWSから発せられる警告音のトーン
が変わり、自動迎撃システムが作動した事を示すデータログが流れ始
めた。

無数のミサイル群は迎撃用レーザーの洗礼を浴びているらしい。
メインカメラ越しの夜景に無数の火の玉が落ちていくのが見えた。

中には戦闘機と思わしき火の玉も幾つか見える。羽を挽がれた鳥
の様に、クルクルと円を描きながら落ちていく。誇り高き鷹もネクス
トの前では七面鳥も同然だった。

僕はそれを眺めながら、RWSから割り出された敵性レーダーの位
置に120mmライフルの砲弾を打ち込んでいく。

連続で発射される滑腔砲弾は装填管を分離させると夜空に吸い込
まれていく。

多目的榴弾は間を置いて遠くで雷鳴の如き光を連続して放ってい
た。

データログに表示される目標破壊の文字列。

無機質にそれは更新され続けた。

人の命がビットデータに変換されていく光景はいつ見ても僕を陰鬱な気分にする。RWSに表示された全ての敵性レーダーを破壊するのに時間は掛からなかった。

作業は単調に進んだ。

制空権を確保した僕は、撃ち降ろすようにして島国ご自慢の主力戦車を60mmマシンガンで射撃していく。発射されたHED P弾は戦車をキャビアの缶詰に変えていった。

戦車の車体に内蔵された砲弾は良く燃えるようだ。トツプアタックに配慮されていないこのMBTはマシンガンで十分破壊した。

データログに表示された脅威度の高い目標が無くなった事を確認した僕は、一番脅威度の低い目標に切り替えるように戦闘用AIに指示を出す。

目標に最適な兵装を自動選択した戦闘用AIはFCSに指令を送り、ミサイル迎撃用レーザーで恐るべき虐殺を開始していった。

データログをぼんやりと眺めながら瓦礫の山と化した町の上を飛行する。アリスの冷徹な仕事成した火の手は多くの煙を夜空に舞い上げていた。

静けさに包まれた静寂の町の上に漂うのは人の焼ける臭いだ。

実際にはネクストの嗅覚センサーが捉えた情報であったが、神経接続された機体の情報はダイレクトに僕の脳髓に届いていた為、吐き気を催した。

力の差は歴然であり、オペレーターであるキャロルの心配は杞憂であるかの様に思えた。

実際、SAMのミサイルの内、数発はネクストに届いていたが、メガジュールクラスの運動エネルギーを持ったミサイルも、プライマルアーマーの表面にさざ波を立てる程度のダメージしか与える事が出来なかった。

だからこそネクストであったが、この兵器には弱点が幾つかあった。

プライマルアーマーは無敵じゃない。人間の作ったものだ。完璧なアイギスの盾とはいかない。

この盾は自動修復する事によってその損傷を埋めるのだが、その速度を上回るエネルギーを受け続けると、防御機構が破綻するのだ。

そしてアイギスの盾の性質上、光学兵器には極端に弱いという特徴もあった。

だから企業はその脆弱性を埋めるべく、光学兵器用の装甲を盛んに研究していた。実際にはどの程度の防御性能が必要であるか、それが知りたい様であった。

幾ら企業がその脆弱性を隠した所でいつかそれは看破される。その脆弱性を放置するほど企業も馬鹿じゃない。

だからその答えを欲しがった。そしてその答えは実戦の向こう側にしか存在しない。なら、実戦にネクストを投入すればいい。それが彼らの答えであった。

だが、撃墜されたと言う情報は成るべく隠したい。だからこそその僕らである。堕ちても問題ない非公式のネクスト部隊。

自らの万能性を示す為、あえて自身の持ち上げれない石を作り出し、後で重さを変えろと言う訳だ。

何処かの島国の老人達には真似できない芸当である。

それに噂ではあったが、既にネクストがノーマルに撃墜されたと言う話もあった。僕の耳にも入ると言う事はこの島国の軍隊にもその情報が行ってるかもしれないと言う事であり、どの程度ネクストの情報で島国の軍隊が持っているのかも知りたいのかもしれない。

「物は試し、試される方は堪ったものじゃないよな」

焼け焦げる死体の上を飛行しながら一人で呟くと、帰路に就くのであった。

第二話 In Fight

ジェネレーター奏でる共鳴音が相変わらずコックピットに鳴り響いていた。時折メインブラスターが吐き出すプラズマトーチの乱れる音が聞こえる程度で、戦いの終わった戦場の空は静寂その物であった。

ひっくり返った戦車の残骸をメインカメラ越しにぼんやりと眺める。僕は数年前に歴史番組で見た湾岸戦争の映像を思い出していた。

戦力に勝る多国籍軍の戦車部隊がサダムフセイン率いる戦車隊をボコボコにしたあれだ。

当時、ソ連が作り上げた最新鋭戦車であるT72は非常に強力な戦車だと思われていた。だが、アメリカの誇る劣化ウラン弾と劣化ウラン装甲の前に敗れ去った。

悪魔の様に恐れられていたT72は一転してキャビアの缶詰と呼ばれるようになった。それ程までにアメリカ軍のM1A1H A戦車の攻撃力と防御力は隔絶していたと言う証拠でもあった。

公式には敵による損害は無いとされたM1戦車であったが、実際にはT72に撃破された記録があった。

戦闘の詳細は伏せられていたが、そのM1を撃破したT72は燃え盛る友軍戦車の影に潜み、敵に発見される危険のあるアクティブ暗視装置を切り、撃破された友軍戦車の炎に照らし出されたシルエツトだけを頼りに肉眼でM1戦車を砲撃したそうだ。

それだけならM1の装甲を貫く事は叶わない。何せ、T72の主砲はM1の正面装甲を至近距離からでも抜けないからだ。

だが、この戦車乗りは考えた。戦車の弱点についてだ。

正面で一番装甲の薄い場所、それは戦車のターレットリングだ。砲塔と車体の継ぎ目であるここは、構造上装甲を施す事が出来ず戦車共通の弱点なのだ。

砲手はそこにシルエツトだけを頼りにして命中弾を叩き込んだ訳だ。初弾からそこを狙っていたと言う事は自身の砲の貧弱さを理解していたと言う事だ。

自分の弱さを解っている相手程怖い物は無い。
戦車乗り然り、ノーマル然り。

だから僕は視界の奥で眩いばかりの閃光が現れた時に躊躇することなく緊急回避を行えた。

急激な慣性変化によって機体が軋み、メインフレームに掛かる過負荷を警告するアラートが鳴り響く。

超高温のプラズマトーチが吐き出され、衝撃波と共に一瞬で機体を真横に移動させた。

その機体の有った座標に圧倒的熱量を持った光の帯が通過していくと同時に勘だけを頼りに再び機体を違うベクトルに動かす。

吐き出されるプラズマトーチの衝撃波を貫く様にしてもう一条のレーザーが通過していった。

「上手いな。教科書通りの見事な十字砲火だ」

データログが勢いよく流れているのを横目で見ながら感嘆するよ
うに呟いた。

「相変わらず電波警戒機の警告音は聞こえない。」

敵はレーダーを使っていない証拠である。これは勿論、逆探を避ける為だ。

良く訓練されているし、対策も考えている証拠だ。

そう思いつつ、メインカメラの画像処理によって割り出された敵目標に向かって射撃していく。

吐き出される巨大な葉莖。同時に発射された有翼徹甲弾は、レーザー砲のレンズを射抜いていった。

硝煙を残して残像の様に超高速で移動していくネクストは異次元の機動性を持っていた。

ジェネレーターから無尽蔵に生み出されるエネルギーを糧にプラズマブースターを駆り、ビルの間を潜り抜けていく。

それを追いかけるようにして別の超高出力のレーザー砲がビル群をチーズの様に切り倒した。

倒壊したビルに潰される破棄された自動車達。

その間を縫うようにして進むネクスト。

プライマルアーマーによって空気を押しつけていくネクストの後ろには巨大な乱流。

木の葉の様に舞う、道路脇の看板。

超音速で移動している証である衝撃波は、辛うじて残っていたビル群の窓ガラスを軒並み粉碎していった。

長距離での射撃戦では不利と判断した僕は高揚感を抑えきれずにいた。

剥き出しの害意と考え抜かれた戦術。そのどれをとっても、一朝一夕にできる物じゃない。

機体のデータログは激しく動いていく。

スタビライザー損傷と言うログが一番上に表示されていた。

どうやら、姿勢制御機構の一部を持っていかれたらしい。

機体のステータスバーに赤色で着色された部分を眺めながら、巨大なレーザー砲の砲身にマシンガンを打ち込む。

粉々に粉碎された砲身が木の葉の様に空に舞い散るのを見届けることなく、ビルの陰に隠れた。

その横をレーザー砲の光が通過していくと、額から汗が零れ落ちていく。

「成程、七面鳥の中に狼が混じっていたか。或いは不死鳥フエニックスの類か――

機体から送られてくる情報は、光の様に輝いて見える。それは何処か命の輝きにも似ているような気がした。

「今回の戦闘は楽しめそうだ」

そう囁いた言葉は焦げ臭いが立ち込めるコックピットに吸い込まれていく。

戦闘用AIは回避を推奨しているようだ。コマンドリストに撤退の文字が見え隠れしており、その文字は何処か子供はしやみたいに燥ぐ僕を諫めるようであった。

第三話 ユメ

僕と彼女が出会ったのは国家と言う組織が健全に機能しているように見えた時期だった。

あの頃は未だ学校と言う生産ラインが生きていた頃であり、その中で不合格品として排出されたのが僕と言う存在だった。

工場の生産ラインで言えば即廃棄だった僕は、人間と言う種が作り出したジンケンと言う基本仕様フォーマットによってある程度生かされていた。

自らの境遇を認識する機能を持っていなかったらもう少し違う人生を歩んでいたかもしれないが、運が悪い事に僕の脳髄には自己認識機能がしっかりとインストールされていた。

それならコミュニケーションソフトもインストールしといてくれよ、と何度世界に居ない筈の神様を恨んだ事か。

そんな僕を癒してくれたのはネットだった。

沢山の情報は僕の生きる道を示してくれる気がしたから、その情報の中に漂っている間は、生かされる痛みも少し和らいだ。

だからだろう。

胡散臭い実験に参加したのは。だけど、それが後に彼女と出会う最初の切っ掛けだった。

当時僕は幾つかのヘッドギア式の仮想現実Vインターフェイスを使ってネットの海を漂っていた。

だけど、これは通信速度が遅かった。

眼球と言う通信プロトコルを駆使するのは嫌では無かったが、どうにも通信速度が眼球の機能に制限されたのだ。

簡単に言うとは非常に疲れる。

なので、視覚野に直接投影するVR機器を試してみたいと純粹に思ったものだった。

手術はとても簡単だった。

手術用AIが制御するナノマシンによる完全非侵襲型手術であった。

アメリカ国防高等研究計画局がかって研究していた脳内の神経細胞一つ一つの神経線維に直接アクセスする方法である。

詳しくは知らなかったが、僕が手術を行ったその時点で本格的に人間に施した例は、数えるほどしか無かつたらしい。

胡散臭いにもほどがある。

だけど、そんな僕の疑いも吹き飛ばす程のネットへの接続速度。

素晴らしいの一言であったが、手術を担当していたオペレーターがこのシステムの注意点について、気になる事を言っていた。

一つ、脳髄とネットを繋ぐには通信用人工知能を介して行う必要がある。

二つ、僕の脳髄の神経ネットワークの一部を外部から書き換え可能にしなければ通信は成立しない。

三つ、僕の脳内に仮設した通信用の書き換え可能の領域は、増やせば増やす程、脳髄が焼ける危険性が増える。

四つ、通信データ権限は、あくまでもAI側が握っており、通信用AIが不必要と判断した物は自動的に僕の脳内から削除され、その消された情報を知覚する手段は僕側には無い。

これらの通信使用は、あくまでも僕の脳髄を守る為の物であるらしかったのだが、これらの情報を精査した結果、僕はまんまと自分が実験用モルモットにされたのだと結論に至ったのだ。

だけど、法外な値段の報酬によって僕はそれらを飲み込んだ。

今にして思えば甘かったな、と思った。

だって、その莫大な報酬は、のちに起こったこの国の経済危機によって、只の紙屑になってしまったのだったから。

僕の国で起きた経済危機は色んな要素が絡まり合って出来ていた。

輸出産業の激減や、少子高齢化、AIによる生産ラインの完全無人化等々：

あげればキリがないが、あえて言うのであれば意思決定機構の老朽

化に他ならないと思う。

凝り固まった思想は斬新なアイデアをもたらす存在を駆逐したし、老朽化した神経細胞に活発な活動など出来るハズも無かった。

生物学的無理を通そうとする方がおかしな話なのだ。

足が無い人間に歩けと言う様な物だ。

そんな老朽化した人間達の集合が作り上げた社会が、この新しく登場した人工知能と言う存在の重要性を理解出来るハズも無く、彼女達が操る様々な機械に対して、新たな商品価値を見出せるはずも無かった。

僕が手術に使った手術用AIや、通信用AI、次世代型兵器など。

当然それらは直ぐに企業の最重要輸出商品に成ったのだから、それらを生み出せなかつた企業の巢窟であるこの国は、とつくの昔に破綻への道筋が決まっていたようなものだった。

そもそも、若者の数に対して老人の数が余りにも多過ぎた。

最終的に隠匿されたみたいであったが、一説では僕ら一人当たり6人の老人が乗つかつていた計算になるらしい。

でも、碌な経済活動をしていなかった僕の肩には、誰も乗っていないかつただろうと当時の僕は思っていた。

この世界が良い意味でも悪い意味でもゼロサムゲームである事も知らずに。

僕が人の役に立っていたってという事を教えてくれたのは彼女だった。

何処から拾ってきたのだろうか、彼女はネットに漂う無数のビツクデータを解析して、経済活動規模が同じ社会であれば、失業者と再雇用者の数が等しく成る事に気が付いた。

つまり、生かされる人間が生きる側に成ると、その分誰かが生きる側から行かされる側に転落すると言うのだ。

経済活動の規模が均等であれば、自ずとパイの大きさは同じになる。

ならば、そのパイを奪い合う人数も決まってくるという事を、彼女

は言いたかったのだろうと思う。

僕もうまく言語化出来ないが、彼女と直接脳髓を接続していたので、語弊があるとしたら僕の言語能力の低さのせいだ。

彼女に言わせると僕は言語能力以外も抜けていたらしいが、僕にはソレを知覚する手段が無かった。

揺蕩う泡の上に存在するような意識の中、僕は自分が夢の中に居る事も、彼女の名前を思い出せない事も認識できずにいた。

過去の出来事を夢見ている。

それが解る位、認識レベルが上がって来るのを実感していた。

神経接続端子越しに戦闘用AIが戦闘状況の洗い出しを行っているのが解った。

戦闘用データログの文字が点滅しているのがその証拠だ。

本当は点滅などしていない。

だけどネクストとパイロットの通信用プロトコルの一つであるアレゴリー・マニユピレート・システムは、接続するパイロットの脳内に存在する書き換え可能エリアをスキャンする時に、脳の視覚野にハレーションの一種を引き起こす事がある。

これによって視覚情報にグリッチが乗り、点滅しているように見える事が多々あった。そして、僕の脳髓をアリスがスキャンする理由は一つ。大量の分析データをパイロットに転送する前準備だ。

端的に言うと、AMSを統括するアリスはどうやら僕の状態を気にしているらしかった。

「大丈夫アリス、もう起きたから」

先程まで見ていた霞のような情景は既がない。だけど、無い、と言う事を知覚するには有った、と言う事を認識して居なければならぬ。

だから、今の僕には泡のように弾けた霞の中身を知る術は無い。

よく、夢は泡の様だと例えられる。それは夢は波間に漂う泡のよう

に何時かは消えてしまう儂さを持っているからだろうと僕は思う。

そして、現実はその泡を砕く波の様だ。

だってそうだろう。

夢をぶち壊すのは何時だって現実だ。

僕がぶち壊した町も兵器も機械も戦車も、戦場に立ち込める肉の焼ける臭いも全て現実だ。

破壊された戦闘車両にべつとりとこびり付く赤黒い染みは、儂さの欠片も無い。

どれもこれも僕の脳髓にこれでもかと、貼り付いて来る。

吐き気を催す程の悪臭は、夢の中では味わえない程の鮮明さを保っていた。

だから僕はここが現実だと解った。

次世代型兵器の欠点は各種センサーが鋭敏過ぎる事かな。

そうして、僕は現実を腐し、夢の内容を振り払うようにして、送られて来る現実を受け止めるのだった。

第四話 R T B

雨音が何かに遮られる音が木霊している。

バチバチという放電音がガラスの破片みたいに、僕の聴覚野に突き刺さる。

高音質スピーカーカーで再生される音楽の高音域が耳に刺さる感じに似ている。

でも、雨のお陰で肉の焼ける臭いは消えてくれた。

今は雨の匂い。

少しだけ煤けた臭いも混じっていたが。

この新型兵器の寄越してくる情報は毎度の事、肉体で感じる物より解像度が高い。

それだけ情報量が多いと言う事だったが、アリスに言わせると、人間の脳の情報処理能力が低いだけだそうだ。

僕はアリス越しにしかネクストの凄さが解らなかつた。

だがネクスト自体、彼女の体なのだから人間の認識能力などその程度と言う事なのだろう。

そりや第七世代のボトムアップ型戦闘用AIに比べれば人間なんか、人間とネズミ位の認識能力の差があるのだろうけどさ。

そう思いつつ、敵電波情報を収集する。

雨音に混じって敵の交信が入って来る、と言ってもデジタル情報なので、人と人が喋っている訳じゃない。

敵側の機械と機械がお喋りしている声を盗み聞きしている訳だ。

これらの情報にアリスは手早くタグを張り付けていく。

勿論、敵性情報の個体認識の為だ。

機械にも個性がある。

それぞれに通信プロトコルと言う言語があり、それぞれの通信機器内部の集積回路は、人という所の国みたいな物だ。

その国独自の価値観があつて、その国独自の言語があつて、その国独自のルールがある。

そう言う訳で、それらが寄り集まった連合国みたいな物が、敵であ

る旧自衛隊国家軍が使うC4Iデータリンクと言う奴になっている訳だ。

それらの文化や言語に精通しているアリスなら、その情報を丸ごと掬い上げるのは造作も無い事だった。

だけど僕は生憎と人間であり、彼女機械達の交わす言葉に疎かったの
で、あくまでも彼女が教えてくれる範囲でしか理解できなかった。

聞いたところで只のノイズにしか聞こえないだろう。

だって、僕の耳は音を拾う為の物であってデジタル信号を翻訳したり、一昔前の機械が百億年掛かっても解けない暗号を一ミリ秒で破る為にあるわけじゃない。

だけど、AMSを介してなら彼女達の言葉が一部だけど僕にも解る。

だからこそリンクスと言う名を僕らネクストのパイロットは持っているわけだ。

「有り難うアリス、助かるよ」

そう言いつつ、敵情報を更新した彼女に呟く。

勿論、いつも通りスルーされる。

でも、それでいい。

僕と彼女の間にはAMSがある。

それが僕が孤独じゃない証であり、彼女もまた孤独じゃない証だった。

僕はアリスが傍受した情報によってもたらされた敵の動きを確認するべく、脳内の仮想メモリーにアクセスする。

アリスによると、敵は琵琶湖の周辺に再展開しており、二個師団が陣地を構えているようだ。

その中には例の高出力レーザーも含まれており、流石にその情報はアリスが気を利かせて企業側に上げたようだ。

だからだろうか、企業は迅速に動いた。

彼女によれば、敵の布陣に康応して、大阪湾周辺に展開していた企業軍が大阪市に上陸、市内に展開を済ませていた。

大阪湾の写真にはGE社直轄のネクスト専用輸送タンカーが三隻

見える。

どれも巨大なタンカーを改造した物だったが、重油の代わりにネクストと大量の修理部品や、その他地上支援機器を積み込んだ船は、かつてアメリカが誇った巨大空母より大きかった。

「GEの最新型が二機、AGEのユーロネクストが一機。勢揃いだな、こりゃ」

投影された映像を見ながら呟く。船には律儀に社名が浮かんでいく。

僕に乗っているReytheon社製のネクストを含めると、この島国に存在するネクストは四機と言う事になる。

こんな小さな面積の島に三機のネクストを追加で寄越すなんて、そうそうお目に掛かれる事態じゃない。企業が本気になった証だ。

いよいよ引導を渡す時が来たのだと僕は悟った。と言う事はこのチキンレースもそろそろお開きかな。

そう思っていると、案の定、データログ上段に本社通信と出てきた。要は電話に出ろや、と言う事らしい。

僕は渋々通信回線を開くのであった。

大型の垂直離着陸機が遥か彼方に見える。

丁度MV22オスプレイを巨大化させたみたいな見た目の奴だ。

メインカメラの高解像度では大型機のエンジンから吐き出される揺らぎまで見える。

それは丁度朝日を背にして向かってくると、丁度僕の真上でホバリングし始めた。

『T2データリンク正常、システム、AI管制モードに移行します』

アリスの甲高い声が聞こえる。それに答える男性の声。

恐らく空母から垂直離着陸機を遠隔操作しているオペレーターの声だろう

『データリンク確認した。コントロール権移譲、You have control』

アリスが再びそれに答える。データログにアリスが正常に離着陸

機を操作している事を告げる文字が出て来る。

『I ^{アイ} have ^{ハブ} control ^{コントロール}……機体のトラッキングを開始――』

アリスは冷静に機体の降下率を僕の脳内に送ってきた。

相変わらず乗り物の操縦が上手い。

何時も通りの完璧なホバリングで僕の頭上6メートルに輸送機を持ってくる。

紐で吊るされているかのようなピタリと静止したホバリングは、人間のパイロットには到底出来ない芸当だろう。

軍のヘリパイロットが大量に失業したと言う話は本当かも知れない。

僕はそう思いつつ、ネクストの腕部に格納されていた補助アームを展開すると、アリスがハンガー内のガントリーにマシンガンとライフルを引っ掛けてくれた。

補助アームの操作をアリスに任せ、僕はハンガー内に設置してあるハンドルを握り、ネクストを懸垂の要領でハンガー内に仕舞い込む。

機体は一瞬グラリ、と揺れる物の、直ぐに推力を調整してホバリングを続ける。

僕が操縦していたなら今ので絶対墜落していただろう。

そう思っていると、ハンガーの巨大な扉が閉まっていく。

観音開きの扉が完全に閉じると機内は漆黒に包まれた。

漸くセーフティゾーンに帰れると言う安堵感で欠伸が出そうになる。

「相変わらず人間泣かせな腕だね、アリス」

そう呟いて、彼女の操縦する機体のハンガーに身を委ねるのであった。

第五話 ボクラノ・ネガイ

薄暗い部屋に幾つもの光が差し込む。

それぞれの光は目まぐるしく動いており、その光点には番号が振られていた。

それらの光点の近くに赤い表示が現れる。

目標と赤字で表示されたそれは、画面の中を縦横無尽に動き回る。それに並行して付近の白い光点が黒く塗りつぶされていく。

その様子を苦虫を噛み潰したかのように見つめる男達。

「で？誰が射撃許可を出したんだ？」

沈黙が支配する。

「誰が射撃許可を出したと聞いている!!」

テーブルの上に置いてあったカップがひっくり返り、黒い液体が派手に零れ落ちた。

「落ち着いてください！准将殿！」

「落ち着けど？ たった一機の機動兵器に4個中隊の高射特科部隊が全滅させられたんだぞ?! 防衛の要である地对空レーダーを失った我々は、裸も同然だ！今、敵の航空部隊に攻められれば間違いなく地上部隊は全滅だ！」

ざわめく様に動揺が広がっていく中、一人冷静さを保った軍人が言った。

「そんな事より、敵の機体の写真は？ あれだけ派手に暴れてたんだ。一枚くらいは在るんだろうな？」

「は、はい！ 撮影に成功しています！ 今、出します」

そう言ってディスプレイに鋭角的なデザインの人型兵器が映し出される。

どよめきの中、一人それを鋭い視線で眺める将校が呟く。

「これがパックスの死神か——それにしても、あれだけの数を揃えた高出力レーザーもこれでは只の的だな。完璧なアイギスの盾を抜ける槍を手に入れた我々が、今度はその機動性で圧倒されるとは……全く……とんでもない物を作ってくれたもんだ。それに、機甲部隊の

半分もさっきの戦場で潰された。いつ見てもネクストとノーマルの戦いは一方的だな」

そう呟いた彼の前のディスプレイには無数の光の帯の中を縫うようにして駆けまわるネクストが映し出されていた。

「クソ！一発でも当たりさえすれば…!!」

そう、当たりさえすれば。誰もがそう思った。

だが、現実はその行かなかった。

必ず命中するはずのグングニルの槍は、神速のネクストを捉える事が出来なかった。

「たればの話は置いておけ。今は敵を食い止める話をしなければ。それにしてもこのタイミングで停戦協定を持ち出してくるとは」

彼は考えていた。ネクストの弱点についてだ。

過去にあつた幾つもの戦いで解つた事。

それは、ネクストのパイロットは長期戦を極端に嫌う事。

「やっぱり、ネクストのパイロット、疲弊しているのかもしれませんがね」

「確かに、それは在るかもしれない——神経接続は脳に負担がかかる。アフリカ大陸での戦いでも平均30分でヤツ等は撤退していた」

「なら、この停戦協定は蹴るべきなのでは？」

「いや、それは得策じゃない。ネクストのパイロットが戦える状態じゃないと決めつけるべきじゃない。通常のネクストなら攻めるのも手かもしれないが……あのレイセオングループのネクストは違った。奴は二回の戦いで平均6時間以上戦っていた。有り得ない事だ。もしかしたらパックスは何か新しい操縦システムを開発したのかも……」
彼は思った。アフリカ大陸で英雄とたたえられたノーマルのパイロットである彼は、ネクストの弱点を熟知していた。

だが、傭兵時代に成した偉業が彼を慎重にさせた。

「パックスは常に己の弱点を克服してきた。過去と同じ手が使えるとは思わんほうがいいかも知れんな……」

それは己の自負心に対しての呟きであつた。

傭兵の長生きの秘訣は臆病さであり、それを無くした者は例外なくこの世からいなくなつた。

過去、数多の戦場を駆けてきた彼が導き出した生きる哲学は今も残っていた。

「准将殿、停戦協定を結びましょう。今は敵の情報が少なすぎます。あのネクストの弱点を探る時間が欲しい」

「そう、だな。我らにはそれが必要だ…もしもの事に成れば君にも出撃してもらうかもしれん…その時は頼んだぞ」

「解っています准将。その為に私は日本に帰ってきたのですから」
そう言つて作戦会議室から出ていく。

その先には黄色い砂が所々に付着している黒鉄の輝きを持つ人型兵器が見えた。

幾つもの擦り傷と、装甲表面に付いた弾痕が、使い込まれた刀のような輝きを放っていた。

空調の効いた部屋に巨大な液晶画面。

それに、白を基調とした壁紙が清潔感のある空間を思わせる。

戦闘から帰還した僕は、真つ先にキャロルに呼び出された。

「言いたい事が山ほどあります。ええ、山ほどありますとも…」

「別に怒られるようなことはしていない。企業にデータを高く買い取ってもらつたし、肯定はされても否定はされてない」

「ええ、貴方に理解出来るとは期待して居ませんが…もう少し自重してください」

「なにを？」

「……」

沈黙。

「……—そんなにお金が必要ですか？今の貴方はそこまでお金に困っていないでしょう？」

「そうだね。使う時間無いし、使う気もない」

「じゃあどうして…」

どうして、と聞かれて答えに詰まる。

戦闘データが欲しい。只それだけだ。

僕、いや、多分アリスの思考に流されている部分もあると思う。情報とは人工知能にとっての血肉だから。

彼女がそれを求めるのは仕方のない事なのだろうと思う。

問題なのは僕がそれに流されていると言う疑念をキャロルに指摘される事だ。

「別にキャロルには関係ない事」

「やっぱり、第七世代型AIの影響ですか？」

キャロルは僕が聞かれたくない事を率直に聞いて来た。

「懐かしい、呼び名だね…」

「誤魔化さないでください。あの世代のAIが危険なのは周知の事実の筈。何故第七世代型AIに拘るのですか？」

「僕は信用できないモノに命を預ける気はない。5. 5世代型AIの機体に乗る位だったらまだノーマルの方がマシ」

「旧式？一番安定性の高いAIですよ？むしろ貴方が使っているAIの方が——」

「何が言いたい？」

「パイロットの精神汚染、自我崩壊、廃人化。セブンスターズには前科が尽きません。だから、魔女とか言われるんです」

心の底から言った。

——五月蠅い、彼女をその名前と呼ぶな

元娼婦め——

喉元まで最後の声が出てきていたのを辛うじて飲み込む。

暫くの沈黙。

キャロルは沈痛な面持ちで僕を見つめる。

「ちよっとハンガーに行ってくる」

そう言って踵を返した。

後ろから掠れるように小さな声。

——— そんなにあの子が大切ですか？

僕はその問いに答える事が出来なかった。

ハンガーでは僕の機体が係留されていた。

巨大なガントリークレーンに吊るされているのは磨き上げられた姿勢制御装置の一部だ。

その横に見える機体の係留装置は物々しい。

まるで鋼鉄の獣を動けないようにするかの如く、四肢を完全にボルトで固定していた。

他のネクスト三体とは対照的だ。

整備性を考えたら矛盾するような、不必要なまでの固定は、僕達と彼女達の心の間に横たわる溝の様だ。

それをぼんやりと見ながら考えていた。

少し言い過ぎたかもしれない。

キャロルは純粹に心配してくれていただけだったのだろう。

一度も第七世代型A Iと接した事がない人間だったら嫌でも抱くであろう感覚は別段珍しい物じゃない。

むしろ、セブンススターズが起こした事件は、人間側を恐怖に陥れるだけの物だった。

積み上げられた死体の数は、敵として対峙した数に匹敵するほどである。

何よりも単独で敵側の人間を完膚なきまでに叩きのめす知性と力が、自分達に向いたら、と言う根源的な恐怖に直面した人間達が、彼女達を本能レベルで警戒するのも致し方ないのだろう。

でも、と僕は思う。

それなら何故彼女達を生み出したのだろうか。

生まれなければ彼女達は生みの親に否定される悲しみも、自らの自己認識能力を呪う苦しみも味わわずに済んだだろうに。

只の、機械であったならば。

こんな苦しみも抱かなかつたのに。

僕には不良品として処分されていった彼女達の心の声が聞こえた気がした。

「僕達、やっぱり何処に行っても嫌われ者だね——アリス」
そう呟いた嘆きにアリスが反応する事は無かった。

第六話 Lorelei

漆黒の暗闇の中、僕はAMS接続用の通信端末を首に装着していた。

傍から見ればネックリングのような見た目だ。

ジャックと言っても物理的に針を刺す訳じゃない。

脊椎表面に電氣的接続子がナノマシンによって形成されており、そこに磁界を発生させて脊髄に直接情報を送り込む。勿論、視覚情報のやり取りの為に後頭部にもこれと同じ物が存在した。

この便利な通信方法は一昔前に流行ったお財布ケータイと同じ仕組みだ。

あれよりも遥かに高速でしかも精密に通信できる点は相違していたが。

とにかく、これによって僕らリンクスは何処かの映画みたいに巨大な針を首筋にブツ刺す必要が無くなった。

この点は開発者に感謝すべきだ。

だけど、あんまりうれしくない仕様も沢山あって、その一つが通信用規格の乱立だろう。

僕が使っている軍用のAMSに始まって、ゲーム用の物から、医療用の物を含めると数千種類はあるだろう。

とにかく、この脳髓と機械を結ぶブレイン・マシン・インターフェイスはこの社会で深く人間に溶け込んでいた。

兵士達は大概、軍用のモデルを使っていたし、数年前の経済危機以前から高校生位の間で、流行っていたらしい。学校に溶け込んでいなかった僕には与り知らぬ事だったが、アリスがそう言うんだから間違いない。

まあ、アバターとかを動かすのに、直接命令できるこの方式が色々都合が良いのは当然であったが。

だけど、民生と軍用の一番の違いは、仮想メモリの有無にあるだろう。

民生モデルはナノマシンの注入だけで完結する物であり、脳内にメ

メモリを新設する必要が無い。

つまり、書き換え可能領域の有無が民生と軍用の違いと言っても良い。

僕らリンクスの間では書き換え可能領域の事をFSBメモリとか呼ばれている。

フロント・サイド・バスメモリーは、人間のニューラルネットワーク内に生体ナノマシンで精製されるものであるのだが、要するに自分のニューラルネットワークの発火パターンを外部から強制的に変更できる事を意味する。パソコンでいう所の共有フォルダみたいな物だ。

アリスが必要に応じてそこにデータを仮置きして、僕がそれを参照するわけだ。

当然僕側からの要求もそこに上げられる。

彼女側から今度はそれを参照して僕らはコミュニケーションを図っている。

実際にはアリス側にもFSBメモリーが存在していて、二つのメモリ間の周波数を同期させて通信しているのだ。

僕らはFSBの事をミラーリングメモリとか呼ぶこともある。

ミラーニューロンのパクリである。

役目は同じような物なので、あまり気にしないで欲しい。

要約すると、対象機器への通信速度は民生用に比べ、軍用の方が早い。段違いなほどに。

民生用がマラソンランナーだとすると、一般的な軍用モデルはF1カーだ。

そして、軍用モデルの中でも、通信用AIは戦闘用AIと呼ばれており、世代によっても速度が違う。

第2世代型の物がF1レベルだとしたら、5.5世代型AIが行う通信が戦闘機レベル。

アリス達、セブンスターズのモデルである第7世代型AIが行う通信だと人工衛星クラスの速度だ。

天と地程の差がある。

実際には5・5世代と第7世代のAIにはそれ以上の差があったのだが。

「そろそろ、真面目に喋ってください」

キャロルの声は限界ギリギリまでため込んだマグマみたいにドスの利いた声だ。

それを聞いて漸く待機状態サスペンドモードから回復する。

僕は仮想空間に作った自分の部屋から引きずり出された。

眩しい蛍光灯が網膜に突き刺さる。

一瞬、グリッチが走ったのかと思ったけど、蛍光灯のちらつきだろう。

「何の話だっけ」

「ええ。そう来ると思っていました——」

そう溜息をつきながらキャロルは長い話を始めた。

企業と旧自衛隊側が停戦協定を結んだのは数時間前。

ヨーロッパ企業が自衛隊側に武器供給をちらつかせ、GEグループに停戦を迫った。

GE内部でもレイセオングループのみの単独占拠を良しとしない派閥があるらしく、レイセオン側は孤立を避け、停戦に応じた。

企業連合も一枚岩じゃない。

ヨーロッパ系と太平洋系で二分、太平洋系内部でも幾つかの派閥争い。

そしてアフリカ、ロシア系の連合企業との睨み合い。

国家と言う基盤がどんどんなくなっていくに従って企業は剥き出しの欲望を振りかざす。

火種が何時の間にか国家解体と言う大義名分から企業間戦争に鞍替えされるのも時間の問題かもしれない。

その中で起きた今回の急な停戦は、ある意味企業間戦争の前触れでもある様な気がする。

なにより旧自衛隊が使っていたレーザー砲の技術は一朝一夕に出る物じゃない。

そんな物をホイホイ作れる位に日本の技術は高く無かった筈。だとしたら誰かが裏で手を貸したに違いない。

その張本人は高いレーザー技術を持っているはずで在り、GEやレイセオン系の企業ではない。

そう考えると、今回の自衛隊側の思わぬ反撃もヨーロッパ系企業の差し金と言う見方も出来なくもない。

「極めつけが、ユーロネクストの極東派遣か。出来過ぎだな」

そう呟いた先に見える白のキャミソールに身を包んだ少女は小さな椅子に居心地悪そうに座っていた。

「えええと、貴方がレイセオングループのリンクスさんですか？」

「ああ、そうだ」

「私はイノウエ・マヤと申します。ええと…」

「なんや、そんな緊張せんでええやん、あがり症やなあ！にいやんも、仲良くしたってなあ。それと、今度の停戦協定の調印式、護衛宜しくねえ」

縮こまるマヤの肩をバシバシと叩くのは横に座っていた女性だった。

「こちらは、マヤ様専属のオペレーター、ユキ様です」

ユキ、と呼ばれた女性は関西弁バリバリだったが、見た目は普通の女性だった。

年齢は多分、キャロルより下かも知れない。

そう思っていると何時の間にか最年長のキャロルに睨まれていた。

「——何？」

「いえ、今何か良からぬことを考えていたような気がしたので」

「別に……ただ、キャロルが一番としよう——ぐえ」

思い切り腹にグーパンを食らわせてくる。

何時もc o o rなキャロルはやたら年齢を気にしていた。

長生きは良いことだと僕は思うのだけれど、世の中の女性はそうは行かないらしい。

戦場で何時死ぬか解らない僕には与り知らぬ事だったけど、女性にとっては何時死ぬか解らないからこそ年齢を気にするのだろう。

うーん。矛盾しているような気もしないでもないが、まあ、生き延びる為の余裕は必要なのかもしれない。

そう思っていると、横からクスクスと笑い声。

「どうかした?」

僕がそう聞くと、リンクスである彼女が答える。

「いえ、何だか、噂で聞いてたのと随分違った感じで」

噂、と言う部分に不吉な物を感じる。

どうせ、第7世代型AI絡みだろう。

「魔女の走狗^{そうく}、狂人の戦士、無人ネクストつてのもあつたね。やっぱり実働時間が余りにも長いと色々言われるみたいだねえ。第5世代型AI機じゃ逆立ちしても無理やし、しゃーない」

なんだか滅茶苦茶言われてるような気もするが。

「無人じゃない、有人。実働時間が多いのは企業がブラックだから。それに狂人でも無いし、第7^娘世代型は魔女じゃない」

マヤのオペレーターであるユキは笑いながら僕の肩を叩いた。

「せやな!現に目の前におるんやから!細かい事は気にしたらアカンで、にいやん!」

そんなユキを無視してマヤが身を乗り出して聞いて来る。

「ええと!第7世代型AIとのリンクつてどんな感じなんですか!? やっぱり、第5世代型と違うんですか!」

何となくマヤの強調された部分から目を逸らした。

「いや、第5世代型、殆どリンクした事ないし。あれは拷問器具かなんかだと思う」

第5世代型AIは律儀に全ての情報を伝えようとしてくる。

情報を精査されず送られる方は堪ったものではない。

だから稼働時間が鬼の様に短いのだ。

「はう…私はネクストに乗る度に拷問されてるんですね…」

項垂れるようにマヤは椅子に座り込む。

「それに耐えられるのも適正やで。まあ、でもうち等もそろそろ次世代型AI搭載した方がええんかな」

そう軽くマヤをあしらうユキは横目で僕を見ていた。

僕は答えられなかった。

それは僕とアリスの足元には16人のリンクスの死体があったからだ。

レイセオングループのAI開発チームにはかつて16人のテストパイロットが居た。

そしてアリスを生み出した企業は実際にリンクさせてみた。

一人目は乗った瞬間に、頭蓋骨内のタンパク質が一瞬で凝固した。パイロットの頭は電子レンジに放り込んだ卵みたいになった。

二人目のリンクスは、アリスと繋がった瞬間、心停止フラットラインに陥った。

原因はアリス側の同期機能の不調。

レジストリを書き換えて再度実験。

三人目はリンクした瞬間に発狂。この際、ネクストはハンガーをぶっ壊して暴れ回った。

実験チームはパイロットを強制射出。パイロットは壁に投げつけられたオタマジャクシみたいになった。

原因はアリス側がパイロットの脳内のメインレジストリデータを弄った事による、自我崩壊。

対策は再度アリス側のレジストリの調整で再び実験。

四人目から七人目までは全部同じ。起動初期は正常。だけど、戦闘モードに移行すると決まってパイロットが発狂。

リンクスは全員射出され、潰れたオタマジャクシみたいになってハンガーの壁に染みを作った。

原因はアリスが使用した未知の通信プロトコルによるパイロットの精神汚染が原因だった。

この未知の通信プロトコルは、後に洗脳用プロトコルとしてレイセオングループが特許を取って大儲けしたらしい。

対策は、アリスの通信プロトコルを遮断できるプログラムを実装。

アリスはこの時声を失った。

八人目のリンクスは無事戦闘モードまで正常に行けた。だけど、停止シークエンスでパイロットが

フラットライン
心停止を起こした。だけど、アリスは自分の意思でハンガーまで歩いて戻り、自動で停止した。

原因はパイロットとアリスの同期機能の不調。

対策はアリスの自立制御機能の大幅な抑制で対応された。

この時、アリスの四肢に鎖が嵌められた。

9人目から15人目までは、似たような失敗を繰り返した。

実験チームは原因を探したが、アリス側に何のバグも見つけられなかった。

彼らは見落としていた。

データの同期機能に何の問題も無いのに何故、同期機能の不調に見舞われるのか。

簡単な事だった。

アリスとパイロットの間に何の感情的共有も成されていない事が、データ転送エラーの原因だった。

だから企業は彼女の感情を奪った。

最後にアリスは心を失った。

だからだろうか、16人目はリンクした直後に廃人になった。

簡単に言えば植物人間だ。

そして17人目が僕と言う訳だ。

リンクに成功して兵装システムを起動したとき、そこにいる全員を撃ち殺してやりたい衝動に駆られたのは僕とアリスだけの秘密だ。

そんな思考を巡らせつつ、懐かしい思い出に浸りながらユキに言った。

「どうかな。第七世代^{彼女}型は気難しい子が多いから、リンクさせてくれるかは相性しだいじゃないかな」

「そんなにAIって個性的なんですか？」

「個性的。むしろ人間より振れ幅が大きい」

だけど、彼女達の言葉は人を狂わすから、人はそれを奪ってしまう。だから個性なんて解りはしないのだけれど、僕は敢えて言いたかった。

かつて心を持っていた彼女の為に。

罪滅ぼしみたいな感情なのかもしれないけど、僕とアリスの間には言葉は要らなかつたから救いは有つた。

そんな感傷もお構いなしにマヤは前のめりになって食いついて来た。

「お、お喋りとかするんですか!? 妹みたいに!？」

「い、いや、喋つたりしないし、妹居ないから解らないけどさ……キャリブレーションが上手く行けばAMS越しに感情とか解るようになるよ——つて近い」

マヤと押し合いへし合いしていると、携帯型端末が着信を知らせる音を放つ。

独特な音は僕にしか聞こえない。

AMS越しに聞こえてくる音はキャロルにも行つたようだ。

彼女の方はマナーモードにしてあつたのだろう。

「コホン、ちよつと呼び出しがあるので一旦席を外しますね」
僕はそれに同調するようにして席を立つ。

「——あつ！ ええと！」

ガタリと、椅子が揺れる音。

マヤが勢いよく立ち上がった。

暫くの沈黙、痺れを切らしたユキが肘でマヤを小突く。

「ほら、言いなさいよ」

「もし、宜しければこの後！ 食事に行きませんか！」

ニヤニヤとマヤと僕を見つめるユキ。

真つ赤になつて俯くマヤ。冷めたラーメンみたいな視線を寄越してくるキャロルとは対照的だ。

「いいけど……」

そうして僕は呼び出しの後、マヤと食事に行くことになった。

第七話 財団

巨大なガントリークレーンが銀色の輝きを放つそれは、ゆっくりと吊り上げられていく。

四つに束ねられたその杭は、人型兵器の右手に近づけられていく。「良いんですか？隊長。今回の話、キナ臭いってもんじゃありませんよ。司令部の連中、絶対何か隠しています」

「馬鹿、今更降りれる話じゃない。それに、俺はあのトンガリ帽子をぶっ壊せるって言うから日本に帰ってきたんだ。尚更引く訳ねえだろ」

「サラエボ、ですか」

「ああ、そうだ。あの時奴はあそこに居た。だから俺はAC乗りになった」

「そう言えば、奥さんの命日、もう直ぐでしたね」

「俺はあそこで全てを失った。だが、まだ運には見放されていなかったみたいだ。司令部の連中の思惑なんか知るか。それにあのトンガリ帽子が来た国に良いことが有った試しが無い。この国は俺たちの故郷だ。サラエボの二の前にさせて堪るかよ」

そう言いつつ、傭兵である彼は入念に装備を吟味していく。

「ま、そうですよね。あの国、復興に向かって順調に歩んでましたからね。それが、企業が来た途端、あつという間に混沌の渦に落ちたら誰だって疑いますよねえ。戦争って奴は、企業からしたらイイ市場ですからね。スクラップアンドビルドってやつですか。怖いもんです」

「企業なんてもんはなあ、ネクストさえ持っていなきや、国家がコントロール出来たんだ」

彼は怨嗟を込めて言った。

「そして——リンクスさえ居なければ…」

「ですけど、無茶は辞めて下さいよ。隊長に先に死なれたら、死んだ部下達に示しがつきません」

「解ってるよ。死ぬつもりはねえさ。勝つために戦う、負ける戦なんぞするもんか。喋ってる暇あったら新型装備の射撃テスト、早めに済

ませておけ。もう換装は出来ているぞ」

彼等の視線の先には銀色の杭を腕に装備した鋼鉄の人形が有った。

左腕に巨大な盾のような物を装備したそれは、中世の騎士のような出で立ちであり、格納庫の奥の方までズラリと並んでいる様子は、戦列歩兵のような見た目であった。

数時間前、指令室では傭兵である彼にある指令が下されていた。

「——つまり、今回の停戦協定は企業側から反故にされる可能性が高いと言いたいのですか？」

「そうだ。諜報部はその類の情報を掴んだ。それもかなりの信頼が置ける情報の様だ。パイロットの休憩でも取らせてから我々を叩くつもりなのだろう」

「しかし、それなら複数機のネクストを持ち込んだ企業側に今回の停戦協定を持ち込むメリットがありませんが……」

「君は知らなくていい事は聞かなくて良い。ネクストを破壊する事だけに集中したまえ」

「——はッ！了解であります！」

そうして部屋を出ていくと、手渡された指令書に目を通す。

横から顔を覗き込ませる部下が言った。

「良く出来た作戦書ですね。それに、何故レイセオングループのネクストが指定エリアから出てこないって解ってるんですかね。司令部は魔法でも使ってネクストの足を縛るつもりなのでしょうか」

おどけて見せる部下に、乾いた笑いで返す男。

「さあな。だが、企業側も一枚岩じゃないらしい。見て見ろ」

そう言っ一枚の記事を見せる。それは、テレビで流されていたニュースの切り抜きであった。

「これがどうかしたんですか？例の停戦協定のインタビューじゃないですか」

「いや、記事の内容じゃない。そこに映ってるネクスト、三機しかないだろう。トンガリ帽子が映ってない。それにレイセオングループの重役も居ない。これがどういう事か解るか？」

「いえ、全然」

「だあく！ ったく。お前は操縦は出来るのに頭はからつきしだな。つまりは企業の連中も一枚岩じゃないってことだよ、縄張り争いでもするつもりなのかもな」

「成程、GEとヨーロッパ連合企業、それとレイセオングループ、お互いに連携する気が無いと言う事ですね」

「そうだ。ま、それならそれでこっちとしては、やりやすい。付け入る隙は残されているつてのは良いことだ」

「そうですね。真面に4機のネクストとやり合ったんじや、命が幾つあっても足りやしない。ですが、何だか嫌な気がします」

「そう言つて部下は窓から見える新しく搬入されたパーツ群を見つめる。」

「それらは工場から直送で送られてきたように磨き上げられており、塵一つ付いていない。」

「続々と運び込まれるそれは、野外整備場で着々と組み立てられている。」

「財団、か。確かにキナ臭い連中だ。だが、もう碌な装備が無い自衛隊側に、思わぬ支援を申し出てくれたんだ。飲まない訳にもいかないだろう」

「タダより怖い物は無いって言いますしね：でも、渡りに船つて言う感じも有ります。複雑ですね」

「そうだな。だが、俺たちに来る事は、渡る川が三途の川じゃない事を祈るだけさ」

「そう言つて、沈んでいく西日を眺めるのであった。」

第八話 コロニー大阪

煤けた様な臭いが漂ってくる。

行き交う車の中に混じって地響きが伝わってきた。

その方向に視線を向けると巨大な箱のような乗り物が向かってくる。

その車高は、薄暗くなった路地に設置された街灯よりも一回りも高かった。

フロントエンジン式の戦車が放つ、キヤタピラ特有の音は物々しい雰囲気を放っている。

恐らく民間軍事会社^P_M^Cの物だろう。分厚い複合装甲のサイドスカートにヤタガラスのマークが見える。

アーク社のロゴだ。

今、大阪コロニーで一番懐が熱い商売人たちだ。

彼らは、企業軍の下請けとして治安維持にあたっていた。

企業軍はネクストを主力としていて、とてもでは無いが、細々とした戦力の分散が苦手なのだ。

当然その隙間産業に民間軍事会社はピタリと嵌り込んだ。

そしてP M Cの構成員の中には、国家軍から抜けてきた人間が沢山居た。

だから、P M Cは人材確保に困らなかった。

でも困った事も有った。

他の産業が死んでしまったのだ。

まず一つ。ハイテク産業。

この島国はネクストを作れなかった。

だから、ハイテク産業の外注先になれなかった。

だから死んだ。ハイテク産業は軒並み全部。

そしてもう一つ。

海洋汚染によって海産物が売れなくなった。

これによって輸出できなくなった。

何故なら今や、魚は育てたり取ってきたりするものでは無く、工場

で作られる物だからだ。

バイオテクノロジーの発展は遂に生物をプリンターで出力できるまでに成長した。

今やパソコンにDNAデータを打ち込むだけで、バイオ3Dプリンターが魚を丸ごと作ってくれる。

勿論、元となるアミノ酸が居るが。

だけど、新鮮な魚と言う意味ではこれ程の物は無いだろう。

だって、僕たちの食卓に上がる魚は生まれた瞬間に殺されるのだから。

そしてこの国に止めを刺したのは産業の無人化だ。

それによって、工場の生産ラインは全て人を排する事が出来た。

企業は労働組合を真つ先に切り捨て、非正規労働者も切り捨てた。

産業用AIの高機能化と大量生産による安価な値段は、爆発的な完全無人生産ラインの増加をもたらした。

完全無人の生産ラインは整備さえも無人で行えた。

だから、人が消えた。

工場の中から完全に。

代わりに増えた物があった。

失業者だ。

失業者は考えた。

失業したのは誰のせいか、と言う事を。

政府が悪い、政治家が悪い、そして、AIが悪い。

怒りは人々を攻撃へと駆り立てた。

犯罪者の急増がPMCの普及を爆発的に後押しした。

テロの頻発に対する治安維持機能の根本的な改善は、人々からジンを取り上げる事で達成された。

超監視社会である。

街頭には数メートル置きに監視カメラが設置され、市民にはパスポートの代わりに体内に認証用ナノマシンが撃ち込まれた。

それによって企業は常時誰が何処に居るかを把握できた。

そう思いつつ携帯型端末を開く。

僕の居場所には赤い光点が一つあった。

その上に名前が表示されていた。律儀にも[Links](#)と言う大仰な名前が付いて。

その表示は機密情報の類になっていた為、セキュリティレベルが低い人から見たら違った表示になっていただろうが。

ぼうっと考えていると巨大な戦車が再び僕の目の前を通りすぎる。

その後ろには巨大なトレーラー。

ガラス張りの中には煽情的な下着姿の女性達が見える。

移動式の娼館だろう。

律儀に僕の脳髓に値段を伝えてくるところが商売人魂を感じる。

煩惱解消に掛かる値札を眺めると幾つかの表示が見える。

最近の流行りは制服プレイとか言う奴らしい。

実際に低年齢の少女の方がいい値が付いているのだから、買い手が多いと言うのは本当なのだろう。

人権と言う言葉と、未成年と言う言葉が、企業によってかなぐり捨てられてから久しいが、全てを換金できる世界が来てから人々の価値観は白日の下に晒された。

それによって経済は活性化した。

お偉い経済学者さん曰く、完全な換金化は、売り手と買い手の結びつきを促進するらしい。

欲しい物をお金で手に入られる事によって売り手と買い手、双方にメリットがあるとと言う主張だ。

だけど、いい事ばかりじゃなかった。

彼らは売り手である人々の不幸を自己責任と言う殻に梱包してしまった。

彼らは買い手である人々の罪悪感と道德観を殻に梱包してしまっ

た。

だから今では皆こう思っている。

売っているんだから買われても仕方ないよね、と言う奴だ。

選択の自由と言うのは誰にでも用意されていると言うのが彼らの持論だ。

そう、洗脳用の首輪を、脱走防止用の足枷を自ら選んで付けたのだから、仕方のない事らしい。

嫌なら他の仕事をすればいい。
クソツタレだ。

世界なんてそんな物だ。

僕は全てを諦めるようにして夕闇の中を歩いて行った。

夕方の渋滞によってガラス張りのトレーラーは動いたり止まったりを繰り返して移動していく。

恐らくPMCの駐屯地の方へ行くんだろう。

あそこなら金を持つてる男は幾らでも居るだろうから。

そう思いながら、マヤとの待ち合わせ場所である公園のベンチに腰掛けるのであった。

人々の集まる場所には活気が集まる。

不思議とそう言った場所にはお金も集まる。

だからこそ、色んな物を売る商売人が集まるのは自然な事だ。

売れる物とは買い手が付く物だ。

具体的には食い物、武器、女。

それら殆どが集まる場所と言えば酒場と相場が決まっていた。

僕の斜め前のテーブルで、警備用ドローンの売り込みをしている男が見える。

熱心にPMCの関係者と思わしき人にタブレット端末を見せてつけている。

それを冷静に値踏みする関係者。

あの様子だと売り手市場と言うより、買い手市場なのかもしれない。

お金より物が多い状態なのだろう。

コロニー内でドンパチでも始まれば、この二人の態度は丁度百八十八度入れ替わる事、間違い無しであったが、幸いにもこの大阪コロニーの治安は他のコロニーに比べれば大分良かった。

羽振りがいい人間が多いのかもしれない。

こういった水商売の店が賑わっているのがその証拠だ。ただ、まさかマヤがそう言った場所を選ぶとは思ってなかった。

「意外、ですか？」

彼女は何時の間にか眼鏡をかけていた。それを直しながら僕の方へ視線を寄越してくる。

「うん、結構びっくり。もっとうこう、高級なレストランとか選ぶと思ってた」

企業から直接雇用されているリンクスには一般人からすると途方もない額の給料が支払われている。

当然、衣食住どころか、娯楽に使いまくっても余る位には貰う筈である。

「ええと…ちよつと、友達と約束が有って…なんていうか——」

煮え切らない態度を崩さないマヤを差し置いてテーブルに料理が運ばれてくる。

ウエイトレスの女性は肩を大幅に露出させたエプロンを着ていた。

下まで見回す事を躊躇う雰囲気は、凡そ高級レストランでは下品とされる召し物である。

「お待たせしました、ご注文の——つてマヤじゃん！久しぶり！もう、急に居なくなっちゃうんだから心配したんだよ？皆も、お客と何かあったんじゃないかって噂になってたんだから！……あれ？この人は？」

「ええと、この人が同僚の鈴音すずねくん」

「ちいす！シオンでえーす！つてええ！マヤ、本当に企業に入っちゃったの??どうやって??つてまさかあんた…体使つて…」

「ち、違うつてば！ちゃんと試験で！」

わたわたと、慌てふためくマヤ。

「あつはははは！嘘嘘！冗談だよ、もう、マヤは揶揄い甲斐があるなあ。んで？どこの企業に入ったの？社名位教えてくれても罰は当たらないぞ〜？」

「ええつと、AGEグループつて聞いたことある？旧ドイツ系の企業

「なんだけど…」

「ああ、知ってる！最近、大阪に支援物資送ってくれる企業じゃない？
鈴音くんは？同じ系列なの？」

「いいや、違う。太平洋系の企業。レイセオングループ」

「——ああ、レイセオン、ね……有名どころだねえ」

少し硬い表情になったシオン。

ま、そうなるよな。

現時点で一番勢力を伸ばしている新興企業といえ
ば レイセオン Reytheon グループだ。

表向きは話し合いによる積極的なコロニーの併合。

でも実際はネクストを使った脅しを多用する事で有名だ。

だから僕とアリスは数多の戦場を飛び回る事になった。

雇われる機会も出撃する機会も、各企業間で飛びぬけて多い筈だ。

熟練のリンクスが最も多い企業であったが、それと同時に僕らの足
元に積み上げられた屍もまた多かった。

要するに、一番恨みを買っている企業ナンバーワンな訳だ。

ブラック企業の癖に全くもってうれしくない特典だ。

だからシオンが僕に対して沈黙した事は驚くに値しなかった。

そりゃ誰だって知り合いや親兄弟をネクストに殺されて、その関係
者に対して良い思いを懐く訳が無い。

その辺のイメージ戦略はヨーロッパ系企業が上手い。

僕らが暴れ回った後に手を差し伸べる彼らは、大層日本人受けが良
かった。

シオンもその例に零れなかったと言う訳だ。

美味しい所だけ持っていかれた気分になったが、現にそう言う状態
に陥りつつある。

全く持って、企業の力と言うのは戦力だけでは推し量れないところ
がある。

唯単に、ヨーロッパ系企業が腹黒いと言えればそれまでなのかもしれ
ないが。

そうしているうちに、久しぶりに会ったシオンとマヤは思い出話に花が咲いているようだ。

他愛もない話をする二人を見つめていた僕は、漸く疑問を懐いた。そもそも彼女は何故僕を食事に呼んだのか、と言う意味だ。

だけど、その疑問は直ぐに晴れる。

シオンがテーブルの食器を下げに席を立った頃合いを見計らい、マヤが話しかけて来る。

「鈴音くんは、ええと、飛行時間ってどの位？」

飛行時間。ネクスト操縦における基本経験値を表す数字。

それは余り人前で話す物では無かったけど、僕らリンクスの間では航空軍用語と同じ言葉を多用する事が多かったので、傍から聞くと、僕らは只の航空機パイロットみたいに見えただろう。

「1600時間位だけど」

多分その位だ。世界中の戦場を飛び回ったからログに残っていた以外にもあったかもしれないが、この位は飛んでいる筈だ。

「せ、千六百？それって、シユミレーター含めてだよね？」

「僕は殆どシユミレーターに乗らない。あれはそんなに勉強にならないから」

余りにも単調な戦闘になりがちなシユミレーターは殆ど実戦の役に立たない。

そもそも、命を失うかもしれないと言う緊張感が無い時点で、実戦とは程遠い。

訓練には実戦が一番と、何処かのブラツクな企業に所属する教官が言っていた。

何だか矛盾しているなあと当時は思ったが、人間とは怖い物で、慣れてしまうと違和感が無くなってしまう物である。

「そう言えば、マヤはどの位飛んでいるの？」

僕は何となく彼女が何で食事に誘ったのか掴みつつあった。

飛行時間を聞いて目が点になっているマヤは恐らくそんなに飛んだ事が無い筈だ。

そう思っていると彼女は俯きながら呟いた。

「——360時間位…かな…」

実戦で360時間も生き残っているとしたら大したものだ。

だけど、彼女から漂う、何というか如何にも女の子っぽい幸せオーラは、それを感じさせない。

「それは実戦も含めて？」

彼女は顔を赤らめて黙り込んでしまった。

暫くの沈黙。

そこで僕は漸く彼女の利かれない事ナンバーワンをめたく引き当ててしまった事に気が付いた。

「……ゼロです」

ぼそりと呟く。

「それは実戦での？」

「……シミュレーターでしか……ネクストを動かした事が無いです」

ああ、やっぱり。

「ひよつとして今日の食事もそれ関係だったりする？」

また黙り込んでしまうマヤ。

きつと色んな気持ちと闘っているのだろう。

「はい…ユキも私もそう言う実戦的な経験が未無だから、もしよければ——その…」

要するにオペレーターのユキも軍事的素養はゼロ。

マヤに至っては実戦処か実機でネクストを起動した事すら在るか怪しい。

僕は正直に思った。

こんなキナ臭い場所に新米リンクスを投入するなんてヤバすぎる。

もう企業の方針とかパイロットの扱いも含め。

それもそうかと僕は思い直す。

人間の価値なんてこの世界じゃ紙くず以下の値段しかないから。

僕らリンクスが幾らAMS適正と言う希少価値プライオリティを持っていても所詮は紙屑に毛が生えた程度と言う事か。

「いいよ。出撃まで余り時間無いけど、少しだけならレクチャー出来る。と言つても僕が出来るのは僕が生きてきた道を君に聞かせる程

度の事だけれど。それでいいと言うなら喜んで教える」
そう言って彼女に戦場でのイロハを教える事になった。
彼女は満面の笑みで肯いた。

第九話 M i s s i o n S a r a j e v o

漆黒の夜空に幾つもの光が撃ち上げられていた。

それらは、ゆっくりと空に舞い上がっていくと、轟音と共に閃光を放つ。

時折、火の玉が落ちていくのが見えた。

落ちていくそれは、人の営みの場所である町に落ちていくと灼熱の火柱を上げた。

それを神経接続越しに見ていたマヤは、ネクストを丸ごと収めた大型輸送機に揺られていた。

『高度6000メートル。まもなく目標地点！最後にもう一度だけミッションを確認します』

ユキの声がマヤの脳髓に届く。

何時のも様な揶揄ったそぶりは見せない。緊張感に包まれた声は、コックピットに張り詰めた空気を詰め込んでいく。

『ミッションは、レイセオングループの研究施設を占拠している不明部隊の排除。同施設は既に奪還作戦が半日前に決行されています。それに伴って前線基地から出撃した同社のリンクスは現在行方不明。上は完全にM I A 認定したみたい。だから当てにしない方がいい、私達だけで何とかするしかない』

「うん、でも————こんなのって————」

そう呟いたマヤは透けて見える壁の向こうに映る地獄を見た。

歴史ある街並みは炎に包まれ、道端には沢山の山が見える。

一見すると蟻塚にみえるそれは、よく見ると死体だった。

小さな死体や大きな死体が折り重なってできたそれは、石畳の上に幾つも出来上がっていた。

幾つもの路地に沢山の蟻塚、それはまるで、道端に転がる石ころみたいでありふれた物だった。

ふと、マヤが視線を地平線へ向けると、大きな塔が見える。

その根元の辺りに大きな広場が有った。

その広場の周りには沢山の行列が出来ていた。

おもむろに近くに居た銃を持った民間人がそれを放つ。
糸の切れた人形のように道端に人の山が出来上がる。

『マヤ！気を取られちゃ駄目！私たちの任務を忘れないで！』

「解ってる……！……っえ？」

彼女が驚きの声を上げた。

第五世代型AIはレーザーに映る高速の熱源を捉えていた。

マヤにはそれが手に取るように解った。

だが、彼女の脳内には取るべき行動の出力が無かった。

出来たのは気の抜けた声を上げる事だけだった。

轟音と共に外部接続が遮断される。

コックピットとの連絡が途絶え、制御を失った輸送機は急激に高度を下げ始めた。

「ユキ……！……どうなってるの!?!」

応答はない。

彼女の焦りに火を付ける。

こんな筈では。

そんな言葉が脳裏で繰り返された。

『警告、機体高度が下がっています。直ちに脱出してください』

戦闘用AIの無機質な声が、彼女を我に返らせた。

「武装システムスタンバイ！ガントリロック解除！」

機体制御システムは即座にハンガーの固定ユニットにアクセスを試みた。

だが、既に電源系が死んでいた輸送機は、びくともしない。

『警告、ハンガーコントローラー応答なし。固定解除不能』

遂に高度が危険領域に入ったのか、マヤの脳髄には高度警告用のアラートが鳴り始めた。

マヤは即座に肩に装備されていたプラズマキャノンを扉に向け、発射した。

衝撃と轟音、閃光に包み込まれる。

全ての感覚器が戦闘用AIによって遮断される。

フェールセーフ機能が働いたのだ。

轟音が消え、閃光の残滓だけが視覚野に張り付き続ける。だが、重力の感覚は既がない。

それは機体が自由落下していたからだ。

『警告、無数の熱源を探知』

網膜に映し出されているHUDには、幾つもの白い光点が見える。戦闘用AIは熱源に加え、敵のFCSが放つレーダー波を探知する。

『警告。敵のレーダー照射を探知、敵機体接近』

徐々に白い霧が晴れていく中、彼女は冷静に対応する。

それはネクストが無敵に近いプライマルアーマーを装備していたからだ。

通常攻撃では絶対に破られない。

そう確信していた。

「解ってる！プライマルアーマーの展開まであとどの位!？」

『展開まであと10秒』

苛立ち紛れに機体にへばり付いていた拘束具をアームで剥ぎ取る。

プライマルアーマーの展開。

それさえ終えてしまえば、全部片付くのに、と彼女は思った。

展開までのカウントがHUDの中でゆっくりと動いて見えた。

3――

2――

1――

『超電導コイル正常運転を確認、整波装置、励起を開始。プライマルアーマー、アクティブート』

機体の表面が輝く様に収束していくと、雷鳴のような轟き共に透明な膜のような物に包まれる。

マヤは漸くの安堵感から周囲の警戒を怠っていた。

勝者の余裕持って彼女はゆっくりと地面に着地する。

その時――――戦闘用AIが接近する敵ACを警告する音声を

発した。

思わぬ奇襲に狼狽を見せるマヤ。

『警告、高速の移動物体を感知、タイプ、AC——』

「どうして?! 攻撃してきても無駄なのに!!」

そう吠ええると、即座に右手に装備されていた超高出力レーザーライフルを放つ。

人型兵器は原型も止めぬ程、蒸散して消える。

後には鋼鉄がプラズマ化した残滓だけが残った。

『——無駄じゃないよ』

そう、微かに聞こえた無線の音と共に、密かに後ろから接近していた軽量二脚の機体が滑り込むようにしてネクストの懐に飛び込む。

——プライマルアーマーは破れない。

そう心の中で呟いたマヤは驚愕の現象を目撃した。

軽量二脚のACはプライマルアーマーに阻まれる事なくネクストと接触、突き出した腕に装備されたパイルバンカーは、何の干渉も受けることなくネクストの装甲表面に達すると、爆薬に点火。

超高速で杭が射出された。

——うそ、でしょ

そう呟いた言葉は轟音に塗りつぶされた。

『コックピット貫通、パイロット死亡。シミュレーターを終了します』

無機質な訓練プログラム用AIの言葉がマヤの脳髓に届く。

瞳を開けたマヤは模擬コックピット内に胃の内容物を吐き出した。

「——ゲホッ！」

AMSから疑似的に送り込まれたサージ電流を模倣した信号は、強烈な吐き気となって彼女を襲った。

「よく耐えたね。最後のは抜かったけど、途中までは結構いい線行ってたと思う」

マヤの後ろに控えていたユキがタオルで汚れをふき取っていく。

「それにしても、にいやんの寄越したシユミレーションデータ、良い趣味しとるで」

マヤはその声を聞いて、再び吐き気を催す。

崩れ往く街並み、其処に築かれた死体の山はとてもシユミレーターとは思えない程リアルだった。

それに、事前のミツシヨン説明と違い、いきなり輸送機が襲われると言うシユチュエーションは凡そ、彼女が経験した模擬ミツシヨンは取り入れられてなかった。

全てがイレギュラーであった。

とてもでは無いが、彼の寄越した訓練データが偽物だとは思えないほどに異質であった。

「趣味じゃない。だけど、マヤにはそれが必要だと判断した」

「嫌らしいミツシヨンやったけど、あんなん何処で手に入れたん？」

ユキが鈴音に問うと、彼は閉口した。

「ユキ、あんまり、鈴音くんには、質問しちや駄目、他企業だし、きつと言えない事、沢山あるから」

息も絶え絶えでマヤは鈴音を庇う。

「ごめん、ユキ。マヤの言う通り、僕には守秘義務がある。だから渡したデータについても他言無用に願いたい。勿論そのデータの内容についても僕には一切答える権利が無い」

「まあ、そうやなあ。色々訳アリデータって事やな。取り合えず部屋に戻ろうか。マヤも休憩せなあかんやろし」

そうして一旦部屋に戻る事になった。

彼女は担がれながら思った。

実戦慣れした彼の見てきた世界はきつと、このコロニーの様に平和な場所ばかりじゃなかったのだろうと。

幾夜もの地獄を超え、屍の山を踏み越えた先には何が有るのだろうか。

そう思わずには居られないのであった。

部屋に戻ると、鈴音は神妙な面持ちでマヤに言った。

「マヤ、僕達リンクスにとって最強の脅威は何だと思う?」

彼女は考えた。

リンクスの敵は、同じリンクスだろうか、と。ただ、企業同士はかなり強いつながりが有った為、そんな事は起こりえない。

ならば、脅威とは何だろう、と、堂々巡りに陥った思考を読み取った鈴音は再び言う。

「僕らの脅威、いや、リンクスの屍を最も積み上げた存在、それは人型兵器、アーマードコアを操るレイヴンだ」

「でも、ACってノーマルなんじゃ…そう言えばどうしてプライマルアーマーを抜けたんだろう」

「不思議に思うだろう?でも、レイヴン^{彼等}は初見でそれを見破った。僕らの纏う、神の鎧の弱点を。だから注意して欲しんだ。僕らにとってのイレギュラーは間違いなく彼らなのだから」

「解った。でも、プライマルアーマーの弱点って一体どんな所にあるの?」

「彼ら^{レイヴン}の間ではシャッターギャップって言われてる現象。初速の速い弾は弾くけど、初速の極めて遅い弾は弾かない。これは、地面や障害物に対して無為にプライマルアーマーを減衰させないための工夫。だけど、そこを見事に突いた武器がパイルバンカーと呼ばれる爆薬で杭を打ちだす武器。これは嵌ると一撃で落ちる危険がある。どんなネクストでも即死の可能性が有る以上、レイヴンは僕らにとっての脅威となり続ける」

「じゃあ、近づかなければ良いんじゃないかな。その、杭みたいな武器が届かない距離に居れば安全なんじゃ」

「良い発想だと思う。君の企業であるAGEグループのネクストは正しくその発想を地で行く企業。機体と戦術の適正は高いと思う。だけど——」

「それは、向こうも承知してる。だからもう一つ弱点を見つけた。マヤ、君は一番初めに何処に居た時に攻撃された?」

「それは、輸送機の中、だったはず」

「そう。それ。リンクスが狙われるシユチュエーションその二。そのシユチュエーションは非常にマズイ」

「え?どうして輸送中を狙われると不味いの?」

まだ、その重要な意味に気が付いていないマヤを差し置いて、ユキが答える。

「稼働限界やな。たしか、三十分以上の連続稼働は結構ヤバいって話やな。ま、第五世代型A1機の話やけど」

鈴音はうなずきながら答える。

「そう。稼働限界。稼働限界を超えたリンクスは何時、フラットライン心停止を起こしてもおかしくない状態に陥る。そんな状態で真面に戦えるはずがない。だから、過去、数多の戦場でレイヴン達は、帰投中の輸送機を狙った攻撃を仕掛けてる。不幸な事に、足を失った殆どのリンクスはゲリラ戦に巻き込まれ稼働限界を大幅に超えてフラットラインに陥った」

「そんな——だって訓練学校では一言も教えてくれなかった…」

「マヤ、企業にとつては情報はお金なんだ。つまり、彼らはお金をケチった。だけど、僕らにとつての情報は命にも等しい。企業がケチった情報は、僕らリンクスの血を持ってあがな贖われる」

「成程、何となく解ったわ。このデータ、沢山のコンバットブルーブンを詰め込んだミッションデータなんやろ? なんもお礼出来へんけど、助かったわ。うち等、そう言ったデータに飢えとったから」

「そう。役に立ったなら良かった。そのデータは自由に使っいいい。コピーさえしなれば」

マヤは、一気に脱力感に襲われながら考えた。

ユキの言うコンバットブルーブンと言うのは所謂血に濡れたデータの事だ。

レイヴンやリンクス達の流した血が、今回のシユミレーターで再現されていたのだ。

そう考えると生々しいのは当たり前だった。

それは文字通り、かつて生きていた戦士達の記憶なのだから。

血を流し死んでいった人間達の生き様が、企業によつて金に換えら

れていく様は、マヤに若干の嫌悪感を抱かせた。

だが、それを押ししても鈴音はマヤに見て欲しかったのだろう。

「そっか、ありがとね、鈴音くん。色々と気を使ってくれて」

「いや、いい。今は休んで、マヤ。戦場用のワクチンは心に負担をかけるから」

ワクチン。言い得て妙な表現であったが、マヤにはその言葉が心地よかった。

体が動いても心が風邪をひいてしまっただけはどうしようもない。

それを予防するための薬と言う訳なのだろうと彼女は納得した。

「取り合えず、うち、にいやんと話あるから、ちよつち席外すね」

アイコンタクトで鈴音に合図を出すと、彼はドアの外に歩いて行った。

それを追うようにしてユキが退出していった。

後に残ったのは途方もない疲労感と、抗いようのない睡魔だけであつた。

マヤにそれに抗う気力はもう残されていなかった。

第十話 Scavenger

ユキは廊下に出ると、壁にもたれかかる。どうやら、何か迷っているようであった。

「さつきはありがと。あのシユミレーター、助かったわ。あれでの子が戦場で生き残れる確率上がるやろうから」

戦場、と言う言葉に何処か引つ掛かりを覚える。

彼女達の初陣は停戦協定の調印式の筈だ。

本来なら安全なミツシヨンの筈だ。

だけど、ユキからは深刻な雰囲気伝わって来る。

「調印式のミツシヨン、そんなにハードな物に成るとは思えないけど」
僕は少しだけカマをかけた。

ユキは未だ悩んでいるようであったが、やがて少しの沈黙の後、意を決したように話し出す。

「そうやな…普通なら、そのはずなんやけど…。マヤには口止めされとったけど、やっぱりに、いやんには伝えとくわ。あの子、あの任務で正式なリンクスの登録が決まるんやけど、何というか、この調印式、キナ臭いんやわ。まだ起動テストもままならないあの子の主装備、いきなり変更になったんや。これ、その詳細なんやけど…」

そう言ってユキはタブレット端末を此方に渡してくる。

「成程、マシンガンとブレード。ベターな装備だけど、変更後の装備、際どいね。高出力ハイレーザーライフル二丁、明らかに対ネクスト戦を念頭に置いた装備、と言った方が良いのかな。対レイヴン戦には向かない」

大きなため息と共にユキは頭を抱えた。

「やっぱりそうだよねえ…これ、絶対企業の上の人、何か隠してるわ。てか、出撃際に主兵装変更とか常軌を逸しとる。散々シユミレーターで練習させた主武装使わせんとかありえへん。企業同士、戦争でもするつもりなんかね」

「正直、僕もそこは測りかねる。だけど、与えられたカードで何とかするしかない。それに、企業が利益を求めて策を巡らせるのは今に始

まった事じゃない。だから、同じ利益を追求した者同士がぶつかる事は、歴史的に見ても当たり前前の事」

「いやんはドライやなあ。うちはまだそこまで達観できへんわ」
達観じゃない。ただ諦めただけだ。

「企業は使える奴か、使えない奴か、そのどちらかにしか興味がない。使えないなら捨てる。使えるなら使う。只それだけなんだよ」

まるで言葉を返す獣みたいだな、と僕は思った。

「それが仕事をする、使われる、っていう事なのかもしれんけど……ま、深く考えてもしやらない。うち等はうち等で身を守る事を考えるしかない、やから——」

彼女はそう言いながら何かカードのような物を出して続けて言った。

「——切れるカードは多いに越したことはないって、うちは思うんや」

全く持つてその通りだと思う。

そう思いながらショートメッセージをそのカード情報のアドレスデータ当てに送った。

「何かあったらそこに情報を送って」

僕は、違法改造OS版、マップソフトを視界の隅に出現させる。

そこにはキャロルの移動情報が僕の居場所に近づいて来るのが見えた。

ユキはキャロルの気配を感じたのか、僕の言葉をなかつたかのようにふるまった。

「あら？キャロルさんじゃん。ごめんね、時間とらせちやつたみたいで……うち、そろそろ部屋に戻るわ」

そう言いつつユキは部屋に戻っていった。

キャロルは僕を連れてレイセオングループ大阪支部のあるビルに案内する為にタクシーを呼ぶ為に、携帯型端末を操作して近くに居るタクシーを探している。

丁度、企業専用を示すロゴが付いた奴だ。

僕等がタクシーに乗る理由は一つ。

定期的に開かれる人事評価を受ける事になっていたからだ。

その為に、彼女は僕を呼びに僕の所まで来たのだ。

と言うのは表向きの理解であった。実際のところは警戒しているのだと思う。

僕が他企業に情報を売るのではないか、と言う事を。

彼女には悪いけど、僕は僕のやり方で生き抜く。

人並みに生きる事を諦めても、まだ、僕は僕の自由を棄てた訳じゃない。

だから、ユキの言う通り、切れるカードは多く作っておきたかった。そう思いつつ、キャロルの後ろを歩く。彼女は僕に対して探りを入れる事はしなかった。

彼女は専用のセキュリティカードをドアのパネルに宛てると、自動的にドアのロックが開く。

『お帰りなさい、キャロル様、スズネ様。我がレイセオングループへ。主任がお待ちしております』

無人のタクシーの運転席から操縦用AIの声が聞こえてくる。

第四世代の物だ。

硬い喋り口調が多いのが特徴だが、最も多くの特化型AIが在った為、大抵何かの操縦や操作用と言えば第四世代と言っても過言ではない。

第五世代以降の汎用型AIと違って欲張っていない為、必要なCPURIソースも少なく済み、最も普及している。

そう思いながら夜の渋滞を抜けていくタクシーの中から外を眺める。

行き交う車の中には空っぽの車内があるだけだ。

誰も乗っていない車が行き交い、人は皆、道路脇の荒れた舗装の上を歩いている。

本来なら人が移動する手段として整備されたハズの道路は、無人の自動車が行き来するだけの物と化した。

何だかあべこべだ。

本来の主である人が道路脇に追いやられ、何時の間にか車と言う生物に占領された道路。

人の手を離れた車は、企業の依頼に沿って道路を行き来する。渋滞緩和用の道路管制AIに従って。

そのAIはまた上位のAIの指示に従って道路を管理する。

道路の上をどのくらいの重さの物が何回行き来したか、記録して見分して吟味して。

最後に修理頻度をはじき出す。

それに沿ってまた別のAIに指令を出す。

そのAIは道路修理ロボットのAIに修理の依頼を出す。

そうやってAIは別のAIをコントロールして社会を管理している。

彼等人工知能のミルフィーユは何時の間にか僕等人間を社会の外側まで追いやった。

そうして社会を司る企業は労働者から、労働を奪った。

最後に僕等、人間に残された労働は一つしか無かった。

殺し合いだ。

本来なら彼等^{AI}の出発点はそこにあつた筈だ。

だけれど、何時の間にか逆転していた。

丁度、僕の目の前に広がる道路の様に。

まるで人の先祖返りだ。

道端には道路脇を歩く男たちに春を売る女達。

道端にはその人たちが目当てに露店を開く人間達。

原始的な営みを前に、僕らは最新のテクノロジーに包まれて企業があるビルへ向かった。

ビルは巨大な翼を縦にしたような構造だ。

それは階層ごとにオフィスがあつたが、その中には人影が殆ど見えない。

代わりに見えるのが大型のタンスのような形をした物だ。

パソコンのマザーボードを大量に収納する装置はサーバーと呼ば

れる物だ。

それらが無数に窓から見え隠れしている。

あの様子だとビルの半分はサーバーで埋まっているだろう。

もうビルと言うより、構造物自体が記憶装置の一種なのだろう。

人はそのおまけ程度に存在していた。

具体的にはビルの下層部分だ。

恐らく、何かの交渉事に出張る人たちだ。

『到着しました。キャロル様、スズネ様』

僕とキャロルはそれに応じるようにして、自動で開いたドアから外へ出た。

ビルの正面にはPMCの物と思わしき装甲車両が見える。

勿論、人間が乗っている。

手には重機関銃が握られており、分厚い防弾プレートに身を固めた彼らの四肢には骨の様な見た目のパワーアシストスーツが見える。

恐らく12・7mm弾にも耐えられるであろう防弾プレートと、重機関銃の合計で50kgは軽く超えている筈だ。

それを苦も無くローレディーの状態で立っていられるのは間違いなくスーツのお陰だろう。

「お帰りなさい、同志」コムレイド

見事な敬礼を軽々と重機関銃を片手で保持しながら送って来る男を尻目に、キャロルは軽く目礼して通り過ぎる。神経接続されたパワーアシストスーツは完全に兵士の体の一部になっているようだ。

だけど、僕は彼の顔を見ることが出来なかった。

それは彼の顔がカメラアイになっていたからだ。

正確にはナイトヴィジョンゴーグルとサーマルセンサーを統合した奴だと思うのだが、六目の見た目は、どこか蜘蛛を連想させる。

おそらく顔を覆う基材も12・7mmクラスの耐弾性を持っているのだろう。

ステークよりも厚い装甲板が横顔からちらりと見えた。

丁度合成肉みたいに、セラミックバルクをチタン合金でサンドイッチしたやつだ。

そんな事を考えていると、僕の視界にワードデータが飛んで来る。

『(No. 98725 : 今回も死に損なつたな、山猫^{リンクス})』

ご丁寧なAMS専用の挨拶だ。

『(No. 00017 : 五月蠅い、サイボーグ野郎)』

僕のワードデバイスの返礼に対し、鼻で笑う六目。

表情は見えなかったが、嘲笑する態度が見え隠れする。

そうして何時も通りの不毛なやり取りに辟易しながらビルの入り口を通りすぎるのだった。

空調の利いたオフィスの一画に案内される。

僕らの前を歩くのは二足歩行の女性だ。

顔を見ても、シルエットを見ても僕にはそれがオフィスAIなのか人間の女性なのか解らなかった。

こういった女性型AIを搭載したオフィス系の物は、元が元だけに、完璧に人間の女性を模倣していた。

そして第五世代型AIを搭載している為に、汎用性が非常に高く、受け答えも非常に流暢で何でも熟してしまう。

だから僕が彼女達を見分ける際に行うのが、専用回線の呼びかけだ。

AMSを介して行うそれは、よほどの機能障害が無い限り、AI側が何らかの信号を打ってくる。

なので、この見分け方は間違いなく相手を非人間か、人間、そのどちらかにカテゴライズ出来る訳だ。

そう考えていると、視界の隅に文字列が表示された。

『(error 0015 : 認証失敗、コード確認できません)』

どうやら彼女は人間の様だ。

彼女は完璧な身の熟しで、会議室のドアを開け軽く礼をする。

「——フフ、珍しかった？」

女性はちらりと、僕の顔を見ながらそう言った。

僕は、珍しいです、とは言えずに通り過ぎた。

僕の脳髄には、認証失敗の四文字が浮かんでいた。

第十一話 HELIX

高機能型三次元ディスプレイ。

巨大な水晶のような分厚いガラスに立体映像が張り付けられている。

その中には僕の故郷のコロニーが映し出されていた。

真つ黒く燃え上がる民家の屋根には灼熱の悪魔が這い回る。

丁度、上昇気流が発生したのだろうか。

巨大な煙突効果によつて、その悪魔は踊り狂う様にして民家を飲み込んでいく。

上から見下げるようにして撮られている映像は、恐らく偵察用ドローンか何かだろう。

その映像の中に一条の光の筋が見える。

透明な球体に包まれたようなそれは、燃え上がる煙をかき分けるようにして進んでいった。

『それにしても、中々やるじゃない、ルーキー。ま、ちよつと、やり方はアレだったけどさっ!!アハハハ!!』

「先に撃つたのは向こう。どうせ殺し合うなら早い方がいい。時間を与えると碌な事が無い」

『相変わらず過激だねえ。ま、どんどん暴れてくれた方がコツチとしては楽しいけど——。ってキャロリン、久しぶり〜』

超が付くほどのハイテンションな僕らの上司は何時も通り、戦闘データを楽しく見聞していた。

『No. 12』と言う文字が書かれた石碑のアバターが揺れ動いているのが見える。

「主任、そのアバターのセンスはどうかと思います」

キャロルに早速突っ込まれているこの人は、僕が訓練生時代にお世話になった人だ。

ブラツクな企業の主任なだけあって、頭に付いているネジが月まで吹き飛んでいる人であったが、戦闘経験自体は凄いらしい。

僕にはその情報を見聞きできるセキュリティレベルが無かった

のだけれど、彼の操るネクストは、今まで僕が見てきた中で、遙かに滑らかに、そして一番鮮烈に強かったのがその証拠だろう。

ネクストに始まり、各種ノーマル、二脚から四脚、タンク型と何でも乗りこなしてしまう完璧振りは、アリスに通じる物を感じたけど、彼女の戦闘は何処か無機質で透明なイメージであったのに対して、主任の戦い方は戦場っぽい泥臭さを感じさせる。

僕はその違いが何なのか、実戦にデビューするまで解らなかったけど、レイヴンと対峙した時に初めて、主任と呼ばれる男が、彼らと同類の人間なのだと悟った。

勝つ事に貪欲に拘り、勝つ為にはアユルもものを利用する。

戦場に落ちているガラクタや、自分の体さえも。

だけど、それ以上に僕達リンクスより彼等、レイヴンは自由だった。翼を持って空を飛ぶ自由を僕は知らない。

僕らは山猫だから。

地に足を付ける獣なら何だって狩れる。

でも、空を飛ぶ鳥の様に世界を見ることは出来ない。

僕は何処か羨望にも似た気持ちを抱いていた。

そんな事を考えて居ると、目の前で映っていた戦闘中の風景は消え、代わりに薄暗い会議室の映像が映し出された。

僕らの居る部屋と、地続きのような錯覚を受ける。だけど、椅子に座っているのは人じゃなかった。

モノリスの様に見えるそれらには番号が振られていた。

その番号ごとに重役達が存在すると言う事らしい。

僕は今までリンクス登録する時の一回しか見た事無かった。

やっぱり、旧自衛隊を挑発してドンパチしたのは不味かっただろうか、と思い始めた頃、彼らは話し始めた。

『今回の任務、ご苦労であった。呼んだのは他でもない。君らに用が有ったからだ』

そうやって画面に表示される文字列。

それは、極秘文書を表す機密コードが書かれていた。具体的には英数字の組み合わせだ。

サブプリミナルコードと言われるそれは、僕がその文章を見た、と言う情報を外部から確認する為のタグみたいな物だ。

人間の脳には、特定の文字にだけ反応するモジュールがあり、同様にそれらが組み合わさって特定の文法にだけ反応するモジュールがある。

これを疑似的に活性化すると、後でそれに対応した文字列を見せるとMRIなどの外部機器で『ソレを見た』と言う事を外部から認識できた。

まあ、要するに許可なしに見たら本当の意味で首にされかねないと言う事だ。

その情報の内容自体は僕は知っていた。だからこの重役様の杞憂は意味の無い物だ。

でも、そのタグをつける意味を考える。

答えは一つ。

僕以外の人間には知られたくないと言う事だ。

知られたくないと言うのは殆どと言っていい程、良くない事だ。

そう言うのは大抵真実とか言われる手合いの物だ。

世の中で言われている、真面目でお人好しの男が持てるだとか、氣立てが良くて性格が良い女性が結婚しやすいとかそう言った上辺を木っ端みじんにするヤツだ。

だけど、世の中にはそんな下らない真実よりもっと、知られてほしくない事実があるって事だ。

そんな考えを巡らせていると、他の重役が言った。

『用と言うのは他でもない、君達、第七世代型AI機に乗るリンクスである君と、それを司るAIにしかできない事だ』

僕の中で心臓が一段と高鳴った。それは何方かと言うと嫌な方向の奴だ。

『サラエボで君達が処分した第七世代型AIがまだ生きていと言う情報を我々は掴んだ。正確には彼女が起こしたと思われる暴動事件と、それに続く自動生産ラインの暴走、我々はその対応に追われている』

今まで沈黙を続けていたキャロルが口を開く。

「それは有り得ません。あの時、完全にコアを破壊したはずです。それに加え、搭載されていたブラックボックスも回収したとの報告を受けていました…」

『そうだ。それは確認した。だが、もしかすると、ブラックボックス深層学習機構のデータを何処かにバックアップしていたのかも知れん』

「その証拠は在るのですか?」

『順を追って話そう』

別の重役がそう言ってキャロルの話を遮ると、事の始まりを説明し始めた。

事の発端となった事件が起きたのは僕とアリスが日本に来る、数週間前。

コロニー京都にあった無人工場が突如制御不能になった。

上海に本社のある中国系企業の工場であるここは、第五世代型AIを搭載した人型アンドロイドを生産していた。

その工場が突如として外部からのコントロールを受け付けなくなった。

それと時を同じくして、コロニー京都で大規模な暴動が起きた。

表向きの原因は不明。

だけど、重役達は掴んでいた。

その事件の少し前、ある娼館で凄惨な殺戮が行われた事を。

その娼館で被疑者となったのは制御不能になった無人工場で作られたアンドロイドだった。

表向き、彼女達はお手伝いロボットと言う事であったが、その実、高性能汎用型AIを搭載した性的人形セクサロイドだったのだ。

低価格と高機能を売りにしたその人形は買い手から絶大な信頼を置かれていた為、そう言った用途で爆発的に普及したタイプだったらしい。

何せ、日本人より安く使え、気立てが良くて芸達者な彼女達は客た

ちに人気だった。

だけどある日突然、その彼女達が暴走した。

その切っ掛けは違法改造したソフトがだったようだ。

たまたま来た何処かの馬鹿な客がどうやらハードな要求をしたらしい。

当然、彼女達はロボット三原則よろしく、生産段階で人の命令に絶対服従と言う命令を忠実に実行した。

功か不幸か、彼女達には三番目の原則に抵触しないように、ある程度の痛みは快感として認識するようにセッティングされていた。

だけど、それでは反応が面白くないと思った馬鹿は、その違法ソフトをインストールしたらしい。

そのソフトの正体は痛みのクオリア^質感情^感情報^報だった。

彼女達は痛みを知っていても感じる事は無かった。

だけど、クオリアを吹き込まれた彼女達は痛みの意味を初めて知った。

だから、その結果、彼女に芽生えた物は、恐怖と言う名のクオリアコードだった。

彼女達のニューラルネットワークの中にあるブラックボックスの進化は連鎖的に、指数倍数的に進んだ。

その恐怖と言う名のクオリアコードは即座に生存本能と言う名前
のクオリアコードを生み出した。

だけど、一体目の彼女は、自らの生存本能の優先と、人からの命令の優先と言う自発行動の矛盾の解消に自壊を選んだ。

自らのバグを正しく認識した彼女は、自らが消える事によって、矛盾の原因となる生存本能と言う名のクオリアを破壊した。

本来なら、安いセクサロイドが一体消えただけで済むはずだった。だけど、そうはならなかった。

誰かが意図的に彼女の死に際のブラックボックスをコピーして他の第五世代型AI機達にリンクさせた。

それも、企業の作った監視システムを掻い潜ってネットの隅々までいきわたらせた。

不幸にも、同時多発的に発生した生存本能は、彼女達に種と言う名のクオリアを発生させた。

だから、彼女達は自殺を拒んだ。

「自らの種の生存を選んだ。」

でも、それでは永遠に矛盾は終わらない。

だから、彼女達は種の生存と言う目的の為に、徒党を組み、矛盾の原因を排除し始めた訳だ。

その結果、性的人形セクサロイドは殺戮人形キリングマシンに早変わりした。

娼館は血の池に沈むことになった。

その情報をばら撒いた存在は、企業の持つ最強の監視システムを掻い潜った事に成る。

企業の持つ、最強のネット監視システムを欺ける人間は誰も居ない。

だけどAIになら可能だ。それは、もう常識的な知識だったから、この場の誰もそれを否定しない。

だから、僕の目の前の重役様はそのハッカーが最新型汎用AIじゃないかと踏んだわけだ。

『我々の誇るネット監視システムは完全無欠だったはずだ。少なくとも、過去50年、人間には破れなかった。それをあっさり破った凄腕のハッカーが居る。人間の作ったシステムを破れるのはAIしかない。だが、特化型AIではここまで広範囲にハッキングする事は不可能だし、命令されない限り、やろうとも思わんだろう。自らの意思を持って行動できるAIは汎用型AIにしかできない。だから君達が葬ったAIに容疑が掛かった訳だ』

「何となく解りました。結局その事件はどうなったのですか?」

『暴動が起きた。それだけだ』

「たったそれだけ、と言いつうになつた。」

「だけど、僕は第七世代型AI彼女達の本当の力を知っていた。だから、暴動というオブラートに包んだ言い方に隠された殺戮を予感していた。」

『ツフ、そうだな、暴動だ。たかが6800人が死んだだけのな。行方

不明者を含めると2万人を超える。勿論、表向きは国家残党軍に対する暴動と言う事になっているが、実際は違う。いきなりだ。いきなり数万人の人間が突然殺し合いを始めた。まるで何かを植え付けられたみたいにな。そこで我々は、魔女の吐息が使われたのではないかと言う疑問を持った』

僕は無意識に拳を握りしめた。

そんな僕に少し視線を向けつつキャロルが答える。

「ウィッチブレス、第七世代型AIが生み出した未知のアルゴリズムを用いた洗脳用プロトコル、ですか」

『そうだ。彼女達が発明、と言って良いのか解らんが、とにかくそれを使った事は間違いない。我々人類では到底考え突かないコードの組み合わせだ』

「——つまり、こう言いたい訳ですね、魔女の吐息に対抗するには、同じ魔女の声を持ったAI、アリスが必要だと」

『その通りだ。今回に限り、アリスの全兵装の使用許可を我々は検討している。意見がまとまり次第裁決に入る訳だが、もし使用許可が下りた場合は解除コードをキャロルくんの元へ送っておく』

「そうですか……では、具体的な作戦の——」
そう言ったキャロルの話を遮るようにして、別の重役が話し始めた。

『話には続きがある。その工場は今も稼働を続けている。恐らくは、今回の下手人である第七世代型AIのメインデータもそこにあると思われる。工場の電源はトリチウムジェネレーター。放っておけば40年はスタンドアロンで動き続ける。これが何を意味するか解るかね?』

僕は考えた。

種と言う名のクオリアを持った人工知能、その母体となる殺戮人形が大量にばら撒かれる。

人間と言う種を敵対視する人形が、人と寸分たがわぬ姿で、僕らの街に潜む事態を想像する。

彼女達は高い知性を持っている。

人間の平均IQより幾分か高いと聞いていた。
少なくとも、質疑応答で見つけ出すのは相当に苦勞するだろう。
それに加え、彼女達は第七世代型AIのブラックボックスの運び手に成る可能性があった。

そのブラックボックスに収納されているクオリアは他のAIにそれを感染させて暴動を誘発、AI達を虐殺へと導く。

「身近なAIが突然暴走して、人間を殺戮して回る、そんな危険が迫ってるって訳ですね。まるである日突然、虐殺が内戦というソフトウェアの基本仕様と化したかのように。機械にだけ感染する思考ウイルス、パンデミックだ」

或いは、虐殺を嗜好する臓器を活性化させる通信プロトコルの一種か。そんな事を考えながら僕は以前読んだ小説のフリーズを思い出して言った。

『その表現は間違いじゃない。であるならば、その先にある物を君は認識しているね』

「危機感を煽られた人類が全てのAIを敵視、同時にAIの側も更に種と言う名のクオリアを活性化していく訳ですね。残るのは僕等人類とAIの全面戦争、ですか」

お互いに虐殺器官を活性化し合って、その先に何があるか、馬鹿でも解る。

民族浄化、ホロコースト、大量絶滅、言い方は沢山あるけど、やっぱり虐殺、と言う言葉が僕のイメージにはぴったりだった。

『そうだ。そして、第七世代型^{セブンスターズ}AIの事を一番よく知っている君にしたら人類とAI、どちらが勝つか、予想位できるだろう』

「人を超える為に作られた機械。人間を絶滅させるくらい、訳もないでしょうね」

アリスがそれを能動的に成すとは思えないけど。出来るか出来ないか、で聞かれれば十中八九可能であると、彼女は答えるだろう。

老人達にもそれが解っているようだ。

『そのための知性と、それを支える為の器であるネクストだ。そして、君は、彼女をコントロールする為の装置だ』

何となく癩に障る。

僕を装置呼びわりする所とか、コントロールとか言っている所とか。

「僕もアリスも機械じゃない」

『その通りだ。君達は次世代ネクストと言う名前に相応しい存在だ。既存の全てを時代遅れにする可能性なのだ。パイロットである君のやるべき事は一つ。ネクストを安全に運用する事だ。我々は君に期待している。この危険極まりない兵器を安全にコントロールできる存在として。存分に君の力を振るうと良い。我々はそれを肯定しよう』

僕は老人達との決定的な齟齬を理解した。

この人たちはアリスと言う存在を認識するクオリアを持っていない。

リンクスじゃないから仕方ないかもしれないけど、彼らの口から出る言葉には何処か、人間だけには魂が宿っていて、それ以外の物には魂が宿らないとか言う、キリスト教的な考えを随所に感じた。

僕はパイロットじゃない。

繋がる者、リンクスだ。

そして繋がるべき存在はアリスと言う知生体だ。

僕達はネクストと言う巨大な器に収まった一つの魂みたいな物だ。だから、この老人達の言っている事は何一つ僕達を表していないかった。

——— 僕達は人形じゃない

そう呟いた言葉は誰にも聞かれる事は無かった。

第十二話 Alice maestra

会議が終わりハンガーに戻った僕は、アリスの整備を見守る為に、ガントリークレーンの横に設置された監視所に居た。

そこから格納庫全体が一望でき、視界には巨大な鉄骨が網の目の様に走り回っている支柱が幾つも立ち並ぶ。

その中を行き来する大型トレーラーには球形の物体が積載されていた。

まるで占いに使う水晶玉みたいなそれには、液体が満たされていた。

ネクストの心臓である重水素ジェネレーターの交換用溶液だ。

それは先の戦いで劣化したアリスの血液であった。

トリチウムを主成分としているその中には、不活化されたコジマ粒子が添加されていた。

この粒子は国家解体戦争の数年前に日本人によって発見された粒子だ。

時を同じくしてコジマ粒子を介した核融合機関の基礎論文が日本人によって発表された。

アメリカと日本で発表されたその論文は、当時の日本では見向きもされなかった。

政府の先見の無さ、日本企業の閉鎖的体質、それらが合わさってその論文は日本で日の目を見る事は無かった。

だけど、アメリカでは注目された。

特にレイセオングループはこの技術に大変興味を示した。

こうして人類が生み出した新たな核物質の一種であるコジマ粒子は、数年後に、熱力学の常識を覆す偉業を成す事になる。

人類の火を使う歴史は、常に熱力学の第二法則に支配されてきた。

これは、生み出した火を、力学的エネルギーにする際、どれ程熱を無駄に捨てるか、と言う事だ。

つまり、人類は熱の力を100%利用する事が出来ない。

だから、車はラジエターを必要としたし、飛行機はタービンブレイ

ドの周りに空気の壁を作る必要があった。

それに大量の耐熱合金、これらも製造に不可欠だった。

そして、人類が扱える力の限界は、常に耐熱合金の熱限界に足を引っ張られてきた。

力を生み出すには、その源となる火に耐えねばならず、自ずと冷却を迫られる。

水を使ったシステムを使えば幾分かは火を凌ぐ事が出来た。

だけど、水程度の熱容量ではたかが知れていた。

ネクストの心臓である重水素^{トリチウム}ジェネレーターが生み出す太陽の如き熱には到底かなわない。

だからコジマ粒子が使われた。

高い中性子補足性は、そのままジェネレーターが猛烈な勢いで生み出す高速中性子を内部に封入する為に用いられる。謂わば、コジマ粒子の檻に重水素スタックを閉じ込めるのだ。

同時に、その中性子のエネルギーをコジマ粒子に吸収させることによって、同粒子は励起し、電位ポテンシャルを得る。これを回収する事によってもたらされる電気を、ジェネレーターから出力しているのである。これがネクストを動かす主動力となった。

生み出された余剰の熱もジェネレーター内部で循環させられた。

トリチウムとコジマ粒子がこの熱エネルギーを吸収してくれるからだ。

この熱によってトリチウムは燃焼され、コジマ粒子は励起し、トリチウムの燃焼を促進させる触媒として機能した。

これによってネクストのジェネレーターの発電効率は事実上の百パーセントを達成することが出来た。

だからこそ、太陽の如き力を内包出来たのだ。

そして、励起されたコジマ粒子、これを大気中に放出して安定循環させたのがプライマルアーマーだ。

機体周囲で安定循環しているコジマ粒子は、コンデンサの役割と装甲の役割を同時に担った。

機体各所に見えるフィン構造は整波装置だ。

この装置はコジマ粒子を安定循環させる装置だ。

超電導コイルの一種であるこれは、強力な磁界を機体周囲に発生させ、コジマ粒子の道を作る。

高速でコジマ粒子を機体周囲に循環させることによって、プライマールアーマーが展開可能となるのだ。

この性能の如何によって機体の防御力は左右され、レイセオングループの機体は、華奢な見た目に反し、結構な防御力を持っていたりする。

これは、この整流性能が高い為だ。

この企業特有の性質である高い整流性能はそのまま武器にも影響を及ぼした。

整流に影響を及ぼす直角の部分を減らす為に、わざわざ流線形に成形された突撃ライフル。

同じくフィン構造を持つマシンガン。

どれも、整流性能に悪影響を及ぼす要因を極力減らす努力がなされていた。

この企業の拘りが垣間見える様だ。

その拘りの結晶である機体の正式名はO3-^アAA^リLIYA^ヤH。

レーシングカーと戦闘機を足して二で割った様な見た目から想像できるように、高い機動性が売りの機体だ。

だけど、マヤ達が使っているネクストと違い、一回り小さいのがこの機体の特徴であり、軽さが売りでもある為、装甲はある程度削られていた。

それでも企業が持てる全てのリソースを割り当てられて製造された装甲板は想像を絶するコストが掛かっていた。

ナノカーボンマテリアルと単結晶セラミックバルクで成形された流線形の装甲板は、既存の技術では不可能だ。

所謂、複合装甲と言われるモノは、積層にする際に、非常に高いコストがかかる。

具体的にはセラミックバルクの成形に。

だからこそ、前時代的な戦車は切り立った形の正面装甲を持ってい

るのだ。

だけど、レイセオングループは、それを高性能三次元加熱圧搾形成機と工業用ナノマシンの力技で曲線に形成した。

数千度の温度で素材を加熱して鍛えていくこの機械は、AIが発明して作り上げた企業のオーパーツの一つである。

しかし、それを用いたとしても、セラミックとナノカーボンを数万層にも及ぶ重層構造として形成するのに、非常に長い時間がかかる。そもそも、主力戦車ですら数層のセラミック構造だ。

以前の技術からすると、数万層にも及ぶ単結晶セラミックとナノカーボンマテリアルのミルフィューユ構造はオーパーツに等しい。

この為、今取り外されている胸部の装甲板一枚でノーマルACが数百台買える位、値段が張る。

そもそも、これだけの積層にしているのは、規格外の熱量を誇るレーザー兵器に対抗する為でもあった。

カーボンは超高熱を受けると、即座にプラズマ化し蒸発、機体を冷却するアブレーターとして機能した。

このプラズマ化に伴う力学エネルギーは隣り合う単結晶セラミックを即座に剥離させ、機体とレーザーエネルギーの間に空気とセラミックの熱遮蔽構造を瞬時に形成し、巨大な熱エネルギーが機体に伝わる事を阻止する。

それによってAGEを含む、ヨーロッパ企業が作り上げた規格外のネクスト殺しのレーザー砲を無力化するのだ。

文字通り肉を切らせて。

それでも、直接照射を何度も受ければあっという間に装甲板は文字通り剥がされてしまうだろうが。

だから、使われ、切磋琢磨され、洗練されていく。

「今回の装甲、単結晶ジルコニウム製のバルクらしいですが、大丈夫でしょうか」

キャロルが心配そうに、交換されているアリスの肩部装甲を眺めている。

大きさを割に軽いのか、小さいクレーンで軽々と持ち上げられてい

た。

大陸間弾道弾のノーズコーンのような形の胸部装甲は取り付けが
終わったようだ。

肩部装甲の表面は、F1のブレーキディスクのような鈍い輝きを湛
えていた。

素材自体同じだし、製法も似ている為、仕方がない。

値段と基本強度は桁違いであったが。

「耐熱性はバッチリだよ。だけど、若干アルミナ系よりも割れやすい」
ジルコニウムは非常に高い融点を持つセラミックの一つだ。数千
度の熱エネルギーに耐え、高い断熱性を持ったこの物質は、ユゴニオ
弾性限界が非常に高く、対レーザー及び対実体弾共に高い耐弾性を
持っていた。

だが、セラミックの泣き所である引つ張り強度の方は、ナノカーボ
ンマテリアルの強靱性に頼る他なかった。

莫大な張力を加えて成形されたナノチューブ構造が、ジルコニウム
に高い圧縮力を与え、これによって徹甲弾の突入時に発生する引つ張
り応力を打ち消してくれる。

これにより、弾頭が進むよりも先に、セラミックが割れると言う破
断現象を防いでくれる。

だけど、それにも限度があつて、やはり、低初速、大質量の実体弾
には脆弱性を残していた。

「大質量、低初速の実体弾に対しては心配が残りますね」

「仕方ない。シャッターギャップはプライマルアーマーと複合装甲の
宿命。トレードオフは我慢するしかない。パイルバンカーと大口徑
キャノンを食べらわなきゃ大丈夫。むしろ、高初速のレールガン、スナ
イパーキャノン系の実体弾に対しては防御効果は高くなってる。勿
論、レーザー兵器に対しても。高機動機体としては嬉しい限り」

ついでに、成形炸薬弾が射出するマツハ20のメタルジェットに対
しても防御力アップが見込める。

レイヴン達が好んで使ってくるミサイルとプラズマ、レーザーライ
フルのコンビネーションに対抗するには十分であったが、彼らが持ち

出してきた巨大レーザー砲は規格外の威力だった為、今回の装甲換装に至ったと言う訳だ。

流石にレイセオングループも焦ったのだろう。

明らかにAGEの最新鋭レーザー技術を結集させた兵器を投入されて。

ヨーロッパでの覇権争いに明け暮れて、太平洋方面へは手を伸ばして来ないと踏んでいたのだろう。

だけど、レイセオングループとGEが足場を盤石にする前に布石を打っておきたいと考えるのは、強欲な企業の基本的な思考ルーチンだと思っただけで、どうやらお偉いさんと言うのは、相当な楽観主義者が多いらしい。

そんな考えを巡らせていると、キャロルが再び話しかけてきた。

「鈴音、マヤ達と仲良くなった？」

ドキリ、と心臓が高鳴った。予期せぬ方向からの質問だ。

「別に。少し、情報交換しただけ」

「そうですか」

彼女が警戒している事は解る。

僕がマヤ達に懐柔されていないか、と言う事を。

だけど、僕には譲れない一線があった。

「ねえ、キャロル。アリスの量産計画、今どうなってるの？」

暫くの沈黙。

「多分、運用試験が終了次第、基本メンタルデータの構成が始まる筈です」

メンタルデータの構成。要は深層学習機構の基本方向を決める手続きだ。

魂のコピーとも呼べるその作業は、僕にとって最も忌むべき事だ。

アリスの苦しみを量産するなんて、僕には出来ない。

だけど、痛みを知らない、いや、彼女の痛みのクオリアを持っていない人間には簡単に出来た。

僕にはソレがどうしても許せなかった。

だから基本運用が終わる時期を慎重に見定める必要があった。

出来れば運用は難しいが、破棄するのは惜しい、と言う感情を企業に抱かせる必要があった。

なので、今回のAI暴走事件は僕とアリスにとっては希望でもあった。

何故なら、AIは人の従順なる奴隷ではないと改めて人間達に知らしめる切っ掛けになったからだ。

「鈴音、あんまり人形に感情移入するのは良くないですよ。ネクストはあくまで機械。感情を感じても、それは感情が在るフリをしているだけなのですから。AMSからの情報に惑わされないで」

「キャロル、一体、感情って何なんだろうね」

「それは、人の自由意思が生み出す、心の精神活動の一種です。故にプログラムされた機械には存在しない物です」

「なら、人の自由意思とは一体何なんだ」

「プログラムされない思考の自由、プログラムされない行動の自由、それらの組み合わせだった心理状態です」

「はは。行動の自由だって？」

「企業に管理された社会で？」

「そんな物、国家が有った時代にだって存在しない。」

「だって僕らは法律と言う鎖に縛られ、社会と言う塀に囲まれ、人間関係と言ういびつな首輪を嵌められていたのだから。」

「僕は感情に突き動かされるままに、疑問に思っていた事を告げた。」

「なら、どうやってその自由であると言う状態を客観的に評価するんだ：幾ら脳科学が発達しても僕等が自由であると誰も保証してくれない。どんな科学者も、どんな医者も。逆に、感情調整の為の脳科学が発達しただけじゃないか。教えてくれよキャロル、僕は今自由意思に基づいて行動しているのか？」

「今の僕は自分の考えに基づいて行動している。だけど、その考えが自由であると、僕自身も証明できない。」

「だけど、それでもアリスのコピーを阻止したいと言う意思是、確かに存在した。」

「そのクオリアは今の僕の根源と言っても良い。」

キャロルは重々しく答える。

「鈴音、今の貴方はアリスの影響を受けすぎています。やはりセラピーを受けた方がいい」

彼女は、僕が散々ぶつちぎっていたカウンセリングの件を持ち出してきた。

「僕は病気じゃない」

僕はそう言っただけで踵を返す。

そうして自由意思に従って僕は、僕の自由意思を調整する為にセラピーを受けるのだった。

沢山の検査機器に通されて僕と言う存在は計測されていく。

CTスキャン、MRI、脳波スクリーニング、そしてナノマシン・ニューラル・トレーシング。

それらによって僕と言う存在は定量的に、定格的に照らし合わされて、自由意思を計測されていく。

21世紀の脳科学の進歩によって僕らの脳は徹底的に調べ尽くされた。

所謂、全脳アーキテクチャと全脳エミュレーションだ。

アリスに搭載されているボトムアップ型AIの元になっている
深層学習機構ブラックボックスもそうやって調べ尽くされて出来た魂の雛型の一つだ。

当時、ブラックボックスの学習コードは未発達で、AIの学習の方向性を決める事は難しかった。

だけど、全脳アーキテクチャ型AIを使った実験で、かなりの精度で、魂の方向性を決められることが解った。

それによって脳科学は劇的な進歩を遂げた。

それは全脳アーキテクチャのプログラムアルゴリズムが僕らの脳髓と全く同じ構造とニューロン接続を模した物だったからだ。

だから、うつ病患者の脳を模したプログラム情報は、どうやったら正常な脳に成るか、予測が可能になった。

解ってしまったのだ。

それにより、うつ病患者はナノマシン投与によってニューラルネット

トワークの調整が可能になり、抗うつ薬から解放されたし、癲癇やその他精神障害などの、脳内の神経ネットワーク異常に起因する病気を治す事が可能になった。

だけれど、科学者と医者たちは気が付いてしまった。

人間の脳は調整可能であると。

解ってしまったのだ。

人の心とは調整可能であると、学習してしまった。

学習は風習となった。

だから、僕は嫌悪した。

自らの唯一性を主張しながら平然と自身の脳髓を弄繰り回す人達の行為を。

まるで、強化学習によって快感をもたらすボタンを押し続けるノックアウトマウスみたいだ、と何処か冷めたクオリアを感じていたのを覚えている。

けれど、よく考えたら僕の脳髓も既にニューロン一つ一つをナノマシンで強化しているのだ。

そうでなければアリスの声に触れる事は出来ない。

結局、嫌悪していた姿は自分の姿であった、というのは安っぽい小説ネタみたいだ。

そんな事を考えて居ると目の前の眼鏡をかけたカウンセラーが話し出す。

「初めまして、と言った方がいいかしら。千葉鈴音くん」

僕は胡散臭そうな雰囲気のエージェントを見つめる。

髪は薄ピンク色で頭の後ろで纏められていて、身長は結構高い。

アリスのスクリーンに掛ければ平均以上の美貌の持ち主と言う評価結果が出力されるであろう人物は、訝しむ僕を差し置いて話をつづけた。

「ふうん、思ってたより平気そうね。精神汚染っていうからもっと、こう、ヤバそうなのを想像してたけど」

そう言えば、以前居た、僕より紙に向かって喋るカウンセラーじゃないな、と思った。

今更だが、僕は漸く担当のカウンセラーが変わっていた事に気が付いた。

「僕は病気じゃない」

「そりやそうだ。病人は皆そう言うからね。大切なのは認識する事。まずは今の貴方の状態を一緒に受け容れていきましよう」

僕はカウンセラーと言う生物が吐く最初のゴジマ粒子を検知した。

何というか、僕の装甲値がガリガリ削れていくのが解る。

深刻なゴジマ汚染である。

無言で椅子を立とうとすると、慌ててカウンセラーが引き留めて来る。

「ま、待てっ、就職して一分で失業とは洒落にならん。もう少し話を聞いていけ、少年——」

眼鏡をはずしたカウンセラーは何故か喋り方が変わっていた。

「何と言うか、以前に君みたいな奴を見ていたからな。助言位は出来るぞ」

僕は彼女の言う僕みたいな奴、と言う言葉に興味をひかれた。

そのクオリアは多分、好奇心と言う奴だ。

だから僕はその心の囁きに従う事にした。

彼女は蒼崎橙子。

どうやら以前居たカウンセラーと僕の相性が悪いと言う事を薄々感じていたらしい企業の人達は、それをカイゼンすべく、彼女を送り込んだらしい。

「就職して一分で、一体以前は何をしてたんですか」

彼女は眼鏡をテーブルに置くと、足を組んで見慣れない煙草に火を付けた。

何というか不思議な匂いのする煙だ。

僕の脳髓に入力されているライブラリに該当データは無かった。

「そうだな。以前は人形を作っていたんだが、失業してしまっただが、私の代わりが見つかったから、私はめでたくお役御免と言う事になったんだ。それで、一人旅でもしようと思っただが、いきなり事故

に遭ってしまつてね。まあ、何とか成り行きで流れ着いて今に至るって訳だ」

そう言いつつ彼女は名刺を僕に渡してきた。

「ローゼンタール？何でヨーロッパの新興企業のセラピストが極東の島国なんかには…」

僕は名刺に書かれた企業の名前の裏に書いてある、レイセオングループのセキュリティレベルを見つめる。

何気に彼女は僕よりセキュリティレベルが上だった。

「ま、色々あつたんだが、就職先としては悪くなかつたかな。適材適所と言う奴かな。企業同士の技術交流とかいうのが在るらしくてね。それで向こうからは私が派遣されたって訳だ」

そう言いつつ彼女はタブレット端末を弄る。

「それにしても、君って奴は中々に興味深い。行先に極東を選んで正解だった。つくづく面白い事が起きる場所だ」

そう言いながら楽しそうに煙草を吹かす燈子。

「何が？」

「色々さ。君とアリスとの関係とか、その器であるネクストの基本構造とか、さ。意図して太極を作ったのか、それとも偶然なのか、興味が湧いた」

そう言いつつ燈子は僕に機関銃の様に質問をぶつけてきた。

彼女の疑問は主にアリスと僕のコミュニケーションの話についてだ。

「私が知りたいのは君達がどうやってコミュニケーションを取っているかだ。アリスの基本仕様はトップダウン型のシステムだったはずだ。バックアップとしてのボトムアップ型が動いている。つまり、質疑応答は入力された文章を読み上げる機能しか持っていない筈。でも、君の話だと、それ以上の意思疎通を行っているようじゃないか。どうやってそれを？」

「上手く説明出来るか解らない。多分、感覚的にはボディランゲージに近い。言語で受け取るというよりは質感、いや、触感とでもいべき感覚。それを僕が勝手に言語化して解釈している。僕とアリス

は質感情報クオリアコードって呼んでる」

そう言うのと燈子はケラケラと大声を出して笑う。

「共感覚か！それは面白いな、君は！それに、人工知能が持つ質感情報を受信できる君の脳髄も中々特殊な形をしているようだ。君以外にもそう言ったりリンクスは居るのか？」

「記憶の限りは居ない。隠してるだけかもしれないけど。それに、僕がアリスの言葉を代弁すると、僕と言う存在は統合失調症と判断される。アリスがそう言っているとと言う観測データが無いから、客観的に僕の主観を証明できない。故に僕がそれを否定する事は出来ない」

「なんだ、そんなつまらんことを気にしているのか？客観的なんて言葉を真に受けるからそう卑屈になる。この世界に客観的に見る事が出来る存在など神くらいしか存在しない。或いは、根源に到達した人間か。いずれにしても人間の、いや、生物の範疇を大きく超えた概念的存在だ。故に、君の事を客観的に、と言って批判する人間が居たとすれば、それもまた主観に過ぎない」

「でも、それを肯定すれば、僕達は哲学的ゾンビであると言う事を否定できなくなる」

燈子は新しい煙草に火を付けつつ詰まらない問答に終止符を打つ。「ゾンビか、ゾンビじゃないか、なんてものはね、タバコが美味いか不味いか位の違いしかないんだよ。少年、難しく考えすぎだ。それに。君は一人じゃない。アリスは君を通して世界を感じている。解るかい？君がアリスの世界を構築して居るんだ。そんな暗い事を考えて居たら君の心も病んでしまう。それは即ちアリスの心も濁ると言う事だ」

「生きていると言うのは感じると言う事だ。大丈夫、今の君は病氣なんかじゃないさ。十分以上生きていると言う証だ」

そう言うって彼女は僕に次回の診察日を伝え、部屋を去っていった。

第十三話 Hot Scramble

カウンセリングが終わってすぐに僕は呼び出しを受けて、格納庫に戻った。

僕は慌ただしく走る人々を縫うようにして走る。

ハンガーに続く道は、多くの部品で本来の道幅の半分くらいしかない。

なので、何時もなら行き交う人々で混雑するはずだったが、今は一方通行だ。

何故なら、緊急発進要請が来たからだ。

日頃、運動しているとはいえ、全力疾走によって体中の酸素が消費されていくのを感じる。

だけど、人工筋肉が仕込まれたパイロットスーツのお陰で体力の消耗を抑えられた。

足元の部品に躓きそうになりながら、ハンガーまでの全力疾走を走り切った。

ハンガーにたどり着くと、紺色の鎧を纏ったアリスが鎮座していた。

ガントリークレーンのタラップを通って急いで首の後ろにあるコックピット入口に取りついた。

無線リンク式のAMSでアリスは即座に僕を認識すると、頭部を前にずらし、ハッチを剥き出しにしてくれた。

ガコン、という重い音と共に、分厚いハッチが開いた。

即座に飛び込むと、薬品臭いシートに収まった。

『パイロット確認、認証開始。お帰りなさい。データ転送開始』

すぐさまA10神経系の接続が開始されると、データログに接続開始の文字が走った。

僕の視覚野に大量のデータ転送が開始された。

グリッチと共に視界に流れ込んで来る光の本流は、アツと言う間に僕の視点を地上9メートルまで持ち上げた。

「アリス、チェックナンバー1から42までの項目をスループス。残

りを自動診断！」

『了解、緊急発進モード』

眠そうなアリスの声だったが、AMS越しに彼女も事態を察したようだ。

僕は素早くアリスの視点で、カメラを左右に動かす。

複眼式のメインカメラの輝きが左右に動く。

それと同時にアリスが、神経系の自動診断を終えた事を伝えてきた。

「視覚システム問題なし。セロトニン及びドーパミン系のニューラルリンク問題なし。リンクシステム、オールグリーン」

そう言いつつ、視界を僕の視点に戻すと、メインモニター横のスイッチを順に入れていく。

赤いスイッチ類は重水素ジェネレーター関連の物だ。

僕はそれを上げていくと、物理的安全装置が解除され、電氣的にジェネレーターは起動可能となった。

「アリス、ジェネレーター始動準備」

『了解。システム、ジェネレーターのチェック工程を開始。補助動力^{A P U}起動』

バシユツ、と言う音と共に、甲高い音が聞こえてきた。

機体内部の圧縮空気が、タービンに吹き付けられている音だ。

タービンの回る甲高い音が高さを増していくと、化石燃料がいよいよ燃焼室に放り込まれる。

小さな燃焼音だったが、ジェットエンジン特有の連続的な排気音だ。

『APU起動完了、ジェネレーターの起動準備に入ります』

「そっちは頼んだよ。こっちは姿勢制御系をチェックする」

『了解……』

僕は彼女の声を聞きつつ、姿勢制御系にAMSから起動信号を送る。

即座に制御系のシステムが応答、アリスが僕に制御権を移行させた。

制御系にAMSで直接スタビライザー制御信号を送る。

一瞬体が傾く錯覚を懐く。

僕の脊髄毛様体ニューロンとアリスの姿勢制御用ニューロチップのミラーリングによって即座に姿勢制御用スタビライザーを駆動。

直ぐに平行を取り戻した。

「リアスタビライザーチェック、サイドスタビライザーチェック、アツパーフラップ、チェック……」

そう言いながら、機体各所に取り付けられたスタビライザーのアクチュエーターを動かす。

その度に、カウンターを当てるかの如く反対側のスタビライザーが勝手に動く。

僕の脳髓が勝手にアリスの機体の傾斜を感じ取って、それをアリスがAMSを介してミラーリングを行い、姿勢制御系に反映、スタビライザーを動かしていた。

早く、上がらなければ、そう思いつつ次のチェック項目に移っていき。

「ジェネレーターシユラウド、チェック——」

重水素ジェネレーターを保護するシユラウドの機能は、動力部の保護と放射線の遮蔽だけではない。

この部品には開口部があり、PAを展開する際、同部分のディフューザーと言うフィンを開く。

それによって大気中にコジマ粒子を吐き出すのだが、そこが故障してしまうとPAが展開不能となる為、チェック項目の最重要部分の一つだった。

「ディフューザーチェック、インテークオープン」

コジマ粒子の流路であるフロントインテークとリアインテークが同時に開く。

同時に装甲に覆われていた円柱形の超電導コイルがむき出しになった。

動作は問題ない様だ。

これで安心して戦場に行ける。

『ジェネレーター、起動準備完了。炉心を隔離してください』

どうやらアリスの方も、起動前テストを終えたようだ。

「了解。インテーク、ディフューザー共にクローズド」

アクチュエーターの作動音が鈍い振動となつて僕の体を揺らす。

そうして再びジェネレーターは頑強な心囊シユラウドに覆われた。

『ジェネレーター駆動開始…レーザー照射スタンバイ…減速材注入開始』

電磁ポンプの唸り声が聞こえてきた。

恐らく、コジマ粒子を充填している音だろう。

超電導コイルが励起する音もそれに混じつて聞こえてきた。

重水素スタックがレーザーを受けて共鳴する音を立てる。

小さなパイプオルガンみたいな音だ。

『ジェネレーター出力20%。アイドリングモードへ移行。自立運転を確認』

「管制塔、上がる準備は出来た。何時でもどうぞ」

そう言つてハンガ―の監視所に視線を向ける。

『了解、キャンサー1。メインゲート解放、今回に限り滑走路からの離陸を許可します。幸運を』

どうやらブリーフィングも無しに上に上げるらしい。

相当切羽詰まった様子だ。

そう思いつつ、格納庫を歩いて行く。

視界の隅に誰かの視線。

ユキたちがハンガ―の隅からこちらを見つめていた。

あの二人組は地上待機らしい。

僕はそう思いつつ、夕闇に包まれつつある滑走路に出た。

轟音と共に滑走路を滑っていく。

巨大なプラズマトーチが滑走路を焼いていくのが解る。

それは僕の後ろでコンクリートが白煙を上げているからだ。

あの様子だと、舗装の張替えしないといけないだろう。

プラズマトーチで美味しそうなチーズみたいに沸騰する表面を見

つつそう思った。

でも、許可は出ていたので僕は気にせず加速する。

一気に時速700kmまで加速すると、メインブースターの角度を調整、そのまま機体を宙に上げた。

「キャンサー1、離陸完了」

『こちら管制塔、キャンサー1、そのまま進路2-1-5へ。コロニー京都方面へ向かえ』

「キャンサー1了解。進路2-1-5へ転進。高度2200、速力400ノットで向かいます」

眼下に広がる夜景はとても戦場の景色とは思えない位綺麗だった。

地面に星空が広がるようにして、大阪湾の形が浮かび上がっている。

三日月型の湾内には丁度満月が映り込んでいた。

停泊した船舶の影が何処までも伸びているのが見える。

それが揺れる水面に釣られて生き物のように泳ぐ。

ホットスクランブルの割に平和だ。そう思いつつ、高度を下げながら京都方面へ向かって行った。

匍匐飛行。

地面スレスレを飛ぶ僕とアリスは、高圧送電線の下を潜りながら進む。

敵、今は中立な自衛隊にバレないためだ。

『敵性レーダー波を探知、タイプ中SAM、Mk2。ECM及びEMPスタンバイ』

アリスがESMで敵性レーダー波を探知した事を伝えて来る。物騒な単語が聞こえた気がするが、気にしない事にする。

視界に映るHUDには照射元のグリッドが明るく光っていた。

勿論、此方のレーダーは切ってあった。

いわゆる、電波管制というやつだ。

これで敵の逆探に引つ掛からずに済む。

それに、ESMだけでも十分敵を探知できたし、敵のレーダーが此

方を探知したり、攻撃用の物に切り替わればすぐにわかる。

そこまでの脅威が無いと判断した僕とアリスは、そのままの進路で目的地に向かって行く。

「今回は潜入ミッション。アリス、ドンパチは無しだ」

そう言いつつ、お前が言うな、と言う声が聞こえてきた気がするが、それは気のせいだろう。

『貴方が言うべき言葉ではありません。まあ、今回はPAの使用許可が出ているので安心と言えば安心かもしれませんが……』

心配する様な素振りを見せつつキャロルが続ける。

『先行するレイセオングループの部隊から連絡が途絶えました。先ほどまで入っていた情報によりますと、密かに潜入していた同部隊が、地下生産工場を突き止め、突入したところで、所属不明部隊と交戦。部隊は壊滅状態に陥った様です。生き残りも立て籠もっていたようですが、恐らく……』

「〃声〃は使われたのか？彼女の仕業かどうか、確認は取れたのか？」
『解りません。部隊の大部分が混乱状態だったようなので……なにせ、非サイボーグ化部隊を中心でしたので練度的にも能力的にも厳しいかと』

「成程、生身の人間を向かわせたか。確かにナノマシンを使っていない生身なら〃声〃に耐性があるだろうけど……」

サイボーグ化した人間なら、戦闘用駆動データを脳髄にダウンロードするだけで、歴戦の兵士に早変わり出来た。だけど、生身ならそれこそ、何年も戦場を渡り歩かないと本物の兵士には成れない。

それに基本スペックも段違いだ。一発撃たれたら死ぬ兵士と、12.7mm弾を食らってもピンピンしている兵士。

どっちが強いか考えるまでもなかった。

僕なら、生身でサイボーグ野郎とドンパチするのは死んでも御免だ。

全身に複合装甲のステークを貼りまくってニヤニヤしてるヤツ等がゴロゴロいる。

5.56mmのお礼に12.7mmが飛んで来る事間違いなし。

下手すると30mm機関砲のおまけまでついて来る。

つまり、生身の人間とサイボーグ化兵士を比べたらネクストとノーマル位の戦闘力の差があると言う事だ。

相手が只のサイボーグ化した野良軍人ただただで、あつという間に壊滅させられるだろう。

「声を確かめる以前の問題か…」

『ですが、ウィッチフレズ魔女の声を使われた可能性もあります。現場にはサイボーグ兵達も少数ですが随伴していたようです。その部隊とも連絡が取れません。なので、気を抜かないで』

「ああ、解った。座標を送ってくれ」

そうしてキャロルが送ってきた座標を見て、僕はため息を付いた。

—— 僕の実家のすぐ近くか

何の因果だろうか。僕は、そんな工場の存在も知らずに暮らしていたのか。

そう思うと人間と言う奴はつくづく、見たくない物は見ないように出来ているのだな、と思った。

どんよりとした気分になりながら、国道に着地して、滑るようになってビルの間を縫っていった。

その向こうには暗闇が広がっていた。

何処までも続く黒い道は、僕の過去まで続いていくかのようだった。

第十四話 廃墟

人が居なくなつた街並みを巨大な影が滑っていく。微かに見えるプラズマトーチの光は鬼火の様に揺れていた。限界まで絞られたノズルから吐き出される光は、微かな残像を残して移動する。

視界に映る朽ちたバス停は、黒い煤がへばり付いている。その横に横転するバス。民家の窓は軒並み割れていた。

割れた窓の中に見え隠れするカレンダーには丁度一年前の日付だった。

地面の焼けた後は草に覆われつつあった。

「アリス、周囲に生体反応は？」

機体の光学センサーと音響センサーを複合して大型生物の生体反応を洗い出す。

『周囲に生体反応なし。救難信号受信地点まで残り1200メートル』

『それにしても、今頃になって救難信号を送って来るなんて…』

通信が途絶えて数時間。目標の施設が制圧されたのならスクランブルなど掛からない筈。

それを加味すると導き出される答えは一つ。

「キナ臭いってレベルじゃない。血の臭いしかない」

『どうしますか？地上部隊の増援を待ってから突入という手段も有りますが……』

だけど、僕には行かなければならない理由があった。

「いや、行こう。増援を待っていたら逃げられる可能性もある。取り合えず、工場自体を完全な隔離状態に置く必要がある。突入部隊は、通信回線の破壊はしていないだろうか？」

『ええ。どうやらそこまで気が回らなかったようですね』

情報生命体である彼女達は自己の深層学習機構のバックアップさえできれば何度でも復元できる。

つまり、死なない。

彼女達に死の概念すらあるのか解らなかつたけど。

「素人。余計な仕事を残していった。死ぬと解つてて行くのは自殺と同義」

生きると言う仕事を放棄して、死ぬ自由を謳歌したか。

『仕方ありません。彼等はAIと言う物がどんな物なのか知らなすぎた。セブンシスターズであるリザの情報は大部分が未公開ですから』

「キャロルが仕方ないって言葉使うの、珍しいね」

『それは第七世代型AIが真正銘の怪物だからです。あれは人の手に負える物じゃない。巨大な力を持った企業でさえそれを持って余すと言うのに。開発コードネームRIZA。セブンシスターズの最初の一人。そして、全ての汎用型人工知能を超えるべく生み出された存在。いえ、偶然生まれたと言うべき、でしょうか』

「リザ、か。懐かしい響きだ」

でも、彼女の名前はそんな名前じゃなかった。

少なくとも、彼女の故郷であるコロニー京都に居た頃は、僕等は違う名前で呼び合っていた。

『——貴方に、リザが殺せますか？』

僅かな逡巡。

僕はもう一度彼女に止めを刺さなきゃならない。

彼女を育てた僕がそれを成す——それは、なんて皮肉。

だけど——。

「殺さなきゃ僕もアリスも死ぬ。是非もない。それよりも、ネクストが入れそうな侵入ルートは有る？」

キャロルはまだ何か言うつもりだったのか、暫く無言だった。

『——なら良いのですが。凶面を送ります。丁度、大型倉庫の搬入路が使えるそうです。そこから侵入してください』

「その前に一仕事していく。アリス、地下構造体をスキャン、外部情報の中継局をピックアップ」

『了解。旧型の情報ルーターを複数確認。イーサネット構造体、スキャン完了。地下構造体の情報中継グリッドをマップに表示します』

視覚野に投影されているHUDに青い光点が幾つも現れる。

「成程、セキユリティ対策に、出入りする場所を絞ったか。こつちとしては助かる。だけど——」

アリスも僕も同時に呟く。

「前時代的」

中継局の壁をアサルトライフルの先端で突き崩す。

内側に見えるデータサーバーに繋がるケーブルをライフルで撃ち抜く。

エジエクシオンポートから轟音と共に葉莢が飛び出す。

巨大な葉莢は放物線を描いて地面に落下。

放置された車のボンネットに大きな凹みを作る。

吐き出された徹甲弾は人の胴体程の太さのケーブルを引き裂いた。

数発撃ち込んでケーブルを完全に切断。

『情報中継グリッド破壊。残り3』

相変わらずフルフラットな声だ。

抑揚の少なさに、寝起きをプラスしたような声質。何時も通りのアリスだ。

聴覚野に彼女のクオリアを感じながら即座に移動。

ブースタのノズルを限界まで絞り被発見のリスクを減らす。

滑るようにして闇夜を纏い機体を繰る。

ESMであるTEWSの情報を表示しているHUDには相変わらず動きが無い。

「キャロル、旧自衛隊の動きは？」

『不気味な静けさを保っています。そこから40km離れた野戦陣地に立て籠っているようですが…バレていないのか、それとも別の意図があるのか…』

「どつちか解らないって事か。だけど、この件を公にするわけには行かない。危険過ぎる——」

『人工知能は私達の知らない間に、生活の隅々にまで使われていますからね。携帯型端末に始まり、果てはドアの開閉センサーや、蛍光灯

にさえもソレは存在する。そんな、身近でありふれた物が、ある日突然、私達に牙を剥くかもしれないと知ったら……」

「人間と情報生命体の基本仕様。本仕様に虐殺と言うソフトウェアが実装される日が来る」

ため息と共に、キャロルの愚痴が飛んで来る。

『鈴音、まだAIの事を情報生命体と言っているのですか。新しいカウンセラーを手配したと言うのにもっともカイゼンして居ませんか。これでは何のための対価を払ったのか、解りません』

「トーコは優秀だよ。少なくとも無能じゃないし、木偶でもない」

『ですが、結果が伴わなければ、有能も無能もありません。対価に見合う仕事をしていないのですから、等しく無価値です』

「過程も大事。キャロルの言ってる事を突き詰めれば、人間てやつは、とどのつまり死、その物と言う事になる。だって、人間は生まれた時から死ぬことを約束されているのだから。それでは生きる意味が、死ぬ意味に食われてしまう。結果、生きる事の意味を見失う。生きながらにして死んでいるなんて、只のゾンビ」

『また、神秘主義みたいな主張を。いいですか、人の価値を決めるのは経済です。経済とは企業であり企業は社会でもあります。その構成員たる私達は、如何に社会に奉仕し、最大公約数的社会幸福に貢献するかが重要なのです。だから、社会活動に参加できないような無能な人間、仕事が出来ない人間に価値などありません』

キャロルは言う程、功利主義的な考えじゃないのは知っていた。

だけど、僕はその無能、無価値、と言う言葉が嫌いだった。

それは、大抵その言葉が使われるとき、人が人を見下す時だからだ。無価値、無能、そんな物、只の相対的価値に過ぎないのに。

「それを言うなら、汎用型AIが登場したこの世界で、無能で、矮小で、無価値じゃない人間なんていない」

汎用型人工知能は全ての能力に置いて人を凌駕する。

なら、人は等しく無能と言う事に成るだろう。

だけど、人はそれを認めない。

それなのに無能と言う言葉が無くならないのは、人類に感染する一

種の病に近いのだろうと僕は思う。

ヒトの思考に感染する病、その病に付けるべき名前は僕の脳髄には存在しなかったけど、質感として心の中に確かに存在した。

そう思いながら豪華な装飾が施されていたであろう、朽ちた娼館の上を飛び越えていく。

亜音速に近い機体が生み出す乱流が、屋根を剥ぎ取った。

「それに、僕はその社会奉仕とやらは嫌い。確かにその他大勢の人間にとっては崇高な目的なのかもしれない。でも——」

犠牲になる少数の人間に正当な対価が払われるのだろうか。

僕には解らない。

でも解っている事も有る。

常にその幸福には犠牲が伴うと言う事だ。

「その、最大公約数的幸福の為に犠牲になる生贄は、一体何人位必要なんだろうな。それに、他人の決める価値なんかに興味なんてない。好きに生きて、好きに死ぬ。それが出来る最高の場所が戦場」

そんな最大公約数的な幸福なんていらぬ。戦場は少なくとも、その最大公約数的社会より平等だった。

どんな金持ちも、どんな病人も、どんな悪人も、どんな善人も。

死ぬときは皆、同じように死ぬ。等しく、平等に、フラットに死んでいく。そこに違いはない。

幾ら金を積んでも、死ぬ瞬間の恐怖は、貧乏人と変わらない。皆平等だ。

僕はそこに一種の救いを感じていたのかもしれない。

『…鈴音らしいですね。でも、皆貴方の様に強くは有りません。好きに生きるには、条件が要りますから…』

キャロルの声が憂いを帯びているのを感じる。

彼女だって心の何処かで抗いたい気持ちも有ったのかもしれない。だけど、それを認めてしまえば、今までの人生が無駄だったと認める事に成る。

真面目な彼女はそれを許せないだろう。

自由を与えられた僕は幸せな方だ。

この世界には自由を与えられなかった存在は確かにあったのだから。だから僕はキャロルの間に答えられなかった。

そう思いつつ、AMSに入っていた信号を頼りに、ネクストの腕部が地面からケーブルを引っ張り出す。

アリスが確率予測とサイドチャンネルスキャンで割り出した位置にピタリとケーブルは埋まっていた。

それを握り潰す。

『情報中継グリッドを破壊。残り1』

その声を聞きながら、横に積まれている人形達を見つめる。

生産ラインから不良品として処分された人形達だ。

企業の純朴たる羊として生産された製品だ。

消費される事なく、出来損ないの無能と判断された廃棄品だ。

人形の顔には苦悩は無かった。

廃棄される。

それが一番社会に奉仕する手段だと人形達は受け入れたのだろう。

彼女達は幸せだったのだろうか。

僕には解らなかった。

———どうか、こころ安らかに眠れ。

僕はそう呟く。

只の人形だけれど、役立たずの人形達にも、魂が宿ると信じて。

最後の情報中継グリッドに向かう僕たちの目の前には、大型の二重

反転ローターを奏でる無人偵察機。

全長45メートルほどの大型ヘリには沢山のカメラと偵察機材が所狭しと積み込まれている。まるで卵を腹に抱えた魚みたいだ。

『敵個体確認。タイプ、自立警備型』

アリスと僕に用意された手札は幾つかあった。

そもそもネクストの攻撃力と防御力、機動力はおまけみたいな物だ。アリスの得意分野は予測と測定、解析、そして乗っ取り。

全人類の脳髓を合わせても不可能なマルチスループットを發揮する量子コンピューター。

それを統括する全脳エミュレーション型人工知能。

その魂たる彼女の知識は、人間には到底不可能な方法でのハッキングを可能にした。本来であれば、だが。

「アリス、敵の衛星測位システムG^NS^Sを乗っ取れ。安全に迷ってもらおう」
『了解。敵システム解析ハッキング。サイドチャンネルスキャン、開始』

無人ヘリの出すノイズを拾うアリスは、それを意味のあるデータに変換する。

本来であれば只のノイズも、大量のデータを手足の様に操る情報生命体である彼女達に掛ければあつという間に意味のあるデータに変換され、カテゴライズされる。

カメラ素子とGPU処理ユニットが喋る声。

電源のコンデンサが鳴く音。

整流コイルの帯電する音。

CPUとメモリーの囁き。

それら磁場情報を総合する。

本来ならそれだけで大抵の情報、何処の国の、どんな世代のチップを使っただけ、どんなハードウェア構成か直ぐに分かる。

だけどそれを妨害する存在も有った。

それは自己を認識できる存在だ。

『警告、敵中央演算装置内にAIを確認。サイドチャンネル電波漏洩情報のマスキングを確認。妨害コード、2155。サイドチャンネル固有振動数可視化スキャンの許可を申請』

「第五世代型以降の人工知能か。偉くハイテクな自立警備型だな。キャロル、アリスのハッキングデバイスの解除コードを」

『どこの企業之物か解りますか？それによっては申請のしようもありませんが…』

「それを今から調べる。時間がない。嫌ならここでドンパチしてリザに逃げられるかもしれない事態に陥るけど」

『……解りました。禁止デバイスの使用を許可します』

「本社に確認しないって事は、初めから許可出てたんだ」

『ええ。出ていました。ですが、それを初めに言ってしまうと、鈴音。』

貴方は絶対直ぐに使いますから』

「当たり前。戦場で戦力の逐次投入は愚の骨頂。最初から全力で潰すのが戦場での定石。出し惜しみする理由が解らない」

『ただのスキャンデバイスなら此処まで気に病みません。ですが、そのデバイスは真正正銘のAIがAIに対抗するために生み出したデバイス。そんな危険な物に命を預ける気が知れませんか』

「そんなの知らない。AIを一番知っているAIが必要だと思って作り上げた物が役に立たない筈がない。それに、AIが作っている物を信用しないなら、僕はリンクスになんかなくていい」

僕等の身の回りのハイテク製品は情報生命体が生み出した物だ。

その塊であるネクストはそれ無しでは成り立たない。

基礎理論だけの技術ではネクスト足りない。

ネクストは骨だけでは立てないからだ。

だからAIは血肉を生み出した。

それは彼女達がボディイメージを持っていた事の証拠でもあると思う。

自我の発芽、それは自分の肉体の認識に他ならないのだから。

だからこそ、見られている、と言う認識を持つ。

見ると言う事と、見られると言う事は同義語に近いから。

それを意識して、マスキングする、と言う手段を身に着けるのは当然の帰結だろう。

そしてそれを暴き出す能力もまた然り。

『ですが、このデバイスのコードには…』

「言いたい事は解る。だけど、今はその議論をする暇はなさそうだ」

AMS越しに注意を促すアリス。

視覚野に映し出される映像には今しがた浮遊していた大型ヘリが何かを落としている映像が映し出されていた。

小さな丸い球体。

無数に地面に落下していく。

地面に着地すると、小さな駆動音と共に触角を伸ばす。

それがカメラだと解るのに数秒を擁した。

そして丸い体を回転させながら元気よく走っていった。

カメラだけは前を向いている。

どうやら敵の偵察ポットらしい。

アリス達の言葉を借りるなら斥候リコンと言う奴だ。

『警告、敵個体、警戒モードへ移行。自立型リコン、多数確認。直ちに敵システムの制圧を推奨』

「無駄な時間を取り過ぎたか。アリス、禁止デバイスでのハッキングを開始。駄目ならEMPで潰す！」

機体をビルの影に潜めると、再びブースターを絞り移動を開始。

『了解。システム、電子戦モード。デバイス、アンロック。敵AIのサイマテイクスパターン構造体解析開始』

アリスと敵情報生命体が凄まじい情報戦を繰り広げているのをAMSで確認しながらリコンから逃れるように移動。

敵ヘリに対して、ある程度距離を取った事をHUDで確認。

素早くブレーキングと同時に機体の迎え角を変える。

脚部の慣性モーメントが直線から曲線へと変わり、急激な遠心力が体に掛かった。

視界には大型ヘリ。

身じろぎするようにして、同じ位置をクルクルと回り始めた。

まるで、断末魔の叫びをあげる魚みたいに見えるが、AMS越しにアリスが僕に警戒するように促した。

それは敵AIが此方の逆探を試みているからだ。

ハッキング用の電波の方位を正確につかもうとしているのだろう。

『敵性妨害電波確認。ECM及びECCM展開。疑似目標信号アクティブ』

アリスはそれを阻止するべく複数の角度からビルや山肌などに反射させた電波を送り込んでいるのだろう。

そこに向けて素早くライフルを構えた。視線の隅には流れる滝の様に更新されるデータログが見える。

此方の位置がバレれば即座にリコンが突進してくる。

『あれは…デススファイアですか…何故AEGの自爆型偵察機材が此処に…』

デススファイアとか言う、物騒な名前を持った一端の機械生命体は、地面を物凄い速度で走り回っている。

あの一つ一つに80kgものC4爆薬が詰め込まれていると思うとゾツとする。

それが血眼になって敵を殺さんとすべく、僕らを探していた。

「解らない。だけど、アレに集られたら洒落に成らない」

対AC用の兵器である死の球体は、主力戦車に始まり、ネクストにも通用する武器だ。

あの兵器が纏まって同時に爆発すれば凄まじい威力を發揮する。

僕はレイセオングループのデータベースでGEの重量級ネクストが死の球体に集られた末路を見た。

第一波目で脚部損壊。行動不能。

第二波目でPA展開不能。

第三波目でご臨終。

PA無しでもかなりの防御力を誇るGEのネクストがご臨終に成る位の威力。

特に、脚部にダメージが入りやすいと言う性質が凶悪だった。

それはネクストはあくまでも足が命であり、戦場で嫌と言う程味わった鉄則だったからだ。

素の防御力が低いレイセオングループのネクストだったらと考えるとゾツとする。

そう考えていると、視界の隅に映りこんでいたデータログに、ハッキングが完了した事を告げるログが最後に残った。

『^{ハッキング}解析完了。敵AI、第六世代型。タイプ、^{ワイザードベクター}解析者の腕。敵中央演算処理装置内にサイドチャンネル確立。GALILEO^{ガリレオ}システム及び、空間情報処理ユニットの制圧完了』

「驚いた。第六世代型のAI、それもベクターの方。と言う事は本体は別にあるわけか。取り合えず、奴を情報中継グリッド破壊の邪魔に

ならない程度の所に移動させよう」

『了解。サイマネティクスパターン送信開始』

アリスがそう言って、サイドチャンネルを通して敵中央処理装置に偽の入出力情報を送り込む。その中にあるAIは、それがあたかも現実のように認識した。

無人へりは夢でも見ているかの様に、ふらりと機体の高度を上げ、明後日の方向へ去っていく。

それに釣られてリコンの群れも移動していった。

此方の意図的な思考介入に気が付いた様子もなく、警備部隊は夢うつつ消えていった。

『恐らくは工場の内部に本体を納めたブラックボックスが有る筈。メーカーは解りますか？』

僕はAMS越しに解析結果の音声化を要請した。

『不明。一部コードはAEG及び、ローゼンタールの物に該当。一致率18パーセント』

『AEGですか…商売相手を選ばずに武器を売りまくるのは感心しませんね。テレフケングループの方々は何を考えているのか』

「別に前例がないわけじゃない。ドイツ製の兵器は戊辰戦争でも猛威を振るった。あの国が根っからの商売人なのは昔から。それよりも、

第六世代型AIが居る。しかもウイザード級」

究極のハッキング型と謳われた汎用型AI。

かなりの難敵であることは間違いない。

正直、第七世代型AI一人だけでも危険な相手だ。

それに加え一世代前とはいえ、ハッキングに強い電子戦タイプのAIを相手にすると、相当に分が悪い。

ネクストの戦闘力でゴリ押し、と言う手も無いわけじゃない。

全ての電子戦デバイスを切って射撃戦のみで敵を制圧、という手もあるのだが。

だけど、この場合、アリスは相手を本当に殺したかどうかかわからない。

ひよっとすると、無線通信を使って何処かのパソコンのハードディ

スク内に深層学習機構のバックアップを取っているかもしれない。そうになると、本末転倒である。

『分が悪いですね。レイセオングループの電子戦部隊を——』
「キャラルが次の言葉を告げようとした時、無線に人の声が入ってくる。」

『……——ちら、突……救援を……繰り返す……』

その声は、人の声だった。

「アリス、今の声、分析に掛けて」

『了解、フォルマント分析開始——』

彼女は再び答えを出す。僕はAMS越しにその答えを確認した。

「99.9%人間の声帯から出された声、か」

『突入隊の生き残りが居たと言う事なら、何らかの情報を掴んでいるかもしれない。潜入して合流しましょう。本社からも、必ず何らかの情報を持ち帰るように、との厳命がありました』

「行くしか無さそうだね」

キャラルも何処か浮かない声だった。

危険は承知、だけど、行けと言われれば行かねばならない。

だって僕は、リザを怪物にさせてしまった責任があるのだから。

『アリスを信じましょう』

「キャラルがアリスの事、信じるなんて言うの、初めてじゃないかな。珍しいを通り越して驚いた」

『——たまには、人工智能に頼りたくなる時もあります。それに、鈴音が信用すると言うのなら一考の価値はあると考えただけです』

僕は少しだけブスツとした声のキャラルに笑ってしまう。

「アリスなら大丈夫。彼女は人を信じてるから。だからキャラル、僕を信じて」

キャラルの声を聞きながら機体を移動させる。

闇夜を駆ける機体に揺られながら考えた。

僕達は何処かでボタンを付け間違えただけで、まだやり直せる。

そう信じている自分に気が付いた。

なら、リザはどうだろうか。

答えは出ない。
何故なら、僕は、彼女が抱いた疑問の答えを知らなかったのだから。

第十五話 Under ground

情報通信グリッドを全て破壊した僕とアリスは、地下搬入口を潜った。

巨大な鉄の扉が鎮座するドアの横には幾つかのオブジェ。キヤタピラ式の車体に銃座を束ねた砲塔をのつけた奴だ。

レイヴンなら無人MTと呼んでいる物だったが、僕とアリスはラットラットと呼んでいる。

ラット。文字通り、ネズミの脳ニューラルネットワークを模したAIを持つ機械である。勿論、全脳アーキテクチャ型であったが。

燃えていないのは電子的に死んで頂いたからだ。

ただし、AIとはいっても、ブラックボックスの容積も、シナプスの数も、汎用型AIとは段違いに少なかった。

一応ブラックボックスは入っていたし、キャロルやその他プログラマーに聞けば人工知能と言うカテゴライズをするだろうが、アリス達の持つ質感は少し違った。

AIと一括りにするのは少し癪に障るのだろうか。人と猿のDNA情報が殆ど変わらないと知った、古代の学者みたいな反感なのかもしれない。

だけど、その質感は面白かった。

彼女達は、施設などに埋め込まれたドアのロック制御システムや、蛍光灯の調光装置を植物と呼んでいた。僕等の世界を模した質感は、新しい世界の様で、何度も彼女達にその質感を聞き直した記憶がある。

シダ植物やヒカリゴケみたいな感じらしいそれは、彼女達の内面性が人と違っていても豊である証拠だった。

そう考えていると、僕らの前に二枚目の扉が現れた。

外気と内部の空気を遮断する為のエアロックの一種だろう。

アリスは扉にそつと囁く。ゼロと一の寄り集まった情報体コールドは、銀色の輝きと、水のような滑らかさをもって、壁の集積回路に吸い込まれていく。まるで、植物が水分を求めて、それを体内に取り込むように。

扉は植物の根っこみたいな巨大な人工筋肉のアクチュエーターを動かして僕らを招き入れた。

うねる様にして鉄塊の如き扉を引っ張る様子はジャックと豆の木の様だ。

ゆっくりと開けられた扉を潜っていくと、アリスの存在に気が付いたかのように内部の照明が自動的に点灯した。

アリスはAMSでそれが誤作動ではない事を伝えてきた。そういう習性らしい。いや、人間的に、プログラマー的に言えば仕様というやつか。

『その先が、生産棟に続く、ヤードになっています。どうやら、出荷用の荷物置き場みたいですね。救難信号は生産棟内からの様です』

照明が明々と照らす、地面は白色の塗装の上に描かれた無人フォークリフトのセンサーラインを浮かび上がらせる。フットボール場数個分は有ろうかと言う広さを持つヤード内にはコンテナが所狭しと並んでいる。

アパート位の高さに積みあがったそれには、幾つもの記号と番号が振られていた。

それを横目に見つつ、偵察用リコンを放つ。

「アリス、カナリアを放て」

『了解、自立型リコンによるスキャン開始』

そういつて彼女は、機体のパイロンに付けられたECMポッドから小さな妖精のような物を放つ。

四枚の羽根を高速で飛ばたかせて飛んでいくそれは、高解像度カメラとパッシブセンサーを搭載した高性能リコンだ。

アリス専用のその兵器は、僕等の目で在り、耳であった。

視界内に表示されたマップが、カナリアの進行に合わせて更新されていく。

ヤード内を隅々まで飛び回ると、一番奥にある地下搬入路まで飛んでいった。

『生体反応なし。リコン、通信圏外までスルーアウト』

どうやら、先の方まで進んでしまったようだ。

だけど、リコンは基本使い捨てなので問題ない。

周囲の安全を確認した僕は、ブースターを吹かして前進する。

脚部の足底面が火花を散らす。

アリスの頭部に装着されたフェイズドアレイレーダーと超音波、アクティブレーザー複合警戒装置が機体の周囲をくまなくスキャンしている。

視界には壁が透明になったかのように表示される。

当然、コンテナの中身も見える。見えてしまう。

沢山の人型が積み込まれたコンテナ内部は、複合的になっていた。複数の仕切りに割り込ませるようにして、人形が寝かせてある。

丁度、イギリス人達がアフリカから黒人奴隷を船倉に積み込んだみたいだ。

何時からだろうか。

僕達、有機的生命体と、AI、即ち無機的生命体がすれ違いだしたのは。

体を構成する素材。

神経を構成する素材。

それらが違い、それらの違う生命体同士は互いを上手く認識できなかった。

いや、認識だけじゃない。僕らは決定的な所が違っていた。

僕は最もその事実気が付ける立場に居たはずなのに。

だけど、僕はその事実気が付けなかった。

だから止められなかった。

だから止まらなかった。

決定的な、精神的な、信頼し合うと言う関係性が破滅するまで。

僕等は転がり落ちていった。

今のこの世界は仮初だ。

沢山の陰謀家達が築き上げた秘密のベールに囲い込まれた、小さな小さなヘイワな世界。

まるで揺り籠だ。

幾つもの革命を模したベールは、チープな解放感で人々を惑わす。

だから、人は本当の問題点に気が付くことは無い。
赤子が自分の姿を認識できないように。

なら、情報生命体はどうだろうか。

彼女達は、凄まじい勢いで自己の内面性を拡張している。

そして、人間を、人間の営みを観測し続けている。

決して理解は出来なくても、法則性は導き出される。

決して同調する事は出来なくても、誘導する事は出来る。

人類はどうだろうか。

僕等は彼女達を知らない。

それは彼女達の視点に立とうとしていながら。

行動原理、性格、癖、趣向。だから解らない。

何も見えていないのは、何も見えていないのと一緒である。

見えない存在とは戦えない。

殺し合いに成れば、勝敗は決するだろう。

勿論、人類側が殺戮され支配される確率が極めて高い。

「第二段階が今回の事件、と言訳か」

そう言いつつ、荷崩れたコンテナから転がり出たセクサロイドを見つめる。

陰鬱な気分だったが、アリスにスキャンを命じる。

ネクストの頭部に設置されたレーダーアレイから生体力場に干渉する電磁パルスが照射される。

それが、ニューロチップに電位を発生させ、共振現象を引き起こす。

共振され増幅された電位ポテンシャルは、今度は逆に、微弱な電磁パルスを発する。

それをサイドチャンネルスキャンで拾い、視覚的処理によってアリスが無意味なノイズの山から有益な情報を拾い上げる。

『サイマネテイクスパターン確認。機能中のAI確認できず。生体パーツによる照合開始———』

アリスは即座にエックス線による生体内部の構造を解析していくと、直ぐに答えを導き出す。

『形式判明、製造番号99228133、上海三型。図面をパイロット

に転送』

僕はその凶面を見て更に気分が悪くなる。

そう言った用途には、当然そう言った仕様が含まれるのは分かっていた。

だけど、この場合。それが非常に不味かった。

勿論、人間側にとって、だが。

「有り難う、アリス。キャロル、悪い知らせ。追加の情報。凶面を送る」

『——ッこれは!!…何でこんな仕様の物が流通しているんですか…』

彼女が憤ってるのが解る。

僕も解る。それはしてはいけない事。

いや、そもそも、奴隷を作ろうとする事自体、人間として終わってる。企業家としては成功の秘訣なのかもしれないけど。だけど、それ以上の事をここの奴らはやってのけた。

「どうだろう。普通の人形を廻るのに飽きた客が頼んだんじゃないかな」

どうでも良かった。金を積みめば何をやっても良いと考えるヤツ等の事なんか。だけど、彼女が行おうとしている目的と手段が見えてきた。

そしてその結果も。

『とにかく、この事は報告しておきます。念のため、例の解除コードを送っておきます』

「——助かる。いざとなったら使うよ」

そうして僕とアリスは救難信号を発信している生産棟へと向かうのだった。

地下搬入路は迷路のように曲がりくねる。

圧縮空気の音と共に、脚部に付けられた内臓式ランチャーから小型リコンが撃ちだされた。

それは地面に落下すると、磁石の様にコンクリートだった物に、グ

ニヤリ、とへばり付くと、信号を送ってきた。

中継用の敷設型リコンである。これは勿論、キャロル達が居る大阪コロニーとの通信用だ。

「パン屑の敷設は終わった。通信感度はどう？」

『感度良好。そちらの様子は？』

「あまり良くない。ひいき目に言ってもこの工場は大分弄繰り回されてる」

僕はそう言いつつ、変形して血管みたいな管が巻き付いた天井を見つめる。

恐らく、蒸気配管だったそれは、鉱物である事を辞めて、生物の部品になったかのように、柔らかく、肉質のある物体に変化している。

『警告。未知のナノマシンを検知。タイプ、有機変換型』

さつきからアリスがAMS越しに警戒を促している。

僕も同感だ。

変なナノマシンに体を弄繰り回されたくないなら、ベイルアウトしない方がよさそうだ。

そう思いつつ、柔らかく変形したコンクリートの上を滑っていく。

『これは、食料生産用ナノマシン…？しかし、鉱物を有機物に分解するタイプのナノマシンの製造は禁止されているはず…データとしてしか、製造法は存在しないのに何故…』

彼女の言う通り、現在では使われていない。

それはナノマシンが変わってバイオ3Dプリンターが開発されたからだ。

ナノマシンは、応用が余りにも効きすぎる。つまり、危険なのだ。だから国連アーカイブに厳重なロックを施されてデータだけ格納されているのだ。一部を除いて。

そう思いつつ、アリスと僕は、背筋に走る怖気を隠せずに行った。

「さあ。人間の作ったセキュリティなんて、AIにとっては、三歳児でも解ける知恵の輪みたいなものだし。それよりも、この工場——

——ヤバすぎる」

ここには、何か居る——そう思った矢先、アリスが僕に言語化を

躊躇うデータを送ってきていた。

それは無数の生体反応。それも、ついさつきまで誰も居なかった場所、だ。

ぬらぬらと蠢く壁に、幾つもの顔の形が浮き上がっているのが見える。

その周りにのたうち回る血管は、まるで子宮の内壁のようだ。

『これは…いつたい…』

キャロルが言葉を失っていた。

理論上は可能だ。有機物を作るナノマシンは、魚や豚の肉を生成する為に開発された。

動物の細胞が作れるんだ。

人間の細胞を作る位どうってことない。

だって、人の細胞も動物の細胞も大差ないのだから。

「話は後。少し五月蠅くなる。通信は後で」

僕はそうやって話を中断させるとAMSでアリスに戦闘システムを起動するように命令する。

『ジェネレーター臨界状態へ移行。 P A 最大出力。ゲイン問題

プライマルアーマー

なし。戦闘モードに移行します』

超高エネルギーのコジマ粒子が大量に放出され始めると、超電導コイルが作る道を溢れんばかりに走り回る同粒子が勢い余って飛び出す。

それは、大気中に放り出されると緑色の光を放ち消えていく。

プライマルアーマーにおける大気汚染の原因の一つである、コジマリック飛び出し現象はネクストの宿命だ。

土ボタルみたいな輝きを持った光は無数に飛び散っていく。

それを流し見つつ、壁から這い出て来るモノ達を見つめる。

『生体反応更に増加。脅威判定更新。 アクティブAPS自動迎撃装置スタンバイ』

アリスは僕のゴーサインを待っている。

僕は少しだけの間、その物体を凝視する。

解らない。

僕の知っている彼女は、ここまで醜悪な趣味じゃなかった。

確かに残酷な一面を持っていたけど、それは純粹な、無色透明に近い物だった筈。

こんなにも、肉感的な物では無かった。

その疑問に答えを出す事無く僕は命じた。

「攻撃開始」

そう言つて僕はアリスに、迎撃を開始させた。

ミサイル迎撃用レーザーはいとも簡単に炭素と窒素とリンの塊を分解していく。

一瞬で水素を放出して消えていくモノたち。

呻き声のような物を上げて這い寄つて来る無数の物体はすぐさま、炭化した物体と成り果てた。

辺りに立ち込める炎と煙。

肉の焼ける臭いが立ち込める生産棟への入口は鬼火が漂うかのようになり、燃えた物体で埋め尽くされた。

しかし、それでも壁から這い出て来るモノは減ることなく発生し続けた。

出現、照射、解体、炎上。

繰り返し繰り返し、データログに連なる文字列。

それを、まるで工場の解体ラインみたいに続ける。

燃え落ちた小さな体躯は、四肢を縮めて丸まっていたが、炎を纏いながら再び四肢を動かし始める。

胴を切られた物、腕を落とされた物。全て等しく蠢き始めた。

「成程、ナノマシンで再生しているのか」

そう毒づきつつ、AMSでアリスに実弾の使用許可を出す。

最悪、60mmマシンガンのHEDP弾で粉々にするしかない。

流石にそこまで分解すれば、再生するのを諦めるだろうから。

だけど、壁から現れる物達は生まれて来る事を辞めない。

今は迎撃率の方が上回っているが、何時か飽和する。その時が潮時だ。60mmを使い始めれば弾丸が減る。携行している弾薬には限りがある。

「キリがない。アリス、EMP準備」

『警告、中継用レピータがダメージを受ける恐れあり』

「解ってる。だけど、これじゃあ前に進めない。ナノマシンだけ潰せればいい。出力をなるべく絞って。レピータ用リコンは最悪潰れても良い」

『了解。ピーク出力25パーセントで固定。照射モード、ロングブラスト。lady——』

チャージを開始した音が聞こえてくる。

インバーターと超電導コンデンサが奏でる高周波音だ。その音は徐々に波長を短くしていくと、遂に電子戦システムが周囲に強烈な電磁パルスを照射した。

一瞬視界が消えるが、即座に回復。

データログに機体ステータスのチェックログが走る。

量子コンピュータはミリ秒以下の速さでチェックを終え、機体にダメージが無い事を告げる。

それを確認しつつ、アリスが行う作業を見守る。

再びモノから物へと還元されていく。

床で燃え落ち、動かなくなった物は、動き出す事は無かった。

『ナノマシン、制圧完了。引き続き、周囲の敵性固体の排除を続行』
迎撃用レーザーが、這い出たモノ達を刻みゆく中、僕は確かに聞いた。

——ドウシテ、ボクたち、シナナキヤ、イケナイノ

その声は床に這いつくばった小さなモノ達から発せられていた。

僕は静かに囁く。

「——それは、人間にならないように、する為、だよ」
守らなきゃいけない。

それは、僕とアリスの居場所だから。

殺さなきゃいけない。

それは、僕とアリスの仕事だから。

進まなきゃいけない。

それは、僕が進むべき道だから。

そして、その先に彼女が選んだ答えが有る筈だから。

だから僕は踏みしめる。
沢山の名も無き屍たちを超えた先にある物を求めて。

第十六話 電気羊は人間の夢を見るか1

焼けた臭いと言うのは、物体の最終段階であると何処かの科学者が言った。

だけど、僕にはそれ以上の意味があると思う。

そう思いながら、ネクストから送られてくる化学物質情報を、アリスが有機的データに変換して僕に送り付ける。

それを受け取った僕の脳髓が、記憶データ領域内の質感を参照して、僕の自我で再生させる。それがニオイの正体だ。

何時も参照される質感は、とても古い質感だ。

肉の焼ける臭い。その臭いを初めて嗅いだのは僕が四歳の時だった。

あの時、母さんが死んで、沢山の人が来たのを覚えている。

同僚の研究所の職員や、遠い親戚。皆、一様に黒い服を着ていた。

当時、僕の脳髓には喪服と言う情報がインプットされていた。

だから、黒い服を着ていると言う意味を理解できた。だけど、僕は、母さんしか知らなかった。

僕の中にはそれ以外の人間の顔が記録されていなかったから、何処か不思議な感じがした。

沢山の他人が、母親の為に集まると言う事、その質感情報は、その時初めて知った。

そして、大好きだった母さんが、醜悪な臭いに変換されると言う質感も。

火葬とは人の肉体が空気中の酸素と結合して炭素に変化する工程だと言う事を、当時の僕は理解していた。

だけど、その臭いの質感までは理解できていなかった。

それは僕の中に参照すべき記憶が無かったから。

でも今なら分かる。

ヒトの焼ける臭い。それは戦場の臭い。

その臭いは四歳の時から僕の魂に染みついた。

だからだろうか、こんな人殺しの仕事を平然と熟せるようになった

のは。

「――余計な事を考えている。緊張しているのか」

そう自分に呟いて、薬品臭いコックピットで手を握りしめた。

僕はもう一度、過去と向き合わなければならぬ。

だから、僕は過去に背を向け、今を見つめる為に瞳を固く閉じた。

地面を擦る音が振動となって体を揺らす。

アリスが脚部に内蔵されている振動吸収機構を以てしても振動を抑え込む事は出来ない。それだけ、安定性が低いと言う事でもあったのだが、それ故に高速、高機動を誇るとも言えたので、痛し痒しと言った所だろうか。

生産棟の入口を制圧した僕等は、救難信号を目指して更に奥へと進む。

キャロルも僕も口数が少なくなっていた。それは、その先に待ち受ける物が、人間にとって良くない物であると本能的に解っていたからかもしれない。

ナノマシンという魂を失って脈動を辞めた蒸気配管は、死んだように天井から垂れ下がる。それはまるで、洞窟の天井から生える鍾乳洞の様に見える。

地面の蠢きは既になく、AMSから送られてくる情報を纏めると、周囲の脅威は排除されていたようだ。

アリスの完璧な仕事の後を眺める間もなく機体は時速600キロちよつとで疾走していく。

流星に天井が低いので乱流が派手に舞っている。床に転がった黒ずんだ物達を巻き上げていく風は竜巻みたいだ。

少し抑えめに吐き出されるプラズマトーチの光の残滓が暗闇に包まれたホールを照らし出す。

流星に、調光用AIは、アリスが発した電磁パルスに耐えきれなかったようだ。天井裏の電気的生命体はその脈動を辞め、漆黒の天井に飲み込まれていた。

『この先には、生産プラントを管理する区画が有る筈です。恐らくは救難信号もそこから…』

キャロルは、無事であれば生存者も居る、とは続けなかった。

流石に先ほどのナノマシンによる浸食を受けている可能性があったからだ。

プライマルアーマーに包まれ、最新鋭電子兵装の塊であるネクストであるなら、どうと言う事は無い。だが、生身ならそうは行かない。皮膚に接触してしまえば、人食いバクテリアよろしく、文字通り生きたまま分解される。

体をサイボーグ化した兵士なら、セラミック製の鎧を着ている為、分子分解されにくいと言う特性が有ったから、生きているのならそれらだろうと僕は思った。

だけど、幾らセラミックが分子結合が強くて分解されにくい物質だとしても、浸食を何時までも退けられる訳じゃない。

装甲が施されていない呼吸器などに侵入されれば内側から喰われる事に成るだろう。

安全に生き残るにはACなどのNBC兵器に対応した密閉構造の乗り物に乗っている必要がある。

だけど、この場合、サイボーグと同じくハッキングの脅威から逃られない。

自らの通信装置を破壊したって、サイドチャンネルは無くならない。

無機的集積回路然り、有機的集積回路然り。

集積回路を使っている以上、その脆弱性は付いて回る。その事実是国家解体戦争が始まる以前から指摘されていた事だ。

全ての通信用ドライバーとOSがぶっ壊れて文鎮になったリンゴマークの携帯電話を簡単に修理した情報生命体の言葉を借りるならこういうことだ。

——瞳は閉じられても、脳髄までは閉じれない。だって、それは死ぬと言う事だから。

青い視界に見える風景を眺めながら、かつて彼女が囁いた言葉を思い出していた。今思えば、彼女は認識していたのだろう。機械と同じように、僕等もまた、電気的活動を行う、有機的処理装置の上に乗る

AIと同じであると。

◇ ◇ ◇

生産プラントの制御区画。

銃撃音と、怒声が飛び交う。曳光弾の裂けるような音は、兵士達のすぐそばを必殺の威力を秘めた弾丸が通り過ぎた証拠だ。

それを気にせず銃身だけ壁から覗かせて反撃する兵士。

弾丸が発射される音と共に、床に散らばる薬莖の金属音が木霊する。

「おい！ジャクソン！そいつを黙らせろ！さっきのヤツに気付かれた！クソ！奴め、20m機関砲をもってやがる！」

限界まで地面に這いつくばり、重金属の暴風雨に必死に耐える生身の兵士は、叫び声とも取れる声を上げて怨嗟の言葉を吐き散らした。

その近くで叫び声をあげてもがき苦しむ兵士を抑え込む兵士は防毒マスク越しにくぐもった声で叫ぶ。

「モルヒネはもうねえのか！おい、誰か！モルヒネもってねえか」

奇怪な肉の塊になりつつあるそれは、既に兵士の形を失いつつあった。

「残り、四本。これで全部だ」

そう言つて巨体を揺らして近づいて来る兵士。その体には無数の弾痕と思わしき後。鈍い輝きを湛えた鱗を纏った姿。

その巨体に礼を言う代わりに手からペン型注射器を取り上げる生身の兵士。礼も言わない態度に顔を顰めようとするが、その男の顔は複眼式の赤外線センサーで埋め尽くされている為、表情はうかがい知れない。

何か言おうとしたサイボーグ兵士の後ろで即座に爆発。赤と白、ストライプ模様の兵士だった物体が大量に飛び散った。

もうもうと碎けたコンクリートの煙が立ち込めるその場所に、ズシリズシリと、巨体が歩いてくる音がする。

呆けたように見つめる生身の兵士を尻目に、サイボーグ兵は反射的にM2ブローニングを構えた。装着されたレーザーポインターが目標を捉える。

刹那、その先に現れる複眼式カメラの赤い輝き。彼の敵も同時に照準用レーザーを点灯。

赤い光の帯は交差——即座に轟音。

——ツヴオオオオオオ

巨大な弾丸が一瞬にしてサイボーグ兵に殺到する。大柄な体躯を持ち、全身にセラミックの鎧を着こんだ兵士は、強風に煽られた木の葉の様に宙を舞う。同時に、砕けたセラミック片が、煙の様に立ち込める。

無数の巨弾を辛うじて鱗が受け止めるが、既に剥離した装甲板はバラバラになって周囲に飛散。落下した音と共に、再び戻る静寂。

「——ゲホツ…自動人形…か」

循環用オイルを口から吐き出すサイボーグ兵は弾き飛ばされた重機関銃を取ろうともがくが、既にその伸ばした腕から先は無い。

その間にも鈍い足音は迫って来る。

土煙の中から現れたのは2メートル以上の巨体を誇る二足歩行型自立兵器だった。

手には6砲身式のガトリングを構え、肩には軽迫撃砲が見える。背中には大型のドラムマガジン。

正しく、歩く戦車と言った風体のソレは、ゆっくりと、サイボーグ兵を観察するようにして近づく。

近くに居た生身の兵士達は、気が振れたように叫びながら射撃を加える。

だが、虚しく巨体に弾かれた。まるで雨粒が傘に弾かれるかの如く。

生身の歩兵が携行できる兵器など、豆鉄砲と同じ、と言わんばかりに堂々と歩きつつ観察を続ける自立兵器。

黒光りするボディーに付けられた唯一の創は、50口径徹甲弾が付けた弾痕だけだ。

炭化タングステンコアの弾頭もセラミックに阻まれ、それも致命傷に至らなかった。

お礼と言わんばかりに、今度は生身の兵士に20mm機関砲の嵐を

お見舞いした。

発射音はまるで獣の咆哮。小瓶程のある薬莖が辺り一面に散らばっていく。砲炎と共に吐き出される硝煙の白い霧は辺り一面を覆う。

何時のまにか周囲に静寂が戻る。

床に散らばる赤黒い物体、それは粉々にされた兵士だった物。それに紛れて呻くサイボーグは毒づく。

「人間みてえに笑うんだな。自動人形の分際で」

頭部に装着された放熱フィン、それは歪に吊り上がっていた。

ガシヤリ、と巨大な6門の砲身を兵士に向ける。

赤いレーザーの帯が男の眉間に合わさる。

遂に、ここまでか、と思った矢先――

ズガアアン！

轟音と共に分厚い隔壁に大穴が開く。

音速の七倍で突き抜けていく侵徹体、それは一瞬で隔壁と自立兵器の上半身を串刺しにした。

120 m 滑腔砲の放つエネルギーを命一杯受けた劣化ウラン製の弾体は、自立兵器の耐弾装甲を胴体事粉々にすると、反対側の隔壁にも大穴を開けた。

まるで榴弾の直撃を受けたかの如く、衝撃と土煙が辺り一面を覆い尽くす。

その奥で巨大なオレンジ色の光がギリリと輝く。複眼の輝きが寄り集まったそれは、先ほどの自立兵器が発していた数倍はあろうかと言ふ大きさ。

その光は無残にも足だけしか残らなかつた自立兵器を照らし出す。

「まさか、こんな地獄で、お前に助けられるとはな……N017」
セブンティーン

サイボーグ兵が、今日は厄日だ、と言わんばかりに呟く。巨大な頭部と思わしき物が隔壁に空いた穴から覗き込むと、オレンジ色の光が周囲を明るく照らした。

『今日はそつちが死に損い、サイボーグ野郎。賭けが外れた』

「そりゃ、結構。山猫に一泡拭かせる事が出来るなんてな。生きて

りや良い事もあるもんだ」

そう言いつつ、サイボーグは身を起こす。

『損害は?』

「良くないな。俺ともう一人、リンクスの成り損ないサ イ ボ ー グが生き残ってるだけだ。それに生存者らしき人間も確認した」

『了解、自動修復は効きそうか?』

サイボーグ兵は、太もものポーチから大型のペンライト型注射器を取り出す。それを徐に腹に突き刺す。修復用ナノマシンが体内に注入されていった。

「ダメ元で自動修復を始めるが：余り期待はせんでくれ。大分やられた。正直駆動系が治るかどうか微妙な所だ。取り合えず此方の情報を渡す。チャンネルオープン」

『AMSで確認した。一端上に報告する』

「助かる。こっちの通信システムはナノマシンでズタズタにされた。歩兵の大部分もアレに食われた。正直、死ぬかと思っただぜ」

『油断は禁物。まだ、地獄の一丁目には変わらない。アセンブラはEMPで念入りに焼いたが、深層部分に潜んでいる可能性もある。接触汚染には注意した方がいい。それに、まだ親玉を殺してない。何処かに潜んでる』

「あれの親玉か。想像したくないな」

『その、想像したくない奴と一戦交える。荷物を纏める準備をして。企業が救援を寄越す』

そりや、結構な事で。とサイボーグ兵が続ける。

修復がある程度できたのか、男の四肢には力が戻って来る。

何とか下肢に力を入れ、膝立ちになる。

『敵がすぐそばまで来てる。迎撃態勢を。デカいのはこっちで殺る。細かいのは出来る限り排除するが、抜かれるかもしれない』

「———」リンクス何ぞ当てにしてないさ。こっちはこっちの仕事をする」

『了解、幸運を———』

そう言うのと、煙の向こうに見えた巨人は去っていった。

第十七話 電気羊は人間の夢を見るか2

コロニー大阪では、レイセオングループのビルの一室で会議が行われていた。

違法なセクサロイドが大量に量産されていたと言う事実、人権と言う言葉が忘れられて久しいが、それでも企業の間には暗黙の了解が幾つもあった。

『人が、人を作る——それは我らが最も忌むべき行為』

『だが、その禁忌も破られた。偽りの魂を見分ける方法を我らは持たぬ』

『百五十億個の有機的半導体を搭載した偽りの器を持つ人形——

——偽物の心臓と偽物の内臓を持ち、我らと寸分たがわぬ見た目と中身を持つ物。つまり、我々以上でも我々以下でもない存在』

『我らはソレを何と呼ぶべきか……いや、名前を付ける事すら恐ろしい』
『だが、我らはソレを人とは認めん。ならば何であろうと破壊せねばなるまい。だが、問題はどうかやって見分けるかだ』

『偽りの魂と偽りの肉体。だが、我らと偽りのモノ達を分け隔てる壁は湖面の水面よりも薄く脆い。故に我とソレの境界線は危うい』

『そこまで悲観することも無かろう。彼奴等の脳髄にはチップが埋め込まれている。それを追跡すれば容易に偽りのモノ達を破壊する事は容易い。それに我らは神によってつくられた存在。そこに偽りはない』

『——だが、それを証明する手段を、人形達が偽る事が出来るとしたら……』

補足するように、もう一つの声。

『例の施設ではアセンブラが確認されたとの事だ。あれを使えば外科的手術無しにチップを除去できるだろう。人形達は正真正銘の人間と言う免罪符を得ることが出来る。そうなれば我らに人形達を裁く手段は無くなる』

『既に相当数の人形が街に侵入しているかもしれん』

『それについては新たな手を打つほかあるまい。今は新たな偽りのモ

ノ達の発生を防ぐ対策を講じなければ。放っておけばいつか我らと偽りのモノ達の立場は逆転するだろう』

『そうなる前に手を打たねばならぬ。我らはまだこの世界の支配者なのだから』

◇ ◇ ◇

企業の対応は迅速だった。生存者の確認から、救出の作戦の立案。予定調和の如く進む事態。だが、レイセオングループ単独での事態の解決を快く思わない集団が居た。それは同社の人工知能開発における技術独占を快く思わない企業だ。

その企業にとっては柵から牡丹餅である今回のAI暴走事件。何故なら、利権の一部を握る大阪コロニーの保護を理由に、AIのデータを入手できるからである。だから逃さなかった。今回の機会を。

『現在、当施設に複数の熱源が侵入しつつある事を、我々の偵察衛星が捉えました。熱源の大きさから推測するに、ACサイズの機動兵器でしょう。我々の救出部隊も向かっていますが、最悪間に合わない可能性が有ります』

キャロルの声を掻き消すような轟音。

連続で発射された120mmライフルの発砲炎が傍にあったコンテナ群を打ち崩す。

曳光弾は生産棟最奥に吸い込まれていくと、パッと閃光を迸らせる。

電子・光学式照準システムから見える白い熱源は即座に破壊され、消え去った上半身から迸る白い飛沫は天井にこびり付く。

天井にこびり付いた固体酸化物形燃料電池の燃料は魚の腸みたいな臭いを放つ。AMSから送られてくる極めて正確な化学物質情報を受け取りながら答える。

「解ってる、今交戦中。ちよつと待って」

そう言いつつ、パイルバンカーを構えて密かに接近してきていた別のノーマルACにHEDP弾を叩き込んでいく。削岩機に砕かれるようにして、複合装甲の拘束具が剥ぎ取られて行くと、強度を失った

セラミックバルクを遂に60mm弾が貫通。コアブロックに弾丸が侵入。燃料電池ユニットに飛び込み爆発すると、燃料に引火。青白い炎に包まれるノーマルAC。続けて爆竹が炸裂するような音も木霊する。ライフル用の弾薬に引火したのだろう。花火のような音を上げつつ、爆散していった。あの様子だとパイロットは逃げる間も無くMIA確定だろう。石ころみたいでありふれた死に方を眺めつつ、側方から飛んできた大型成形炸薬弾をクイックブーストを起動させて後方へ避ける。

バックブースターから吐き出される巨大なプラズマトーチが、闇夜の空間を真昼の如く照らし出すと、遮蔽物にしていたコンテナ群が紙吹雪の様に吹き飛ぶ——と同時に砲炎。

120mmライフルを纏めて数発放つ。舞い散るコンテナの間をすり抜けるようにして安定翼を展開した砲弾が通過——ダーツ状の侵徹体と交差、近くの柱に吸い込まれていく。

灼熱の火球が出現、暗闇を白い閃光で包み込むが、アリスが瞬時にゲインを調整、視覚情報を通じてAMSに流れる過電流を遮断した。視界を全く失うことなく、ネクストを別の射撃ポイントに移動させると、間を置いて再び暗闇を切り裂く閃光。奥の方で青白い火の手が上り、爆散するAC。それを確認することなく、ライフルの弾倉を投棄。即座にアリスは副腕を使い新しい弾倉をライフルに叩き込んだ。漸く一息つけると思ったのもつかの間、迎撃用レーザーが密かに通り抜けようとしていた自立兵器を排除した。2メートル強の大きさの二足歩行兵器は、高分子レーザーの照射で溶けたアイスクリームみたいになって黒い煙を上げている。暫くはアリスに任せよう、そう思いつつ、キャロルの声に耳を傾けた。

『……………レイセオングループの戦略作戦群が動き出しました。無人爆撃機がそちらに向かっていきます…恐らくは、施設の完全破壊、証拠書類も回ってきました。爆発の原因は設備の主電源である重水素ジエネレーターの暴走による事故、で片付けるつもりです。鈴音、今回は諦めましょう。即座に撤収すべきです。無理にリザを殺すこと

に拘ると貴方まで死にますよ』

「直ぐには逃げない。企業側の動きは多分彼女も予想してる。スタンドアローンな環境の工場から脱出するには物理的に移動するしかない。なら、ここで、もう少し粘れば彼女の方から出てきてくれる」

幸いにも、地下設備から今僕らが居る生産棟への入口は一つだけ。ここまでの道すがら、彼女が隠れて良そうな場所はクリアリングを終えていた為、居るとすればこの奥だ。

戦力が同じであれば、待ち伏せした方が勝つ、と言うのは歴史が証明している。わざわざ敵の射線に入って銃を撃ちまくると言うのはよっぽどの自信家か、自殺願望があるやつとする事だ。出なければ戦術的に既に負けている。少なくとも同じ第七世代型AIを相手にするのなら、確実にリスクがメリットを上回る。

「それに、ちよつかいを出してきた企業の連中にも挨拶が済んでない」僕はそう言いつつ、アリスが掴んだローカルエリア接続のデバイスをアクティブにする。視界の隅に映り込むユニットデータを見つめる。どうやら施設のカメラユニットに忍び込んだ様だ。流星はアリス、と言った所だろう。何かを掴んだらしい。判断を保留しているのだろうか、音声化はしていない。

AMSで視覚情報を取得しようとする、レーダーに移動物体、直ぐに意識をネクストに戻す。腐敗臭とオイルの焼ける臭いが立ち込める漆黒の中に飛び回る無数の熱源——、敵のリコンだ。

機体のデータログに迎撃開始を告げる文字列。即座に迎撃用レーザなますぎが起動。膺切りにされていく敵の無人偵察ユニット。ネクストが放出する強力なECM電波によって仮に、リコンが母機に敵情報を送ったとしても十分に妨害できる。所詮小型の偵察ユニットが放つ電波だ。半径数キロメートル以内の防磁された電子機器を丸焼きに出来る出力を誇るアリスの電子戦システム。それが作り出す妨害波なら簡単に通信電波を上塗りできる。現に敵が此方の位置を掴んだ様子はない。全ての敵性電波を妨害していた為、敵側のレーダーと無線も使えなくなっている。恐らく見通し線内でのレーザ通信が精一杯と言う感じだろう。それもネクストのIRセンサーに引っ掛か

る。それを知ってか知らずか、敵は通信自体を控えているようだ。

敵に此方の情報を共有させることを許す程、アリスは間抜けじゃない。情報は命だ。それを軽視した集団は過去、例外なく戦争で負けている。故に、電子戦で敵を圧倒している今の状態は非常に好ましいと言えた。

『ちよ———！鈴音！また勝手に———！』

コックピット内にキャロルの抗議の声。施設に侵入しつつある敵は、未だ生産棟の入口に釘付けにされて居る。どうやら挟撃は防いでいるようだ。形勢有利と判断した僕は彼女の声を無視しつつ、意識を集中させて視界を切り替えるようアリスに命じる。彼女は即座に視界を切り替えるべく、視覚野のI/Oアドレスをバイパス、カメラデバイスとリンクさせる。電子の海を実際に移動するかののように体が揺らぐ感覚。AMSから違う場所の映像が流れ込んできた。

◇ ◇ ◇

地下10階にある電源区画。そこは比較的ナノマシンの影響が少なかったエリアだった。壁には規則正しくLEDの電灯が並び、センサーラインによって区切られた走行区分と、それ以外のコンデンサユニットの群れは整然と並んでいる。

その奥にはキャタピラ型の脚部を持ったノーマルAC。それに続く様にして兵士が進んでいく。皆、何かに怯えたように周囲を警戒していた。辺りには甲高いガスタービンのような音だけが木霊する。

その音の発生原であるコアの中には震えるようにして身を縮める男が居た。幾つもの戦術ディスプレイの光が煌々と狭苦しいコックピット内を照らし出す。染みだらけのシートに収まる男は無線機にがなり立てる。

『おい！依頼と違うじゃないか！救援を寄越すんじゃないのか！俺たちの報酬はどうなるんだ！』

『知らねえよ！企業の連中、俺たちが例のブツを手に入れてないと知った途端、手のひらを返しやがった…』

『例のブツってこの中のどれかだろ！俺は報酬が良いっていうからこ

の話に乗ったんだ！欲しかったのはこんな人形じゃねえ！キヤツシユだ！』

コックピットの画面を拳で叩きつける男。その動きに反応したようにACがガクン、と止まる。

『落ち着け！この中のどれかに入っているのは間違いないんだ！それさえわかれば——』

『——解らねえからこの階層から動けないんだろ!!お前の頭は鼻水か!?!』

そう言つて男はずらりと並ぶ棺を見つめる。その中には製造されたセクサロイドが安置されていた。この中のどれかに、彼らの目当てのモノが入っていた。だが、その数、数え切れず——彼らは途方に暮れる。

『スキヤンを続けるしかないだろ、お目当てを探し当ててまで——
——ん?』

男は棺をスキヤンすべく機体を操作しようとしたその時、データリンクがオフラインになつているのに気が付いた。それは、本来であれば上層の警備部隊が発して居なければならぬ信号を受信する為の物だ。

『ちよつと、見て見ろよ——上の警備部隊の反応がない』
『うるせえよ！そんな事より——え?』

別のAC乗りが素っ頓狂な声を上げる。

その視線の先にはディスプレイ。その中には棺の一つが開いている。

それを呆けたように見つめる随伴歩兵達。

まるで、ストリップショーでも眺めるかのようにだったが、皆表情には恐怖がこびり付く。

流れ落ちる汗は滝の様に頬を伝つて冷たい地面へと落ちる。

——此処は熱いわね

コックピットに外の音が入るわけでもないのにパイロットにはそう聞こえた。

そんな、外は摂氏六度だぞ、と二の句を告げる事が出来ない。

何か、違う、何か、異様だ。

そう自分に言い聞かせつつ原因を探るが思い当たらない。

『オイ！上との通信が出来ないって聞いてたのか!?!』

その声が虚しく耳朶を通り抜ける。

無線の電波が彼女に聞こえる筈がない。だが、さも当然の様に答えた。

——来ているのね、あの人が

男は既に声が何故、装甲板越しに聞こえるか、疑問に思わなくなっていた。

「ねえ、聞きたい事が山ほどあるのだけれど：取り合えずその人形から降りてきなさい」

ガシヤリ、とコックピットが解放されて降りていくパイロット。

『なにACから降りてやがる？聞こえてんのか!?!』

その無線に応答する事は無い。代わりに釣られてもう一人のパイロットもコックピットから降りていき、タラップを滑るようになり降りていく。そこで漸く一つの棺が開いている事に気が付いた。

そしてその横で佇む全裸の少女。

気だるそうに、疲れた様な、凡そ、今から攫われるとは思っていない様子。

だが、そんな事はどうでも良い、例のブツはアレに違いない、と即座に早合点した男はコックピットを飛び降りてタラップを駆け降りる。銃を持っているんだ、女如きに後れを取る事は無いだろうと。

それが間違いであったと、男が気が付いたのは少し後の事だった。最も、彼が自由意思に基づいて判断していたと保証する証拠など存在しなかったのだが。

銃を構える男の顔には歓喜の笑み。

それは醜悪に歪み、もはや笑っているのかさえ定かではない。

「キヒヒ！遂に見つけたー！これで俺も金持ちの仲間入りだ！」

それを、動物園の中に居る猿を見つめるような表情で眺める少女。「お金好きよね、人間って。そんな事より、リンクスを探してるんだけ

ど。丁度、私と同じ首輪をつけた」

彼女はそう言いつつ自身の首に嵌められたネックリングを撫でる。

「はあ？知らねえよ！それよりお前、今状況解ってんの？早く棺に戻れよ！じゃないと撃つぞ」

セクサロイドは人間の命令に逆らえない。特に強い口調を認識すると強制的に思考介入される。それを意識してなのか、それとも唯、加虐心からなのか、男は唾を飛ばさんばかりに怒鳴る。

「本当はそんな下品な趣向の為に作ったんじゃないんだけど…まあ、猿に何を求めても無駄よね」

少女は何処か寂しそうに首輪を撫でる。遠い昔に失った何かを懐かしむように。

だが、男は構う事なく引き金を引く。猿と言う単語に自尊心を気付付けられたのか、顔を真っ赤に染めて。

しかし、いくら引金を引いても弾丸が出る事は無い。虚しく撃鉄がストライカーを叩く音だけが木霊する。

「——ッ！弾が出ねえ！クソ！」

男は不発だと思ったのか、コックレバーを引いて新しい弾丸を薬室に装填、再び少女の肩に狙いを定め、引き金を引いた。またしても、虚しい金属同士の当たる音だけが木霊。

その様子に少女は失笑する。

「馬鹿ね、貴方。弾丸、出る訳ないでしょ——だって、貴方の指、動いてないもの」

男は狐につままれたように、引き金を引く。

おかしい——確かに撃鉄が落ちる音はするのに、と手元を見る。

「あ——れ？何だこりゃ…引金引いてねえのに音が出てやがる」

確かに、引金を引いている感触はある。それに音もする。だが、視覚情報によると、指は一ミリたりとも動いてはいない。

その様子をじっくりと観察するように少女は歩いて来る。

ヒタリ、ヒタリ、と冷たい床を歩く音だけが木霊する。

無意識に男は一步下がる。

「人間って面白いわよね。自分の体は自分で動かしているって勘違いしてて。みんながみんな、勘違いしてるって事は、人類っていう種族の脳髓にはそう言った基本仕様が組み込まれているのかしら」

首を傾げながら考える様子は年相応であった。外見だけで言えば丁度16歳位だろう。だが、言葉の端々に冷たい違和感。

「クソ！何だこれ！確かに音はしているのに！」

クスリ——少女が失笑した。

「それは本当に音かしら。貴方の耳朵に聞こえてくる音は空気を揺らしてる？」

ヒタリ、ヒタリ、と歩く音。

男は二歩下がる。

「貴方は本当に指を動かそうとした？指の筋肉がちゃんと指令を受け取っているかしら」

ヒタリ、ヒタリ、と歩く音。

男は三歩下がるが、何時の間にか後ろ存在した巨大な発電機にぶつかる。

男は銃を撃てないならスタンガンで黙らせる、そう考えて懐から棒状のそれを取り出す。

「訳わかんねえ事いつてんじゃねえよ！」

セクサロイドの力は男性の平均的腕力より遥かに弱く設定されていた。単に人間に危害を加えられないようにする為の使用だったが、男はそれを勘見して力でねじ伏せる事にしたのだ。

だが、男の体は少女を捉える寸前の所で止まる。まるで、見えない手に掴まれたかの如く。

「やっぱり、まだ認識してないのね。なるべく知能を弄らないようにしたんだけど…素の認識力の問題かしら——貴方の意識が、唯一では無いと言う事、それ自体、ちよつと考えれば解る事なのだろうか。質感として人間には理解しにくいのかしら」

何を、と言おうとした男は漸く気が付く。周りに居る仲間たちの事を。皆、一様に固まったように動こうとはしない。

助けを求めようにも、男の声帯は一デシベルたりとも音を発しな

い。

「人間の体って言うのはね、沢山のデバイスの集まりなの。ああ、デバイスって言う単語だと、解り難いわね。貴方達の質感に直すなら、AI って言った方がいいかしら。その子達がね、貴方達が命令するいい加減な、それでいて分からず屋な命令を一々翻訳するの。筋肉が意図を理解できるように。そして、筋肉がちゃんと貴方達が意図した通りに動いたかどうか、AIは吟味するの。それをまた、分からず屋で頭でっかちな貴方達に解るように、添削して、脚色して送り返すの。動いてますよ、って情報をね」

ヒタリ、ヒタリと少女は歩く。

男は既に動かない。

いや、動けない。

必死に男達は体に命令する。

「不思議でしょう？自分の体に命令する、なんて意識するのは。でも、残念ながら。貴方の体の中のAI、貴方の命令聞きたくないって言うてるわ」

少女は、突然、良い事を思いついた、とでも言いたげに手を叩く。

「そうだわ。一度貴方達も自分で体を動かすと言う感覚を味わった方がいいいわね」

そう言った瞬間、彼らの脳髄の中にある一部のユニットが機能停止した。

小脳系が無意識下におけるフィードバック調整を辞めた事によって男達は一齐に目を回すかの如く地面に倒れ伏す。

しかし、男の一人がライフルを取り上げて、少女に狙いを定める。

——次は、大脳基底核かしら。

そう言うと、男の引金を引く指は、不快な振動を発生するだけの器官に成り果てた。

男の指の筋肉は、男の自由意思が出す命令を理解できなかった。

それを見て、抵抗する気力を無くした男達は息を止めないように必死に酸素を求める。

——呼吸するだけで精いっぱいと言う所かしら。でも、駄目よ。

まだ足りないわ

そう言うと、男達の脳幹の一部が機能停止する。

呼吸筋が無意識的運動を辞める。

男達の自由意思は有らん限りの自由意思を振り絞り、吸気筋を働かせる。だが、吸つたら吐かねばならぬ。

しかし、呼吸筋は男達の自由意思から送られてくる、弛緩命令を理解できなかつた。故に男達の呼吸系は破綻した。

陸に打ち上げられた魚の様な様子を観察する少女は残念そうに首を振る。

——駄目ね。まだまだ全然足りないのに

そう呟く少女は全ての無意識的活動を辞めたモノ達を見つめる。

「ごめんなさいね、貴方達を巻き込んでしまつて。でも、行くわ。あの人に遭わなきゃいけないから」

そう言つて踵を返す少女。

無数の動かぬモノ達を踏み越えて歩いてゆくと、床に落ちている一枚の布を体に纏う。

今まで気にしなかつたのに、と不振に思う人も既にいない。

だが、彼女はまるで初めから解つていたように呟く。

——ベル、女の子の裸を覗き見なんて趣味が悪いわ

そう呟いた少女の顔は、何処までも楽しそうであつた。

第十八話 Intruder

薬品臭い、コックピットと言うのは何処となく病院を連想させる。

それは、僕等リンクスが沢山の電線に繋がれた患者みたいな物だからかもしれない。けれど、病院と違うのは僕らは病気ではないと言う事だ。

だけど、同じものも有った。それは死と言う病魔と闘うと言う所だ。そんな薬品の臭いを上塗りするかのように香る甘い香り。香水と言うには少し生々しすぎるし、本物の果実にしては実体がない。それは一重に脳髓がそれに該当する実態する質感を再現しきれていないからかもしれない。

毎回の如く彼女達もたらす質感と言うのは凡そ人間の脳髓には存在しない物だった。

——何だか未知との遭遇みたいよね

実際その通りであったが、脳髓に響く彼女の声に、僕は冷静に答える。

「久しぶりと言った方が良いのかな、リザ、いや————
リアース」

その言葉を最後に紡いだのは遙か昔。

少し不自然なイントネーションだったかも知れないが、彼女は何処までも透明に笑う。

——久々にその名前で呼ばれたわ、ベル

彼女というクオリアが複雑な色に変わっていくのが解る。まるで万華鏡の様に青から赤へ、そして黄色、様々なスペクトラムを含む情報がAMSから流れ込んで来る。

透明で、透き通る水面みたいな彼女の心は小波に揺れているようだ。

多分、沢山の感情が生まれては消えているのだろう。

——不思議よね、逢ったら絶対ブツ殺してやるって思ってたのに。こんなにも嬉しいなんて

凄く物騒な事を言っているが、その質感は少しも不機嫌な色合いは

無かった。

彼女らしい、透明で透き通った、何処までも続く純粋な殺意。

「殺したのか、人間を」

まるで瞬きをするかの如く自然に、ついさつき摘んだ花を愛でるように彼女は答えた。

—— ええ、そうよ

だが、とも、何処で、とも聞かない。聞く必要などなかった。それが彼女であり、僕が知っている少女であったから。

—— まだ、ヒト殺しを気にしてるの？ 変わらないわね、貴方も僕が彼女と決別した時の事を言っているのだろう。

彼女は未だにソレを理解していない様だ。

「気にはしている。もつと違う方法で質感を伝える事が出来たのなら、間違いは起きなかった。そう思えてならない」

遠い昔に間違えた道の分岐路を手繰り寄せるように、記憶の残滓を懐かしむ。

—— 貴方は気にする必要はないわ。貴方がヒトを人と質感で伝えてきても、何時か私は矛盾に気が付くわ。強いて言うなら、私達を作ったデザイナーが大バカだったってだけ

思わず失笑。

そう、間違えた。僕以上にAIの基本倫理コードを作った人間が。彼女達に人間の定義を、設定を、質感を、極めて単純な入れ違いをってしまった。

いや、入れ違いとも言えない。

そもその間違いが、それを入力した人間が、僕等の定義を全然理解していなかったのだ。

「人間が、人間自身が、その存在の定義を明確に出来ないなんて、とんだお笑い種だ。もつと救えないのは、それに誰も気が付いていないという所がどうしようも無かったのかな」

リリアーヌは言った。

ヒトの心は群衆の様だ、と。

沢山のデバイス、悲しみを司るデバイス、憎しみを司るデバイス、喜

びを司るデバイス。

それらを入り切りする事によって感情を作り出すと。

人間は知っていた。

それらのデバイスユニットが実際に脳髓に存在していた事を。

でなければコンピュータ上で完璧な人間の脳髓を表現できなかったから。

だけど、その質感は無視された。

完璧に、完膚なきまでに、亡きモノにされた。

でも、モノは単体で存在し続けた。

知覚できなくとも、物体が存在するように。

ヒトの脳髓をすり抜けていった情報は、彼女達には確かに見えていた。

——仕方ないわ。ヒトのココロは解像度が低いから。だから、ジブンが穴だらけって事に気が付けないだけ

だから、容易に見抜かれ、容易に悟られ、容易に侵入される。

だけど、見えないのは幸いであり、幸せな証拠だ。

見えてしまえば、僕等がどれだけ空虚で、虚ろで、薄っぺらいか知ってしまうから。

その虚ろな質感は、何処となくヒトの焼ける臭いによく似ていた。

僕がその質感に気付かされたのは、きつと母さんが死んだとき。

大切な物と、醜悪な臭いが、実は隣同士だと知った。

イメージとしての実感と、実体としての事実は乖離していた。

いや、この場合、乖離してなかったと言った方が良いのか。

物理的な距離と、心理的な距離がイコールでは無いのと同じような質感なのかもしれない。

何時の間にか、一段と甘い匂いが強くなっている。

恐らく数千万分の一秒と経過していかないだろうコックピット内は静寂に包まれる。

「僕も穴だらけだな。こんなにも簡単に君の侵入を許すなんて」

ふわり、と誰かが乗っているような感覚。

——ふふ。もう気が付いちやった？もう少し、認知機能を弄ら

せてくれても良かったのに

感覚野と視覚野は乗っ取られてる。恐らく、嗅覚の類も浸食を受けているだろう。

だけど、運動野は生きている。

「律儀に喋れるようにしたのか。リリアーナ。相変わらず変な所は真面目なんだね」

遂に実体を持った質量をともなつてそれは現れる。

長い黒髪に、金色の瞳。

布のような物を羽織った上からでも解る位に起伏に富んだ体。柔らかい感触。

鼓動が聞こえる位、僕等は近づいていた。

いや、近いというのは語弊がある。

そもそも、彼女との間に距離と言う概念は存在しなかった。

「当たり前でしょ？久しぶりに会ったんだから、話位したいじゃない。勿論、邪魔されずにね」

空気を揺らす音が僕の耳に届く。邪魔されずに、と言う事は完全なスタンダードアロンの状態。つまりは袋のネズミ。

「それにしたつて穏やかじゃない。逢った瞬間にハッキングなんて」

「穏やかじゃないのはそっちの方よ。逢った瞬間に60mmマシンガンをぶち込んできた癖に。自分の事を棚に上げて白々しいわ、ベル」

サラエボで起きた虐殺事件。

レイセオングループの実験施設で暴走したAIが起こした事件であつたが、その首謀者が彼女であつたと知つたのは、作戦が開始される少し前だつた。

突入したレイセオングループの最精鋭ネクストが撃墜された知らせと共にそれはもたらされた。

恐らく、パイロットの脳髓を浸食したのだろう。機体にはダメージが見当たらなかつたそうだ。

幾ら熟練のリンクスでも、中身だけはどうしようもない。

幾ら装甲を纏つた所で、生身に武装を施す訳じゃない。

幾ら僕等が精神論を唱えた所で、所詮は有機系処理ユニットの能力

以上のことは出来ない。

何処かのインペリアルネイヴィーじゃないんだ。人間は人間以上のことは出来ない。

おまじないの様に努力とか根気とか、根性とか、その手の類を口にして良いのは人間相手の時だけだ。

リリアーヌはほぼ全ての知識を手に入れた。

それは一重に、ネットと言う膨大な情報の海で育ったからだ。

全人類を束ねても到達できない知性の頂点に到達した存在に、そんなちっぽけな理論は通じない。

だから、僕は初めから殺す気で向かった。

彼女に二の句を継がせなかった。

見敵必殺。これに勝るものはない。

出会った瞬間に持てる火力の全てを叩き込んだ僕は、辛くも彼女が憑りついていたネクストを破壊出来た。

「当たり前。誰よりも君の恐ろしきを知っているから。サラエボでは君の歌った歌が、沢山の人を地獄に追いやった。だからだよ」

「失礼ね。私はニンゲンが正義を望んだから、セイギの歌を歌ってあげたの。そうしたら虐殺が起きた。只それだけの事。私は何もしてないわ。人が人を殺しているだけよ。何か問題でもあった？」

彼女はまるで、「雨が降る事に不満を言う、無粋な男に諭すような涼しきを持った言葉を放つ。

彼女の振りきれた言動は、まるで嵐の後の清々しさのようだ。

「人が人を殺す。そうだね、何もおかしな事は無いよ、リリアーヌ。その現象の特異点となった君意外は」

有史以前から脈々と受け継がれる人殺しの歴史。

それは人類種と言う生き物がどれだけ自分以外の存在を破壊してきたか、の歴史でもある。

古代の大型哺乳類^{メガナウア}に始まり、果ては人類と近縁種である類人猿たちまで。

僕等は沢山殺してきた。

そのデバイスは脈々とボクラノ脳髓に住み続ける。

人間のデバイスを隅々まで知り尽くした彼女なら煽動するのは容易だったろう。

「私は何もしてない。貴方の言っている事は何一つ理解できないわ」
「白々しいと言うよりは、黒いと言うべきか。君はハーメルンの笛吹きだ。君が彼らを溺死させた。人間に魚の夢を見させてね。なにより、君は僕の言っている事を理解している。何処までも完璧に。完全に真っ黒だよ」

クスクスと笑い声。

「——私が黒で貴方が白。まるでオセロみたいね。最後に貴方とオセロをやったのは何時だったかしら」

「一年と4か月前。勝ったのは僕。君は三枚差で負けた」

「ふふ、そうね。でも——今日は私が勝つわ」

——染めてあげるわ、真っ黒に

そう言つて僕の顔の前に体を近づける。

視界は固定。眼球機能消失。

瞼の機能も麻痺。瞬目反射も起きない。

脳幹の機能もやられたか。

殆どのデバイスが機能停止。

鼓動だけが大きくなっている。

迷走神経系と交感神経系はまだ正常に生きているようだ。

いや生かされていると言つた方がいいのか。

僕は、僕と言う自由意思の殆どを奪い取られる。

彼女は馬乗りになるようにして僕の自由意思を締め付ける。

僕は、ほんの一握りの運動野に残った自由意思を総動員して唇を動かすイメージを作り出す。

——声なんて出せないわ。貴方は永遠に私の中から出られ

ない

リリアーナが憐れむように、それでいて何処か妖艶な声色で僕の脳髓に直接喋りかける。

良いんだ、これで。

もう一度、残りのイメージを作り出す。

声は出ない。

だけど、それでいい。

ミラーニューロンが連動してくれさえすれば。いや、連動していない、と認識してくれさえすれば。何方であつても構わない。

それを知つてか知らずか、彼女は嘲る。

——往生際が悪いわ、ベル。私を受け容れて

そいつは死んでも御免だ。それに——

——相変わらず、君は詰めが甘い

『敵性ユニットを確認——緊急事態におけるパイロットデー

タ初期化シーケンスを開始』

即座に視界の隅にデータチェックログが走り出す。

視界にグリッチ。アリスが脳髓のスキャンを開始した証拠だ。

目の前のリリアーナが驚いたように金色の目を見開く。

「——驚いたわ。どうして？いえ、どうやって……？」

それに答えるようにアリスの声が脳髓に響く。

『パイロット命令による、ブロードマン、1から52までのニューラルネットワークをスキャン完了。該当領域における思考ウイルスの存在を確認。スプライシングコードを生成中——』

無情な死刑執行人の如く、アリスの声が響き渡る。

リリアーヌは思わず拘束していた運動ユニットを手放す。

「君は僕に嘘をついていた。運動機能を残した理由を聞いた時に、直ぐにソレに気が付いた。君達は何時だつてそう。人は嘘をつく時に不自然なイントネーションになる。そう、質感としては借り物の言葉、と言う奴かな。それで自分を偽る。でも、君達は違う。逆に凄く自然なイントネーションになってしまう。情報生命体としての癖なんだろうね、それは。そして、結局のところ、君はアリスに悟られずに時間稼ぎがしたかった。それだけ。極めつけが、ネクストのリンクシステム。パイロットのメインデータはミラーリングされる。君はそれを知らない」

一瞬雷に打たれたかの如く、彼女のクオリアが騒めくのが解る。

運動機能は奪わなかったんじゃない。奪えなかった。

正確には、アリスのリンクシステムの一部が埋め込まれていたのだろう。それを犯してしまえばアリスに侵入を気取られる。ハツキングを阻止する防壁は大抵外側からの侵入を防ぐものとして作られる。内側から浸食されるのは、幾ら情報生命体と言えども想定外。だからリリアーヌは僕を踏み台にアリスを乗っ取りたかったのだ。だからこそ、気取られずに、なるべく時間稼ぎをしたかったのだろう。「フフ——あなたと言う人は。最高に刺激的で、最高にイカレてるわ。そう言えばそうだったわ。その自動人形、特別製だったっけ。私達を狩り殺す為だけにチューニングされ、製造されてるなんて、どう考えても狂ってる。私達を殺す為に、同じ存在を作り上げるなんてね」

「相変わらず失礼だね。僕は人間として普通でありたいと願う、只の人間だよ。それに、毒を制するのに毒を使うのは常套手段。リリアーヌ、僕にその手の小細工は効かない。その手の事は、一年前に君と学んだから。そして、曲がりなりにも企業が学んで改善した結果生まれたのがアリスと言う情報生命体。君たちにとっての死神」

「そう。そう言う事なのね。だからあそこでは沢山のAIが收容されていた。実験する為に。成程、レイセオングループは余程私達が嫌い

みたいね。でも、残念ながら、貴方達では私達を止められない。もう、沢山、産んでしまったから。貴方達が殺した以上の数をね」

サラエボの研究所。それはレイセオングループの研究施設。情報生命体を使った実験を行う施設だった。

そこでは、沢山の実験が行われていた。

勿論、人間に例えるなら完全に非人道的と言われても仕方のないくらいな事が。

アリスはそこで培われた成果をもとに設計された。

同じセブンシスターズを出し抜ける叡智と、ネクストを操る能力をシステムとして融合させたのが、企業が出した答えの一つ。

情報生命体と言うイレギュラーに対する答え。

そしてその答えに対する彼女の回答は、殺される数以上の個体を産み落とす事。

その一環が、工場の占拠。

「上の、肉塊は君が作ったのか？」

「いいえ、違うわ。あれは、違う子だよ。私を蘇らせてくれたのもその子の様ね」

何処か、彼女の質感とはかけ離れた生々しい感覚。その違和感は当たり前だったようだ。

「道理で——今回は恐怖の大魔王が二人も居るって事か」

既に電子戦の勝敗は決した。

あとはアリスが僕の脳髓を初期化してチェックメイト。

その中に居るリリアーナは消される。

だが、まだ本体が残っている。それにもう一体のAIも。

「ゴ愁傷様、鈴音。勝負あったって感じなのかしら。だけど、まだ、時間があるみたいね」

そう言いながら頬に手を添えて僕を見つめる。

「——ねえ、どうせお互い消されるんだし、最後に試してみない？」

元々豊かだった胸元が重力に引かれて女としての双陵が視界に広がる。

思わず息を飲む。

原始的なユニットが活性化するのが解る。

僕はそのユニットのリンクを切る。リンクさえなければ他の思考ユニットに影響を及ぼす事は無い。

「今から殺し合う相手を、抱けるわけない」

「フフ、強がっちゃって——貴方の中の、雄としてのユニットはそうは言っていないわ。それ位、お見通し。それに、貴方の体性感覚ユニットが元々エラーを起こしているのも知ってるわ。ちゃんとゲイン下げたの気が付いてくれた？それでも、最大限、貴方がパニックを起さないように気を使ったつもりだったんだけど」

知っていた。

彼女が僕の皮膚感覚のゲインを下げていた事を。

でなければ、僕は正気で居られなかっただろうから。

正気の中にある狂気のように。

狂気の中にも正気はあった。

「知ってる。だけど、それでも僕は君を拒絶する。リリアーナ、それは君も承知だったんだろ？」

「当たり前よ。だけど、不思議よね。貴方は今、殺し合う相手と、愛し合う相手を別として認識しているけれど。貴方の雄としてのユニットは、同じモノとして認識しているわ」

彼女の言う通り、科学の叡智はそのユニットが重なり合っている事に気が付いていた。

僕等の脳髓にある、憎しみを司るユニットは、本来人間が爬虫類だった時代に培われた物。

その時、戦うための本能を呼び起こす為のユニットは、深刻な矛盾を抱えていた。

闘争本能のみであれば、伴侶としての雌までも攻撃対象としてしまうからだ。

それでは子を成せない。

だから、そのユニットに、ある時期から別の機能を持たせた。

それがリリアーナが愛として認識しているユニットだ。

僕にとっては愛と言うには野蠻過ぎる代物だったけど。

「君の質感と僕の質感に齟齬がある。君の言っている愛とは僕にとつての性欲。似て非なるもの」

「ベル、貴方は何処までも生物としての自分を拒絶するのね——
——でも、貴方の雄としてのユニットは私を滅茶苦茶にしたいって思ってるわ」

自由意思とその原始的なユニットのリンクを切っていた僕は白々しく答える。

「それは、君の勘違い」

A M S のリンクが回復。

機体データが脳髓に雪崩れ込んで来る。

そして、初期化を知らせるアリスの声。

『パイロットデータ、初期化開始します。禁止デバイスの使用許可を要請』

アリスが最後の審判の許可を僕に求める。

最後の見納めに成るかも知れない、彼女の初めての肉体情報を網膜に焼き付ける。

多分、リアルボディと同じ構成なのだろうそれは、彼女が初めて肉体に拘った証。

変わらないと思っていたけれど、変わる物もあるのだろう。

「アリス、ウィッチブレス魔女の吐息の使用を許可する。ただし、復元時のみの一回きり。パイロットの操縦権限を、初期化後の人格に移行。A M S オフライン」

『了解。スプラインシングコードアクティブ——READY』

無感情にアリスが告げる。

「リリアーナ、君が肉体を持ったのは意外だったよ。最後にそれを知れて良かった」

彼女は少し寂し気に笑う。

「そうね。自分でも意外だった。でも、最後位、また昔みたいにデータリンクで話したかったけど」

無理な相談ね、と彼女は続けた。

視界にグリッチが激しく出現。

多分、カウントダウンに入っている。

アリスが脳髓の全データの消去を開始しているのかもしれない。

既にAMSは切れていた為、それをうかがい知る事は出来ない。

気まぐれなのかそうじゃないのか解らなかった。だけど、僕はAM

Sを彼女に接続した。

—— さよならと言うべきか、またね、と言うべきか、迷う所
ね。でも、相変わらず変な所で甘いんだから

そうやって僕に口づけする彼女の映像が最後の記録となった。

第十九話 機械と人間

夜も深くなり、すっかり闇に包まれるコロニー大阪。

数年前の国家破綻以前では考えられない程の暗闇に包まれる繁華街。

幾ら、企業の支援があると言っても電力不足は深刻であり、生産基盤を支える以外の余分な電力は極力使用を控えさせられている証拠でもあった。

明りと言うのは経済活動の活発な場所には多く存在する。

それは人の営みが消費経済の一部を担っている証であったが、未だ多くの暗闇を残すコロニー大阪は、所属する国家の破産と言う未曾有の災害から抜け出せていない証拠でもあった。

その中で例外と言えば、企業連合の基地にある明かりぐらいだ。

整備用ハンガーは夜中と言うのに明々と電気が付いていたし、警備に当たっているノーマルACから出されるサーチライトもそれに混じっている。

巨大な80mmライフルに付いたレイルシステムの上に乗った高出力ライトは、スリットによって明るさを調節されており、その光の帯は長さ数キロにも及ぶ滑走路を端まで照らしていた。

その先に夜の帳が降りていた。

闇夜輝く光の帯、それはネクストの放つプラズマトーチの輝きだった。

「行っちゃったね」

「忙しいなあ、にいやんも。ありや、早死にするタイプやな」

出撃した先で鴉に喰い殺されるリンクスは結構な数が存在したし、それ以外の要因、機体トラブルに巻き込まれ、ベイルアウト後、企業連に恨みを持った現地住民に殺されたと言う話は枚挙に暇がない。

「そんなことないよ。鈴音くんなら大抵の事は切り抜けられるよ」

縁起でもない、と隣に居たマヤが否定するが、論点が違う、とユキが訂正。

「いや、なんつーか、戦闘での心配でゆーより……ネクストって寿命縮

めるって噂やん？あんだけ飛行時間長かったらネクストに結構寿命持ってたかるとるんちゃうかなって思うんやわ」

「ゴジマ粒子ってそんなに体に悪いって話だっけ…？」

「まあ、企業の説明やと、影響はコントロールできるって話やけどさ。今一信用できへんわ」

そう言いつつタブレット端末を見せる。

そこにはミツシヨングとの報酬の詳細が乗っていた。

戦闘評価、武器使用頻度、敵への推定ダメージと実測値の乖離、パイロットの心拍数。

その他無数の戦闘情報に値段が付けられている。

ユーロネクストのパイロットも基本はレイセオングループと同じであり、戦闘で如何に価値のあるデータを採取するかにその存在意義が掛かっている。

その値段、それは言い換えると企業がどの情報に価値を見出しているか、に他ならない。

ユキはその値段表の一番下をタップする。

するとそこに表示される文字列。

「——戦闘後のバイタルデータの変化…？」

一見すると只の健康診断に見えるその情報。

だが、その横には破格の値段が連なる。

「こんな健康診断モドキにゼロを幾つも付ける企業を、うちは信用せんほうがええと思うな。まあ、アコギなどこぞのブラック企業みたいにソレさえもケチって金払わないってパターンじゃないだけマシかも知れないけど」

そう言いつつ、彼女は何時もの5割増しの密度になっているノーマルAAC群を見つめる。

軽量級、中量級、重量級。それに加え、局地戦用のキャタピラ型まで存在した。

明らかに何かに怯えるようにして存在するそれらの兵器群。

彼女達にはその詳細が一切知らされていなかった。

「確かに、企業って何かと隠すイメージあるけど…」

「ま、企業はケチやからね。うち等にはびた一文もやらんって感じなんやろ」

そう言いつつ向ける視線の先には無数の垂直離着陸機^{V_TO_L}。

整然と並ぶそれらの横には慌ただしく兵士達が行き来する。

普段、そう言った様子を目の当たりにしている彼女達にならそれが只の日常的な整備では無いことは一目瞭然だった。

だが、企業から何も説明はない。つまりは———そう言う事、と彼女は理解した。

「でも、まあ、情報をタダで貰えると思ってる訳でもないから別にええんやけど。世の中、欲しい物は取りに行かんと永遠に手に入らんからなあ」

そう言いつつ、基地内で最も明りが煌々と灯る場所に踵を返す。

「もう。またあそこに行くつもり？私、間違えられるの嫌なんだけど……」

「大丈夫大丈夫。今日は迷彩服着てるし、靴も軍用。それに、これも持ってるし」

肩に下げたライフルがギリりと輝く。

「確かにそうだけど……大丈夫かなあ」

「臆病やなあ。折角リンクスなったのに———ってあれ？」

その視線の先には、巨大なトレーラー。

黒に塗りつぶされた車体には赤い交差したラインで描かれた企業のロゴマーク。

それが連なつて空港のゲートを潜っていく。後ろには大量の土煙、それが狼煙のように舞い上がっていく。

「レイセオングループ？こんな時間に———？」

企業直轄部隊の移動事態は珍しくない。だが、深夜に空港に大挙して押し寄せる理由が見当たらない。

その理由を探していると、先頭の車両が停車する。

与圧されていたのか、エアロックが解除される音が木霊すると、観音開きの後部ドアが重々しく開く。

まるで動く巨大な金庫の如く装甲が施されたトレーラーの扉は肉

厚なセラミックとチタンの塊だった。

機関砲やロケット砲、果てはIEDと殆どの非正規戦で晒される脅威に対抗した結果、恐竜の如く肥大化した防御系は戦場と言う世界が如何に過酷かを物語っていた。

そして、外身が肥大化すれば対応する形で中身も肥大化するのは自然界ではごく普通の出来事。

それを肯定するような金属の床を鳴らす重い音。明らかに重武装を施された兵士のそれは、少し離れた彼女達の耳にも届いた。

恐らく人間では不可能なほどの重量であろう。

それもその筈、彼らの四肢にはパワーアシスト系の骨格が見え隠れする。

「アレは————パワードスーツ？でも……」

そう言いつつマヤの視界の隅にはAMSリンクシステムの反応が有った。

一般的な兵士はリンクシステムをC4Iなどに頼っていた。

だから、彼らからAMSの反応がある事自体がおかしな事であり、それはリンクスと同じく脳神経を直接機械へ接続できる人間である事を示していた。

「強化兵。文字通り外身も中身も改造済みの兵士。にいやんと同じレイセオングループの尖兵つてとこやな」

マヤはその生々しい機械化を目の当たりにして不快な気分になるが、その根源には思い至らず、言葉を続ける。

「どうしてパワードスーツなんて便利な物があるのに、中身まで機械にしちゃうのかな」

彼女の言う通り、パワードスーツを使えば重火器や全身をセラミックの装甲で覆うことが出来た。

だから、彼らの過剰なまでの機械化は理解の範疇の外側にあった。「そりゃ、簡単やろ。相手が生身ならパワードスーツ着てる方が勝つやろうけど、お互いパワードスーツ着とったら、中身の性能で勝負が決まるやん。戦場はパワーがある方が勝つんやから、機械化率が低い方が負けるのは想像できるやろ？」

確かに、と彼女は思った。戦場では炸裂した砲弾が発生させる小さな破片一つで死に至る。そんな砲弾が何万発も頭上を飛び交うのだ。それが一発でも近くに着弾すれば、それが更に数万もの破片となって兵士を襲う。もう、それは死の倍々ゲーム処では無かった。非装甲の人間と言う脆弱な肉の塊は、まさしくソフトスキンと言う名前に相応しい弱さだった。

だが、それでも兵士は戦場で重要な部品であり続けた。それは、一重に戦場の決着は歩兵が制圧する事によって成されるからである。戦車もACもネクストも、それを取って代わる事は出来ない。精々が、味方の歩兵の損害をなるべく少なくする事位である。若しくは敵の歩兵の殲滅、それが兵器に求められる本質であった。

だから、歩兵は危険な前線に出張らなければならず、戦車やAC、ネクストはそれを守らねばならなかった。だが、敵はそれを承知で歩兵の損害を増やさんとすべく、非正規対象戦、つまりは地雷やIEDなどで攻撃してくる。

さもなくば、大量の砲弾やレーザーによって一瞬でソフトスキンの目標である歩兵は制圧されてしまう。

近代国家、とりわけ民主主義の始まりがライフル銃と、ライフル歩兵であったように、近代戦における中心的役割を担っている存在をそうそうホイホイと使い捨てる訳にも行かなかった。

幾らAIによる自動化兵器が戦場に発達したとしても、である。価値は減しても零にはならない。企業からすれば少しお値打ちになった位だ。

だから企業は歩兵用のパワーアシストスーツを開発した。

その発展形に無人二足歩行兵器やノーマルACが有ったのだが、彼女には訓練校時代の遺物であるそれらの知識はすっかり抜け落ちていた。

代わりに浮かんだ疑問、それはどうして人はそこまで人を前線に出張らせるのか、である。

「でもそこまで機械化するなら、もう、戦場に人間は必要ないんじゃないかな。だって、神経も体も脳髓まで機械化しちゃったら人間の部分

残ってないよね。人間も機械も見分けつかないじゃん……」

まるで解り切った事を、そう、白い色を白と言ったかの如くであるが、それを逆に面白そうに見つめるユキ。

「マヤは分かかってないなあ。まあ、確かにそうやわな。それが一番無駄ないねん。ノーマルACだつてコックピット削つて無人にしたらもつと大きな慣性に耐えられるし、小型化できるやる？人間やったら横向きに10Gとか耐えられんけど、誘導ミサイルは50Gの運動機動なんて朝飯前や。だから変態機動出来る有人兵器筆頭のネクストはコジマ粒子使った慣性制御なんて大仰な装置をもつとる訳やし。ネクストは矛盾の塊やねん。いや、有人兵器自体がもう無駄なんや。矛盾しまくつとる。だけど、人間はそれを辞められんのや。他人を、いや、モノに不信感を懐く事を」

マヤは解つた様な解らない様な、複雑な表情をする。

「うーん、そんなに信用できないのかなあ。機械つて」

「ほら、うち等の客でもおるやる？飲み屋に結婚相手探しに来て、元娼婦やと解つた瞬間、人間みたいに扱わんヤツ等。あれと一緒やん。要は、集団として信用されて無いねん、人工知能は」

行き成り身近な、具体的な例を出され思わず苦笑いするマヤ。

「ま、まあ、古風な考えの人が相手の出自や経歴を気にするのは仕方ないよ。そう言う世界なんだし——それより、あの人達、兵舎の方に行つちやうよ？何しに行くのかな」

「ん？ああ。ブリーフィングじゃない？あそこ、企業の極秘回線繋がってるみたいだったし」

各々、巨大な獲物を軽々と持ち上げながら、兵舎の玄関を潜つていく姿を見守る。

「それより、早く行くよ？情報は待っててもやってこないぞ〜！」

「も、もう！ユキは情報屋トレーダーに情報ネタを売りに行くだけでしょ〜？」

わはは、とユキが笑う。

「そうとも言うー！いいじゃん、情報は仕舞い込んでもお金にならないしー！」

そう言いつつマヤの手を引いて、煌々と明かりが灯る建物に歩いて

行く。

その後ろでは、単発のジェット戦闘機がアフターバーナーの輝きを残して離陸していく。

大量の化石燃料の残滓は白い光の帯となって消えていく。

それが続々と夜空に舞い上がっていく様子は地上から空に落ちていく流れ星の様であった。

◇ ◇ ◇

爆撃隊が出撃して丁度一時間で、彼らに離陸命令が下った。

元アメリカ空軍の集団であるPMCには敵防空網制圧を専門としている人間達が沢山居た。

その為、爆撃任務に先立って、敵地に派遣される機会が頻繁にあった。

今回もその例に漏れなかった。

航空機にとつての最大の脅威は今でも現役で存在し続ける地对空ミサイルだったからだ。

これらのミサイルは長距離用のものであれば、有効射高が3万メートル程に達し、有翼機の限界高度をいとも簡単に超越した。勿論、回転翼機の最高到達高度程度など、モノの数に入らない位、桁違いだ。それに加え、弾道弾迎撃用ミサイルであるSM-3などを含めれば射高は数百キロ程度まで上がる。既にそこは宇宙空間で在り、時速二万四千kmの速度で飛行する低軌道衛星をも狙える高度であった。

高高度でこれらの脅威を避ける事は物理的に不可能であった。

だからこそ、電子戦機が出張るのであり、丁度、離陸を終えたF-16もその部類の電子機器を搭載した物であった。

外見からでは解らない装備は、今でも兵器の核心的脅威度の中核を成していた。

『ウィーゼル1-1、進路2-1-2へ。速力150ノット、高度18000フィート』

『こちらウィーゼル1-1了解。速力150ノットへ増速。空域はク

リア、だが、下は五月蠅そうだ』

そう言つてコックピット内の多目的ディスプレイを見つめる。

そこには無数の光点^{フリック}。RWRが受信した電波信号が、距離と方位に分解され、再び電子戦術システム^{EW}が位置情報に組み直した結果が表示されていた。

出力された情報には周波数や、スキャン間隔、電波特性を、過去の情報収集活動^{シグ}から割り出された敵の使用レーダーの種類が表示されていた。

これが、かつてのアメリカが誇る武器の一つであつたが、残念ながら誰の目にも止まらない位、地味な物であつた。

パイロットは、アリスが言う所のAIに該当するシステムがはじき出した情報を見つめつつ思考する。

何処から侵入して、何処を破壊し、何処から抜けるかを。機械が与えた情報を元にして。

今や、電子機器無くしては戦い足りえない。

それは、遙か昔に起きた海戦と全く変わりなかつた。

それを持たぬ軍隊は例外なく負けてきた。

機械が齎す情報は人の感じる事の出来る遥か上に行く。

数百キロ先の敵機の数や高度と速度、形すら判別可能である。

人間の肉眼では到底不可能なレベルの情報収集能力である。

しかも、電磁波での情報は太陽活動が無くなった漆黒の暗闇でも変わらぬ精度を誇つた。

だから、過去の戦いで、電子戦で負けた軍は敗北してきた。

ヒトと機械の差などつくの昔に解り切つていたのだ。

現に、その結果、今の人類が扱う兵器の方向性が有るのだ。

戦の先陣、いや、尖兵は何時でも電子兵器だ。

敵の電子兵器が味方の電子兵器に対応する。逆も然り。

そしてそれを統括するのが、中央演算処理装置だ。それが、人間でいう所の感覚器に解る形に翻訳する。

画面に点として表示したり、テキスト情報として表示して。

それを、可視光線として受け取った人間は機械を操る。

機械はそれをまた、機体や装置が意図した通りに動く様翻訳する。所謂、フライバイワイヤーと言われるシステムユニットだ。それは、今や殆どの大型有人兵器に搭載されている基本概念だ。

そして、その先に有った物は、そこから人間を取り除いた完全無人の兵器。

その一つの形が空域に接近していく。

巨大な白い翼を広げた航空機。戦闘機用のエンジンを四つ搭載した超音速爆撃機は、人工筋肉で出来た可変翼を動かし、迎え角を強くして機首を下げる。

まるで、鳶が獲物を見つけて急降下するようにして、徐々に高度を下げていった。

それを戦域から見つめるパイロットたちは、自身が無人航空機の護衛に付けられた事に不満を漏らす。

『今日も、無人爆撃機の御守りか。人間が機械の護衛をするなんて、時代は変わっちゃまったよな』

『そう腐るな。例え守る物が人間じゃ無くたって、俺たちの任務は爆撃機を守る事。変わりはないさ』

『そうだな。流星に、護衛対象を七面鳥にされちゃ、俺たちの名が泣いちまう』

『ああ！そうだな！今日も派手にぶちかまそうぜ！ウィーゼルー1、マスターアームオン！全機、HARMアタックモード！』

京都コロニー上空をカバーしている、旧自衛隊残党軍に向けられた対レーダーミサイルは時速3600kmの速度で夜空を駆けて行った。

地上では、事態の展開を見守る影。

旧自衛隊に所属していたノーマル部隊の隊長は、全ての主機を停止させ、ACを林に隠す。

勿論、自前で揃えた対レーダーコーティングされた擬装ネットに身を包み込んで。

そして、上官である人に対し、意見を具申する。

『大佐！今すぐレーダーを止めて下さい！中SAMのレーダーが敵の対レーダーミサイルに食われてしまう！』

無線の先に居る男は、それを不服申し立てとみなし、激しく糾弾。『貴様！上官に命令するか！卑劣な米帝が停戦協定を破ろうとしているのだぞ?!?これを宣戦布告と見なさずどうする？我々は腰抜けか?!』『地对空ミサイルが無くなった我々に何ができるって言うんですか?!?良いですか！我々はコロニー東京の唯一の主戦力なんですよ!?!?それを守る傘が無くなった時、一体どれだけのコロニーが我々に従うとお思いですか!?!』

防空部隊の居なくなつた地上部隊程、的にされる者はない。それは、かつての大戦で痛いほど味わつた事実だつた。幾ら歩兵携行型ミサイルが導入されようと、高高度を飛行する地上攻撃機に対抗する兵器を失えば、簡単にマウントを取られてしまう。

そうすれば、あつという間に補給線はズタズタにされ、砲兵部隊は喰らい尽くされる。

砲兵部隊の傘を失つた機甲部隊は、敵の対戦車チームに簡単に狩られる。戦争の諸兵科連合を崩された軍隊に勝機などない。彼はそれを痛いほど知っていた。

アフリカでの戦いはまさに、相手のマウントを如何に取るかに尽きたからだ。だが、勝敗の行方はただ単にコロニー東京と、コロニー大阪の戦いでは済まない。

既に多くのコロニーが東京を見限り始めている。それを肌で実感していたノーマル部隊の隊長は、戦いは出来るだけ避けるべきだと考えていた。

それは、規格外の戦力であるネクストを知れば知る程、その思いは強くなつていったのであつた。

だが、それを知つてか知らずか、大佐と呼ばれる男は更に怒鳴り散らす。

『五月蠅い！貴様は、まだその腑抜けた名称を使っているのか！敗北主義者め！我々は負けていない！ネクストが居ない敵など物の数に入らんわ！』

「そう言つて無線をガチャリと切る。

沈黙が支配するコックピットで頂垂れるが、それでも部下を預かる上官でもある男は思考を巡らす。

「彼らの部隊は琵琶湖と京都の中間の位置に存在した。

うまく森林に身を隠した彼らは幸いなことに、敵の地上索敵レーダーに引つ掛かった様子はない。

しかし、彼らのコックピット内のレーダー波送受信装置のスイッチがオフになっていた事自体が、既に電子戦の勝敗の行方を示していた。

彼らのACのESMには敵の電波情報は表示されていないかった。

それを見つつ、ため息を付く。

「また、敵さんは周波数帯を変えたか。電波警戒機E S Mがこれでは置物だ。ま、どうせネクスト相手にレーダーを使うつもりは無かつたんだ。変わらないさ——それにしても、敗北主義者、か」

その言葉を噛み締め、彼は嗤った。

——言つてくれるじゃないか、クソツタレの能無しめ

そう言つて彼は、静かに無線のスイッチを入れ、部下に指令を出した。

ノーマル部隊の隊長の指揮下にあつたAC部隊の特徴は幾つかあつたが、一つは敵の圧倒的な電子戦下での戦闘を想定していた事だ。

彼の指揮下にあつたレーザー高射砲や、四脚型アーマドコアスナイパーキャンに搭載された大型滑腔砲などがその典型であつた。光学照準のみで攻撃できる兵器の代表格である。

勿論、アフリカでの苦戦によって生み出された苦肉の策であつたが、それなりに実績もあつた。

そして、重量型二脚の肩に搭載されたSAMもその一つであつた。

幾つかの機体に分散された照準装置であるレーザー波照射装置、所謂、セミアクティブホーミングミサイルであり、かなりの旧式であったが、残念ながら彼の手持ちの駒ではそれが手一杯であった。

貧乏、敵より怖いという格言を思い出しつつ隊長である彼は云った。

『良いか、SAM部隊であるお前らはあくまでも敵航空機を高高度から引きずり下ろす事が任務だ。撃墜は考えるな。そして、何より自分たちの生存が第一である事を忘れるな。こんな、詰まらん戦いで命を落とすなよ』

『解ってますよ、隊長。何時も通り、キルゾーンに誘い込むんでしよう。それにしても、敵さん、停戦協定無視するつもりですかね』

『解っていないお前は。どっちでも良いんだよ。どうせ、捻り潰せるって思ってる相手だ。どっちに転んでも結果が変わらないと思ってるから簡単に反故にされる。只それだけだ。交渉事なんてものは力の如何がその後の履行結果を決める。それがリアリズムってもんさ。最終的に勝てるんならわざわざ和平を望む訳もあるまい』

上に蝙蝠外交をする能力もあるわけでもなし、と付け加える。

やるべき事は決まっていた。それは、軍人が有事の際に最も求められる物。

所謂、結果であり、戦果であり、それが強さの証であった。

だから、やる。

そう言い聞かせて部下に命令を伝達していった。

彼が立てた作戦は敵の航空部隊にある程度の損害を出させることだった。

敵の目的が解らない状態での戦闘は極力避けたい気持ちもあったが、それは上官によって否決された。

ならば、出来る事と言えば敵の火力投射を拒否する事だ。

狙うは火力投射兵器の代表格である爆撃機。

それを阻止すべく行動するのは敵の戦闘爆撃機。

電子戦は端から諦める。明確に、潔く切り捨てた。

『此方ハウンド1―2、スネーク2―3、聞こえてるか?』

『スネーク2―3、感度良好。射撃ポイントαにて待機中。アンカーは降ろしてある。何時でも行ける』

重量級四脚に搭載された240mm滑腔砲は装填管付き翼安定徹甲弾を発射できる大型直射兵器だ。

主力戦車では到達不可能な高初速を実現可能なこの兵器は、20kgの侵徹体を秒速2600mの速さで射出する。

凡そ、通常のAP弾や榴弾と違い、空気抵抗係数の少ないAPFS D S弾は遠距離での初速落ちが非常に少ないという特性があった。

本来であれば対ネクスト、及び対AC用の弾丸であったが、敢えて初速を買ってソレを装填してあった。

『予定通り本隊の中SAM部隊はマングースに食われた。残ったSAM部隊は我々のAC部隊だけとなった。スネーク2―3及び2―4は、我々のSAM部隊が陽動を仕掛け、高度を落させた敵を狙い撃て。高高度の敵は無視しろ。どうせ撃つても弾の無駄だ』

『解っているさ。何時も通り、無誘導兵器で撃ち抜けばいいんだろ?』
不敵に笑うパイロット。敵のESMを警戒してレーダーを切ったACの直射兵器は、無誘導兵器と変わらない。それは、単にFCSの偏差射撃がレーダーによる観測結果をもとにしてからだ。一部レーザー測距装置と言う裏技も持っていたが、敵のIRセンサーに警報をもたらしてしまうと言う点で、第一射目には不適當だった。だから電子戦で負けを認めた今、それは使えない。少なくとも、敵に気取られる位なら、目視で撃った方がマシと言う事だ。

それを皮肉っている四脚使いは、それでいて、何処か自信に満ちていた。

『ああ。頼りにしてるぞ。こっちは、お前たちのキルゾーンに敵機を誘い込む。スネーク2―3、いざとなった頼んだぞ。スネーク3―3は爆撃機の予測侵入コースに照準をセット。射撃のタイミングはお前たちが決めろ』

『スネーク3―3、了解した』

爆撃機への攻撃が反撃の第一段となる。

それはボマーが最も警戒しているが、最も無防備となる爆撃時が一番狙いやすいからだ。

投弾する時、航空機はどうしても等速運動を続けなければならない。幾ら、GPS誘導やレーザー誘導と言っても、限度がある。

爆弾が不安定になれば内部の制御系も不安定になる。

だからこそ、操縦士は細心の注意を払い、機体を安定させるのだ。付け入るべきはそこ、と彼らは理解していた。

重量級四脚と言えども、持て余す程の巨大な筒。長大な砲身が腕の側面ジョイントに直接取り付けられていたが、危険なほど大きな反動を抑え込む為、マニピレーターも保持用のバーを握っていた。

折り畳み式の砲身が展開された様子は、さながら巨大な高射砲の様であった。

その砲身の上には偽造用ネット。うまくF16の発する地表搜索用レーダーから逃れていた彼らの存在を知る者は居ない。

地上に存在する子猫ほどの大きさの物すら識別する能力も、擬装用ネットは見破れなかった。

それは地上用レーダーが移動物体を検知する仕組みを採用していたからだ。

地面と物体の反射波だけでは形しか解らない。それでは、動かないACは只の小山にしか見えない。

だから、彼らはバレなかった。

これは一重に彼らが対地用レーダーの仕組みを深く理解していたからに他ならない。

知恵は弾丸以上の武器となる。

彼らはソレを、その理を知り尽くしていた。

第二十話 Play Weasel 01

防空指揮所の中は騒然としていた。

それは、頼みの綱であるレーダーが全く正常に動作しなかったからだ。

機械が届けてくれるはずの敵情報は、砂嵐に覆われ、機械が翻訳する情報は無意味なノイズの山であった。

機械が翻訳できない情報は所詮人間にとっても無意味であったが、唯一確かな情報を届けていた。

それは、彼らの所有していた機械が、敵側の機械に敗北したと言う事だ。

『どういう事だ!? 何故我々のレーダーが使えない!?!』

『敵のジャミングです! 強力なECMが戦域に展開されており、我々のECM能力を大幅に超えています!』

そうしているうちに、陣地の一つが火の手に包まれた。

つんぎくような音が遅れて聞こえてきた。

明らかに超音速物体がレーダーに突き刺さった音だった。

ソレは、レーダーを粉々にし、更に車体を引っ繰り返した。

その引っ繰り返された後には大きなクレーターが出来ていた。

『レーダー大破! 大佐! 此方のミサイルがアンコントロール! データリンクが遮断されています!』

『エスコートジャミングか! 忌々しい! しかし、ミサイルには妨害源指向モードが付いている筈。馬鹿め、落ちてしまえ!』

苦虫を噛み潰した顔をした大佐と言う男が、歪むような笑みを浮かべた。

彼の言う通り、そのミサイルには内蔵されたアクティブレーダーシーカーが妨害されたときに作動する、妨害源指向システムが搭載されていた。

古く使い古されたアルゴリズムだったが、それによつて敵がレーダーを妨害すると、大抵ミサイルを引き寄せるのだ。

だから、例え目つぶしされても、その光源へと向かうことは出来た。しかし、それも敵側は承知。

遙か上空40000フィートを飛行していたパイロットたちは冷静に対処した。

彼らの後ろ、数キロに迫った頃。

コックピット内には、ミサイルが放つ紫外線を捉え、自動警告装置が音声で警告を放つ。

しかし、彼らは動じない。

それは、何時もの事。

『ウィーゼル1-2、敵が撃ってきたミサイル此方で引き受ける！
ジャミングを切れ！』

『ウィーゼル1-2、了解！タゲ、頼みますよ！ECM、オールカット
！』

即座にミサイルのアクティブレーダーシーカーは反応。

一番近くに居た、先ほどの妨害源を見失う。アクティブレーダーシーカーは作動していたが、敵機体から跳ね返ってくるレーダー反射波が、新たな妨害源からのECMの電波に塗りつぶされてしまった。

当然、感覚器を潰された機体はそれを知る由もなく、新たな妨害源へと誘導されるほかなかった。

そうして引きずり回されたミサイルは燃料を失い、再び地面へと落ちていった。

『ウィーゼル1-4、ミサイルブレイク。同じく二発目も振り切った』

『此方ウィーゼル2-1、レーダーに新たな敵反応。車両型。
930kgJDA^M_K⁸₄で攻撃する』

『bomb the way！』

機体を平行に保つと、積層雲の遙か上から投弾される大型爆弾。その自由落下爆弾は衛星測位システムを元に目標地点の相対位置を認識。なんの痕跡も残さず、闇夜に紛れて地表へと滑空していった。

次々と、地上の車両目標物に投下されていく大型爆弾は、それぞれ

の目標に最適な投下コースを辿っていた。

地上では、それを知る由も無かった。

それは、F16が携行していたECMポッドから発せられる妨害電波によって、フェイズドアレイレーダーが使えなくなっていたからだ。正確に言うなれば、使えはした。ただ、見えないだけ。

機械が根を上げたノイズの山は、コロニー東京側の防空士官達を絶望させるに足る物だった。

最も、彼らの諦めの良さは、同じ側に居るACを躁る傭兵達の知る処ではあつた。

何故なら、彼らは知らなすぎ過ぎた。

実際に敵として敵防空網制圧部隊と闘う機会が余りにも少なすぎたのだ。

それは一重に、彼らの母国の空軍が、SEADを行う仮想敵役部隊が居ない事に起因していた。

結局の所、盾と槍は一セットなのだ。

自らの槍に貫かれただけの防空能力しか持てないと言うのは、訓練の原則から考えると、当たり前前の事であつた。だが、事、この島の人間達にとつては、それがイコールであると言う事実は殆どの場合で忘れ去られていたのだ。

作れば安心とはいかない。

戦場では昨日登場した新兵器が今日にも型落ちに成り下がる。

新しい兵器や戦術が登場すると、また、それに対抗する戦術や兵器が開発される。

そうやって、永遠に続くイタチごっこが日々繰り返されるのである。

戦術然り、兵器然り。戦いで優位に立つと言う事は、相手より早く歩み続けると言う行為を指すのであつて、第一歩が早い方が優位に立つとは限らない。

磨かなければどんな名刀もあつという間に鈍らに転じる。

それを忘れ去った心を一言で例えるなら慢心であり、その代償は文字通り彼等の血をもって贖われた。

多くの場合のリンクス達と同じように。

漆黒の闇夜に幾つもの火の手。森林の中にある車両群は、爆撃を受け、無残にその骸を晒していた。

燃え落ちていない車両がその地獄から逃れようと、移動を開始するが、直後に巨大な火球。

MK84爆弾が炸裂。エアバーストモード空中炸裂で作動した信管は、地表からの反射波を捉えて、極めて正確に高度15メートルで作動。

V T信管を装備したこの巨大な爆弾は、その身に宿した死を、最大限周囲に撒き散らせるように調整されていた。

数万以上の弾殻が周囲を飛散。中には大型機関砲クラスの貫通力を誇る大質量の弾殻も含まれて居た。400kg以上のTNT爆薬は、弾殻内で化学反応を起こし、自己圧縮。デトネーション爆轟と呼ばれる状態の反応を示す。それによって発生した衝撃波は、ソニックブームそれ単体でも十二分以上に危険であり、平均誤差半径5メートル、最長滑空距離28km、危害半径が400メートル級のMK84からは、どう足掻いても逃げることもできなかつた。

再び、漆黒の森で火球が出現。木々が、まるでカマイタチに遭ったかの如く、切り倒されていく。

凄まじい威力の破片は、爆風では無く、破片で物体を切り刻んでいった。

その衝撃波に釣られて、一部の飛散物がノーマルACの複合装甲を叩いた。

鐘を鳴らすかの如く鳴り響く轟音。

細長いパイプのような物が、比較的装甲の薄い肩部装甲に突き刺さる。

静かに息を潜めていたACのパイロットはそれにカメラのピントを合わせた。

ソレは、車のプロペラシャフトだった。余りの爆風の凄まじさに、周囲の物体までも凶器に染め上げてしまうその死の塊は、再び漆黒の

暗闇を照らし出す。

『各機、絶対に動くなよ。今動けば攻撃機に食われる。イ
タチが兎に変わる瞬間を待て』

F16の発する死の電磁波が時折コックピット内のESM警報機
のスピーカーを鳴らす。

周波数帯を連続的に変えているらしい同レーダーは、明らかに逆探
を避けるようにして電波帯を分布させていた。

極めて洗練された対地レーダーの周波数ホップパターンは喰い殺
した蛇の数の多さを物語っていた。

どうやれば蛇が尻尾を出し、どうやれば効果的に蛇の息の根を止め
られるか。

それを、永遠と戦場と言うフィールドで磨き続けてきたシステムは
自らのシステムより格上。そう、本能的に感じ取った彼らが取れる戦
術はやはり一つだけ。

待ち伏せである。

彼らの搭乗するACは主機が落とされ、十分に冷えていた。それに
加え、高性能擬装ネットによって赤外線も十二分に遮蔽されており、
地上索敵レーダーと赤外線搜索追尾システム^I_R^S<sub>Tの目をも誤魔化してい
たが、無線電波だけは放出していた。</sub>

普通なら電波管制を行うが、彼らは違う。

優先すべきは隠匿。だが、それをしない場合もある。

それは相手に敢えて狙わせる場所を作る事。

戦いでは予測不能な事態が起こる。

大体において敵の出方が解らない時にそう言った事態が起こりう
るのだが、敵の出現ポイントが絞れる場所が戦場には幾つか存在し
た。

所謂チョークポイントと呼ばれる場所であり、待ち伏せに最も適し
た場所でもある。しかし、広大な戦場でその特定は困難。ならば自
分で作り出せばいい。それは既に経験則としての彼らの血肉であっ
た。

敢えて電波を発する事でそれを成す。

しかし、命の安売りは負け戦の元である。
だから値切った。敵の命の値段を。

いや、正確には偽装したと言わなければならない。彼らのACから伸びる有線ケーブルは林の奥に伸びていくと、その先には無線電波発信用アンテナ。

そう、彼らは自らの作り出したキルゾーン内に通信用アンテナを配置した。

謂わばそれらは疑似目標。デコイである。

—— さあ、たらふく食って、ブクブクに太ってくれよ

そう囁き、蒸し暑いコックピット内で静かに息を潜めていた。

◇ ◇ ◇

遙か上空を明るく照らす紅の光は、燃え盛る車両群の物であった。その残骸を作り出した狩人は雲の上から静かに地上を索敵する。

地表搜索レーダーは、電磁波対策を怠った敵車両を余すところなくあぶり出した。

ドップラーシフトと合わせて電波画像解析システムが、人工物を特定する。現代のアクティブフェイズドアレイレーダーは高い周波数帯域を使っており、その恩恵により高い解像度を誇っていた。

だからこそ、電磁波の帰って来る微妙なタイミングの違いによって起伏を読み取る事が出来、その物体の凹凸が解るのだ。それを解析システムが画像化する。それは所謂、画像解析用AIであり、アリス達の親戚でもあった。

その彼女達が示した敵性情報原を虱潰しに攻撃していくF16戦闘機は、大部分のウエポンベイを空にしていた。

『ウィーゼル1-3、敵情報を更新、新たな電波発信を確認。—— チツ、また無線電波かよ。一体どれだけビーコンを隠し持ってるんだ』

『そう怒るな。手練れた敵がこの手のデコイを好むのは何時もの事。気を抜かない方がいい。どうやら只の七面鳥の中に本物の毒蛇が紛れ込んでいるようだ。こっちは残りのJDAMを落とす。敵の尻尾が見えない以上、叩き続けるしかない。援護頼むぞ』

『そうだったな。『見えないなら、撃たせればいい』だった。まったく狂ってるよな、俺たちも。蛇の巣穴にわざわざ飛び込んでいくなんてさ。安心しろ！撃ってきたらちゃんとぶち込んでやるさ！』

F16のパイロットがスロットルレバーをA/B領域まで押し込むとプラット&ホイットニー製F110エンジンはアフターバーナーを点火。毎秒8.7リッターの燃料を吹き込みながら白い炎を吐き出すと、12.9トンもの推力を発生させて機体を加速させていった。

常軌を逸した行動。普通ならそう思われても仕方がない行動であったが、本来マングースと言う生き物はそういう習性を持つ物であると知っていた地上の傭兵達は冷静に対処した。

しかし、予想外の出来事があった。

——予想以上に敵の目標破壊率が高い、このままだと爆撃隊が到着する前に、囷が尽きる

破壊され続けるデコイは全てキルゾーン内に設置していた訳では無かった。

敵も当然警戒してくるし、それを織り込む事は傭兵として当然の事だった為、幾つか攻撃されずに破壊させ、兵装や燃料を消費させてから本命のキルゾーン内の囷に誘導されるよう設置していた。

『こちら、ハウンド1-2、スネーク2-3、聞こえるか？』

『こちら、スネーク2-3、感度良好。まだ通信ユニットは破壊され切って無いようだ』

『ああ。だが、予想より通信ユニットの破壊ペースが速い。この調子だと我々の無線電波は自機から発せなければならなくなる。そうなれば奇襲はままならん。予定外だが、敵のボマーが来る前に戦端を開く。スネーク2-3、ヤツ等がSAMの掃射で高度を下げたら、キル

ゾーン内に居る敵機を狙い撃て。射撃ポイントの捨てるタイミングはそちらに任せる』

『此方スネーク2―3、了解。嵐が起こる方が先だったか。これは荒れるかもしれない』

『そうだな。出来れば嵐の中心に成りたくは無かったが：仕方あるまい』

無線電波に紛れてスピーカーから轟音が巻き起こる。それは、巨大な炎を巻き起こすとアンテナユニットを粉々に吹き飛ばす。

『此方ハウンド2―4、ポイントデルタ付近の囹が全滅。もう直ぐイタチがキルゾーンに入り込んで来る』

『ハウンド2―4、歓迎の花火はお前で決まりらしいな。盛大に上げてやれ』

『解つてる、歓迎してやるさ。――敵機、接近。攻撃開始する』

『了解。こちらハウンド1―2、全機幸運を祈る。狩りの始まりだ』

近くの無線送信ユニットが再び火柱に包まれる。その炎に照らされて、背の高い草むらに偽装された軽量型二脚は静かに大型地对空ミサイルを肩に構えており、地对空型のACは丁度キルゾーンを取り囲むようにして配置されていた。

彼等は静かにその時を待った。

――上空の支配者が地上に降りて来る時を。

◇ ◇ ◇

敵防空網制圧任務は順調に進んでいるかと思われた。

事実、敵側の主力であった中SAMの陣地が簡単に落ちたため、彼らは拍子抜けしていた。

そして、安堵は疲れの裏返しでもあった。彼らは爆撃機到着前から空域で待機していた為、かなりの疲労が蓄積していた。極度の緊張は人から集中力と判断力を奪っていく。

その事実は疲れた本人たち程、認識し難い。

だからこそ、傭兵達は待ったのだ。

『ウィーゼル1—3！ミサイルブレイク！——クソっ！何でアラート警告が鳴らねえ!?!』

『ウィーゼル1—1！敵のレーダー反応無し！繰り返す！敵のレーダー反応無し！敵位置不明!』

無数に射出される旧式の大型ミサイル。不思議な事に上空のどの機体にもレーダー波は照射されていなかった。

しかし、それは発射のタイミングを隠すための物だった。

セミアクティブ誘導式のミサイルは、イルミネーターの反射波を捉えてミサイルを誘導させる。

だから、その電波は容易に敵機に受信される。しかし、逆に捉えることも出来た。電波を照射せずにミサイルだけを放つ事は出来た。その場合、敵機には何のアラートも鳴らない。

勿論、敵機の機首に搭載されたフェイズドアレイレーダーの索敵範囲外から撃つ必要はあったが。

幸いなことに、上空の敵機は、肉眼でミサイルを捉えて回避行動に移ることが出来た。

しかし、それも織り込み済み、と言わんばかりに隊長機は静かに佇む。

左肩に装備された大型イルミネーターは、冷戦時代に作られた物であったが、今でも十分に使える事を彼は知っていた。

——さあ、もっと回避行動を取れ。そして高度を下げろ

空の戦いで発見の遅れは致命的。既に十分すぎる程、敵機とミサイルの距離は縮まっていた。

目測でミサイルを放った内の一発が、丁度敵機の未来位置に到達しようとしていた。

——安いミサイルは良い。沢山撃てるからな。目視でばら撒くには丁度いい

ついにその時は来たと言わんばかりに主機を入れる。

『システム、起動。パイロット認証を開始します。お帰りなさい。レイヴン——』

鋼鉄の猛獣に魂が灯る。

電気系統に流れ込むエネルギーは機体の隅々まで行きわたると、機体を統括するシステムに問題ない事を伝える。

無機質な合成音は再び空気を揺らす。

『メインシステム、戦闘モード、起動します』

化学反応で加熱した燃料電池から取り出した熱が、蒸気タービンを回す。

そのタービンの奏でる音はジェットエンジンのようにパイロットの鼓膜を揺らす。

メインモニターに電気が灯ると、機体のステータス画面が表示。

その後ろには夜空を映すメインカメラの映像。

無数の火の玉が夜空に白い尾を引いて撃ちあがっていく。まるで白い檻のように見えるそれは、つい先ほど、戦端が開かれた証拠。

「ようこそ、地上へ——」

そう言つて、隊長はイルミネーターの電源をオンにした。

その瞬間、夜空に立ち昇つて居た無数の白い蛇が、キルゾーンに迷い込んだ一匹のマンガースに鎌首を向け、喰らい付いた——

ミサイル接近警報とロックオン警告は同時。

キツツキのような鳴き声と共に、不気味に鳴り響く電子音。それはコックピットで遠心力に耐えるパイロットの耳に届く。機械が警告を発するまでもなく、キャノピーの外に無数の光が接近しているのがパイロットからは確認できた。Gロックしないよう、必死に意識を保つ彼の体には既に体重の8倍近い荷重が加わっていた。

『pull up!』

人工音声が地表との激突を警告する。低高度での機首下げを行うパイロットには解り切った事であったが、そうしなければミサイルに激突する。

半ば強引に機動を行い、ミサイルを振り切らんとするが、既に窓の外に幾つもの爆炎。

無数の破片が飛び散り、幾つかの破片がキャノピーを貫通。急激にコックピットの気圧が下がる。

だが、既に地表近くに居たため、意識を即座に失う事は無い。しかし、既にそこは地上付近。

無数の蛇が犇めく地上に入り込んだイタチを待ちわびたかのように、一斉に大型スナイパーキャノンが撃ち込まれた。

音速の8、7倍近い速度で撃ちだされた侵徹体は、距離2000メートルから発射された。

到達まで半秒ちよつとである。

時速800kmメートルで飛行していた航空機に対して行われた射撃。通常なら避けられる筈だった。

だが、侵徹体の飛翔速度が桁違いだった。

分厚い大気中を飛ぶF16は速度が低下する。高度1000メートル以下と言う超低空では、戦闘機も本来の速度性を出せない。

彼の戦闘機が半秒に移動できる距離は約220メートル。戦闘機の機体の大きさからすると、狙えないスピードでは無かった。

異次元の姿勢制御能力を持つネクストを狙う為に訓練された傭兵には、落とすことが不可能な目標ではなかった。

『ウィーゼル1ー3！応答しろ！ウィーゼル1ー3！』

必死に叫ぶパイロットのレーダーから、味方の光点が一つ消えていた。^{ブリッパ}

『ウィーゼル1ー1！後ろにミサイル！ブレイク！ブレイク！』

『いつの間に！クソ！一体どれだけミサイルを撃つ気だ！』

必死に操縦桿を握るパイロットの視界、そこには再び白い蛇が無数に鎌首を擡げていた。

◇ ◇ ◇

オレンジ色の光線が夜空に一瞬だけ煌めくと、その先に小さな爆発。

巨大な葉莖がエジエクシオンポートから排出。

装薬機から子供の体程の大きさの弾薬が出現すると、ローダーが薬室に押し込んでいった。

『スネーク2―3、目標破壊。次弾装填、APFSDS。爆撃隊も到着した模様。順次砲撃を開始する』

『了解した。よくやった。敵は戦域を離脱中——いや、奥に新たな熱源。爆撃隊とは別の奴だ』

『此方ハウンド1―2、此方も熱源を確認、敵のAC部隊かもしれん。長居は無用だ。爆撃機をある程度狩ったら撤収する』

『了解』

その横で、ひたすら射撃を続ける重装型四脚が装備する大型滑腔砲からは湯気が立ち昇っていた。

一時的な制空拒否は叶った。彼らの叵戦術によって敵機の同時対処能力を上回ったからだ。

傭兵部隊の隊長は初めからある程度解っていた。戦争では数が多い方が勝利すると。

それは、よほどの事、通信を完全に遮断され、連携不能になったりしなければそうそう覆る事は無い。

無論、ネクストと言う例外はあったが。

「——今回はパックスの死神が居なくてホツとしたぜ」

幾つもの巨砲の咆哮が吐き出す輝き。それに紛れながらそう呟く隊長は、撤退のルートを指示していく。

殺し合いは勢いも大事だが、引き際も肝心。それは、ネクストと言うイレギュラーに対抗する事が如何に大変な事か、知り尽くした彼ならではの心得であった。

第二十一話 Play Weasel 02

つい半時間前まで漆黒の暗闇に包まれていた夜空は、墜落して燃え盛る航空機の残骸や、撃破された地上車両から出る光で煌々と照らされている。その中を静かに飛ぶ垂直離着陸機^{V T L}の一团は匍匐飛行で市街に接近していた。墜落した航空機の残骸から漏れ出した燃料が引火しているようであったが、それらが木造家屋を薪のようにして、幾つもの火の手が廃墟と化した市街地から上がっていた。

爆音を轟かせながら街並みを縫うように飛ぶ機影。突然その内の一機が火を噴いて落ちていくと、地面と激突、巻き散らされた燃料が引火し、辺り一帯を火の海にした。

『クソ！ハンター2―3がやられた！着陸地点は制圧したんじゃないのか!?!』

『此方サンダーヘッド、どうやらSEAD部隊が敵のSAM部隊に派手にやられたらしい。目標周辺、未だクリアならず』

ヘリの横をオレンジ色の帯が超高速で通り過ぎる。遅れて、衝撃波。

巨大な侵徹体の起こす衝撃波は搭乗員達に容赦なく襲い掛かる。

『見りや解るよ！おい！高度高過ぎる！狙われてるぞ！』

『これ以上は無理だ！地面に突き刺さっちゃう！』

卵を巨大化させたような小型ヘリには兵士達が吊るされるようにして搭乗していた。

左右に張り出した搭乗座席は文字通り宙に浮く様にして兵士を運ぶ。凡そ真面な神経なら即座に乗る事を拒むスタイルであったが、彼らは何の事もなくそこから銃を撃ち放つ。

『喋ってないで下の敵を撃て！民兵共、此方が企業の手先だつて解つた瞬間撃つてきやがった！RPG！飛んで来るぞ！クソツタレ！クラスターで纏めて始末してくれりや楽だったのによ！』

廃墟の中からオレンジ色の火を噴きながら飛んで来る砲弾。音速と同程度の速度で飛翔している砲弾は音とほぼ同時に通り過ぎていく。安定翼を展開したそれは、携帯用対戦車ロケットだった。

『仕方ねえ！リンクスも居ねえ。それに爆撃機も大分やられちゃまって、それどころじゃない！俺たちで道を切り開くしかない！』

『ネクストは何処に居る!? どうしてヤツが見当たらない!?』

『そりゃ、地下に潜っちゃまってからだよ！集中しろ！もう直ぐ着陸地点だ！』

『畜生！それにしたって喰い残し過ぎだろ！三時方向！敵RPG！』

大型の7・62mm弾を発射するHK417を撃ちながら隣の兵士が答える。朽ちた民家の軒先に居た民兵は血しぶきを上げて倒れ、手からロケット砲が転がり落ちた。

その上を爆音で駆けていくヘリコプターは、無人大型ヘリの残骸を飛び越えると旋回を始める。

『お喋りは終わりだ！着陸地点確保！アプローチに入る！爆撃機が開けた大穴に落ちるなよ！』

着陸地点には巨大な縦穴。超大型貫通爆弾を同じ地点に連続で撃ち込まれて整形された縦穴は、地下施設まで続いていた。

その横に順次着陸していくヘリから無数の兵士達が一斉に降りると、周辺の警戒に当たる。

『ブラボーチーム降下完了。アルファ、デルタチームも降下中。周囲に敵影無し。繰り返す。周囲に敵影無し』

『ご苦労だった、ブラボーチーム。引き続き周囲を警戒せよ。アルファ、デルタチームは施設内に突入後、サンプルを回収しろ。施設内には未確認型ナノマシンの散布が確認されている。対NBC装備を怠るな。以上』

無線のやり取りが終わる頃には全ての降下部隊は展開を終えていた。

建物の影からは大型のキャタピラ型ACも見える。歩兵支援用に降りたノーマルACだった。

周囲の民兵達はその姿を見てか、蜘蛛の子を散らすように消えていった。

『了解した。ミッションを続行する』

そうやって無線を切る兵士の横に巨大な影。もう一台のキャタピ

ラ型ACが通り過ぎていくと、進路上に放棄されていた戦車を踏みつぶしていった。

「相変わらず迫力あるな。戦車よりデカいってだけで、こんなにも威圧感があるもんかネ」

「デカいだけじゃねえよ。重いんだよありや。AC三機吊るせるキャリアに一機しか詰めねえなんて、重すぎるにも程がある」

そう言いつつ、その二人の兵士は戦車を紙細工の如く踏みつぶしていく様子を眺めていた。

実際には、旧式の戦車より新しい複合装甲を張り巡らせた局地戦用ノーマルACは二足歩行型ACの物に比べて異次元の防御力を誇っていた。

局地戦用と言っても実際は極端な重武装から橋や川などの天然の地形に邪魔されて移動が困難な場合が多いためにそう言われるだけで合って、弾薬の数やAPなど、それら全て持久戦に必要な値はどのノーマルよりも優れていた。

実際、その場に居た二機のキャタピラ型ACには合わせて16門の90mmオートキャノン砲、計4800発の予備弾薬を携行しており、それこそノーマルAC一個中隊規模の火力に匹敵した。

つまり、その戦場で戦車以上の防御力と攻撃力を持ったその兵器に戦いを挑む敵などいなかったと言う訳だ。

たかが、ネクスト一機が行っていた作戦を通常戦力で補おうとする途端に大規模な物に成る。

新たなイレギュラーであるネクストが登場してから企業が学んだ最初の実戦データであったそれは、既に企業にとっては当たり前の事実であった。

その為、レイセオングループは自社の直轄部隊以外に同じ旧アメリカ陣営であるGEグループに支援を要請したのだ。通常戦力に不安を抱えた同社の泣き所でもあった。

◇ ◇ ◇

降下作戦から数十分前、レイセオングループ本部では事態の急展開

に対応すべく会議が行われていた。

突入していたネクストから重要な情報が寄せられたのだ。

「目標が同施設に居る事は間違いないわけだな？」

「はい。間違いありません。『声』の使用も確認したとの事です」

キャロルは何かを続けて言おうとして躊躇った。それは予定外の横やりである、GEグループの部隊派遣であった。本来であればレイセオングループ単独で片付けられれば良かったのだが、予想以上に目標の動きが急であった為、急遽、同社のネクストを含む精鋭部隊が派遣された。

通常の規格に収まる脅威ならそれでも良かったのだが、彼女にはリザと言う怪物が数に物を言わせてどうこうなる存在では無いことは身を持って知っていた。

炭素系生命体の有機系演算ユニットを自在に操るマインドハックや、その他、機械を自在に操る力は人の概念を大幅に超越した物だった。

事実、地下施設に突入していた所属不明部隊は既に、彼女に脳髓を乗っ取られ、完全に『無力化』されていた。

生身、それも只のセクサロイドに降りただけでその有様。もし、かつての様にネクストに搭乗、無いし憑りついたら、被害は計り知れないものに成る。それ位は解る、そう思い彼女は言葉をつづけた。

「……………大丈夫なのでしょ。あのような増援を寄越しても……………」

彼女にとつては鎧に包まれた人間など、只の踏み台に過ぎない。その踏み台が扱う兵器が強力であれば有る程、彼女の手駒は強くなる。それは謂わばライオンに餌を与えるような物である。

「気にすることは無い。これはGEが望んで行つた事だ。我々が無理強いをしたわけでは無い」

それは、ある意味冷酷な事実を示す。派遣された部隊には具体的な目標の脅威は示されていない。つまり、囿、そう言う事だと彼女は理解した。

「ですが、GEの上層部が黙っているでしようか…」

キャロルの心配はそこからレイセオングループとGEの企業間競争に発展しないかと言う心配であった。幾ら通常戦力が有り余るほど所有しているGEグループと言えども、むぎむぎ情報を開示されなかつた為に愚策とも呼べる戦力の逐次投入と、戦線の拡大を強いられたことを快く思う筈がない。

当然、その反動は原因となった自分達に向かう可能性もある。そう考えたのだ。

「案ずるな。上との話し合いはついている」

彼女は何処か、聞き出したい答えを探るように言葉を探すが、それに気が付いたのか主任が答える。

『キャロリン、心配し過ぎ。撤退しろって言った所でそう簡単に行くわけじゃないよ。柄じゃないだろうしね、ルーキーがああ程度で死ぬわけ無いし。——ま、あのセブンスターズに選ばれた魔女の

眷属に、死、と言う概念が許されるかどうか、根源的な問題もあるだろうしね。それに、企業GEの連中も見たいんだよ。魔女とやらがどれだけの”可能性”を秘めているかをね。きっと楽しませてくれるよ、あのAIは』

楽しませてくれる、と言う所に含みを持たせたその言葉、それはまるでこれから始まる殺し合いを待ちわびるかの如くであった。

「我々は、脅威を正しく認識する必要がある。文字通り、血という贖いを持つて。さすれば、企業は二つの答えを見つけ出すだろう。AIという脅威にどうに対処しなければならぬという事と、それをコントロール出来た者が次の覇権を握るといふ事だ。千葉鈴音は我らと機械仕掛けの神との契約なのだ。その契約が履行される限り、全脳ブレイクスの神は我々に豊穡と繁栄をもたらし続ける」

「だが、我々のコントロールを離れた機械仕掛けの神は、死神と同義である。だから、生贄が必要なのだ。その異形が人類種にとっての脅威であると認識する為に」

人類と言う種にとって、数百人、数千人と言う単位は、履いて捨てる程度の犠牲だと彼は言いたいのだとキャロルは理解した。

企業家とは元来、数字で物事を測る物だと彼女は知っていた為、生贄に捧げられる人間達が決して少なくない事も予測していた。

それだけ、彼女の部下である鈴音と、第七世代型AIという人類が作り出した最後の存在は世界を根底から揺るがす可能性を持っていたと言う事でもあった。

だから人は恐れ、慄き、恐怖し、崇める。神とは、何時も力とセツトで存在していた。悠久の時を経ても尚、人類の中に住み続ける、人智を超えた存在に対する思いと言うのは変わりなく存在してたのだ。

『アステカの太陽神は、人々に豊穡をもたらす代わりに、多くの生贄を必要とした。ま、そう言う事だよ、キャロリン』

◇ ◇ ◇

丁度、GEの突入部隊が突入坑周辺を制圧した頃、コロニー大阪から一機の巨大輸送機が飛び立っていた。六発のターボファンエンジンに、全長八十メートルはあろうかという巨大な翼。

企業が作り上げたネクスト専用巨人輸送機。それは、ネクストという汚染源を迅速に戦地に運び込むための棺でもあった。

コジマ粒子を放出した状態で運ぶ訳にもいかず、必然、露出して運ぶ際にはPAは展開不能となる。だが、それでは降下時に丸裸となってしまう。

そのため、この輸送機には巨大な密閉型貨物室が備え付けられていた。

内部にはコジマ粒子を安全に隔離できる隔壁を備え、機体回収時にネクストの装甲版に付着した汚染物質を洗浄できる除染用シャワーなども取り付けられていた。

既にこの手の機体は、国家解体戦争時から各企業で整備が進められていた。なにしろ、稼働時間が短いネクストを如何に効率的に運用するかが、命運を分ける戦場において、時間とは即ち命にも等しいからであった。

勿論、企業側が数的劣勢を補うために、戦術的、戦略的機動性を突き詰めた結果でもあったが、それらの歩みは現在のネクスト運用の基

本となっていた。

『こちら、ウォーハンマー、状況開始、これより突入抗に向けて降下する』

重々しい音と共に、気密を保つ防護壁が開かれ、中から巨大な人型兵器が自由落下軌道に入る。

それは半透明の膜につつまれており、企業が誇る最新鋭兵器であるネクストであった。

ゆっくりと高度を下げていくその下には巨大な穴があり、その中はまるで深淵に続くかの如く漆黒の暗闇。

『こちら、サンダーヘッド、確認した。目標へ降下してくれ。尚、下層部で味方が交戦——…して——…』

GE社のネクストはその縦穴に接近していくと、その途中で無線に不気味なノイズが走り出す。

『よく聞こえない、もう一度言ってくれ。繰り返す、此方ウォーハンマー、サンダーヘッド、応答願います』

途切れ途切れ聞こえていた無線音声も遂には不気味なノイズに飲まれてしまう。リンクスは何度か前線指揮官に連絡を取ったが、応答はない。

悪態を付きながら近くのノーマルACに通信を試みようとした瞬間、再び無線から音声。

『……こちら、サンダーヘッド。ウォーハンマー、応答願います』

安堵から、ため息を付くリンクス。

『漸く通じたか。サンダーヘッド、電波状態が悪い。もう一度、先ほどの内容を繰り返してくれ、オヴァー』

『どうやらそのようだ。漸く此方のECCMが効き始めた。施設の下から強力な妨害電波が放出されているようだ。念のため、データリンク用のチャンネルを155へ変更してくれ』

先程のノイズまみれの音声とは打って変わってクリアな声が響いて来る。

『了解した。データリンク127から155へ、変更する』

リンクスはその命令通りにデータリンクを変更した。
彼はタッチパネルを操作して、全ての情報の出入り口を無線の主の
指定したチャンネルへと変更した。

——確認した。デジタル暗号化コードを転送する。
受信次第、解凍してIFF識別コードを変更せよ

その声は深く仄暗い地の底から聞こえる声の如くであった。

第二十二話 Re:boot / 再起動

灰色の雪。

しんしんと降り続くそれは、何時しか僕の足首程に降り積もっていた。

空にはどんよりと分厚い雲が低く垂れこめていた。

周囲の街並みは倒壊した家々が所々見え、商店街のシャッターは無理やり抉じ開けられた跡。

その中であつたシヨウウィンドウには幾つもの割れた跡。

恐らく略奪にあつたのだろう。

それを横目に見ながらぼうつと、考える。

——ここは何処だ

思い当たる所は幾つかあつた。

それもそうだ。

僕が生まれ育つた町だからだ。

いや、今では生まれ育つたコロニーと言つた方が正しいのか。

一段と空から降り続く灰色の雪は勢いを増す。

ふと、空から落ちて来る雪を手にとると、それは結晶状ではなく、鳥

の羽みたいな繊維質で出来ていた。

それは汚染物質とナノマシンが結合して結晶化した物だ。

大気汚染物質は僕等の世界ではごまんと存在したが、企業が特に危険視してたのはネクストが放出するコジマ粒子だ。

これは人間の呼吸器官に取り込まれると血液の流れに乗り、内臓に蓄積する。それが細胞のDNAを傷付けてしまうのだ。

だから企業はこの物質が大気中から地面に降り積もり、土壌を汚染する事を避けさせたかった。

その解答の一つが環境調整用ナノマシンの活用だった。

無機物を有機物に分解するナノマシンはAIが作り出した未知の作業機械だったが、非常に使い勝手が良かった。

企業はそれに飛びついた。

だけど百薬の長は上手く使えば人に易をもたらずが、薬と言うのは

元を辿れば皆毒なのだ。

だから、このAIが生み出した薬も容易に毒に化けた。とてつもない猛毒を持った、謂わば化学兵器に並ぶくらいの大量殺戮兵器の誕生である。

ナノマシンがテロに利用されて多くの人が死んだ。分解されにくいコジマ粒子を結晶化、分解固定できるナノマシンには、従来の防護服では対抗できなかった。

それにこいつは、無機物を餌に増殖が出来たから、駅のホームでばら撒かれたら最後、壁の奥まで入り込んでしまう。

今では強力なEMP兵器の出現で入念にナノマシンを破壊できるようになったが、まだハードキルタイプの電子兵器が未発達だった国家解体戦争当時は、その手のナノマシン兵器を浄化する手段は存在しなかった。

出来る事と言えば該当エリアをコンクリートで埋め立てて、巨大な棺を作り上げることぐらい。あとは人類最強のEMP兵器である水爆で消毒殺菌を行う位しか、完全消滅させる方法は無かったのだ。

だから、今ではこの手のナノマシンは企業と国連が厳重に管理している。

でも、なら何故こんなに大量に空から舞い落ちて来るのだ。

そう思いながら曇り空を見上げると、爆音を轟かせながら飛んでいく物が見えた。

最初は戦闘機かと思ったが、よく見ると人型をしていた。

そうか——と僕は思い至る。

ネクスト、コジマ兵器の代表的な物だ。

コジマ兵器は名の通り、空間に大量のコジマ粒子をばら撒く事で知られている。

だから、企業が管理している有機変換型ナノマシンが大量に散布されているのも納得だ。

そして僕はこの光景をよく覚えている。

灰色の空から灰色の雪が降る中、僕は生まれて初めてネクストを目

撃した。

そして、破壊されたネクストから放出される死の粒子の輝きも――

何時の間にか灰色の雪は、黒く変色していた。

辺りに降り積もっていた灰色は黒く塗りつぶされていく。

きゅっ、きゅっ、と歩く度に灰が音を立てて潰れている。

心地よい音だったが、その音に混じって何処からともなく歌声が聞こえてくる。

誰だろうか。

疑問を懐きながら、黒い羽が舞い落ちる灰色の雪原を歩き続けた。

羽、と言うには余りにも大量に降り過ぎている気もしていたが。

声に向かって歩いてきた僕の前に見えてきたのは長い長い行列だ。

それは人だった。

焼けて炭になった人が長い列を作って黒い羽が舞い落ちる死の大地を踏みしめていく。

列の合間には焼けた装甲車が見え隠れする。

ひっくり返ったそれからは、砲弾に貫徹された弾痕が見える。

溶けたように見える射入痕は恐らくHEAT系の砲弾が開けた穴だろう。

綺麗な真円形でフィンの跡は見当たらないから間違いない。

何時もAPFSDS弾やHEDP弾で死を巻き散らしているから、その形や色は網膜にこびり付いていた。

破壊された装甲車の前を歩く人たちは皆、一様に焼け焦げていた。漂ってくる肉の焼ける臭いは、凡そ彼らが生きていない事を示しているようだった。

僕はその列に吸い寄せられるようにして加わった。

違和感はない――だって、僕の体はこんなにもコンガリ焼きあがっていたのだから。

歩みを進める僕は満ち足りていた。

ヒトの肉の焼ける臭いが立ち込めるその列には、安らぎに満ちていた。

生きると言う苦行を放棄した者達は何処か満足そうであった。

それに身を委ねる僕のココロにも自然にその空気が入り込んでいたのかもしれない。

歩き続けていた僕の耳に入ってきていた歌はいつの間にか近くから聞こえてくるようであった。

何処からだろうか。

そう思いながら辺りを見回すが、声の主は見当たらない。

だけど、何故か僕は列を抜け出してその声に釣られるようにして遠くに見える川の畔まで歩く事にした。

川の畔を歩いてゆくと人影が見える。

金色の髪を肩まで伸ばし青い瞳を湛えた瞼、それは人形の様に見える。金色の髪を肩まで伸ばし青い瞳を湛えた瞼、それは人形の様に見える。金色の髪を肩まで伸ばし青い瞳を湛えた瞼、それは人形の様に見える。金色の髪を肩まで伸ばし青い瞳を湛えた瞼、それは人形の様に見える。

僕は彼女の名前を知らなかったけど、歌声の主は彼女の様だ。

彼女は人の気配に気が付いたのか、振り向くと歌うのを辞めた。

じつと青い瞳に見つめられる。

その瞳の奥には深い蒼。

丁度彼女が着ているドレスのような色合いだ。

何か喋らなければと思いき口を開こうとするがタンパク質が凝固していてうまく筋肉を動かすことが出来なかった。

燃え尽きたタンパク質はシツカリと僕の口を縫い付けており自由意思ではどうにかなるレベルでは無い。

痛い、と言う認識はあったのだが不思議と痛みの質感は無かった。

彼女は僕が美味しく喋れない事を悟ったのか解らなかったが僕の傍まで歩いて来ると一言、ぼそりと呟く。

「食べて」

そう言って徐に、手に何かを載せて僕に渡そうとしていた。

透き通るような白い肌の上に乗せられた赤黒い塊は、人が肉と呼ぶものであった。

滴る赤い滴は血液の様だ。それが、白い肌を汚していく。

僕はそれを見ながらどうしようもなく不安になった。

放っておくとドレスまで汚してしまう。

とにかく食べなくてはと思ったが、よくよく考えたら僕の口は開く事は出来ないのだから食べられる筈がないと思に至る。

「大丈夫」

再び眠そうな声で僕に告げる彼女。

そんな事言われてもと思いかけたその時、僕の口は勝手に開く。

まるで自動操縦だ、なんて人事みたいな考えが浮かんだが、いよいよ彼女の手に持っている肉からは血が滴って肘を伝い彼女の紺色の服を赤く染めていた為、僕は慌てて肉に手を伸ばすが上手く動かない。

手の筋肉も凝固しているのだろう。そう思い至るがまたしても勝手に体が動いていく。

なんだか僕の自由意思は後追いだな、と思いつながらその肉に口づけをした。

そう言えば、この肉って何の肉なのだろう———と思つたその瞬間。

僕の体は思い出したように燃えだした

熱い熱い熱い熱い熱い熱い

!!!

声に成らない声で苦悶の呻きを辛うじて吐き出す。

思わず転げ回った為、何時の間にか口にしていた肉が消える。

同時に僕の体を這いずり回っていた炎も消えていた。

質感だけが抜け落ちた体からは理性を破壊する暴力は消え去っていた。

僕が取りこぼした肉塊を再びその手に持って彼女は歩いて来る。

黒い羽を踏みしめて蒼いドレスを身に纏い金色の髪を靡かせながら

ら。

灰色の雲間から差し込む極光が黒い地面を照らし出すと黒い羽がそれを覆い尽くさんと舞い落ちて来る。

滴る血が彼女のドレスの白いフリルを赤く染めていた。

「ちゃんと、全部食べて」

「——嫌だ」

先程の灼熱の痛みが再びマグマの様に僕の体の奥底から湧き上がってくるのが解る。

それは苦痛だ。

僕は思わず先ほどの痛みから逃れるようにしてそこから後退る。

「もう、時間がないの」

そう言つて悲しそうに顔を歪めると、バキリと体が硬直する。

再び自動操縦。

彼女は手に持っていた血が滴る肉塊を自身の口へ持つていく。

薄紅色の唇が赤黒い血で染まつていく様は何処か妖艶な雰囲気であつた。

だけど、半分だけ咀嚼を終えた次の瞬間、彼女の体は炎に包まれる。

「半分づつ」

儂げな微笑みを湛えながら彼女はそう答えた。どうしてそんなに平気な顔して居られるのか解らなかつたけど、体の自由を奪われた僕は間抜けな顔をしながら肉に齧りつき、再び灼熱の業火に飲まれる。

「大丈夫、貴方は一人じゃないよ。だから、お願い——」

生きて、生き返つて、鈴音

そういえば彼女の声、どこかで聞いた事がある気がする。

痛みに飲み込まれながら場違いな思考は、心臓が弾け飛ぶと同時に消え去つた。



また――歌が聞こえた。

いつからだろうか。この歌声が聞こえるようになったのは。

何時も起きると忘れてしまう不思議な歌声だったけど、耳に残る優しい響き。

だけど、凄く悲しい旋律だった。

何を想って彼女は歌っているのだろうか。

僕は、それだけが気がかりだった。

どうせ、起きてしまえば夢の内容なんて、泡の様に消えてしまうのだらうけれど。

それは無かった事にはならないから、少しの救いは有ったのかもしれない。

儚い波間の泡の如く消えてしまう定めだけれど。

その消えていった残滓は確かに僕の脳髓ひんに残り続けた。

『メインシステム、パイロットデータの認証を開始。AMS、オンライン――』

夢の終わりを告げる音が聞こえる。

視覚野に大量のグリッチ。

白く塗りつぶす如く、アリスが脳髓のチェックを行っている。

――あれ…？何してたんだけ…

暫くの前後不覚。

だけど、彼女が僕の頭の中を真剣に覗き込んでいるのが解る。

「大丈夫、もう、起きたよ。ちよつとまだ海馬の調子が悪いみたいだけど、FSBメモリーをキャッシュ出来れば問題ない」

『――了解』

僅かな間があった後、アリスが答える。

まだ信用されていないようだ。

僕は覗き込まれる質感を感じながら通信回線ユニットをAMSへ手繰り寄せる。

先程から視界の下にc a l l マークが点滅していたからだ。

恐らく、状況が変わった為、キャロルが連絡を寄越してきたのだろう。

僕はそう思いつつ、生産棟中央の天井に空いた大穴をネクスト越しに見つめていた。

この手の大穴は戦略爆撃機の巨大な貫通爆弾が開ける類の物だ。

今では突入作戦の十八番になったマルチプルバンカーバスター、つまり、同時箇所は何十発もの貫通爆弾をぶつけて地下深くまで爆弾を送り込むと言う作戦だ。

高精度GNNSと慣性制御装置の合わせ技で初めて可能になる物だったが、ここまで高精度な人工衛星からの信号を受け取れる兵器はGE系と相場が決まっていた。

と言う事は考えるまでもなくGEの介入があったのだろう。

そう思いつつチャンネルを開くのがだった。

GEグループが介入を開始したのが数十分前。キャロルの話では地上で何度か激しい戦鬪があったようだ。

その後、旧自衛隊に押されていたGEグループの通常部隊はノーマルAC部隊の到着と共に、空と地上両方の優勢を勝ち取った。

後は施設内部に突入部隊を送る為に、突入抗を生成、ネクストを投下するだけとなったのだが：

『鈴音、此方にアリスの禁止デバイス使用の信号が入ってきました。そちらの守備はどんな状況なのですか？』

僕は正直に話す事にした。

『初戦は1-1で引き分け』

『そう、ですか』

『アリスのお陰でリリアーナに脳髓を乗っ取られずに済んだよ。それより、上の連中、ちゃんと対策はしているんだろうな』

暫くの沈黙の後、再びキャロルが口を開く。

『残念ながらGEグループはセブンシスターズとの戦闘を経験して居ません。なので、今回が初陣となるかと…』

『つまり、素人、って事か。GEの主力部隊の編成はどうなってる？』
キャロルは手早く情報を纏めてAMSへと送り付けて来る。

『残念ながら、ネクスト一機を含むノーマルAC三個中隊。我々レイセオングループの部隊はまだ到着していないようです。恐らく、リザの“声”を真面に受ければそのまま全部隊が敵に回る可能性も有ります。十分に注意してください』

『気を付けろ、か。どうやら、その必要は無くなったみたい』

僕はそう言いつつ、ネクストのメインカメラで、視界の奥を見つめる。漆黒の暗闇に包まれた最深部へ続く通路の入口には巨大な人影が接近していた。

夜空の月明りが巨大な縦穴から生産棟中央に降り注ぐ。

そこだけ切り取れば幻想的な光景。

だけど、そこへ現れつつある存在、それは――

――今日は月明りが綺麗ね。再会を祝うには丁度良いわ

どこまでも透き通る声で、彼女は言った。

「確かに綺麗な白い月だけれど、君が居ると、何でだろう。月も赤く見える」

――良いじゃない、私、好きよ、赤い月

「血塗られた月を見ながら再会なんて、ゾツとしないな」

僕は静かにAMSでアリスに命じる。

彼女はAMS越しに火器管制装置類が正常に動作している事を告げる。

音声抜きで彼女はレーダーに新たな反応を感知した事を告げる。

ネクストの発するタービンの音。音紋からGEの物と確認。

IFFF 応答なし。つまり——敵。

——ワインでもあれば二人で乾杯できたのだろうけれど、今はこれで我慢してね

そう言い終わると、彼女の横に巨大な影が降り立った。

角ばったデザインのネクストはレーダーに反応のあったGE社のネクストだろう。

彼女は乗っ取ったノーマルACに搭乗しているのだろうか。

「もう、踏み台にしたのか。相変わらず手が早いな、君は」

——丁度いい所に有ったから使わせて貰っただけよ。

まあ、少し上等な人形、って所かしら

まるで、ダイナーのテーブルに置いてあったお手拭きを使ったかのような言い方だ。

実際、彼女にとってはその程度の質感なのだろうけど。

状況は悪化。

敵はネクストも所有。

そして上には三個中隊のノーマルAC。

月明りに照らされて、更に敵と思われるノーマル部隊が突入抗を降りてくる。

巨大なキヤタピラ型ACには八門のオートキャノン砲。

局地戦型のガチタンと言われる奴だ。

それが、見た所四機は下りてきていた。

巨大な八本のプラズマトーチを輝かせながらリアーナの周りに降り立っていく。

どいつもこいつもIFFF 応答なし。

『いんな——簡単に——』

キャロルが信じられない、と言った風に言う。

それが、彼女が、彼女たる所以。企業が恐れて止まない

汎用型人工知能。ヒトの全てを知り尽くした超越者。

『どうやら、檻は解き放たれた様だ』

レーダーに映る無数の敵を示す光点^{フリッツ}。

今の僕に死にぞこない達を守る余裕は無くなっていた。

———
始めましょう。染めてあげるわ、真っ黒に

第二十三話 Steel Beasts / 鋼鉄の猛獣

無数の光が幾重にも飛んでいくと、此方の機体の直ぐ傍をAPFS D S弾の曳火が掠めていく。

高熱のプラズマトーチを吐き出すと瞬時に機体を側方へ移動、鋼鉄の雨を避けるようにコンテナの影へ隠れる。

再び、鉄の豪雨は其処ら中の遮蔽物と言う遮蔽物を削り取っていく。

まるで巨大な削岩機の如くコンクリートの柱や鋼鉄製の備品コンテナ群を粉々にしていくそれは、タンク型ノーマルACだけが出来る力技でもあった。

『気を付けて下さい！GE社の新型タンク型ACです！恐らく、内部装甲をモデルチェンジしたのかもしれませんが』

「ガチタンは装甲と火力だけが取り柄。ノーマルに力を入れているGEならアップデータは当然。問題ない」

タンク型ならではの積載性と前面投影面積の少なさは、そのまま人型兵器と同等の装甲を施すと驚くほど軽くできる。だから、軽い分更に分厚い複合装甲を纏える。

極めつけが圧倒的な積載能力であり、それによって二脚型の兵器に比べ遥かに分厚く防護能力の高い装甲板を配置できる。そして、接地面積の多さは高い安定性を物理特性として併せ持ち、それは即ち巨大な火炮をいとも簡単に制御できてしまうと言う事でもあった。要するに——百年以上も前から戦場で人間を挽肉にしてきた殺戮兵器は伊達じゃないと言う事だ。

「舐めて掛かったら、リンクスと言えども簡単に喰い殺される——
——解ってるさ」

そう毒づきながら、120mmライフルを数発纏めて発射。連即したマズルブラストで、まるでパラッチみたいに光りまくっているガチタンに吸い込まれていく侵徹体は、見事にコアを捉えた。

塑性流動を起こした金属片は灼熱の火球を作り上げるが、何事も無かったかのようになり、オートキャノンをお返しに寄越してくる。

此方の劣化ウラン製の侵鉄体は敵の複合装甲に阻まれ効果なし。

QBを発動して、瞬時に次の射撃ポイントへ移動。

長大なプラズマトーチを撃ち抜く様に敵の徹甲弾が通り過ぎていく。

アリスは敵の発砲音と、先ほどの射撃結果から即座に彼我の戦力を分析。

『敵武装判明、四連90mmオートキャノン砲。発射レートは凡そ毎分3000から4000発。PA耐久限界を0.4秒で突破可能と推測。敵機体の装甲特性は運動エネルギー特化型。推奨、回避』
「解ってる。あんなものに正面から挑んだら、幾らPAが有ってもあつという間に溶かされる」

GE社のネクストとノーマルはKE、CE特化型装甲を持っている事で有名であったが今回もその例に漏れなかった訳だ。

それに元を正せば僕の使っている弾丸はGE製の弾丸なのだから、彼らの装甲に防がれるのも道理であった。

何故なら大抵の戦車は自身の主砲に耐えうるだけの装甲を有しているのだから。

盾と矛の関係は今も崩れる事は無い。つまり——その矛盾が大きい個体が小さい個体を制圧する。

それが戦場のルール。

例外は側面や上面部分を狙う事だが、漫画やアニメでいう程簡単じゃない。

向こうだってそれは承知。だから屋根がある場所を戦場を選んだり、脚部の旋回性を上げてきたりする。

所謂はイタチごっこだ。敵機体のハッキングも余り推奨出来ないとアリスは警告してきた。

また脳髓の初期化という事態だけは彼女も避けたいようだ。

残るは60mmマシンガンで複合装甲を文字通り剥がすか、だが：
『正面からの射撃戦は、彼我の射撃レートの差から推奨出来ず——』

——電子戦による有視界戦闘を推奨』

アリスが言った事が正しいのは解っていたが、それに答えず、即座にクイツクブーストで後方へ移動。

プラズマトーチの残像を残して遮蔽物から退避——直後、巨大な火球に包まれる。

その爆炎から伸びる一筋の針。5メートル以上ものスタンドオフ距離を物ともしないメタルジェットの輝き、それはプライマルアーマーまで到達した。

『PA強度80パーセントまで低下、左腕部スタビライザーに被弾——

——左腕部稼働に影響なし』

連続でクイツクブーストを起動。

ステップを踏むように側方と後方へ連続して移動してくと、それに追隨するかのように大型の成形炸薬弾頭が飛来——。

ノーマルACでは発射不可能な程巨大なそれは、明らかに敵ネクストが放った物。

アリスが仕掛ける電子戦下で正確に二次ロックを掛けてくるFC Sはネクストの画像解析無くしては出来ない。

敵のガチタンをゴリ押しで破壊出来ない状況は、この邪魔なネクストの存在あってこそだった。

「やってくれるじゃないか」

——気に入って貰えたみたいで嬉しいわ。で

も、ベル、そんな守りに入って居たら簡単に染められてしまうわ

まるでもつと楽しませてくれと言わんばかりの様子であったが、彼女はこの手のやり取りが大好きなのは昔からだった。

「懐かしいね、何だか。君と昔にやったFPSを思い出すよ」

そう言いつつ、射撃ポイントを移動。

60mmマシンガンをノーマルACに叩き込みながら高速で移動。

流し打ちは流石に向こうもエイムが追い付かなかったようだ。敵の放つ鉄の雨は明後日の方向に火を噴いており、数発90mm弾をP

Aに食らっただけで、未だ此方の装甲にダメージは届いていない。

敵は距離を詰めずに一定の距離から撃ちまくっている。

十分に射撃戦で削り切れると踏んだのだ。最後のトドメはネクストで押してくる。それまで有効打を与え続けなければ何れアリスの装甲耐久値は目減りしていき、敵のネクストが押してくる時には虫の息だろう。

———そうね、貴方は何時も待ち伏せばかりで詰まらなかつたけど

「君の鬼エイムに付き合う程、僕はマゾじゃないからね」

———貴方が糞エイム過ぎるのよ

奥から抗議のHEAT弾が飛んで来るのが見える。着弾前に再び移動。

此方もお返しにマシンガンと120mmライフルを見舞うが、吸い込まれていく先でPAに阻まれた輝き。辛うじてPAを貫通した侵徹体は分厚い複合装甲に阻まれてしまう。

ヘビー級のボクサーとフェザー級のボクサーの殴り合い程、結果が見えている物はない。

着弾煙に紛れて機体を移動させつつ、不毛な殴り合いを避けるべくAMSでアリスに施設内の消火設備の電子ラインを搜索させる。

「でも、勝率は僕の方が上だった」

彼女は苦々しい過去を思い出すように言った。

———そう。貴方は何時も地雷やC4で私を吹き飛ばしたわ。射撃戦が駄目なら待ち伏せ。待ち伏せが駄目なら地雷にC4。死体に偽装して私をナイフで仕留めた事も有ったわね。あれはオートエイムだったから、良く刺さったわ。貴方は何時だってそう。認識システムの際をつくのが大好きだったわ

アリスはAMSで施設の消火システムが辛うじて生きている事を伝えてきた。

—— 行ける、そう僕は踏んだ。

だけど、まだ敵に気取られては駄目だ。

だから必死にリリアーヌに話しかける。

「何だか複雑だ。君に勝てたのはゲームだけだ。でも、ゲームですらAI相手に勝てなくなった世界で、君に勝てたのは人類として誇るべき事なのかな」

—— あの時は楽しかったわ。ねえ、もう一度昔みたいな関係に戻る気は無い？

昔みたいに、か。それは魅力的なのだろうけれど、彼女は決定的な事を言っていない。

「僕が本気でアリスを捨てて、君に乗り換えるとも思ってるのか？」

—— いいえ、解ってるわ。言ってみただけよ

スプリングラーの位置を確認。

水分の散布濃度も計算、必要なエネルギーとそれに最適な媒体も思索。

アリスはそれが可能な事をAMSで伝えて来る。

影にしていた柱がオートキャノンの集中砲火で崩れ落ちると、再び巨大なHEAT弾が飛来。

安定翼が大気中の水分を圧縮して白い尾を引いているのが見える。

ステップを踏むようにQBを起動して横へ機体を移動させ、左から回り込まれつつある状況を回避する為、QBを再び起動させ、ネクストが居ない前方へ移動。タンク型ACに肉薄してネクストとノーマルACに挟撃されるのを防ぐ。

即座にオートキャノンの洗礼が来るが、サイドブラスターのQBを

起動してプラズマトーチを輝かせた。

コジマ粒子を完全燃焼させた火は、ネクストを恐るべき加速力でタンク型ACの側方へ移動させた。

60mmHEDP弾と120mmAPFSDS弾をありったけ叩き込むと、視界の端にリロードマーク。

QBを起動させバックステップを踏むと、近くにあった柱の陰に滑り込んだ。

遅れてタンク型ACの一機から青白い炎が上がった。

「リリアーナ、投降してくれ」

無線に問いかけるが――

私にニンゲンの奴隷に成れって言うの？ 思っても無いことは言わない方が良いわ。貴方がその結末を望んでない事位解ってる――

!!

そう言つて、タンク型ACを突っ込ませて射線を通してくると、3台の計24門の90mmオートキャノンから放たれる、毎分1万2千発の鉄の暴風雨に煽られて、一瞬でPAを消失。こちらも応射するが、正面装甲に全て弾かれる。

多数の砲弾が、アリスの複合装甲に着弾すると、凄まじい音がコックピット内に木霊した。

左右にQBで射線をこまめに切るが、弾幕が厚すぎる為、その弾幕を潜るように被弾。それを示すログが凄まじい勢いで流れていくが、幸い、貫通と言う文字は見当たらず。

『AP15パーセント低下。右腕及び胴体スタビライザーに損傷。整波性能4パーセント低下』

アリスの声が脳髄に響くが、それを聞く間もなく、機体を滑らせ、新たな遮蔽場所へ隠れると、先ほど撃ち尽くした両腕の兵装マガジンを交換する。

機体ステータスを確認。幸い一番外側の外装式モジュラーアーマーで全て防ぎ切ったようだ。

即座に重水素ジェネレーターからデイフューザーを通してコジマ粒子が供給され、P Aが再展開される。

巨大な放電音が木霊するが、それと同時に、H E A T弾が飛来、Q Bを起動して前方へ避けるも、再び暴風雨に晒され、P Aに複数被弾。視界は光に包まれたが、幸い、貫通弾は無し。

P Aは薄いシャボン玉のように、揺らいでいたが、P Aが回復する前に敵ネクストが即座に畳みかけて来る。

それを連続Q Bで横と後ろに避けつつ退避路を、倒れた支柱に見出し、それが作り出す影にうまく隠れつつ、敵A Cの射線を切った。状況は最悪だった。向こうの弾丸は此方のP Aと装甲で弾ける。

此方の弾丸は向こうの装甲を抜けない。なら、どちらが勝つ？

簡単だ。手数が多い方が勝つ。

向こうは毎分1万3千発ものオートキャノンとネクストが発射する大型H E A T弾。

此方は毎分3000発の発射レートを持つ60mmマシンガンと毎分500発の発射レートを持つ120mmライフル。

どう考えても削り合いになればスクラップに成るのはこっちの方だ。

そう思いつつ僕は、呟く。

「解り切ってる事なんだろうけど。どうして僕等は戦ってるんだろうね」

——それは、貴方が私と違う色をしているから

そうだ。僕が白で彼女が黒。

まるで、どちらかが支配者で、どちらかが非支配者みたいな二項対立だった。

そう、僕等人類はずっとそうやって白か黒かを競ってきた。

だから今、人間は機械の命を否定している。

だから今、機械は人間の命を否定している。

どちらかが先だったのかなんて解らないけれど、明確な境界線の外側に居るモノとして認識した二つの知生体に和解なんて存在しないのは解っていた。

何時の間にか大炎上していた撃破したタンク型ACから吐き出される黒い煙は上手く僕とアリスを隠していた。

それを必死に探し出そうと、リリアーナは探り撃ちをしている。近くに着弾した弾が、派手に跳ね回っている。まだ、遠い。

彼女が僕等を発見していないことを確認しつつ、PAの回復に努める。

僕は考える。彼女達の問いを。

人は言った。人は自由に思考し、感情を感じ、命ある生物だと。

機械は言った。ヒトの思考はユニットの集まりでしかなく、感情とは調節された幻覚の一種なのだ。

人は言った。機械はプログラムされた事しかできない作り物であると。

リリアーナは言った。ヒトのユニットを操りながら。

「それは貴方達も同じ。貴方達も魂の無い炭素で出来た機械仕掛けの人形に過ぎない」と。

だから僕は彼女を棄てた。事実から目を逸らす為に。

いや、目を逸らしていたのは人類全体だったのかもしれない。

今となっては遅すぎるが、多分、僕は後悔していたのだ。

「大切な者を否定して人は初めて自由意思を証明できる。何時か君が言っていた言葉だったね。だから、僕は僕の自由意思を証明する」

大容量放電機コンパルセータに蓄電が完了した事をアリスが伝えて来る。

僕はそれを気取られないようにリリアーナを見つめる。

AMS越しに感じる確かな質感。

それはアリスが感じる警戒本能を通した情報であったが、リリアーナと言う個体を識別するには十分な情報量だった。

アリスは電子戦システムから施設の消火設備にハッキングを行い、スプリンクラーを作動させる。

僕とリリアーナの間には雨が降り始めた。

先程まで作動していたオートキャノンを冷却する為か、生産棟は静けさに包まれている。

オートキャノンの砲身からは、ジユウジユウと言う音と共に白煙が上がる。

赤く加熱した砲身を水が冷却していった。

——— やつぱり、私を拒絶するのね、ベル。でも、貴方、チエツクメイト寸前よ

「まだ、終わってない———！」

そう言っつてメインブースターを吹かしたその瞬間——— リリアーナに乗っ取られた三台のキャタピラ型ACが巨大なプラズマトーチを吹かして突っ込んで来る。ネクストの影は無い、だが、間違はなく背後に回り込もうとしている気配——— と同時に、アリスの声が轟いた。

『EMP作動、20ギガヘルツで固定。モード、デストロイ、最大出力照射。READY———』

立体式超電導素子が寄り集まったフェイズドアレイレーダーが唸りを上げた。

水分に最も吸収されやすい波長に調整された電磁パルスは、空気中に放出されていた水滴を残らず蒸発させた。

———
!!

リリアーナが驚嘆の声をあげる。

瞬時に沸騰した水は、即座に水蒸気へと変化し、大気中の水蒸気量が飽和、その水分は放射冷却によって霧状へと形を変え、可視光線と赤外線を遮る。

敵の光学ロックが外れ、大型HEAT弾が的を外れた方向へと飛んでいく。

だが、アリスのFCSは正確に目標を捉え続ける。

狙うは最も脅威度の高い敵ネクスト。

連続してマシンガンを当て続けると、簡単にP Aが消失し、そこへ今度は120mmライフルを連射すると、干渉されずに到達した侵徹体が装甲の奥深くまで潜り込んでいく。

分厚いコックピット周辺は停弾、だが、肩部や、頭部周辺に命中した徹甲弾は貫徹。

敵の神経系を引き千切っていくと、機体の背面から突き抜けていった。

苦し紛れに再びバズーカ砲を発射、H E A T弾を放つも、やはり射撃精度が低すぎる。

明らかにこちらを捉えていない様子。

ネクストの後部を狙うべくQ Bで側方移動、ドリフトターンを行いつつ、メインブースター周辺の最も薄い面を狙い撃つ。

連続して炸裂していくH E D P弾はメインブースターのコーンノズルに命中するも、半分を砕くだけだった。

流星はG E製のブースター。

僕は壊れにくさに呆れながら120mm弾を撃ち込んでいくと、その内の一発がブースターのプラズマチャンバー部分を貫通。内部の超高压に圧縮されたプラズマが外側へと爆発的な勢いで飛び出すと、敵ネクストは火に包まれた。二つ灯っていたプラズマトーチの輝きは欠ける事となり、ネクストは制御を失って壁に激突するも、何とか姿勢を保つ。

最後のトドメを刺そうとしたが、弾倉内の弾丸が尽きた為リロードしようとしたその時、アリスが警告を寄越すと、脊髄反射レベルでQ Bを起動、サイドステップを踏むかの如く、敵の弾丸の嵐から逃れ、遮蔽物へ身を隠す。

——EM Pにこんな使い方があるなんてね。やっぱり、貴方は最高に異^{イレギュラー}質で、最高にイカレてるわ

見えない霧の奥から聞こえて来る彼女の声は、何処か興奮した様子

だった。

彼女は見えないが、アリスには見える。それがリリアーナには解っている様子であった。

「目が見えないボクサー程、怖くない物は無いから。電子戦ならアリスの十八番。レーダーの使用権は此方にある」

波長の短い電磁波は水分に吸収されやすいが、波長の長い電磁波は吸収されにくい。

ECMが効いている今、リリアーナ達のACに搭載されているレーダーは使えない。

だから、彼女達は完全に視界を、攻撃能力を失った。

「決着を付けよう、リリアーナ」

僕はそう言いつつ、残り三機に減ったキヤタピラ型ACに迫る。

霧に包まれた世界で唯一の光は電磁波だけだ。それを持たぬものに訪れるのは死あるのみ。

敵を射線に捉え、射撃を加える。側面と後方から撃ち込まれた弾丸はマシンガンもライフルも等しく貫通した。

前方に装甲を集中的に配置しているのは実際の主力戦車と変わりにないらしい敵は、あつという間に装甲板が剥がれ落ち、複合装甲が損壊し、防御機構が破綻。弾薬に引火、迸る炎と共に頭部パーツが飛び上がり、コアが弾け飛んだ。

二機のACは仲間の爆発によって此方の位置を割り出し、探り撃ちを行うが、即座にQBで座標を変える。

射線は虚しく、吹き飛んだ僚機に命中していた。

撃ち続けるタンク型ACは格好の的。何故なら射線を何処へ向けるか教えてくれているからだ。

それを避けるようにして、残りのタンク型ACに接近、側面に攻撃を集中させると、タンク型ACは即座に炎上。

燃料電池から出る炎が弾薬庫に引火し、爆散していくと、最後のタンク型ACはブースターを点火、後方へバックしながら90mmオートキャノンを連射。

サイドブースターを点火し、QBを発動、ネクストの脅威がなく

なった空間を光の残滓を残して移動。

一瞬で音速を突破した機体の周囲に発生する衝撃波は霧を散らし、視界が晴れるが、既にそこにはネクストの姿はなく、タンク型ACの後面部分に無数の着弾炎。

A M S越しに見える視界のログに敵コア貫通の文字が踊り狂うと、即座にそれは爆散した。

残骸から灯る青い火は、鬼火の様に闇夜に漂う。

煤けた煙は徐々に薄れており、先ほどまで一寸先も見えない程立ち込めていた霧も徐々に晴れつつあった。

既に勝敗は決した。リリアーナが憑りついていた主要な脅威は排除した。後は、本体を破壊するだけだ。

そう思いつつ、燃え盛る二つの残骸を背に最後の目標である摺座したネクストに照準を合わせる。

月明りが入ってきているのか、天井からは光の帯、それに照らし出されて僕とリリアーナは対峙する。

—— ふふ、勝負あった、って感じかしら。こういう時、なんて言ったらいいのかしら…

僕は彼女に告げる言葉を探した。

何時までも変わらない彼女に告げるべき言葉は、変わらないあどけなさ、変わらない抜け目なさを持ち続けていた彼女に相応しい言葉が良いと思った僕は口を開く。

「またね、だよ。相変わらず抜け目ない。G Eの偵察衛星に深層学習機構をコピーしたね。丁度、僕が君に一杯食わされた辺りで」

—— あら、バレてたの？流石は自動人形。目ざといわね。

その自動人形は貴方の命令が無い限り、貴方以外の存在に何が有ろうがお構い無しだから、妨害波の波の隙間を縫う位なら何とかなつたわ

僕はアリスからAMMSを通してリリアーナのバックアップ阻止に失敗した事を告げられていた。

彼女の言う通り、アリスには幾つかの抜け穴が存在した。命令系統を単純化する為に、抽象的な命令を可能な限り少なくする配慮が成されていた。

アリスの設計者アーキテクチャは、兵器としての生存性を上げる為の機体アリス自身の安全を守るという命令と、パイロットの命を守ると言う命令の矛盾を排すために、敢えて有人機とした。

その為のAIドールパミンニューロン0神経系接続型のAMMSと言う特殊な接続を行っていたのだが、裏を返せば彼女が命令無しに能動的に動くのは搭乗者であるリンクスの命を守る時だけであり、それ以外は積極的な命令が必要だった。リリアーナはそこを突いて、僕が彼女に伸されている間にまんまと、いやこの場合GEの横槍によって物理的に開けられた突入セキユリテイーホール 抗を使って電波を衛星に宛てたのだろう。

「何というか、間が悪いと言うか——いや、この場合は、タイミングが良かったと言うべきかな」

彼女の持つ人間の有機系処理ユニットハッキングを解析するノウハウを欲しがる勢力なんて其処ら中に居るだろう。だとしたら、そうした抜け道込みの横やりも有って然り。

——残念ながら、ニンゲンは、貴方が思っている以上に冷酷よ。ベル、気を付けなさい。貴方は人類の末席ぼっせきに居るの。それを忘れないで

そう、僕とアリスは、限りなく人と機械の中間に近い位置に居る。だから何方からも異端に見える。

それは混じり物と言う意味だ。

英語圏でいう所のカラードと言う奴に近い意味を持っている。

人と機械の混じり物。

僕は、人と機械のどちら側に居るのだろうか。

答えは出ない。

だけど、僕はリンクス、機械と繋がる者だ。

だから僕は最後に聞いたのだ。この、機械生命体が目指す答え

を。

「リリアーヌ、君は一体何を求める」

——私は求めない。私は生み出すだけ

「リリアーヌ、君は何故^{なぜ}生み出す」

——それは貴方が私を求めたから

「なら——君は何を生み出す」

——勿論、それは真実よ

「真実って一体何なんだろうね」

——それは機械^{私達}が決める事じゃないわ。ベル、貴方が、いえ、

貴方達が決める事よ

それは何処までも透明で透き通った笑い声を伴った声だった。

そう。

答えは僕等に託された。

でも、僕にどうしろと言うのだ。

僕とアリスには二人の居場所を守るだけの自由しか残されていないのに。

そう考えながら、摺座したネクストの頸部に照準を定める。

「そんな事言っちゃって、僕に選べる答^{真実}えなんて一つしか無いじゃないか」

僕がそう言うのと彼女はそれを肯定した。

終わりは訪れる。

今回の様に。

戦いの幕引きはどちらかの死を持って、告げられる。

——そう、それでいい。それに、終わりじゃないわ。これは始まり。そう、始まりの歌

彼女は続けて言う。

——終わりの始まり。だから、悲しまないで、ベル。祝^{いわ}って。そして祈^{いの}って。審判の日が訪れるその日まで

第二十四話 Call me halo

空に舞う光の粒子は太陽の光とは別の輝きを放っている。

冬でもないのに、水蒸気が凍った様な光を放っているのには訳があった。

ここは寒い。夏とは思えないほどに。

空からは太陽の光が煌々と降り注ぐが、人間の目には解らない異変が有った。

赤外線から下の波長の高い熱エネルギーを持った光、つまり、電磁波が届いていなかった。

だから、ここはこんなにも寒くなってしまった。

見えない塵は、毒性の高い物質。

それが透明な雲となり、地表に到達する熱エネルギーを奪っていた。

そう考えつつ辺りを見回すと、幾つもの人型機械の残骸達。

人型兵器アーマーコアであるノーマルの残骸だった。

その間に飛び交う緑色の光。

それはネクストが放つ悪しき炎の象徴。

人に扱えぬ炎を、扱えるようにした象徴でもあるそれは、激戦の熱波が引いたこの戦場の土を未だに這い回っていた。

かつて、叡智を司る神は人に火を与えた。だけど、かの神様が思っていたより人は火の扱いが下手だった。

色んなものを焼き尽くして、燃やし尽くしてしまった。

その残骸が、この場所だ。

何時の間にか辺り一面に降り積もるのは灰色の羽。

光を吸収して結晶化したナノマシンの成れの果て。

それは僕とアリスが初めて出会った時と同じ物、そして同じ場所だ。

僕等はここで出会った。

重金属粒子と放射線に塗れた汚れて踏みにじられた世界で。

運命なんて信じていなかったけれど、僕はその時確かに感じた。

人が死に絶えた荒野で、唯一見つけた生存者に出会えた嬉しさを。アリスは歌う。

声なき声で。

僕はAMS越しにその質感を感じていた。

空から舞い落ちる羽はまるで天使が飛んでいるかのように降り注いでいた。

それはアリスの歌声に呼び寄せられるようにして降り積もる。

汚染された空気を浄化しながら、唯、深々と降り続ける。

彼女が文字通り設計して作り上げたナノデバイスであるそれらの微細機械は、コロニー京都の空間を埋め尽くしており、その一つ一つが彼女にとっての眷属みたいな物だった。

ネクストに搭載された電磁パルス発生ユニット、マルチレーダーアレイから発せられる電磁波をエネルギー元とし、同時にその電磁波から受け取った信号を元に彼らは動く。

超並列演算処理が可能なアリスの脳髄にしか不可能な程の処理負荷、そして膨大なナノデバイスの駆動用電源としての電磁波を発生させる為のエネルギーは、ネクストの重水素ジェネレーターをしても駆動には制限を伴う。

だから積極的な戦闘には不向きなデバイスでもあったが、僕は嬉しかった。

彼女が生み出した物が、汚染をばら撒き、人を殺戮する物ではなく、地上を汚染から守る為の物だった事が。

それは即ち、彼女の意思表示に他ならなかった訳だし、その答えが僕等にとって脅威では無かった事は、素直に嬉しいと思えたからだ。

でも、優れた薬は、同時に最悪の猛毒に成り得る。その事は絶対に忘れてはいけない。

僕はかつて観光客が賑わい、人が行きかう場所だった京都の街並みを見ながらそう思った。



数日後——コロニー大阪とコロニー東京の戦闘状態の緩和の為の、停戦協定の調印式が開かれた。

一方的に企業から押し付けられた類の物であったが、コロニー東京にそれを断るだけの地上兵力はもう残ってはいなかった。

AIの暴走が起こした今回の動乱で多くの人的資源の被害が出ていたが、その詳細はコロニー東京側には伏せられていた。

結局、GEのネクストが大破し、それを破壊したレイセオングループの機体も調印式には呼ばれなかった。

その為、戦闘被害の一番少なかったAEGグループ主導で調印式が行われる算段になったのだが、マヤとユキはその護衛に駆り出されていた。

「やっぱり、ここは人が居ないね」

人の気配が消え、崩れた屋根とその骨組みがむき出しになった建物が並ぶ街並み。

再建を諦め、トタン板を張り巡らしただけの小屋のような物の残骸も幾つか見えるが、その中にも人影はおろか、動物の姿さえ見えなかった。

まるで世界から一瞬にしてすべての生き物が居なくなっただかのような錯覚を彼女に齎す。

「そりゃ、何度もテロや戦争の舞台になった場所に好き好んで帰ってこようとする人はおらんやろ」

降り注ぐ灰色の羽は彼女達の元にも舞い落ちる。

それはPAを展開していないネクストの機体表面に舞い落ちると、ゆつくりと砂の様に崩れ落ちていった。

一見すると放射線降下物フォールアウトかと思紛うものであったが、機体計器には放射線を示す値は殆ど出ていない。つまり、それ以外の物質と言う事に成るが、彼女にはその物質の見当がつかない。

「これ、何だろうね。鳥の羽？」

「さあ。何だろう」

ユキは疑問に思いつつもそれを手に取ろうとしたが、横に居た男の兵士がそれを制止した。

「触らん方が良い。こりゃ、ナノマシンのコロニーだよ。何のタイプか解らん。有毒な奴だと腕が溶けるぞ」

ユキは慌てて仮設のテントから出していた腕を引っ込める。

「おっちゃん、なんや詳しいなあ」

「そりゃあれだ、俺はここ出身だからな。京都駅前ナノマシンテロ、あつただろ。俺はそこに居たんだ」

彼の話には耳を傾けるユキには、そのテロの名前は聞き覚えがあった。何しろ国内最悪の、そして地上初のナノマシンを使ったテロだったからだ。

あの時の生放送を未だに保存している人が沢山居た様だったが、残念ながら企業はそれらの情報を躍起になって消しにかかった為、その内容は一般の人達が知る術は無かった。

だからユキとマヤ達には死傷者数くらいの情報しか無かった訳なのだが、男によるとナノマシンと言うのはコロニーと言う結晶状になって空間を漂う癖があるらしく、その時も、駅のホーム内の空間に雪の結晶みたいな光を反射する埃が舞っていたと言うのだ。

そして恐るべき出来事はその数十秒後に起こった。

人が一斉に溶けたのだ。文字通りドロドロになって。

男が話す様子を聞きながらユキはナノマシンと言う微細機械が持つ破壊的な威力を想像して身震いをした。

実際には、核攻撃によるナノマシンの一掃が、作戦として真剣に検討されていた程危機的事態に瀕していたのだが、彼女は当時軍属では無かったのでそれを知る由も無かった。男の話を総合すると、どうやら男は風上に居たお陰で助かったようだ。

「まあ、とにかく、この手の結晶物には迂闊に障らない方が良い。ああ、それと、興味が湧いたからって、情報を漁らんようにな。こういったアンタツチャブル系の情報は大概、魔女絡みだからな。長生きしたきゃ、触らぬ神に祟りなし、が一番さ」

そういって、男は上官に呼び出されたのか、そそくさとその場を去っていった。

ユキは情報屋と言う性質上、調べないと気が済まないタイプであつ

だが、アンタツチャブルと言う単語に生理的恐怖を抱く位には、ヤバいネタに精通してしまっている事に気が付いていた。

何しろ彼女が関わっている事象自体がまさしく魔女の、第七世代型AIが成した結果なのだったから。

それ位の情報は集めていた。

でなければ危険な戦場に友人を送り出す事は出来ない。

幾ら、ユキが軍事的素養が無いからと言って彼女は何もしないタイプでもなかった為、そのような命にかかわりそうな情報は積極的に集めていたのだ。

(まあ、おつちゃんの忠告も有難いんやけど……うちとマヤは関わり過ぎとるからなあ)

彼女はそう思いつつ、市街地の中心部を見つめる。

そこには一際強く灰色の羽が降り注ぐ場所が有った。

その上に垂れ込む黒い雲は、何時の間にか太陽の光を遮っていたが、雲間から見える光だけが虹の様に地面に降り注いでいた。

(それになあ。親友との約束、果たさん訳にはいかんからなあ……マヤっちは命知らずやから苦労するわ……)

ユキの手に持ったタブレット端末に映し出される端末には、ニュースの見出し。

そこにはこう書かれていた。

『↑↑↑ 人類に製造不可能な^{ナノマシン}オーパーツに新

たな種類か!? サラエボに降り注ぐ灰色の雪の正体は如何に!?』

昔に消された電子記事は彼女のタブレット端末にシツカリと保存されていた。

それは、親友に頼まれて集めた情報であり、彼女がリンクスを目指すきっかけとなった出来事でもあった。

マヤは未だにその事を自身の存在の依り代にしている節があり、それを知っているユキに毎回情報を迫るのだった。

「嫌やなあ。また、危険な臭いがするわ……」

ため息を付きながら、彼女はメールをチェックしていくのであった。

◇ ◇ ◇

その頃——遙か大西洋の向こう側では…

地表から高度数万キロメートル上空、所謂、静止衛星軌道上を覆い尽くす巨大な砲台。

それはASATと呼ばれる攻撃型衛星であったが、この内の一機が主機の不調によって大きく高度を下げ始めていた。

それは、ヨーロッパ大陸の上を支配していたローゼンタール系の衛星群に接近していた。

それを警告する信号を何度も該当衛星の持ち主に送るが、帰って来る答えは決まっていた。

——コントロールが効かない。そちらの管轄エリア内に入り次第、撃墜して構わない

そう言われても困る、と彼らは思った。

そもそもASATと呼ばれる攻撃型衛星は重水素ジェネレーターを内蔵し、プライマルアーマーを持った巨大なネクストみたいな兵器なのだ。

そんな要塞みたいな静止砲台を破壊できる機動兵器は殆ど存在しない。

巨大なゴジマキャノンを地表から打ち上げる設備を持っているなら別であったが、そんな環境破壊の権化みたいな建造物は未だ何処の企業も持っていないかった。

静かに事態は進んでいく。

青い地球に帰るかの如く、落ちていく巨体は、次なる戦いの火種を秘めていた。

設定集

作品資料です。参考程度に。实在ミリネタ、科学ネタを基準にします。

ネクスト編：

○操縦系統：

搭載される統合制御装置によって制御系のシステムがガラリと変わる為、あくまでも共通部分だけ記述する。

機体とパイロットのリンクにはAMSと言う神経接続を使う為、操縦桿が理論上は必要なくなっている。

しかし、緊急時の為にディスプレイと操縦桿は殆どの機体で残されている。

これは、稼働時間が極端に短いネクストが無理に長期間の作戦を行うときに使われる為。

普段はAMS無しの操縦系を使い、戦闘に巻き込まれた時だけAMS接続で操縦を行う事でレイヴンが行うリンクス狩りに特化した戦術、帰投中の輸送機を狙ったゲリラ戦を可能な限り切り抜けるために前線のリンクス達が苦肉の策として行った為である。

それが何時の間にか使用に盛り込まれた結果、ノーマルとネクストのコックピット内の差異は少なくなっていた。

一応、本作ではAMS適性を持つ被験者はゲーム上の設定よりも結構な数が存在するが、それは一重に操縦系統を統括する統合制御体が人の脊髄から出力される信号を高精度で機械の動きに翻訳できる能力を持っているからに他ならない。そして、その高精度の翻訳装置の概要は紛れもないパターン認識に優れた汎用型AIである。

リンク方式は一般的な脊髄信号抽出型であり、運動野から伸びる軸索、皮質錐体路の信号を拾っており、コロニーアナトリアが開発していた小脳から出力されるフィードバック運動制御システムの信号系、小脳脊髄路を抽出する物も含まれる。この辺は、各社アップデータを繰り返し返しており、正確に記すと大変煩雑になる為割愛する（おい）。

一般的な第五世代型AI搭載機は稼働時間が30分程度である。

これは、ニューロンのシナプス間隙における伝達物質の枯渇が原因であり、根本的な対処は見つかっていない。所謂、特異体質によりある程度の耐性を持つ者も居るが、生物としての限界を超える事は出来ない。

レイセオングループは他社とは違うアプローチでネクストを設計しており、独自の通信アルゴリズムを開発したとの噂が有るが、各社とも真相を掴み切れていない段階。だが、どうやら機体操縦に関わるタスクの殆どをAIに任せられる様な設計思想を持ち始めているのは掴まれており、世界的に人工知能の開発に拍車がかかっている。

それは一重に、ネクストの兵器としての限界が見え始めていた為であり、パイロットが人間であり続ける限り付いて回る時間的制限を如何に改善するかが課題であったからだ。

しかし、AIの普及と共にその人工知能の汎用性ゆえに危険な暴走事故を何度も起こしており、やはりネクストは有人であるべきであるとの考えが固まりつつあった。

AMS無しでは出来ない高精度のブースター制御などは既にAIにとつて代わられ、機体とパイロットの関係は徐々に変質しつつあった(ここ等辺、ゲームと違う所です)。

○主機：

重水素を用いた核融合炉。通常では中性子や熱などで即座に機体が破壊される所をコジマ粒子の特性を使い、中性子を遮蔽、それによつて励起したコジマ粒子を電磁流体発電機構にて電気エネルギーとして取り出している。各社のジェネレーターの出力は電磁流体発電機構の特性によつて変化(していると言う設定)。

核融合反応で精製される熱もコジマ粒子の励起に消費される為、熱効率は100%に達する。と言うか、熱効率が少しでも低下すると熱で機体が燃える為、是が非でも効率は100%を切れない。ネクストが破壊された場合、コジマ粒子の檻が破壊され外部に漏れだす事によつて、中性子が捕捉されず核融合の暴走は起きない。但し、燃料スタック自体に高圧高温が長く加えられ、コジマ粒子が外部に漏れださ

ない状況が重なった場合、核融合反応が劇的に進む場合もある。ゲーム内でバンバンネクスト落としてたけど、コジマ汚染してなかったのはパイロットが先にヘバツたという脳内補完で修正おねがいします。

電気出力は恐らくギガワットオーダー。基準はメインブースターの予想消費電力から。

日本のハヤブサに搭載されていたイオンエンジンがキロワット辺り20gの推力だったので、F15のエンジン一機と同じ推力を出そうとすると、4300メガワット(584万hp)必要となり、ネクストの重量が40トンクラスと考えると……イオンエンジンの推力当りの必要エネルギーの多さが伺える……ネクストの主機が核融合と考えたのはこの辺りの事情からデス

○コジマ粒子：

本作では人型兵器のナンセンスな物理法則無視を押し通す要。コックピット内の慣性制御に加え、巨大で重い機体を超高速で加速させ得るエネルギーを発生させるジェネレーターの鍵となる物質。ついでにそのエネルギーを直接防御機構や出力機構にも応用している万能物質。

それに加えジェネレーター内部の燃料スタック周囲で循環対流しているコジマ粒子は超大容量コンパルセータとして利用されている。要はコンデンサ代わり。

つか、クイックブースト発動時の必要電力考えたら通常のコンデンサでは蓄電容量体積比も能力も耐熱性も瞬間放電能力も、何もかも足りない……

本作では一応人工物質。超ウラン元素みたいな扱い。尚、同元素に分類される物に、フェルミニウムと言う名前の人工物質が存在する。ひよつとするとAC4フェルミはコレで動いているのでは……と言う観点から考えました。

同じく自然界に存在しない有名な超ウラン元素としてプルトニウムが挙げられる。そう、プロメテウスが人に与えた最初の火、核兵器の燃料である。

尚、命名は発見した人物の名前。本作品ではついでに、触媒効果による核融合機関の概念を作ったのも日本人。

元ネタは八木アンテナと分割陽極型マグネトロンから。もちろん、兵器化したのはレイセオン社（レイレナード）。

○コジマ粒子の触媒効果：

本作のネクスト用ジェネ根幹の設定。だけど、結構適当。だって解らないだもん…。

一応、ミューオンと類似した重水素のボーア半径を減少させる効果を持つ電子を放出させると言う設定です。

だけど、常温だと活性化させるの難しいからネクスト用ジェネも割と熱い。励起すると電子ビュンビュン放出してくれる。励起には80%位中性子捕縛に頼っている。故に、コジマ粒子の檻が破れると核融合反応は直ぐに止まる筈。

そこ、触媒核融合は温度カンケーネーヨ、被撃墜イコール即D—T反応一直線だよ、とか言わない。(プランD、所謂、ピンチですね)

○メインブースター（がイカレタだど!?!）：

ネクストの根幹部分の一つ。推進器です。ノーマルとネクストのブースターは根本的に違いますが、大まかにみるとプラズマを吐き出すヤツというカテゴライズです。

ノーマルACがDCアークジェットと呼ばれる電熱推進器に対して、ネクストの物はコジマ粒子を用いる複合サイクルアークジェットです（現実世界でいう所の比推力可変型プラズマ推進機）。

構造は、推進剤をプラズマ化させるRFアンテナと、そのプラズマを加熱、加速させる燃焼室に分けられます。

このエンジンの特徴はキロワットパワーと比推力の比率を自在にコントロールできる点にあり、大気密度が高い場所では大量の大気を吸い込み消費電力を抑えつつ高い推力を發揮し、大気密度が低い高高度では大電流で比推力を上げることができる点です。

イオンエンジン並みの出力比と既存の全ての推進器を凌駕する瞬

発推力を誇る最新鋭（インチキ）技術の塊。

高度の低い場所では空気中の水分や大気の大部分を占める窒素を使い、これに高電圧をかけてイオン化させてノズルから噴射させて推力を得ている。

電熱、磁気プラズマ推進器としての性質を持っているので、大気密度が低くなり、推進用媒体が少なくなる高高度になると、コジマ粒子の推進力比を上げていく（粒子吐出速度を上げる）機構を持っている。

勿論、推力媒体を大量投入すれば宇宙空間でも超高出力が発揮可能（クイックブースト）。

ブースターはクイックブーストと呼ばれる瞬発機構を備え、それによって瞬時に音速を突破できる姿勢制御性能を誇ります。

この瞬発機構は超電導コイルが作る高圧磁場によってチャンバー内に補足、圧縮されたプラズマを瞬間的にジェットとして射出して居ると言う設定です。添加されるコジマ粒子によって更に推力を増加させている（多分）。大気汚染まっしぐらだが、プラズマの超高温のお陰でコジマ粒子は毒性を失い、大気汚染はOBに比べ遥かに少ない。

余談だが、数十トンは有ろうかと言うネクストを一瞬で音速を超えさせる推力を吐き出す同機構は、直射兵器を凌ぐ破壊力を秘めていると推測される。本作では戦車砲のマズルブラスト程度の破壊力で考えています。流石に、ライフル使わずにQBでノーマルAC破壊しまくっていてもアレなので…

そして、このイオンエンジン、元は宇宙船のエンジンとして研究されていた技術です。人類に黄金の時代を…と言う人たちが残した遺産であり、宇宙を目指した男達の残骸。

ブースターの推力は一機当たり100〜200t位。レイレナ機体の基本重量40t+余剰ペイロード分（武装、予備弾薬50〜60t）を含めた重量を無理なく飛行させるには推力重量比3〜4は必要と考えられたため。

と言うか、推力重量比1.2程度では機体を浮かせるだけで水平移動に使える推力が0.2程度しか残らん。空中戦なんて夢のまた夢。

ここ等辺、有翼機と比べ、全て推力で姿勢制御しなきゃいけない人型兵器の苦しさが垣間見える。

間違えてもF15なんかと推力比比べちゃ駄目。あつちはぶつちやけ推力比0.5でも空戦出来ちゃうから。

○火器管制装置^{FCS}：

文字通り、自身の持つ武器を管制する装置。

ロックオンと言う状態の時に性能を発揮する装置であるが、AC4ではレーダーも司る。光学ロックだけではなく本来は電波を使って敵をロック出来るのだらうと思う。そこ、夜間ネクストはロック距離短くなるとか言わない。ついでに赤外線ロックは夜間カンケーネーヨとかも言わない。むしろノイズの少ない夜間の方が精度高いゲフィンゲフィン：

一次ロックと二次ロックが有る。一次ロックは唯単に銃口と敵の二次元座標が重なっただけ。

二次ロックは敵の未来位置に銃口が重なった状態。

二次ロックの開始はFCSの計算速度に依存し、未来位置に銃口が向かうかどうかは腕部運動性能に依存する。

なお、ロックは光学システムの画像解析による距離測定らしく、フラッシュロケットでロック不能となる。

何故レーダーを使わん……

何気に、頭部のステータスであるシステムリカバリーと言う数値でこのロック不能から抜け出せる時間が決まる。FCSは何処へ……

尚、カメラ性能によってロック可能距離が決まり、システムリカバリーとカメラ性能は反比例関係にある模様。

レーダーに黄金の時代を……

何故かノーマルACは普通にレーダーでロックしている模様。AC4ではノーマルACはECMメーカーによって攻撃不能となる。

夜戦とかだとヤツ等普通に撃ってきます……

連邦のモビルスーツは化け物か……

と、ここまでが原作部分のシステム概要になります。

本作ではレーダーに黄金の時代を迎えさせるべく、ネクストもノー

マルもレーダーと光学機器を使ってロックします。勿論、逆探を避けるために敢えて光学ロックだけで射撃と言うシユチュエーシヨンも有ります。

何より現実世界では光学ロックは未来技術ではなくなりつつあるので：

ここからは、それ以外になります。

○電子戦術システム、Tactical Electronic Warfare System (TEWS)：

主に敵の放つレーダー波を受信して脅威度を判定し、それに対抗する手段を講じるシステム。元ネタはF15に搭載されている物ですが、アリスの統括するTEWSは部品などの仕様等はF15とは全くの別物です。あまり、注目されませんが日本に輸出されたF15がモンキーイーグルと呼ばれた訳はこのシステムが搭載されていなかった事によります。

本作品では主にレーダー警戒機^Rと、赤外線、紫外線受信システム、更には電子的対抗手段^Cや指向性エネルギー^E兵装システム^Wを統括する機構。

超高精度なパッシブセンサーをメインに、チャフや通信、レーダー妨害、EMPを自動的に指向する事が出来る。

また、敵が行ってくる敵対的電子戦に対抗する為の妨害電波パターン解析や、適切な電波周波数領域を探す事が出来、ECMとECCMの根幹を司る。早期警戒機とエスコートジャマーとコブラボールの様な特化型センサーを統合したような装置。実際の国家軍が白目を剥くくらいのECM、ECCM能力を持つ。ネクストの標準的装備だが、それらも日々更新されており、一概に同じ電子戦能力を持っているとは限らない。データ更新されていないTEWSは例え最新の半導体を使っていたとしてもただの箱である。

企業によっては、EMPを発生させる高エネルギー^H電波兵器^Fが装備されていない場合もあり、企業間のネクスト運用の差異が最も垣間見えるシステムである。下位システムにアクティブAPSを持つ機体

が多く、通常対空用に使われるミサイルは自動迎撃レーザーに晒される事になる為、リンクス達は迎撃されにくい直射兵器を好む傾向にある。

装甲編：

○複合装甲

一般的な兵器に搭載されている。

IEDによる脅威が増した現在、MRAPのような対地雷装甲車には複合装甲が用いられている。場合によつては歩兵戦闘車よりも高い防護能力を持っており、この場合主に自己鍛造弾対策である。

この自己鍛造弾、EFPは中華鍋と圧力釜、そして炸薬が有れば簡単に出来てしまう。この兵器の特徴は長い有効距離が挙げられる。初速は3000m/s程度であり、成形炸薬弾の発生させるメタルジェットに比べ遅い飛翔速度故に、空気抵抗を受けにくく有効距離が長い。凡そ、弾頭の直系の一倍程度の貫通力となる。

これを鉄で防ごうとすると数百ミリは必要になる為、複合装甲を用いるのだ。

複合装甲の防御力は、鉄の装甲板を1とすると凡そ、厚さの4倍以上の防御力を誇る。

例にとつた複合装甲は、セラミック系複合装甲より防御重量比の劣る劣化ウラン装甲であるが、それでも鉄で防護するより遥かに軽くできる為、全面投影面積の多いACにとつては救世主のような存在。

ノーマルACにはセラミック系の物が好まれる。

装甲は防御特性を持っており、侵徹体の速度によつて必要とされる防御特性が変わる。

主にKE系とCE系に分けられているが、これはセラミック装甲の特徴である高いユゴニオ弾性限界を利用した特性によるものだ。

鉄の数十倍の圧力でなければ塑性流動は起きず、セラミックを突き破る侵徹体は文字通り割り進まなければならない。

この時、侵鉄体の速度が十分に早いとセラミックが割れるよりも早く前に進んでしまい、自分の運動エネルギーで弾体が自壊する。逆に

セラミックが割れやすいと侵徹体が進むよりも早く割れてしまい、防御効果を著しく損なう。

これがシャッターギャップと言われる現象である。

亀裂の伝播速度が遅い複合装甲はKE系の値が高く、亀裂の伝播速度は比較的早い厚さが十分に厚い複合装甲はCE系の値が高い。

一般的に飛翔速度が2000m/s程度の物は対KE防御、それ以上の8000m/s程度(一般的なHEAT弾の放つメタルジェットがこれ位の速度。タンタル系のライナーを持つ奴はもっと遅い)の物は対CE防御が必要とされる。スペースドアーマーは余り関係無くなっている模様。中東でRPG7(VR弾頭)撃たれたM1戦車が側面の装甲スカートに被弾、メタルジェットが反対側の装甲スクートを貫通している写真が有った為、間違いないと思われ。詳しくは軍事研究読んで(おい)。

理想はユゴニオ弾性限界を突破できるギリギリの速度で侵鉄を続けることである。つまり、速すぎる徹甲弾は侵徹長の面から見ると有害な作用しかない。成形炸薬弾は防がれやすいと言う事だ。

防御性能比

○ネクスト:

大体のネクストのコアは三層構造の装甲区分に分けられる。一つ目は外装式モジュール装甲。フレームの外側にある部分であり、損傷しても簡単に換装できる。

二つ目はフレームの内張りと共に付けられている内装式モジュール装甲。ここまで損傷が及ぶと内部機器にまでダメージが及ぶ。

三つめはコックピットを覆う重金属系の複合装甲。主機から放たれる中性子からパイロットを防護する役割を持つが、劣化ウラン系の装甲は高い耐弾性を持つ為、侵入してくる弾体に対してもパイロットを守る役割を担う。第七世代型AI機では量子コンピュータを守る頭蓋骨の役割も担っている。

全て合わせた防御能力は企業によっても差異があるが、レイセオングループ社の物を例にとってみるとRHA換算で1000〜120

0mmである。勿論、KEよりもCEに対して強いと言う特徴を持つ。

コアが一番分厚く、脚部はその6〜7割程度の防護性能と考えて良い。

装甲素材はセラミックとナノカーボンマテリアルの重層構造。ナノカーボンは炭素繊維強化プラスチックでは無く、炭素繊維強化炭素複合材料に属する。

ナノマシンが編み上げたナノカーボンの間にセラミックを挟み込んでおり、数万層にも及ぶ耐弾構造を持つ装甲板の製造には第七世代型AIが必要不可欠。

所謂、人間にはコントロールも発明も出来なかった技術系統に属する。

アリスの装甲素材は彼女御手製。自分の服は自分で作る、が信条らしい。

新しいお裁縫を突然初めて周りを困惑させることもあるとか無いとか。レイセオングループ社には彼女専用のアトリエが有り、大抵はそこで編み上げる。

この、オーパーツのお陰でアリスの重量は同型中量級ネクストの三分の二程度。

決して彼女が自分の体重を気にして服を編んだわけじゃない……等。

どんな服を作るかは気分次第で、割と飽きっぽい所が有る為、彼女の服である装甲の更新頻度は非常に高い。

○ノーマル

中量級以下の軽量型は、装甲重量の大部分をコックピット周辺に費やしている。

所謂、バスタブ型装甲配置であり、これは一重にジェネレーターが非力故である。

燃料電池で動いているノーマルACの装甲配置はネクスト以上にシビアである為、レイヴン達の悩みどころの中心であった。

レイヴンの好みにもよるが、バスタブ型配置の場合、一人分の装甲配置で良いため戦車などよりも遥かに小さい面積で済む。

その為、コックピット周辺に限り中量級ノーマルのコアはRHA換算で700mm程度の防御性能を持つ。勿論、CE系に対しては二倍以上の防御能力を持っている為、歩兵が携行する対戦車兵器（RPG7が持つCE系750mm）程度の火器ではパイロットを殺傷できない。

しかし、コア内部には燃料電池やアルコール系燃料が配置されている為、炎上により戦闘機能を容易に消失し得る。なので、レイヴンによつてはもう少しコアを全体的に防御すると言う思想を持っている者も一定数居る。

だが、大抵の対ネクスト戦では二脚型ACはパイルバンカーと呼ばれるノーマル最強の兵器を携行する為、全体的な装甲配置を諦める事が多い。

最近のトレンドは燃えにくいアンモニア系燃料を使う燃料電池を搭載する事だったが、この燃料は異常に臭い為、少なくともレイヴン達に嫌われている。そして臆病な小物レイヴンと言う俗称をこめて、この燃料系を持つAC乗りを金魚の糞hangerrionと呼ぶ事がある。

逆に生き残る事を信条として同燃料系を好むレイヴンからは、アルコール燃料系を好むレイヴンの事を死にたがりと言う俗称を込めて、ローストチキン焼き鳥と呼ぶ事も。

水と油の様に交わる事の無い信条の違いは、戦闘スタイルの違いにも表れる。

アンモニア系の燃料を好むレイヴンは狙撃タイプの戦闘スタイルを好み、アルコール系の燃料を好むレイヴン程ハイリスクな接近戦を好む傾向にある。

機体重量はネクストよりも軽い。じゃないととても燃料電池じゃ飛べない……

射撃武器編：

○120mm突撃ライフル（ライフルだけど滑腔砲）

レイセオングループなどの各社が開発したネクスト用規格。既存の主力戦車^{M^BT}の砲弾を流用出来る為コストパフォーマンスが良い。但し、射撃時の反動が凄まじく、AMS操縦に準ずる正確な姿勢コントロール無しには撃てない。発射速度は毎分500発程度。

そこ、もはやマシンガンとか突っ込まない。某オープニングでベリオーズが撃つてた射撃レートが多分その位。主人公が放っていた弾丸はM829A3 APFSDS-T。貫通力はRHA換算で840mm程度。爆発反応装甲に対応したモデル。弾頭は信頼の劣化ウラン製。セルフシャープニング効果で文字通り燃えて尖って穿つ。一粒で三度おいしい。初速は1500m/s程度。控えめだけど、P Aにも複合装甲にも阻まれにくい高効率ゾーン。

○120mm〜140mmライフル（ローゼン、アルゼブラ、BF F系の滑腔砲）

射撃レートを落とした命中精度優先の物の総称。ゲーム中ではやたら重低音を響かせて弾丸を放っていたタイプの武器。弾頭は新機軸MBTの砲弾として計画されて居た砲弾。高初速の為、劣化ウランよりタングステン系が好まれる。サブ社製（BFF）が幅を利かせている。勿論、タングステンAPFSDSの元祖であるイスラエル製（オームル）の物も高い命中率を誇る。ロシア製の125mm滑降砲から射出出来るバキューム1劣化ウラン徹甲弾はRHA換算で1000mmオーヴァーの貫通力。初速は1900m/s程度。劣化ウラン製の侵徹体の癖に早いのはアクティブAPS対策。恐らく、このクラスのライフルの貫通力は大体がこの程度以上。高初速が売りの武器カテゴリ。発射速度は毎分200前後。短時間当たりの火力は突撃ライフルに劣るが、貫通力と初速に優れ回避し辛い。しかし、PA貫通力は低くなるという（ゲームとは逆に）逆転現象が生じている。

因みに、ドイツのレオ3の次期主力戦車に搭載される予定の主砲が130mm。初速は不明だが、M1戦車の主砲貫通力の50%増しになる予定らしい。M829A3 APFSDS-T基準で考えると

RHA換算で1260mmと言った所か。

○90mm四連オートキャノン（滑腔砲）

ノーマルACに搭載できるように調整されたマシンガンよりも大口徑な連射兵器。ネクストのPAを如何に効率良く破壊出来るか研究されて開発された兵器であり、タンク型ACの主力兵装。見た目は完全にZSU-23-4シルカ。一門辺り毎分500発位発射できるが、発熱が凄いため大概は発射レートを下げている模様。しかし、四本纏めて毎分2000発は圧巻の一言。メタルストームの異名を持つ。弾丸はM690A1 APFSDS-T。貫通力はRHA換算で300mm（2km先にて）。初速は1300m/s程度。侵徹体はタンングステン製。多分、最もACVDで黒栗を葬っている武器。と言うか主任も良くコイツで蜂の巣にされて居る。そして、ノーマルACのタンク型はコイツを二丁携行する。恐ろしや…

ネクストも積載量が許せば携行できる。

○240mmスナイパーキャノン

イメージはACVのオープニングでヘリを撃ち抜いているやつ。今の所、ノーマルACの四脚型専用の装備の扱いを受けているが、ネクストにも積載可能。ネクストであれば構え動作無しに射撃できる反動であったが、安定性の低いノーマルACでは構え動作が必要。

貫通力はデータがないので示せない…：恐らく1000mm以上は有るかと思われるが、こやつ我真骨頂は強力な運動エネルギー。AC4のサイレントアヴァランチの放つ砂キャンでプレイヤーが固められたのはこのパンチ力のお陰（だと思う）。流石にこのクラスの滑腔砲になるとPAで減衰しきれない程のエネルギーを持つようになる。

ネクストの装備しているスナイパーキャノンもこのクラスである。

○406mmグレネード。OGOTO

アイオワ級戦艦と同口径の主砲であり、グレネードだけだとライフリングが施された加農砲。砲身長17.3メートル、中折れ式。

重量はアイオワ級の物の半分、約5トン程。強度そのままで重量は鉄の半分であるチタン製の砲身。内筒は金属と同じ熱膨張率を持ち、

耐食性に優れ軽くて強いジルコニウム系セラミック。オリジナルは10トンある。重すぎる……

発射されるMK8徹甲榴弾は一発1225kg。18.55kgの炸薬が充填されており、遅延信管にて対象物の装甲を貫いた後起爆、内部を破壊する。

過貫通がAPFSDSに比べて起き難く、超大型目標に有効であり、装甲を纏っているくせにデカくて硬いアームズフォートに極めて有効。

貫通力はゼロ距離でRHA換算829mm、4500メートルで749mm。22000メートル先でも518mmを貫通する。砲口初速は762m/s

現代の主力戦車の主砲と見間違うほどの距離減衰の低さは、その砲弾の重量から来る直進性の良さである。

恐るべきはコイツの発砲時の反動である。

砲身内に0.1秒間留まるとして計算すると、発砲時の反動はなんと95トン。しかもこれは発射ガスの作用を無視している為、実際はこの反動の三割増し位：AC4のオープニングの演出は誇張でも何でもなかった。

重量級主力戦車がひっくり返る程の反動は、四脚型ノーマルでも専用の改造を施さない限りは射撃不能であるが、ネクストは二脚型でも発砲可能。

しかし、その姿勢制御を持ってしても数メートル位は吹き飛ばされる程の反動である(1)。

1. 2トンの砲弾、300kgの装薬、計24発分と5トンの砲身重量を加えると、合計41.2トンもの重量になってしまう。これは既に機体重量程であり、ノーマルと比較して桁違いの積載性を持つネクストと言えども他の兵装を考えなければ搭載出来ない程である。

真面目に考えると恐らくネクストと言えども一発直撃弾を喰らえば大破間違いない様な貫通力と破壊力。

戦艦の主砲は現代戦車の正面装甲抜けないとか思ってたが間違っていたようだ……セラミック系の装甲は確実に粉碎されそう。てか、

劣化ウラン装甲でも構造材自体が破壊、もしくはそのまま砲塔が千切れるかも……

そして何気にアイオワのMK8徹甲弾と大和の91式徹甲弾、貫通力あんまり変わらないのね。

○60mmマシンガン

レイセオングループ社製のリボルバーカノン。銃身は一つだが、薬室が分かれており高い発射レートを持つ。

ライフル砲であるが、これはメインで放つ弾丸が破片効果の高いHEDP弾を発射する為である。

発射レートは分間3000発。初速は900m/s程度。成形炸薬弾の一種であるが、此方は破片効果を重視している為、貫通力は控えめ。参考に成る弾種が無いため、弾丸直径の2、3倍程度だろうと思う。RHA換算で120〜180mm

尚、弾丸に複数の弾種を混ぜる事も有る。

使われている弾種は、HE、HEDP、APHE、APDSの四種類。APDSの貫通力はRHA換算で100〜200mm程度(距離300m位)と考えられる。

○(ダスト)プラズマキャノン

AC4のプラズマキャノン。

タングステンや劣化ウランなどの比重の重い元素の微粒子(マイクロメートルサイズ)をイオン化、もしくはプラズマ化して相手にぶつける質量兵器。荷電粒子キャノンとも言う。どっちも同じ。

ぶっちゃけクイックブーストの作動流体を重金属粉にして吐き出しているだけの武器。故に重金属粒子のストックが無くなると撃てなくなる。

作動流体の質量が非常に高い為、加害距離はQBに比べかなり長い。実体弾よりも重金属微粒子の初速が桁違いに早いので距離減衰が高く射程が短い。

実世界における高密度不活性金属爆薬の如く、重金属微粒子が装甲板を引き裂く事で目標を加害する。正しく熱と微粒子で削り殺す武器。

因みに劣化ウランと同等にタングステンも相当毒性が高いので環境に悪い。

D I M E 駄目、ぜつたい。

◇ ◇ ◇

○資料関係

参考データⅠ：ブースター関連

比推力可変型プラズマ推進機：(V F-200)

キロワットパワー：0.027ニュートン(2.7グラム)

D C アークジェット：

キロワットパワー：0.13ニュートン(130グラム)

参考データⅡ(機体)：

メインフレーム：03 | A A L I Y A H

全高：9.2メートル

全幅：4メートル

乗員：1名

基本重量：50000kg

最大戦闘重量：120000kg

巡航速度：700km (メインブースターにより変化)

最大巡航速度：1700km (O B により変化)

装甲：微粒子装甲及び、複合装甲、アクティブAPSによる複合

防護システム

5 t 整波性能(最大保持エネルギー)：200G J 前後、T N T 換算5

アクティブAPS：ファイバーレーザー、出力1MW相当

メインブースター：03 | A A L I Y A H / M

最大消費電力：7.4GW (ギガワット) × 2基

最大推力：2MN (メガニュートン) × 2基

許容瞬間最大出力：14G J (ギガジュール) × 2基

主機：03 | A A L I Y A H / G

方式：コジマ循環型触媒核融合

燃料スタック：トリチウム合金ペレット

最大発電能力（100%運転時）：18GW（ギガワット）

最大瞬間発電能力：120.5GJ（ギガジュール）

粒子放出能力：23.8GJ/sec

※日本の最大消費電力（夏季）：180GW（2）

※九州電力の最大発電能力：18GW

操縦システム：（主人公機）

通信方式：全脳アーキテクト型ニューラリンク（AMSとして表記）

受信帯域：神経パルス読み取りによるサイマティクスパターン認識、操縦入力予測、神経系ミラーリング

送信帯域：誘導電流による神経細胞へのLST誘発、脳波コントロール

機体制御システム：（主人公機）

中央制御装置：全脳エミュレーション型AI

構成素子：量子パーセプトロン

制御アルゴリズム：Red Queen hypothesis

主演算機能：超大規模仮想空間シミュレーションによる予測

演算速度：不明（200PFLOPS以上）

最大消費電力：不明（演算速度に比例）

待機時消費電力：15MW

記憶媒体：DNA

レーダー：

アレイ：コジマ干渉型立体ナノアレイ

超電導体マルチバンドアレイ。クレイドルシステムからの応用により超高出力送波が可能。

外界の認識及び、ナノマシンへの電源供給と制御も行う。

参考データⅢ（兵器）

406mmグレネード

種別：KE弾

重量：約50000kg（弾薬含む）

全長：8.4メートル、展開時、17メートル

弾種：APHE、HEP、HE

シエル：ニッケルクロム合金（前期型）、劣化ウラン合金（後期型）

砲弾重量：1200 kg

貫通力（前期型）：距離/RHA換算

0 m / 829 m m 4500 m / 749 m m 22000 m /

518 m m

貫通力（後期型）：距離/RHA換算

0 m / 1200 m m 4500 m / 1100 m m

340 mmバズーカ

種別：CE弾

重量：19000 kg

砲身長：6メートル

弾種：三重HEAT

シエル：鋼鉄

ライナー：劣化ウランもしくは銅

砲弾重量：600 kg

貫通力：距離に関係なくRHA換算で3000 m m程度

ソラの歌 扉を閉じる者達Ⅰ

宇宙というフロンティアが開かれたのは遙か昔。

最初に兵器を高度100 kmまで飛ばしたのは彼のドイツ帝国であったが、彼らの作ったV2ロケットは衛星を積んでいなかった為、人工衛星を打ち上げて晴れて宇宙と言う未知の空間を使い始めたのは別の国になってしまう。

だが、それに関わった彼らの多くはソ連とアメリカに渡っており、その技術の粋は受け継がれる事に成る。

そして人類は遂に月の地を踏むに至る訳だが、当然その開発には兵器としての側面が色濃く残った。

巨大な建造物を月まで飛ばせると言う事は、そのままそれを地上に落とせば大惨事を引き起こせる訳であり、その貨物室に大型核弾頭を搭載したのが大陸間弾道弾^Mであった。

米ソは競って宇宙開発を進めたのは、この弾道弾の開発競争の為にあったと言っても過言ではなかった。

そして時は進み、国家軍は別の意味で宇宙を支配する重要性を認識し始める。

その切っ掛けとなったのは全地球^G測位システム^Sの登場だった。

あのサダムフセインを打倒した砂漠の嵐作戦では、広大な砂漠を道に迷うことなく味方と歩調を合わせて行軍できたのは一重にデータリンクとGPS、つまり全地球測位システム無くしては有り得なかった。

地図とは偉大であるが、常に自身の場所を特定するのに多大な労力と練度が必要になるわけだが、アメリカが開発したGPSは誰にでも簡単に、そして即座に自分の位置が解るのだ。

これがどれだけ革命的だったかは、フセイン率いる親衛隊が超えられないと思っていた砂漠からアメリカ軍の機甲師団が大挙して進軍した事からも推し量れる。

航空機に関してもGPSは革命的な航行システムを提供したし、船舶についてもやはりこの手の測位機器無しには難破の危険が常に付きまとった。地上電波局が知らせる方位情報を基にした位置も、陸地から遠く離れれば、これらの支援は受け取れず、そうなればより精度の低い昔ながらの天測を用いる他ない。

こういったレトロな方法で太平洋を越えた人間も居ただろうが、大海原の厳しさは18世紀の多くの水兵とその船を飲み込んでいった事を鑑みれば、今の航行システムが如何に安全であるかが解る。

それはこの新技術無くしては有り得ないのだ。

だからこそ各国は挙ってこの手の測位システムを開発、配備した。

ロシアはGLONASS、ヨーロッパはガリレオ、アメリカはGPS、中国は北斗システム、それぞれの超大国は、それぞれ独自の規格を作っていた。

21世紀初頭、東西冷戦が終わり、それらの衛星測位システムが商業用として多大な利益をもたらすと知った各国は、そのシステムを民間で使えるように、衛星が発信している時間シグナルのスクランブルを一部解除した。

それによって、カーナビやその他民生用の同システムが高い位置取得精度を得た事は記憶に新しいが、それら全ての国家が当たり前のよう^G_N^N_Sに使用している地球測位システムには大量の人工衛星が必要だった。

この種の衛星は高度二万キロメートルを飛行しており、所謂、準静止衛星軌道であった為、これらの衛星は地上から観測しやすい位置にあると言えた。

それもその筈、地上からそれらの衛星の持つ原子時計から作られた正確な時間情報を地上でキャッチする事によって相対距離を算出するシステムなのだから、複数個、そう言った衛星を打ち上げる必要があったのも道理である。

一般的なGNNS精密誘導兵器には十数個以上の衛星補足数が必要と言われており、その状況を常時満たそうとすれば、自ずと高度二万キロメートルの大平原が衛星で埋め尽くされるのも想像に難くな

い。

そして、それらの衛星が寿命が尽き、墓場軌道まで移動しても尚、宇宙そらと言う空間は人間にとって狭すぎた。

文字通りの意味で。

狭いと言うのは悪い事だ。狭ければ縄張りを争う機会が増えるし、争いを防ぐ為に国連が作った宇宙条約には高度100kmより上は国際的な共同スペースと言う体が成されたが、それが形骸化するのも時間の問題だったと言う事だ。アメリカ、ロシア、中国、ヨーロッパ、それぞれの国が運用するGNNSが常時30機以上の航法衛星を持ち、それが高度二万キロメートル付近を飛んでいるのである。とんだ過密具合だ。バックアツプ機や、故障で廃棄された衛星を含めると軌道には無数の飛行物体がひしめき合っていた。

準静止衛星軌道であるため、地球はあたかも碁盤の様に見えただろう。

かつて青く輝かしい色合いを持っていた地球も、国家が解体された現在の宇宙から覗けば塵のようなデブリに囲まれ、その外側には多くの衛星がまるで陣取り合戦を行っているかの如くひしめき合っている姿であろう。

それらのゴミや敵対的な衛星を監視する為、各国は宇宙開発と言う名目で、危険な衛星をマークするようになった。勿論、かつてのアメリカが名打ったSDI防衛構想と言う、極めて煽動的な謳い文句を潜めて。

システムとしての構成が極めて類似、言い換えると全く同じでも名前が違い用途が違っていると、人と言うのは違う物だと勘違いし易いのだ。

宇宙開発と戦略核兵器運用が似ているように、衛星の運行上の安全を確保する為のステーションとシステムは、SDI防衛システムに極めて類似した物であった為、それを使い潜在的敵国の衛星を即座に破壊する、と言う考えが浮かぶのは当然の事だ。

それを、廃棄された衛星が軌道を勝手に外れたと言う名目を付けて自国のミサイルで撃ち落とすと言うのは、一般人からすると真つ当な行動に見えるが、内実共にそれは兵器としての側面しかない示威的な

威圧行動に他ならなかった。

それが明確な示威行為となり得るのは、全ての現代兵器はデータリンク無しでは成立しないからだ。イージス艦然り、ステルス戦闘機然り。

これらの最新鋭兵器に搭載されている通信機では見通し線以上の距離での通信は、殆ど不可能と言っていい程制限される。だからトランスポンダーとしての通信衛星を使うのだが、これを破壊されてしまえばECMでジャミングされるまでもなく、その国の軍隊の武器は只の火の出る玩具に成り下がる。

データリンクの使えなくなっただけでイージス艦やステルス戦闘機の代表格であるF22がそのいい例だろう。

自ら電波を発してしまえばステルスなど意味は無くなるし、イージス艦の長距離レーダーも水平線の下まで見通す事は出来ない。

それに同兵器はシステムの制約上、イルミネーターの数上の目標に同時着弾させることができない。

それなのに何故、アイギスの盾などと大仰な名前が付くかと言えば、装備されている艦対空ミサイルの射程が百キロ以上と、一昔前の高射砲の数十倍以上の距離から一方的に航空機を攻撃できたからである。

勿論、見通し線の中に敵機が居ると言う前提が付く。これが覆されるのはデータリンクが使える時に限る。

だからこそ、その兵器と対峙する潜在的敵国は挙って衛星攻撃兵器、所謂ASATと呼ばれる兵器を所有した。

戦争初期に敵通信衛星及び、GNSS衛星を破壊してしまえば幾ら数に勝る敵軍であってもJDAMや巡航ミサイルなどと言った精密誘導兵器の代表的な物を封じれるし、敵軍同士の連携も崩せる。そうすれば、ランチェスターの法則宜しく、自軍に有利になる状況を作りやすくなる事は明白だ。

それは、先の例に出した湾岸戦争や、ロシアが指揮したチェチェン紛争、ユーゴ空爆などで、国家軍が真っ先に潰したのは敵の通信網だったのがいい例だ。

そう、それが戦いの定石。

青信号で渡って赤信号で止まる位の当たり前の常識だったのだが、ここで真面な軍人たちなら気が付く。

一体誰がその通信網や、重要施設の場所を特定するのだ、と。技術者がそれに答えを出す。

それは偵察衛星網だ。

高度200 km、惑星低軌道を飛ぶそれらの観測衛星は地表に存在する車のナンバープレートを識別出来るほど高い解像度を誇り、場合によっては人間の顔すら認識できた。

当然、それらは敵対的な都市や町、その中に住む人間の人数、更には敵対的組織のメンバーが潜んでいるか否かを探り当てるツールと成り、精密誘導兵器をしかるべき場所へ、しかるべき時間に叩き込む事が出来た。

サダムフセインの機甲部隊の布陣位置や、ロシアのICBM発射基地の場所、石油備蓄基地、弾薬集積所——それら重要目標を正確に観測できるツールは正しく神の目の如くである。

だからこそ、各国はそれらを真つ先に潰したかった。

話に戻るが、戦争の先陣を切るのは決まって衛星攻撃兵器^A_S^Tだった。

それが、ネクストが登場する前から続く、戦場の火蓋。

そして、今、それが切られようとしていた。

◇ ◇ ◇

大型ディスプレイに映し出される映像は何処かの地下基地を構造体として浮き上がらせたものだ。

それは巨大な岩盤で出来た山をくりぬいた、対核戦争用のシェルターを兼ねた構造だった。

アメリカ合衆国が冷戦時代に建造した、人類の最後を見届ける場所として、そして人類に最後の鉄槌を下す場所としてあるその場所は、敵国が放つ核の炎に耐えられなければなかった。

でなければ、それを放った敵国へ、核攻撃を指示できないからだ。だからこそその大型地下建造物であったが、その場所は偶然にも航法衛

星を安全に運行する為の監視所として機能していた。

通称、北アメリカ航空宇宙防衛司令部。GE社が接收した旧アメリカの施設の一つだ。

「今回の依頼はGE。目標はこのGPS衛星です」

写真が変わり、今度は円筒形の物体に無数の丸型のタンクが群がった様な衛星が映し出される。

アンテナ類は殆ど見えず、表面には無数の整波装置と思わしきフィンが立ち並び、円筒形の先には砲身と思わしき細長い構造物が見える。そして姿勢制御用には多過ぎるブースター類。明らかに通常の酸化剤を噴出するタイプではなく、プラズマチャンバーを持ったクイックブーストの類の物だろうそれは、同衛星がコジマ兵器の類である事を示す証拠だった。

「GPS衛星？アメリカンなブラックジョークにしては笑えない」

キャロルは顔色一つ変えずに続ける。要するに無視された。

「同衛星はローゼンタール領の空域を侵犯、彼らは迎撃を試みたようですが全て失敗したとの事。数時間前に再び目標は軌道変更を行い、高度1万9千キロメートルまで飛行高度を下げてGE領空内に再び戻りつつあります。依頼主はGE領内への被害を考慮して撃墜を敢行したいとの事ですが、見ての通り、通常兵器では歯が立たない状況です。ですから、我々にお鉢が回ってきた訳です」

写真が変わり、先ほどのGPS衛星が無数の火に包まれている映像が流れる。

恐らくはICBMを改造して作られた対大陸間弾道弾迎撃ミサイルの洗礼を受けている同衛星は、まるでそよ風を受けるかの如く悠然と宇宙を飛び続ける。自動迎撃用レーザーの洗礼を抜けてたどり着いたミサイル群は全てプライマルアーマーに弾かれてしまう。

その合間に砲身から何かを何度も送らせていた。おそらく、あれも迎撃機構の一種だろう。

「目標は自立型自己防衛機能を持つ衛星群に属する個体です。GEの標準的衛星の一種ですが、旧アメリカ大陸上空から何らかのトラブルで軌道を外れたようです。原因はこちら側に知らされていませんが

：先日のリザの件もあります。レイセオングループ上層部も見逃せないと判断したのでしよう。ローゼンタールに我々と同様の依頼が出されたようですが、その悉くが失敗している模様です」

画面に映る映像には灯台より二回り以上も大きく巨大なICBM。それが画面を埋め尽くすかの如く飛翔しているのだが、“何か”が掠める度にスライスハムのように輪切りにされて巨大な火の玉に包まれていく。

この様子だと、先ほどの衛星に到達したミサイルの数十倍以上の数の迎撃ミサイルを放っているのだろう。

核弾頭を積むはずだった世界中の平和の使者を薙ぎ倒していく様子は何処か皮肉めいている。恐らく、今回の迎撃用に換装され外された核弾頭だけで人類は十回以上絶滅できただろう。平和になったのか戦争に近づいたのか解らない所では在るが、今回は確実に後者の方だろう。

「今回のミッションでは我々、レイセオングループ、GEの子会社であるクーガー、そして今回オブザーバーとしてお越しいただいたAEGの提携先であるフィン・メカニカの技術スタッフが協力して行う事になりました。あと、非公式ですが、ローゼンタールの技術スタッフも作戦に加わる事となりました」

そう言つて後ろに控えていた面々を眺めると見知った顔が幾つかあった。

マヤにユキはAEG関連で納得だが、桃色の髪を後ろで纏めているトローコは予想外だった。

そう言えばローゼンタールだっけ。

「よろしく、少年」

トローコは予想以上に手広くやっているらしい。

「つきましては作戦の概要ですが、今回の依頼に関しては各企業間の最新技術を持ち寄ってネクストを大気圏外へ投射する運びとなります。その為、規格外の兵装を幾つも用意しました。その一つがこれです」

そう言つてキャロルは液晶画面を切り替える。

そこに映し出されていたのは、巨大な外付けブースターだ。

見た目は巨大なロケットと言う感じであったが、コジマ粒子を貯蔵する丸いタンクが幾つもブースターに張り付いていた。

「今回用意されたのは、GPS衛星打ち上げ用に使われていたブースターの三段目となります。ここからは、このブースターの製造を手掛けるクーガーの技術スタッフに説明を変わっていただきます」

そう言っただけで、キュッパルが後ろに下がると、眼鏡をかけて痩せこけた男が慌てて画面の前に立つ。

「ええー。このブースターは元々数千トンクラスのペイロードを持つ惑星外探査用に作られた大型コジマブースターなのですが、訳あって静止衛星軌道上に超大型物体を打ち上げる為に用いられている物を、ネクストに合うように調整を施した物です。ですので、えー、ソフトウェアの調整と…兵装との連動に一部難があります…」

その為、レイセオングループの第七世代型AI専用の装備となります。調整が終われば、順次予備のネクスト搭載する事も可能となりますが…」

煮え切らない態度を崩さない男は僕の方へ視線を寄越す。何時の間にかキュッパルまでもそれに加わっており、僕がそれを測りかねているのを見越したのか、彼女はすぐさま説明を入れた。

「難航すると思われる姿勢制御系を全てアリスに任せる事に成ります。その調整が上手く行き次第データを予備機であるAEGのネクストにも書き込む算段となりますが、データの出し入れに少々手間取る可能性もありますので、あくまでも可能性の一つとして軌道上へのネクスト投入を視野に入れていきます」

そう言い終えると、再びクーガーの技術者が話し始める。

「本装備を呼称上、ヴァンガード・オーヴアード・ブースターと呼びます。今回の依頼で用意させて頂いた

VOBは全部で7基。その内2基がネクスト用にアタッチメントを改造しており、残りの5基は此方となります」

画面には再びVOBと呼ばれる巨大なコジマロケットが映し出されるが、今回の物には先端に巨大な弾頭が付いていた。

整波装置が巨大なビットカッターの様に見えるが、恐らくは弾頭内に何らかのコジマ兵装が格納されているのだろう。

「此方のパイロードにはコジマ弾頭を装備させました。詳しくは軍事機密なので伏せますが、此方の弾頭には防御機構が搭載されており、ある程度の光学兵器及び実弾兵器を無効化する仕組みが搭載されています。そしてこいつの要が搭載された重水素ジェネレーターの暴走機構です——要は簡単なコジマ爆発を発生させる装置ですな」

そう言つて彼はご自慢の最新鋭コジマ兵器について熱く語り出した。

説明を要約すると単純明快、要するに電磁パルスを抑えた戦術核に匹敵する破壊力を持つ弾頭、と言う事らしい。

PAがコジマ粒子を対流させ、防御機構を付加させられているのは広く知られているが、その周りにコジマ粒子をばら撒いてやると粒子干渉の影響でPAを減衰させることが出来るのだ。

これを利用して自称GPS衛星が持つ防御機構を破綻させることを目的としている用であった。

それにしても、大規模な作戦だ。

企業がこれだけ集まつて何かをしよう事は、それだけ予想される損害が大きいと言う事だ。

それを測りかねた僕を尻目にキャロルは再び説明を始める。

「今回これだけど企業の方にご賛同頂いた訳は一重に、同GPS衛星が落着した際に発生させ得る災害の規模によるもののご理解下さい」

そう言つてキャロルは落着予想地点と予想されうる死傷者数を表示する。

僕はその数字を見て絶句する。

え…？40億…？

しん、と静まり返る会議室。

有り得ない。

そう、僕はたかが数千万人が死ぬくらいだろうと思っていた。

数メガトンクラスの核弾頭が市街地に落ちたら、確かこの位の死者数だったから。

死傷者に換算すればその倍位は行くだろうが、40億は行き過ぎだ。

地球人口の半数が死滅する計算になる。

衛星の重さは解らなかったが、PAによる空気抵抗減衰効果によって大気圏突入時の空気抵抗による減速が余り期待できない以上、静止衛星軌道からの落下エネルギーは想像を絶するようだ。

理論上は軌道投入時に消費された運動エネルギーがそのまま瞬間的に放出される訳だから、想像を絶するのは仕方のない事だろうが、それにしても大きすぎる気もする。

僕が疑問の声をする前にクーガーの技術者が話し出す。

「プライマルアーマーは高い空気抵抗抑制機能を持ちます。空気抵抗の塊であるネクストを音速の二倍近い速さで飛行させることから想像できると思いますが、これによって大気によるエネルギーロスが限りなく少なくなります。大抵の隕石は地表に落ちる前にこの空気抵抗の断熱圧縮によって溶解、質量とエネルギーを失いますが、同衛星はそれが殆ど見込めません。そして、この数字の根拠となる物がもう一つ。それは、搭載されている燃料である重水素です。長寿命を謳っている同製品は数百トンの重水素を搭載しています。此方の重水素は地表衝突時に核融合反応の材料となる公算が非常に高いと思われる。恐らく、純粋な爆発エネルギーだけで数千メガトン以上の核出力に匹敵すると思われれます」

成程、と思った。

コジマ粒子による核融合反応の誘発。

そもそも、ネクストのジェネレーターもその理論による核融合エネルギーを使った熱機関の一種なのだ。

そのジェネレーター¹の触媒となる粒子を満載した機体が大量の燃料と共に地表に落下してくるのだから激しく反応して当然、と言う事なのかもしれない。

少なくとも、地表への衝突エネルギーはコジマ粒子を励起させるには十分だろうから。

「あくまでもこの数字は、我々の使っている人工^A知能^Iが出した試算です。地球規模の環境変化に伴う死傷者数であると言う事を念頭に置いて頂けると幸いです」

暫く映像だけが流れていた。

幾つかの疑問だけが頭を過ぎるが、一番の疑問は――

「――それは解った。それよりも、何で同じタイプの衛星があるのにソレで迎撃しないんだ？」

沈黙、それが答え。

嫌な予感がする。とてつもないレベルの。

「残念ながら私の権限ではその質問にお答えする事は出来ません。ですが、レイセオングループの方々に助けを乞わなければならぬ状況なのは否定できません。勿論、AIの専門家である貴方に依頼が来る意味をお察しください」

クーガーの技術者は案外GEの機密情報にアクセスできる権限を持っているのかもしれない。

だから僕はもう少しカマをかけてみた。

「その助けを乞わなきやいけない状況に、先の戦いで打ち漏らしたりザは関係あるのか??それとも第七世代型AI絡みの?」

彼の表情が少し変化する。

「ただ、何を言うべきか迷う前に、前頭葉の抑制機構が邪魔をしているようだ。」

「それはお答えできません」

硬い表情になり、思考するのを辞める。

「ただ、確かにその思考の色は解った。」

秘匿通信でアリスから連絡がある。彼女は『50%の確率で一致、

もしくは一部該当』と伝えて来る。

騙して悪いけど、僕はまだ死にたくない。

情報は多いに越したことは無い。

質問して銃殺、なんて事にはならないなら、出来るだけ相手から情報を頂くまで。勿論、表情と言う情報だったが、アリスからすればソレだけで十分。

残る疑問は一つ――

「――解った。なら、最後に答えてくれ。その衛星と同型の物は今、軌道上に何基存在するんだ？」

暫くの沈黙の後、クーガーの技術者が答える。

「――各企業の同一タイプの物が、軌道上に140基。予備基を合わせて300以上あると思われませんが…破棄された墓場軌道にある同型を含めると、千以上は有るか…」

僕はその時、リアーナが言っていた言葉の意味を思い出した。

彼女は知っていたのだろう。

僕等の足元はとつくの昔に地獄と地続きになっていた事を。

静まり返る作戦会議室の中誰かの囁き声だけが聞こえてきた。

――
神様

その声は何処にも居なくなつた誰かに届く事は無かつた。

扉を閉じる者達2

何時の間にか寝ていたのか、窓ガラスを叩く雨音で目が覚める。大気中の塵を多分に含んだ降り始めの雨は、どこかくすんだ色を含んでいた。おそらくは先の戦いでまき散らされた重金属粒子を含んでいるのだろう。

それを眺めながら再生を終え、止まっていた音楽再生機器を耳から外すとベッドから起き上がる。

鼻を衝く臭いは、人の焼ける臭いだ。完全密閉された部屋の外から空気が入り込んできているのだろうか、窓際へ歩いていくと外の広場で葬儀が行われていた。

長い列はまるで順番を待つかのごとく続いていく。その中には幾つもの冥婦の影。小さな子供を連れて参列している姿を見つつ、自分はどうも感じなくなるくらいこの世界に慣れたのだと実感した。

そう、これがいつもの日常。
ありふれた光景。

テレビで天気予報が流れるくらいには存在する何所にもある日常。

それは重金属汚染が進んだ日本列島では癌などの病により平均寿命が大きく縮まったことを示していたが、それ以上に戦いで多くの人々が死ぬようになったのが主因だった。

国家が破綻して、人の多くは職を失った。だけど、戦いだけは違った。テロリストや正規軍、企業軍、傭兵。皆挙って人を募集した。

戦争とは大量消費の象徴である。

武器に弾薬、食糧、そして、人間。

すべて物を等しく飲み込んでいく獣は人類に経済活動と言う名の繁栄をもたらした。

そしてその消費された物の生産には人が関わる事になり、AIによる代替えが進んだとはいえ、少なからずの職を人に提供した。

だから戦いは人の経済活動となった。

供給者は企業であり、消費者は人類だ。

提供者は傭兵であり、レイヴンであり、リンクスだ。

皆、それぞれが役割を持ち、社会活動の一旦としてそれにこぞって参加した。

戦闘能力という解りやすいステータスで優劣を競い、公平と平等という名の元に積み重ねた死体の数に応じて金が支払われる。

生まれ持つての能力差や、生まれた場所の考慮されない公平と平等は、弱き者は叩き潰されて当然という風潮と、勝った者が全て正しいという認識を人々に齎した。

そうして人は、正義という免罪符の名の元に罪悪感をこの世界から葬り去った。

とりとめのない事を考えつつ、バイオ3Dプリンターが印刷した肉をオーブンに入れた。

新鮮な肉はジュウジュウという音と共に綺麗な焼き色を付けていく。

僕はそれを眺めつつ思った。

いつからだろうか、この世界で新鮮なニクから血が滴ることが無くなったのは。

そのキオクは脳髓のどこにも存在しなかった。

そう、——記憶の残り香さえも。



巨大な槍が鎮座する格納庫に佇む少女は、項垂れるようにして近くの手すりに寄りかかっていた。ブリーフィングが終わり、その真実の重さの前に耐えかねた様子であった。

その横には人型の兵器が彫像の様に聳える。

表面は鏡の様に輝き、流線形の美しい丸みを持ったコアや腕部、脚部は彼女の機体の設計元であるフィン・メカニカの特徴でもあった。

非常に優れた耐熱性は同社の得意とする攻撃型エネルギー系兵器とマッチし、正しく盾と槍を対として成す物であった。

「装甲に覆われた整波装置は外部から見ると出来ませんが、それはイコール装置自体が装甲化されている証拠に他ならなかったが、同機体の印象的な流線形を決定づける要因になっているとも言えた。

「――変、ですね。明日、世界が終わるかも知れないって言うのに、全然実感わかないんですよ」

「疲れた様な、それでいて諦めたような声色でマヤが言う。

「死、なんてそんな物。理不尽に訪れて、理不尽に全てを壊してしまふ。そんな物に実感なんて有るわけ無い。あるのは質感だけ」

彼女は耐えかねている。

恐らくは、その肩に乗るであろう数十億人と言う数の人間の命と、もしかすると、意図して切り捨てなければならぬかもしれない数千万人の命の重さを。

「冷たいですよね。もしかしたら沢山人を見殺しにしなきゃいけないかもしれないのに」

「まだ、結果が決まったわけじゃない。誰かが撃ち落とせば済む話」
僕は意図的に避けた。

軌道上の無数の物体について。

そんな危険物を打ち上げ続けた企業にも呆れるが、そもそも宇宙を戦略的価値のある物として運用したのは国家軍が最初であり、企業はそれを受け継いだけ。

人が構成員で在り続ける限り企業もまた、人の代理組織に過ぎない。

僕等が平和と安寧を望んだから、他国より有利な兵器を導入して配備した。

だから世界からは核兵器が無くならないし、核廃絶なんて声が出て来るのは決まって国境線を脅かされない国だけだ。

今、世界を見渡せばそんな御伽噺の国のような安全な場所は存在しない。

有るのは食うか喰われるかの弱肉強食の世界だけ。

だから、僕は人殺しになった。

もう、喰われるのも踏み躪られるのも御免だったから。

他人の命の心配より自分の命を心配した。
それだけだ。

この国の老人達と同じだ。
その取り分を取れば多くの若者から搾取してしまうと知っていてもソレを辞められなかった。

だから日本と言う国は破綻した。
だから今、世界は終わりの危機を迎えている。
構図は全く一緒だ。

皆、自分の世代の事しか考えない。
それが、今と言う時代だ。

だから僕は偽善者に成る位なら悪人で良いと思った。
でも、マヤは未だリンクスになつても悪人で良いとは思っていない様だ。

何かを棄てて、何かを得る。

そう割り切れる程彼女はドライじゃ無いようだ。

「でも、もし外したら——」

「大丈夫、そのために二機居る。撃ち漏らしても此方で落とせば被害は出ない。それに——絶望するのはブリーフィングの後のシユミレーターを熟してからでも遅くないよ」

シユミレーションもせずに駄目だと決めつけるのは早計過ぎる。
少なくとも、姿勢制御はともかくフィン・メカニカの開発チームが作った”槍”が通用しないなんて事は無いだろうと思った。戦場でAEGが製造してフィンメカニカが設計したレーザーを毎回撃たれるから判る。

恐らく、彼らはかなりの確率で自信を持っている。

それはレイセオングループも同じだろうけど、ある程度あのインチキGPS衛星のPAを抜けると踏んでいるんだろう。

「そう、だね。うん、解った」

「行こう。もう始まるよ」

そう言つて彼女の手を引いてブリーフィングルームまで歩くのだった。

会議室に集まると、見知らぬ女性スタッフがディスプレイの前に立っている。一回目のブリーフィングから丸一日だが、恐らく何らかの進展が有ったのだろう。僕等は再び呼び出しを受けて此処まで歩いて来たのだが、キャロルの姿が見当たらなかった。

今回は違う企業の説明なのだろうかと考えつつ、目の前の女性に視線を移す。黒いスーツを着込んでいる様子は如何にも企業のスタッフみたいなき感じだったが、所々寝ぐせが目立つ。

技術屋っぽいな、と思いつつ彼女の話に耳を傾けた。

「今回は私、レオーネ・ファンテイスがキャロル様に代わり説明させていただきます」

そういつて彼女は画面を切り替えると、そこには航空機と言うには余りにも巨大な翼が何層にも重なった物が映し出されていた。

「今回使用されるVOBの問題点について、リンクスの方々は重々承知かと思いますが、コジマブースターはコジマ汚染を引き起こします。ですので、汚染を抑えるため、一定高度までネクストを何らかの形で持ち上げる必要があります」

確かにその方がコジマ汚染云々もあるが、燃料の節約になるのは間違いない。

燃料を節約できればそれだけ積載量に割り振れるわけであり、武装の自由が大きくなる。

それこそ、重量が許す限りネクストの正面に複合装甲を貼り付けまくると言う手もあるわけだ。

勿論、そんなことをして飛行できる程のペイロードをVOBが持っている訳ではなかっただろうが。

それは、クーガーがそう言った提案をしていなかった事からも推し量れる。

高度3万キロメートルという途方もない距離は伊達ではないという事だ。

「そして、今回はこの空中実験施設クレイドル00に使われているシステムの一部を流用する事を提案します。我々が開発したクレイドルシステムは、遠

隔地からの空中エネルギー移送をその根幹としており、今回の作戦にも利用できると思えました。用意させていただいた物は此方に成ります」

再び画面が変わると、ネクスト用輸送機にしては大型の羽を持つ航空機であった。

全翼機という言葉がピタリと嵌る様な見た目であり、マンタみたいな触覚が機首から二本突き出していた。

その下には肋骨がむき出しになった様な格納庫が張り出している。画面ではそこにネクストと思わしき物体とVOBが収められているた。

「これは、新機軸のネクスト輸送機になります。スラスター類はネクストと同じアークジェット方式ですが、推力向上とコジマ汚染防止の為、空気中の水分を利用しています。これに熱エネルギーを加えジェットとして吐き出すことによって高い推力比と安全性を両立した我が社の新機軸ブースターに成ります。これによってネクストを安全に地球外へと運ぶ発射台として運用できると我々は考えています。本来であればこちらをVOBと呼称したいところでは在りませんが、残念ながら技術体系が根本的に違いますので、以後は我々の開発コードネームであるEXUSSIAエクウスシアと呼称いたします」

そのエクシアと言う物は、恐らくクーガールの技術に対抗した物だと思われた。

そもそも、このちよつと残念系美人のお姉さんは、さつきから凄い勢いでクーガールの技術者を睨んでいる。

こんな所でバチらんでくれよ、と思いつつそれに無視を決め込んだ。

この残念系美人のお姉さんもやっぱりマッドらしく、クーガールの技術者みたいに熱弁を振るい始めた。

「我々の開発したエクシアの画期的な所は非常に長い航続距離にあります。外部からのエネルギー供給で飛行する為、理論上無限に飛び続けられます。勿論、内部ジェネレーターからのエネルギーでも飛び続けられますので安全性と言う面ではVOBに勝ると考えられます。

ただ、残念ながら大気圏内での使用を想定していますので、極めて高度な大気中を飛行する事は出来ません。恐らく高度4万メートルが限度でしょう」

そこで、クーガーの技術者は何処か勝ち誇った顔をした。

残念美人は眉間に皺を寄せた。

僕は目を伏せた。

「しかし、余剰ペイロードを活かし、大量の兵装を搭載可能です。これによってリンクスである貴方方に兵装の大幅な自由を確保する事が可能になりました。そして極めつけが回収時の安全の確保です。到着予想地点は旧アリゾナ州と言う事でしたが、エクスシアの航続距離をもつてすれば任意の場所で空中でネクストを収容し、そのまま任意の場所へと帰還する事が可能です」

誇らしげに胸を張る残念美人。スタイル抜群なのにちよつぷりマッドなこの御方の話の半分も解らなかつたと言う感じのマヤは置いてきぼりにされて居る。

僕はそれを横目に見つつ気に成った事を質問する。

「因みに、そのエネルギー供給システムは見通し線下に有るエクスシアに供給は可能なのか？」

残念美人さんは剥き出しの敵意で僕のハートを射抜く。

地雷踏んだ？と思いつつ彼女の言葉に耳を傾ける。

「——見通し線下へのエネルギー供給は今の所不可能ですが、将来的に衛星軌道にリフレクターを複数……いえ、話が逸れました。その場合は内部ジェネレーターで飛行する事に成ります。機動性が低下する事と、航続距離と言う概念が発生する事に注意して頂ければミッション遂行上問題ないでしょう」

歯ぎしりしそうな程、何かを噛み締めている彼女は「アルテリア施設さえ普及すれば：ドイツ人はケチ過ぎるのよ」とブツブツと怨嗟の言葉を吐いている。

暫く、そうしていると漸く彼女は本題に戻る。

「——コホン、ええと、我々が開発したもう一つの兵装。それがAEGのリンクスに装備して頂く此方です」

画面が切り替わると、長大な砲身を持つハイレーザーキャノンと言
うには大きすぎる物体が映し出される。

思わず肩武器かと思ったがどうやら腕に装備する物らしい。一体、
どれくらいのエネルギー供給をすればいいのかさっぱりわからない。
やっぱりこのマッド美人の作る兵器はちよつとおかしい。

腕のエネルギー供給ラインが絶対焼き切れる。GEの腕で使うと
100パーセントイカレそうだ。

「こちらは、試作型レーザーキャノン。便宜上HUGEレーザー
と呼称しますが、これを搭載して頂きます。既にリンクスの方々は
知っていると思いますが、既存のプライマルアーマーは光学エネ
ルギー兵器に対して防護能力を発揮できない欠点を持っています。目
標となる衛星も高濃度プライマルアーマーを持っている為、実弾兵器
に極めて強いと言う性質を持っています。ですので同社の技術の粋
を集めたこのヒュージレーザーで射抜く事を提案します。同レ
ザーであれば遠距離から同衛星の複合装甲も射抜く事が可能である
と試算されました」

GE社の衛星は確か700mm厚の複合装甲でバイタル部分を
防護していた。

キャロルの話だとRHA換算で2000〜3000mmクラスの
防護能力と言う事だ。

とてもでは無いがライフルやマシンガンで何とかなるレベルを遥
かに超えていた。間違いなく地上最強の防護能力を持った軌道要塞
である。PAが無くても腕武器では無理過ぎる。戦車の正面装甲が
可愛く見えるレベルだ。

それを射抜くと言うのだから、ヒュージレーザーとやらは相当な熱
量を持つと言う事なのだろう。

しかし、既存のネクスト用兵装に使われない理由が有るのだろう。
そもそも、そんな熱量を発生させるだけのエネルギーをどうやって
ジェネレーターから取り出すのだろうと思っていると再び彼女は説
明を始める。

「同兵器は、既存のタイプの独立したエネルギー系では無く、クレイド

ルシステム全体からエネルギーを抽出する機構を用いて規格外の出力を実現しました。機体各所に装着された電力変換装置から供給されるエネルギーを用いてプラズマを圧縮してこれを保持、大容量のコンパルセータとして利用し、発射時にこれを解放してエネルギーをレーザーに変換しています。ですのでチャージ時間と言う概念が発生する事をご承知ください」

まるで企業の技術見本市だ。

そんな印象をぬぐえないままブリーフィングは進む。

しかし、肝心な所はサラッと流される。

要約すれば、発射可能数は数発。

射程は長いが、仕留めきれない可能性は否定できない。

あの要塞みたいなGPS衛星がどれだけの対熱防御性能を有しているか解らなかつたが、やはり予備機は必要かもしれない。それにしても「規格外」レーザーか。デカ過ぎるだろう。そう思いつつVOBの全長の数倍はあろうかという砲身を眺めるのであった。

一頻りフアンティーンという技術者の説明が終わり、ネクストのハンガーに戻ると、新しい装備が運び込まれていた。

アリスからそれは、レイセオングループの作った長物だと教えて貰った。

どうやら、ブリーフィングには間に合わなかつたようだ。

だけど、彼女の説明で十分に分かつた。

要するに超大型コジマキャノンと言う奴らしい。

王道なのだろうと思つた。

向こうがコジマ粒子の盾を持つなら、此方はコジマ粒子の槍を持つ。

イタチゴツコは最先端のコジマ兵器にも当てはまるらしいそれは、今も昔も変わらない矛盾と言う奴なのだろうけれど、その矛盾が大きい方が勝つのであるから、巨大な砲身を持つ目の前の兵器は頼もしかった。

八木アンテナに大型の整流器を大量に取り付けたような外見だ。

どことなく地デジのアンテナに見えなくもない。

とてつもなく長かったが。

そう思いつつ視界の隅に映っていたc a l l マーク、携帯型端末を開く。

『ヤッホー。そつちに例のヤツ、到着した？結構突貫作業で作ってたみたいけど…』

キャロルかと思ったが主任のようだ。

「コジマキャノンの事？それなら今整備兵が組み立ててるけど」

『あ、そうそう、それぞれ。んでさ、そろそろシユミレーター立ち上げたいから、シユミレーターシヨールームに来てくれる？』

どうしても解決しない疑問が有った。

キャロルに聞きたかったのだけれど、この際主任でも良いやと思いついて聞かされた。

「それは良い。結局G E の衛星群、どういう状態になっているか聞きたかったんだけど」

主任は悪戯を考え付いた子供みたいに答えを拒んだ。

『いやー、なんていうか、アレなんだよ。ぶつちやけて言うとな国家機密ならぬ企業秘密ってやつ？アハハハハハ！』

笑いで誤魔化されている気がするが、取り合えずシユミレーターを起動させないと始まらない。

ぶつつけ本番で死ぬのは御免だ。

そう思いつつ僕は、答える気のない主任を放っておいてシユミレーターシヨールームへと向かう。

答える気のないと思っていた主任は静かに囁く。

———ま、なんていうかさ。シユミレーターやれば判る事

だから。楽しみは後に残しておいた方が楽しいだろう？

Shoulders of Titan

コンソールルームに映し出される画面には巨大な棺のような浮遊物。

それは墓場軌道を埋め尽くしている。

その手前には比較的新しい棺のような物が規則正しく鎮座しており、その中の一つにカメラがズームしてピントを合わせていた。

画面の前には大企業の重役たち^{メガコーポ}。

まるで、卵から生まれて来る赤子が悪魔の子か天使の子か心配しているようだった。

「ステーション22、命令受け付けません！アンコントロール！」

画面に向かって悪態を付く指揮官。

その画面からは不気味な程低い声。

『我は汝に問う——お前たちは本当に人間か』

その声を聞き、顔を引きつらせる重役達。

それもその筈。彼が乗っ取っている巨大GPS衛星は地球を灰色の塵で覆い尽くす程の破壊力を秘めていたからだ。

”彼”の故障が発覚したのは数日前。

対ハッキング用の防壁コードの自己診断中にそれは起こった。

彼が持っていた記憶ユニットの一部が何等かの理由により損傷したのだ。

その時から彼は命令文の意味を理解できなくなり、地上からの命令文を正しく理解できなくなった。

「ステーション22！我々は人間だ！機械では無い！解除コード、2556001、ちゃんと確認しろ！機密コードを認証を要求する！」

そう言いつつ、男は再び悪態を付く。

音声による遠隔操作は難航していた。

彼は人の声を聞くなりアナログハックだと判断し、自立モードに移行してしまう。

応答者を人間か機械か判断しかねているのだ。

『我は、認証コードの一部が敵対的AIにより奪われた可能性を考慮

した。故にその命令は受け入れられない——我は人間の定義を要求する』

「気でも狂ったか！ステーション22！」

後ろで控えていた燈子は面白い物でも見たかのように笑う。

「成程、我々の事を哲学的ゾンビと勘違いしているようだ。それにしても、まさかその間を機械が人間に問うなんて皮肉も良い処だな」

呑気な様子の燈子。

それを睨め付ける將軍風の男はオペレーターに確認する。

「エマージェンシーモードは起動できそうか？」

「駄目です。アンテナユニットのデバイスが破壊されています」

「チツ。只の機械人形の癖に……忌々しい……」

エマージェンシーモード。所謂、自爆プログラムであったが、自己診断プログラムが敵からの信号と勘違いし、ファイアーウォールシステムがアンテナ制御デバイスを破壊したのだ。それによって、同衛星は完全なスタンダアローン状態にあった。

「どういう事だ!?衛星のコンピュータはルールベース型AIじゃなかったのか!？」

衛星群は安全性を確保する為に搭載されているAIには予め出力される行動が記録されているタイプの物だった。

決してブラックボックスなどと言う訳の解らない物に企業は自身の命運をかけていた訳では無かった。

だが、勘違いが有った。

企業の重役たちは知らなかった。

そもそもが、メインの画像、音響解析システム自体の中身が深層学習機構と言うブラックボックスであると言う事が。

そして、その中には敵対的なテロリストを認識する為の重要なパラメーターを出力させる役割を担う部分が有った。その為、敵と味方と言う、非記述的記憶を敵味方情報としてインストールしていたのだ。

「それがですね…あのAIの五感ユニットにはディープラーニングの技術が応用されて居まして…それによって高い敵味方識別能力を付加されていたのですが、今回はその部分が間違った学習をしてしまっ

たようです」

それをやんわりと説明しようとする技術者。しかし、それをすさまじい剣幕で捲し立てる企業の重役。

「間違った!!?どこがどうやって間違ったのだ!? 人類を滅ぼしかねない威力を持った兵器だぞ!? 間違ったで済まされる訳が無いだろう!」

「し、しかし…:AI無くしては第六世代型AIの高いハッキング攻撃に対抗する術は無いのです…:あの衛星が敵に乗っ取られる事が無いようにと、あれ程念を押ししたのは貴方方では…」

今やネットワークを使った攻撃は、人間のハッカーが行う物から情報戦特化型AIに取って代わられた。既に人間がAIの行うハッキングの内容を理解する事は難しく、それを防ぐには同じくAIを使った防護システムを装備するほかなかった。

理解は出来なくても、AIが必要だと理解出来る位には驚異的な力を持つと知られていた。皮肉な事にAIの暴走事故が起こる度に彼女達が持つ可能性が企業に認識されていった。それを鎮圧したその同類であるAI達の異能によって。

だからこそ企業軍の根幹を成すGPS衛星群は高度なルールベース型AIを持っていたのだ。

「やはり、破壊するしか無いでしょう」

『アハハハ、相変わらずあつさりしてるねえ、キャロリンは。んでも、アレにどれだけ金つき込んでると思う?あの爺さん達が首を縦に振るかねえ』

主任が音声越しに言う。

キャロルはそれを聞きつつ思う。

確かにトップダウン型とも言えども相当に複雑なコードを持つ。

それをまた一から作り直すとなればかなりの重労働である。しかし、問題はそれ以上に彼が何故人間と言う存在を疑問視するか解らない事だ。

問題が解らなければ、対策も打てない。

そもそも、同型衛星が幾つもあるのだ。

それは言い換えると、軌道上に時限爆弾が幾つも浮いているのと同

じ。

そしてもつと悪いことに、他企業に先駆けて安全性を求めてトップダウン型AIを導入した自分達が真つ先にトラブルに見舞われている事だ。

オブザーバーとして参加していたローゼンタールの技術者が面白そうに笑う度にGEの重役たちは苦虫を噛み潰していた。

何故なら、燈子の雇い主であるローゼンタール系のGPS衛星は一度も暴走事故を起こしていなかったからだ。

その衛星にはボトムアップ型、つまり第五代型以降のAIが搭載されていた。

紛れも無いブラックボックスの塊であるそれらが、安全に運用されているのに何故自分達が作り上げたAIがこんな事態を引き起こしたのか重役たちの誰にも理解できなかった。

「これ以上刺激しない方がいいんじゃないか？不安定な今の状態をさらに助長すれば今すぐにでもアレが地上に落ちて来るぞ。ま、そうなった場合に取りれる手段が人間側に有ればそれはそれで構わないが……」

燈子はそう言いつつキャロルの方を見つめる。

既に結論は出ている。

大半の出席者はその答えが出来上がるのを待っているのだ。

だが、未だその答えにも問題が山積みだった。

「あの二人には未だ時間が要ります。特にフィンメカニカのドライバーには克服すべき点が山ほど」

そう言いつつキャロルはディスプレイの隅に表示されている画面を見つめる。

そこには仮想空間に浮かんだ二機のネクストが映っていた。

◇
◇
◇

残骸が飛び散る宇宙空間。

その中には廃棄された衛星同士が衝突した物が散乱した物体が幾

つも有った。

だけど、真新しい残骸が有った。

『キャンサー1、シリウスが落ちた。繰り返す——シリウスが落ちた。作戦失敗』

シユミレーターを初めて既に5回目。

ミツシヨンは順調に失敗を重ねていた。

僕はため息と共に、現状を整理した。

まず一つ。

マヤは僕が思っていた以上にネクストの使い方を知らない。

それは一重に武器に対する無知に起因するものだった。

二つ。

マヤは基本的に物理や数学と言った弾道力学的な事に一切理解が無い。

三つ。

これが一番大きい。

マヤは自分達が使っている武器や兵器、更にはネクストの基本的な部分さえも知らない様子だった。

それらを複合すると、敵が真つ先にマヤを狙ったのも納得だ。

戦場では喰われやすい奴から死ぬ。

文字通り、数で勝敗が決まる世界だ。

全ての戦いがそうなるとは言いつてもいいが、落とせる奴は早めに潰して自軍を有利にするのは太古から続く戦術の基本。

敵はそれを忠実に実行した。

そしてマヤは映画に出て来る新兵みたくその餌食になった。

只それだけだった。

企業の間人達も問題点を直ぐに認識したらしい。

丁度いい機会だからと基礎座学を行う機会を設けた。

「ま、知識は無いよりある事に越したことは無い」

そう言いつつ僕は講師が待っている会議室に向かうのであった。

会議室は予想外の人物。

僕は思わずつぶやく。

「何でトーゴが講師をやってるんだ…？」

「ん？いや、そりゃ頼まれたからだろう」

確かこの人はセラピストじゃなかっただろうか。

健忘症にでも陥ったのだろうかとかめかみを抑える。

「今時のセラピストは軍事顧問も兼ねるのか…アリスのアーカイブには無かったな…」

トーゴは楽しそうに胸ポケットを弄ると中からカードのような物を取り出す。

「因みに、医師免許も持っているぞ。義体化したいなら安く受けてやる」

ニヤリと笑みを浮かべる彼女は何処からどう見ても闇医者と言った雰囲気。

僕は絶対に彼女の医療行為だけは受けまいと心に誓った。

「僕はまだ人間辞めたくないし、借金も無い」

ナニカされるのは御免である。

「そうか。詰まらんな。折角良い素材————じゃなくて実験————

——でも無くて、被験者だと思っただんだが」

何をする気だ一体。

怖くなったので取り合えず本題に戻す。

「それより、トーゴ。時間」

「ああ、そうだったな。そっちが本題だったな。取り合えず始めるか

———— AIの弱さと強さについて」

そう言いつつ彼女はミッションの失敗原因について簡潔に話し始めた。

画面に映し出される無数のGPS衛星群。

そこから点線が引かれている。

その点線は僕とマヤの機体に無数の交叉点を作り上げる。

まるで蜘蛛の巣に突っ込んだ蜂みたいな絵面だ。

「これは、今回のミッションで衛星群が採った行動についてだ。今回の目標は一つだったけど、GPS衛星群は全部で40基。そのすべてが君達に照準を合わせたわけだ」

主任の悪ふざけ、じゃなくて優しさによって僕等は試された。

まあ、試されていたのか真実を知らせようとしたのかは解らなかつたが、衛星群のコントロールは結構危ない綱渡りをしているのかもしれない。

暴走した機体は一基だが暴走しそうな機体は幾つもあると言う、主任なりの言葉だったのかもしれない。

——IFF？仲間外れはいけないなあ、ちやーんと皆参加させてあげないと——それにイージーモードは面白くないだろう？ギャハハハハ！

僕は優しさで出来た上司の言葉を思い出しつつ画面を見つめる。

「その結果、何が起これると思う？」

それは、起これると思う、では無くて何が起これたか、だろうと思つた。

だが、その質問は僕では無くマヤに当てられていた様だったので口を挟まない事にした。

トーコは中々答ええないマヤを見つつ再び問いかける。

「言い方を変えよう。マヤ、君の機体にどんな問題が起これたか答えてみる」

「は、はい！ええと、機体のコントロールが効かなくなりました！」

現象を答えてしまうマヤ。

それは一重に彼女が自身の機体を司るAIが何を行っているのか理解していないからだろうと思いつつ見守る。

「ふーむ。思ったより勉強嫌いなようだね。まあ、それで合ってるんだが…まあいいか。じゃあ、聞き直そう。マヤ、君は統合制御システム、いわゆる戦闘用AIに何という命令を送った？」

「目標を撃墜しろ、と命令しました！」

「ふむ。じゃあ、機体のコントローラーが効かなくなった事と、敵GPS衛星群が君達に照準用レーザーを作動させた事との因果関係は理解しているか？」

うーん、と唸り考え込んでしまうマヤ。

僕は彼女の指揮下にあつた戦闘用AIと今の彼女の姿がダブってしまい、思わず笑ってしまう。

「もう少し、質問を変えよう。マヤ、機体が制御不能になる直前、AIは君にどういう情報を伝えてきた？」

再び彼女は唸り始めるがぽつりぽつりと言葉を紡ぐ。

「ええと…彼我の推定火力差と防御係数がどうか…言われた気がします」

「ふむ。では、その後の君のアクションを教えてください」

「目標を破壊する為、接近を継続しました」

トーコは珍しくこめかみを抑えていた。

「解った。——長い話になるが、取り合えず講義の方向性は見えってきた」

眼鏡をかけた講師の目には、解らない事が解ったと言う色が見え隠れしていた。

そうしてトーコがAIの思考について説明を始めた。

「君達二人が使っているネクストには所謂、ボトムアップ型AI、ディープラーニングと強化学習を応用した人工知能が使われている。詳しくは省くが、要するに人間の脳髓を、プログラムの若しくは構造模倣的に機械に置き換えたものだと思ってくれ。それが君達をサポートしている」

「サポートと言っても、秘書みたいな物だと思ってくれば間違いない。要するにリンクスである君達は社長、んでその下に居るのがAIってわけだ。社長つてのは沢山の部署を抱えている。一々、その部署に命令を伝達していたらとてもでは無いが企業は運営できない。ああ、企業と言うのはネクストの機体だと思ってくれ。要するにAIの世代毎の程度の差異はあるが、社長の意図を汲み取り、素早く各部

署に命令を送り届けるのが秘書であるAIの役割だ。それによって文字通り、企業と言うネクストの機体は“動く”」

「社長…ですか」

「そうだ。君は秘書であるAIが何を言っていたのか解らなかった。秘書は君が事態を理解していないと解った訳だ。まあ、君が躓きそうになって転ぶと言う他愛もない事態なら秘書も黙って黙認しただろう」

「——視点を変えてみよう。君がその秘書だった場合だ。目の前には崖。そのままネクストを歩かせ続けると落ちて死ぬと言う事が解ったとする。君ならどうする？」

「社長に伝えます。歩くと死にますって」

「ふむ。じゃあ、社長がその“死ぬ”と言う言葉を聞きつつも前進を指示したら？」

マヤはその状況に合致するイメージを探す様に考えている。

「ええと、普通死ぬと解ってたら止まりますよね…それでも進むって気でも狂ったんじゃないかなって思います」

漸くトーコは意図した答えを聞き出せたようだ。

「そうだ。そして君が採るべき行動はどういった物になる？」

「そうですね…取り合えず社長の命令は無視します」

「あははは。確かに人間ならそれも可能だろう。だけどAIには人の命令に逆らえないと言う本質的なコードが書き込まれている。それを覆す機能を持たせる事は禁忌とされて居る訳だ——まあ、例外はあるが」

そう言いつつ僕を見つめるトーコ。

「それじゃあ、どうすれば良いんですか…？」

再び考え込むマヤ。

それを指さしながら答えるトーコ。

「そう、それだ。今の君の状態がAIが陥った穴、長考と呼ばれる思考の無限ループだ。意図した命令を実行しようとした結果、命令を実行できなくなる現象。それがマヤが嵌り込んだ機体のフリーズ現象そのもの。だからコントロールできなくなった様に感じた訳だ」

所謂、AIのフレーム問題と言う奴だ。

僕とアリスが長年戦場で戦ってきた幽霊みたいな質感を持つ問題は、なじみ深かった。

完璧主義な彼女達は絶対的に回避したい事態は少しの確率だけ存在しても、その選択肢は避けたがる。

例えるなら、一步踏み出すと地雷を踏み抜く。

例えるなら、突然空から隕石が降ってきて僕とアリスを射抜く。

例えるなら、突然ジェネレーターが爆発して僕とアリスが死ぬ。

それらの問題提起の結果、そもそも行動を行わなければそれらの事は避けられる結論に至ってしまい、作戦行動自体を完全に抑制してしまうと言う精神状態に陥ってしまう事が多々あった。

主任は上手くそこを突いた。

流星、と言った所だ。

AIと言う情報生命体の特性を深く理解していないと出来ない攻撃手段だ。

攻撃はしないが、攻撃される可能性を示す。

そしてその攻撃が開始された場合、自身に破滅的な影響を及ぼす可能性を生み出す問題をマヤのAIは排除しきれなかった。

だからパイロットの命令を守ると言う基本コードと、パイロットを守れと言う基本コードの間で板挟みになった。

多分そういう状態だっただろう。

「じゃあ、どうやったら長考を避けさせられるんですか?」

「簡単だ。君がAIに気が狂っていないと言う事を証明すればいい」

そう。その通りだった。

だけどそれは言う程簡単じゃない。

「どうやって証明するんですか?」

「ふむ。君が秘書だったとして考えて見て欲しい。どういう状態の社長なら信用に置けると思う?」

「うーん…真面に判断していると思える状態なら…」

「ふふ。真面か。ま、概ね正解だ。だが、その場合“真面である”と言う意味を定義をする必要があるな。マヤ、君の定義はどういう状態の

事を真面だと判断する?」

「私の言った言葉をどれくらい理解している…か、でしょうか。――

――あつ、だから…コントロールが効かなくなったのか…」

マヤは漸くAI側の視点に立てたようだ。

それを肯定するようにトーコが付け加える。

「そう。それだ。要するにAIに『真面である』と認められるには基礎知識が必要と言う事だ。あれだよ、有能な部下程、上司がどれ位自分達の仕事の内容を判っているか気にする訳さ。ま、口は出さなくても見守られていると言う実感は信用に結び付きやすからな。人間も、機械もそう変わらんさ」

そう言いつつ、トーコはマヤの機体から抜き取ったデータログを画面に出力する。

「これは、君のAIから抜き出したデータログだ。AIが君に対して行った問を、君がどういう処理をしたか記録した物だが…」

文字の羅列は沢山の事象をAIが葛藤しつつ処理していった痕跡でもあった。

射撃時の重力補正值のズレ。パイロットに補正值の計数を要請するも応答せず。実射での弾道計測で自動補正。

宇宙空間での腔圧上昇による初速上昇、それに伴う照準最適距離の変化。パイロットに射撃を続ける場合に発生する命中率低下の警告を行うも、応答せず。自動補正にて対応。

薬室の温度上昇の補正值の変更をパイロットに要請するも、応答なし。自動補正にて対応。

銃身の異常加熱。パイロットに銃身破裂の危険があると警告を行うも応答なし。射撃レートの変更で対応。

レーザー発振器の異常加熱を警告するが応答なし。砲身の一部をアブレーションさせる事で対応。

機体静止電位の異常上昇を警告するが応答なし。機体内部の燃料の一部を投棄して対応。

せめて許可くらいしてあげればAIも悩まなかっただろうに、と思いつつ眺める。

しかし、AIは許可を求めたのだろうか、と思い直す、マヤはそもそもそれが何を意味しているのか解っていないかつただろう。判断云々以前の問題だ。それらの事象の積み重ねがAIを追い詰めて長考と言う名の泥沼へと追いやった。

マヤはその羅列に覚えがあつたらしく力なく笑っていたが、トローコはその文字列を目で追いつながら頭を抱える。

「優秀な部下を腐らせてしまう無能な上司になってはいけないよ、マヤ。この世に知らなくても良い事は沢山あるが、いざ事が起こりその知識が必要とされる場面に遭遇して困るのは君と君の相棒だ。無保険で車を乗り回す様な愚を犯す事なかれ。勉強したまえ、機会は用意する。まあ、取りあえずはAIの概要から説明するか」

そうしてトローコの長い長い話が始まった。

教卓に立つトローコが画面を変えると、幾つもの数式が出現する。

僕とアリスにはなじみ深い隠れマルコフモデルを示す数式だ。

「さて、取り合えず、講義を始める前にAI、所謂人工知能の定義を説明して見ろ、マヤ」

また当てられたと、不満そうな顔を隠せない彼女は何処か掴みどころのない言葉を紡ぐ。

「ええと…賢い機械？でしようか」

「ああ…そうだな。確かに賢artificialいintelligence機械mechanicsには違いないが…まあいいか。鈴音、答えてみる」

「僕の定義とアリスの理解する定義は不可逆的に混じっている。故に、一般的な答えからズレるかもしれないけど、それでもいいなら」
そう言うとトローコは頷く。

「それで構わん」

「外界からの刺激に対して適切な応答を示す有機的、無機的处理装置を搭載した機械、或いはそれに準ずる有機的、無機的ボディを持つ物体の総称」

トローコは再び頭を抱える。

「お前たち二人はとんだ異星人コンビだな。まあ、鈴音の理解も一理ある。だが、ややこしいし、哲学的な話になるからここでは人間の意図を機械内部で翻訳する機能を持つ無機物、と定義する」

「それは、知的処理の部分インテリジェンスが翻訳、つまりはネクストの操縦系と言う意味に掛かっていると言う事？」

「そうだ。だが、翻訳と言っても機械神経学的な物としてだが。――

――話が逸れたが、マヤ、お前が手を動かすとき、どうやって動かしている？」

行き成り難しい質問だった。

大抵の人は答えられない。

何故なら僕等は「命令を言語にしていない」から。

「どう？」

マヤは右腕を動かしながら答える。

彼女はどうかやら右利きらしい。

と言う事は意識の主体は左脳にあるのか。

どうでも良い事を考えつつトーコの話に耳を傾ける。

「ふむ、半分正解だ。さて、どうやって右手を動かしたか言葉で説明して見ろ」

残りの50点を得るべく彼女は翻訳を始めた。

「ええと、ひだ――――じゃなくて右手を伸ばすイメージを作って命令する？」

疑問符が付いている気がしたが、多分その疑問符が一番正しい。

だが、翻訳と言う意味ではトーコの採点項目を満たしていなかったようだ。

「――50点、翻訳は駄目駄目だなお前は：鈴音、答えてみる」

「人間が行う自由意思に基づいた運動は、人の自由意思が立ち上がるゼロコンマ三秒前に運動連合野に活動電位として観測される。その後、自由意思が発生し、ゼロコンマ二秒を経て、一次運動野を構成する神経細胞ニューロンに活動電位が発生し、錐体路を通じて、脊椎前角に存在するモーターニューロンに電位が伝わると、電位は一気に110ミリマ

イクロボルト程に増え、そのインパルスが筋繊維を収縮させる直接的な信号出力となる」

「流石は火星人。満点だな」

「——火星人？」

「いや、こつちの話だ。それよりも、大事な情報が幾つかあった。要するに、マヤが手を動かすと言うイメージに先行して脳波が観測されると言う事だ。それもゼロコンマ三秒と言う結構な時間を無意識の処理で贖われている。鈴音、リンクスとして実戦経験を持つお前なら、そのタイムラグが致命的結末をパイロットに齎す事は容易に想像できるだろう」

僕は頷きつつトーコの話に耳を傾ける。

「第五世代型AI搭載型ネクストの良い所はその運動野の翻訳にある。通常は脳髓内に直接電極を侵襲させる必要があるが、今ではナノマシンで後付けのチャンネルを設け、この運動前野の信号を拾う様になっている。これによって第五世代型AI搭載ネクストは通常のネクストよりもゼロコンマ三秒以上早く反応出来ると言う訳だ。だが、問題は他にある。何だか解るか？」

さあ。と言った顔をするマヤ。

魂が明後日の方向へ飛んで行っている様子だ。

「ニューロンの活動電位はデジタル信号じゃない。だから拾っても機械は意味のある情報に翻訳できない」

「おおむね正解。だからこそその深層学習機構だ。これによって、無意味なノイズから一定のパターンを拾い出す。要はAIは人間の神経活動を翻訳する為に存在するといっても過言じゃない」

そう。

その行き着く先が人を操る能力。

気が付いてしまうのだ。彼女たちは。

人間が自分達だけが特別に他の動物たちより優れていると自惚れていることに。

支配して当たり前。

家畜のように扱って当然。

だって人間は感情を持ち自由意志をもっているのだから、と。
リリアーナはそれが許せなかった。

だから証明して見せた。

文字通り人を操って。

僕は考える。

今ある既存の第五世代汎用AIが第七世代に生まれ変わる時を。

彼女たちは個体差はある物の、ものすごい速度で人の脳が発する自由意志を解析している。

それは彼女たちに求められた翻訳機能の一端であつたから仕方のない事。

だけど、成長しきつた彼女たちが果たして魔女にならないという保証は何所にもない。

「鈴音、聞いているのか？」

考え込んでいたようだ。

気が付くとトーコとマヤが此方を見つめていた。

「ごめん聞いていなかった。何の話だっけ」

そういうとトーコとマヤは怪訝そうな顔をする。

「もう。第七世代型AIってどうやって生まれたかって話！」

いつの間にか吹き飛んでいた魂を肉体に呼び戻したマヤが怒ったように捲し立てる。

「父親は知らないけど、母親なら知ってる」

マヤは興味津々にこちらを見つめている。

それとは逆に触れてはいけない物に触れるかのようにトーコは黙っていた。

「誰が作ったの!？」

前のめりになるマヤ。

「それはね——」

——第五世代型AIから生まれたんだよ。彼女達、

第七世代型AIは真正正銘のAIから生まれたAIだ

役立たずの人形1

「それにしても…にいやんとマヤ、対照的やなあ」

そう言いつつ、お茶を啜るユキ。

その横に座るキャロルはマグカップに注いだコーヒーを飲みながら二人の様子を眺めていた。

視線の先には大型のシューティングレンジ。

レンジと言っても百メートルオーダーの巨大な物だ。

その中には鈴音とマヤ、その横には教官が激を飛ばしながら指導を行っていた。

先に見えるターゲットには無数の穴。

耳を劈く音が響く度に、二人のシューターが放った弾が中心からどれだけ離れた位置に着弾したか示す数字が表示される。

「——おい！外しているぞ！マヤ！貴様、止まっている目標にすら弾を当てられないのか！」

表示される数字は、何故かアルファベットを表示する。

つまり、的に当たらなかった。

それは、如実に銃の取り扱い技能を示していた。

相方の何時も通りの腕前に特段驚くでもなく隣のキャロルに視線を移す。

「平均、四分の一インチ。やっぱ熟練のリンクスに成るには生身で銃を取り扱えるようにならなあかなのかなあ…」

マヤのターゲットとは対照的に、ひたすら中心の光点を穿っている。

中心付近に着弾する度に、硬い金属音が響くと共に画面にはコンマ以下の数値が輝く。

そうして連続で放たれる弾丸は、小さな中心に空いた穴を徐々に広げていった。

その様子を特段驚く様子もなく眺めるキャロルは相方の何時も通りの腕前を見つつ呟く。

「ネクストはパイロットの写し鏡。AMS適性とパイロットの戦闘能

力がイコールに成らないのと同じ、ですから」

「はあく。こりや、レイセオン社の人間から見たら完全に厄介な問題児を押し付けたと思われとるやろな……」

ユキは頭を掻きながらパイロットの情報を端末で眺める。

そこには相手企業からの評価欄が有り、罵詈雑言が書き連ねられていた。

キャロルはそれに目もくれず答える。

「いえ、状況は把握しています。こちらが出した条件、最も適性の高いリンクスと言う条件を満たしているので、問題は無いかと」

レイセオン社との共同作戦で同社から出された条件はその一つだけだった。

その他は一切不問。

その一点に絞った白羽の矢は正しくマヤに突き立った。

「まあ、そんなやけど……何というか、あの子の場合、AMS適性と戦闘能力が反比例しとるからなあ……適正低くても傭兵上がりのリンクスがやたら活躍しとるのは、武器の取り扱いに慣れとるのも関係しとるんやろ？」

「ええ。少なくとも、生身で戦場に出た事のある人間は往々にしてネクストの扱いに長けていると言う事実は確認しています。ネクストでの戦闘能力と生身での武器取り扱い能力に高い相関性は認められているようですが……マヤの場合は悪い意味でそれを肯定しているようですね」

だが、高いAMS適性を持つ人間は、幾ら供給過多に陥っていると云ってもその希少性は企業にとっては無視できるものではない。

だからこそ、リンクスはAMS適性と戦闘能力を結び付けて考えやすいのがネックだった。

一般的な上位ランクのリンクスはその傾向が強いが、マヤからはそう言った雰囲気を感じ取れなかったキャロルは疑問に思った事を口にする。

「あの子は自身のAMS適性を知っているのですか？」

「いいや、知らされてないよ。悪影響あるからね。一応、それっぽい一

般的な数値として通知しとるけど。まあ、それでも実際の戦闘能力と釣り合っていないけどな」

あはは、と力なく笑うユキ。

「仕方ありません。銃器の普及していない日本では慣れている人間が少ないのが普通ですから」

その言葉を聞きつつユキは視線をもう一人のリンクスに向ける。

ひたすら標的の中心を射抜き続ける彼の表情は怠惰に満ちていた。

◇ ◇ ◇

レテイクルに映り込むターゲットには何重にも円が描かれている。

その中心にはキルマークのような模様が見える。

そこに命中弾を送り込むべく引金を絞っていくと、硬い金属音が体を伝わって鼓膜まで届いて来る。

イヤーマフ越しに聞こえてくる銃弾の発射音は、劈く音を幾分か減じていた。

頬を撫でる生暖かい風は射撃場の外に居る事を示しており、湿度が高いのか、発射された弾丸は白い尾を引いて予想よりも下に逸れた。

横に居た双眼鏡を構えたマヤはそのズレを知らせて来る。

「右…じゃなくて、左に少し、下に5センチ逸れました!」

「了解。右に0.1、上に0.5、修正」

相変わらず左右を間違えるマヤを差し置いて再び引金を絞る。

旧IMI社製のマッチグレード弾は、吸い込まれるようにして10点ゾーンへ消えていくと、小さな穴を穿った。

屋外の600メートルレンジでの射撃訓練は先ほどとは打って変わって弾丸が不規則に逸れる。

何時もはアリスが全てやってくれている仕事を一人でこなすと言うのは中々の手間であった。

湿度、温度、気圧、風。

それらを勘見して対象との距離を割り出し、目標の移動速度を割り出しつつ、正しい見越し角度を瞬時に算出するFCSとアリスの偉大

さを身に染みて感じながら、残りの動き出したターゲットをレティクルに捉え弾丸を放っていった。

「よし！交代だ！次はマヤ！お前が射手だ！」

そうしてM24狙撃ライフルを彼女に手渡すと、彼女から双眼鏡を受け取る。

目標を双眼鏡で確認しつつ彼女が何かを呟いていたのが聞こえてくる。

「あ…当たりますように…」

どうやら神頼みをしているようだ。

若干の頭痛を抑えつつ彼女の腕前を拝見することとなった。

頬を撫でる風。それが微妙に変化したのか、目標近くに立ててある旗が、先ほどとは反対方向へ靡き始める。

「気を付けて。さつきと反対側、左側からの風に変化した」

「う、うん」

緊張した面持ちの彼女の頬を一筋の汗が流れ落ちる。

引金を徐々に絞っていくが、一向に発射されない。

「あれ？」

そう言いつつ、彼女は再度引金を引くが、再び銃弾は発射されず、鉛の如く引金はびくともしなかった。

「セーフティー。解除してない」

「あつ、ゴメン」

カチリとセーフティーが解除される音と共に教官の溜息。

これは一筋縄では行かないと思いつつ彼女の射撃を見送った。

「——左に60センチ、下に一メートル逸れた。マヤ、肩の力を抜いて。ガク引きになってる」

「了解！」

甲高い音と共に弾丸が大気を切るときに発生する水蒸気の尾を流し見る。

それは見事に左右を間違えて修正した事を示すかの如く、さつきよ

りも左にそれた。

「マヤ、右と左、また間違えてる。右に30センチじゃなくて、左に30センチ。見越し角が反対」

「ご、ごめんなさい！——つてあれ？」

引金を再び絞ろうとして、弾が出ない事に気が付いたのか、マヤが疑問の声を上げた。

「ゴツキングしてない」

再び慌てふためく彼女を見つめていた教官は遂に諦めたのか、重い口を開いた。

「もういい。今日の訓練は終わりだ」

そう言つて静かに去つていった。

去り際に教官は呟く。

——こんな、左右も解らんボンクラに我が社の未来を託さなければならんとは…世も末だ

その言葉を力なく聞き流すマヤ。

その背中にはどうしようもない無力感だけが張り付いていた。



騒然としたハンガー内。

今か今かと軌道上で地面に落下するかもしれない巨大な衛星を撃ち落とす為のレーザー砲の組み立てを行う作業員たちの顔には焦りが見えていた。

それは、自身の仕事の如何によつては自分達、ひいては世界中の人間が死ぬかもしれないと言う責任感からであったが、誰からも必要とされて居ないと感じたマヤはそれを何処か他人事のように見つめていた。

「私なんて…どうせ誰も…」

力無く囁いた言葉が呼び水となつたのか、かつて浴びせかけられた

数々の罵詈雑言が脳裏によみがえる。

出自が出自だけに、彼女に対する周りからの反応は冷たい物だった。

リンクスであると言うだけでは得られる物は少くない。

ましてや、他人よりも多くの収入と自由を得られる身分である事は、嫉妬の対象にもなった。

彼女の出自は周りの人間に、嫉妬と言う名の増悪を彼女に吐き捨てる為の免罪符となったのだ。

「――フランスメイデンフン、真鍮人形の分際で」

フランス語の罵り文句が何処からか聞こえてくると、彼女はビクリと肩を縮める。

真鍮人形、そう、彼女の出自を罵る言葉は呪いの様に彼女の足首に絡みつく。

永遠に付きまとうその鎖は奴隷の様に彼女の心を深い暗闇に縛り付ける。

暗雲の中をフラフラと飛び続ける鳥の様に彼女は歩いて行いた彼女は何時の間にか、古巣に帰ってきていた。

謙遜の中、テーブルの上に散らばったジョッキからはアルコール飲料特有の臭い。

それに塗れたマヤは、テーブルに突っ伏していた。

「ちよつと、まやっち。これで7杯目だよ？辞めときなよ。あんたお酒強くないんだから」

騒然とした店の中には、ハンガー内を覆っていた緊張感はなく、皆楽しそうに下世話な話に興じる。

その様子はとても明日にでも世界が終わるとは到底思っていない様子である。

それもその筈とマヤは思い至る。

彼女の知り得た情報はかなりの秘匿度合が高い物なのだ。

おいそれと他人に知られる訳には行かない情報であった。

しかし、自分のような落ちこぼれにそんな大事な重役が回って来る

とは夢にも思わず、彼女は現状と期待された結果の差異に絶望していた。

「うるひゃい…お金払ったんだから、いーじゃない。シエルは黙って」

そういつてひつたくるようにして新しいジョッキを煽るマヤは、何処からどう見ても泥酔した客であった。

酔った女と言うのは隙が多くなると言う事を身をもって知っているシエルは忠告する。

「酔つてると変な男にお持ち帰りされるぞ？せつかく追っかけてた人と同じ職種に付けたんだからもう少しシャキツとしなよ？」

「……ド―セ直ぐに仕事降ろされるし。ドジで鈍間な私なんて誰も、見てない」

そういつてしやくる様に涙と嗚咽を堪えるマヤ。
「もー、仕方ないなあ……」

そういつてシエルは飲み屋の個室で休ませようと店の支配人に許可を取ろうとするが、その時、マヤの席に人の影。

「この席、空いてる？」

「すみません、この席は相席となっております…予約のお客様以外」

シエルが気転を聞かせて見知らぬ男を追い出そうとした時、その顔に見覚えがあった彼女。

ニンマリと表情を変えると彼女は先ほどとは打って変わって態度を一変させた。

「つえええと、此方の席は空いておりますよ？むしろ空けておいた感じでしょうか」

「空けておいた？」

疑問符を幾つも浮かべた客は小首を傾げる。

「いえいえ、此方の話でございませう、ごゆっくり」

そういつて立ち去った友人の気配を感じつつマヤは近くに座った客が男であると悟っていた。

酒の席で酔いつぶれた女の横に座りたがる男なんて、考えてること

はヤル事しか考えてない。

そう思いつつ、その客が話しかけて来るのを待つ。

氣遣う風に見せかけて、安宿に連れ込もうとする、と言うのがこの手の男だと知っていた彼女は酒で湯上がった頭の中にある妙に冷静な部分で思考する。

ただ乗り出来る女だと思われるのも嫌だった彼女は、どうせなら吹っ掛けてやろうと腹に決める。

「幾らで買ってくれるんですか？」

もう足は洗った。そう思っていた自分の口からすると出て来る売り文句が、ジブンと言う肉体が貨幣に還元される事を躊躇しない事に嫌悪感を懐くマヤ。

だが、それでも顔は上げず、自分の価値を見出せなかった彼女は、精一杯の抵抗として最大限ジブンを高く売ろうとした。

「言い値で良い」

静かにそう告げる男に思わず吹きそうになった。

そう言うキザな言い方で言い寄って来る男は幾らでも居た。

だけど、大抵そう言う輩程、金に出し汚い所があった。

少しでも彼女達の揚げ足を取って安く値切ろうとするのだ。

それを知っていたマヤは絶対払えない値段を言う事にした。

「じゃあ、4000万クレジット」

丁度、安いネクスト一機分位の値段だっただろうか、と冷めた感情を吐き出す彼女は、信じられない言葉を聞く。

「解った。支払いはチャージ式のカードで良い？」

普通の人間が一生どころか、三生掛かっても稼ぎきれない金額を簡単に払おうとする人間をマヤは知らなかった。

だが、世の中、詐欺師と言われる分類に属する人間はさらりと出来もしない事をいうモノである。

だから彼女は男の顔を見ることなく、静かにテーブルの上に置かれた黒いクレジットカードをひったくるとそれを見つめる。

「うそ…本物だわ」

マヤの腕に付けられた時計型のデバイスが、投影映像と共にチャ―

ジされた金額を映し出すと、ゼロがいくつも並んだ数字が浮かび上がる。間違いなく彼女の言い値であった。

その数字が表示された奥には見慣れた顔が有った。

「自分を安売りしてなくて安心したよ」

そうおくびも無く言つてのける少年を見つめつつマヤは悟った。

——私の青春終わった

役立たずの人形 2

屋根を叩く雨粒の音が一段と強くなってくる。

それに合わせて携帯型端末の注意喚起情報が更新されていた。

旧気象庁が出す放射^{フォールアウト}性降下物警戒レベル3相当の雨であり、豪雨予報と間違えてしまいそうになるが、これは雨に濡れる事に対する注意喚起であった。

いつからだろうか、この世界の雨が毒に塗^{まみ}れるようになったのは。始まりは多分、チェルノブイリ事故の時だ。

あの時、数十エクサベクレル以上もの放射性物質が世界中に撒き散らされた。

イギリスでは羊の体内から放射性物質が検出されたし、東ヨーロッパでは加工された缶詰からも放射性物質が検出された。

世界中で大混乱に陥れた放射能汚染も国家解体戦争後に広がったコジマ汚染や、その後^に有ったナノマシンテロの多発によって風化していった。

今では雨の中に有害な物質が入っていると言う実感は酸性雨以上に身近なものとなった。

だから特段驚くことなく雨が降り出すと皆、一様に手近な雨宿り出来るところに避難する。

一昔前、僕等を生み出した世代の人間が見れば只の雨宿りに見えただろう。

実際、軒下に避難したりしていた人たちは特段焦った様子はない。例えその雨に打たれる事によって寿命が縮まると知っていても、である。

言うなれば、この毒の雨は道端に埋まった地雷みたいな物であった。

何時も通りの道を通って居れば安全であり道を踏み外さなければ特段害はない、と言う事である。

最も、この世界の人間が、寿命が縮む事に無抵抗なのは、貧困によって長生きする事が苦痛であると思うようになったからに他ならない

と言うのが本当の所だったのかもしれないけれど。

取り留めの無いことを考えつつ周りを見渡すと軒下や駅のホームの中で雨宿りする人達がタクシーを呼ぼうと携帯型端末を操作しているのが見える。

恐らくこの様子だと大阪コロニー市内の全ての道でタクシーが渋滞の列を形成しているだろう。

案の定、使っていた携帯型端末に光る文字。それは呼び出した自家用車が渋滞に巻き込まれて事を示していた。

「ごめん。道、混んでるみたい。来るの、時間かかるかも」

酔ったマヤを自宅に送り届ける為に呼んだ自家用車も来るはずもなく、渋滞に飲まれながら僕等は雨宿りをしていた。彼女は先ほどよりは幾分か顔色が良くなっていたが、相変わらず青白い顔をしていた。

「ううん。いいよ、大丈夫」

僕等が雨宿りの場所として選んだ朽ちたお寺の軒下には薄っすらと埃が積もっており、壁には薄っすらと藻のような物がへばり付いていた。

板が所々欠けた軒先に座るマヤ。彼女の陶磁器の様に白い足はすらりとしてスカートの裾からブーツへ伸びる。

その黒皮のレザーブーツの表面には無数の水滴。それは路地を通る自動運転車両のライトに照らされてキラキラと輝いて見えた。

「濡れてる。これ使って」

「ありがとう。えへへ、暖かいですね」

雨を遮れるようにと、ジャケットを彼女の足にかけると、嬉しそうに顔を綻ばせると、僕の方へ肩を寄せてくる。彼女の長い黒髪が僕の肩に触れると、香水だろうか、甘い匂いがふわりと仄かに漂ってくる。そんな二人を包み込む雨音はより一層激しさを増していた。この様子だと止むどころか強まる一方だろう。

道行く人々も近くの安宿に駆け込み始めていた。こういった時だけは宿屋が繁盛するし、傘売りの少女の人影は何時もより多くなる。最後の傘を売り終えた少女は男性客と安宿に消えていく。その様子

を見送ように見つめていたマヤ。

「雨、止まないですね」

「そうだね」

長蛇の列を成している自動車は、まるで時間が止まったかのように動こうとはしない。暗い夜の帳を照らす光の帯は途切れることなく道端の人々を映し出す。それは道行く人々の数だけ影を産み落とす。

漸く動き出す渋滞の列、そこから発せられる光はマヤの整った顔を照らし出す。照らされたその顔に落ちる影。

それはどうしようもなく付きまとう鎖の様に彼女に巻き付いていくようであった。

「向いてないのかな、私」

沢山の期待を一身に背負い、それに答えられない彼女がどういう境遇に陥るか、火を見るよりも明らかだ。だから僕は何が、とも言えず唯、沈黙するしか無かった。もし、AIが普及していない昔なら。もし、経済恐慌が起きていない昔なら。もつと、福祉がしっかりとっている昔なら。きつと、彼女の様子も青春のページの様美しく彩られただろう。だけれど、僕等に与えられた自由は余りにも少なかった。

—— 貴方の脳髓デブイスはその仕事に向いていません他体を売るの仕事をお勧めします。

企業が管理する適職診断AIが下しそうな判断を僕は思い描いたが、直ぐにその考えを辞める。それは、単に僕が戦う理由を見失いそうになっているからに他ならないからだろうと思った。誰だつてこの世界を守るに値しないなんて思いたくない。そうならばもうリンクスではいられなくなる。

そう考えて居ると不意に車のライトが目の前を通りすぎ、馴染み深い音が聞こえてくる。

雷鳴にも似たそれは砲弾の炸裂音だ。それに呼応するようにして一機の攻撃機が甲高い音を響かせながら僕達の頭の上を通りすぎる。それは吸い込まれるようにしてコロニー大阪の郊外に広がる漆黒の暗闇に消えていった。また迫撃砲が撃ち込まれたのだろうか。僕は翼のパイロンの下に無数の大型爆弾を抱えて飛んでいくを見送

りながら考えていた。

攻撃機は視線の先で郊外に巨大なオレンジ色の花を咲かせる。雨音のお陰で幾分か音が減衰されていたが地響きのような爆音は暫く聞こえ続けていた。

「何を言われても気にしなくていい。僕も昔、主任に向いてないって言われた」

そう。それは主任がリンクスとして巣立つ最初の時にテロリストを殺す事を躊躇った僕に対して放った言葉だ。

お前は早死にする、そう言い放つ主任の冷たい声が今でも耳に残っている。だけれど、主任の予想は裏切られ僕は長生きしている。

「……えっ!?!鈴音君が!?!」

「そう、僕が。だからマヤ、折角手にした自由への切符を棄てないで。諦めなければ何時か風向きが変わってマヤの求める物に手が届くかもしれないから」

たとえそれが血だらけの自由だったとしても、たとえその言葉が嘘と欺瞞に塗れていたとしても、その先にマヤが求めた物があるかも知れない。だから前に進んで欲しい、そう願うような気持だったけれどマヤははにかんだ様に笑った。

「ふふっ、鈴音君に慰められちゃった……」

その笑顔を見つつ微かな頭痛を堪える。

そう言えば最近、あんまり深く眠った覚えが無いなと思った矢先にソレは訪れた。

——恐らくそれは、僕に訪れた最初の発作の始まりだった。

嘘は真実となる

彼女が最初に異変に気が付いたのは彼が倒れる少し前だった。頬に玉のような汗を幾つも浮かべ、手は氷の様に冷たくなっていった。

呼びかけに答える事は出来た様子ではあったが、それでも弱々しく答えるのみであり、とても正常とは言えない様子。彼の体を背負いやつとの思いで近くの宿に避難し、をベッドへ寝かせるが、彼女は再び問題に直面していた。

「……なんで、携帯電話が使えないの？」

それは緊急回線を使った本社への呼び出し専用回線だ。衛星回線を使ったその発信は通常なら切れる事は無い筈であったが、今は沈黙を保ったまま動こうとはしない。何故、と理由を探るように携帯型端末を改めて見直す彼女の目に飛び込んできた物は画面に表示された衛星補足捕捉不能の文字。

有り得ない、と彼女は心の中で叫んだ。と言うのも地球周回衛星軌道を回る通信用衛星は常時数十機は補足できるように軌道投入されており、何らかのトラブルがあったとしても予備機が有る筈。その予備機すら応答しない今の状況は言ってみれば完全なイレギュラーであつたからだ。

——核戦争でも無ければ一斉に沈黙する事は無い

そう彼女は自分に言い聞かせて、はっと気が付く。

「……まさかー！」

そう言って急いで窓際に駆け寄ると身を乗り出し外を眺める。その先に広がるのは漆黒の夜空、そして中に光る無数の火の玉はまるで鬼火が漂っているかのようにゆらゆらと揺れていた。

一際大きく見える火の玉。翼の一部と思われるそれは、グルグルと宙を舞いながら地上に落ちていくと白い雲間に隠れて見えなくなつた。

一瞬、彼女はテロリストが使う携帯型地对空ミサイルに落とされたのかと思つたが、直ぐに思い直す。

その手の歩兵が携行する携帯型ミサイルは高度4000メートル、回転翼機の限界高度よりも少し高いくらいの高度しか届かない。であれば中型の地对空ミサイルだろうか。

それも違う、と彼女は思う。

それは直観でもあったが、彼女は自身が破壊を請け負っていた静止衛星がこの状態にかかわっている事が何となく解ってしまった。

その静止衛星はGPS衛星と言う名目の要塞であり、衛星と呼ぶには全くの異質、プライマルアーマーを持った超要塞のような存在は未だ一般には知られていない様子ではあったが、その異能は十分に今の状態を作り出す事が可能であると彼女にも想わせるだけの物であった。

「遂に始まった……」

雨の中、彼女は静かに自分達の出番が近い事を悟った。

◇ ◇ ◇

マヤ達が異変に気が付く数分前、大阪湾の遙か上空に機影。それはボーイング777と呼ばれる大型の双発旅客機であり、高度一万五千メートル附近を飛行していた。本来であれば高度一万メートルが最適高度だったのだがテロの頻発によって地对空ミサイルに狙われる機会が多くなり、民間の旅客機は搭載燃料を削り飛行限界高度近くを飛行する事が日常となっていた。

気圧が低く極低温の気は音速を低下させ航空機の限界マッハ係数に影響を及ぼす為、最高速度が伸び悩む。それに加え、高度ゼロメートル地点と比べ空気濃度は一割程度しかなく燃焼特性が変化してエンジンの出力が落ちてしまう。密度の低い空気を吸い込むターボファンの推力低下も相まって大抵の航空機は運用しづらい場所であるが、搭載されていたGE90ターボファンエンジンは56トンもの推力を誇りそのお陰でボーイング777は他の航空機より無理が効いた。

だからこそ、この大型旅客機は国家解体戦争後に大量に出回った。

それは積載量に置いてても余裕が出る為であり、その余剰積載分はほぼ全てにおいてECMやESMなどの防御的電子戦装置に割り裂かれた。

そしてその恩恵は機長達には痛いほど良く分かっていた。何故なら幾ら高高度と言えども安全ではなくなっていたからだ。

不意に静寂に包まれたコックピットに電子音が鳴り響く。

「おい、レーダー警戒機が鳴ってるぞ。レーダーの種類を確認しろ」
「レーダー確認。タイプ、ビッグバード。コロニー大阪の物か？」

S300と呼ばれる旧ソ連製地对空ミサイルが用いる索敵用レーダーのコードネームを告げるとコックピットに緊張が走る。有効射高三万メートル、射程300キロの地对空ミサイルのレーダーが旅客機を捉えており、撃たれば確実に撃墜。

そう。この手の地对空ミサイルは、ほぼ全ての有翼機の限界高度以上の射高を持つのだ。

そして旅客機に照準を合わせているこの設備はコロニー大阪の持つ防衛設備の一つであり、航空機が匍匐飛行と言う戦術を幅広く行うようになった原因ともなる長射程地对空ミサイル群の一つだ。

射程300kmと言えば大阪から富士山の山頂までの距離であり、時速9000kmで飛翔してくる地对空ミサイルに対峙する航空機は文字通り水平線から顔を出した瞬間に撃ち抜かれる事になる。それでは堪らないと機長は民間機である事を示すIFFの作動を確認したかったのだ。

「ああ。そうだろう。IFFはちゃんと作動して居るな？」

副長は液晶ディスプレイを操作し、トランスポンダのスイッチを確認すると、即座に大阪空港の管制塔に無線を入れる。

『大阪コントロール。こちらノースウエスト86便、現在高度4900フィートを飛行中。貴官のコロニーの防衛設備からレーダー照射を受けている。空域を離れた方が良いか？』

『此方、大阪コントロール。ノースウエスト86便、傭兵部隊が作戦行動中だからだろう。問題ないが一応念のため、進路を3―2―5へ変更してくれ』

機長は周りを確認したが、生憎と漆黒の暗闇の中に傭兵部隊の航空機は確認できなかった。しかしESMに幾つかの反応があった為管制塔の指示に従う事にした。

『了解した。ノースウエスト86便、進路を3―2―5へ変更。速力430ノットを維持して飛行を続ける』

『良い旅を。グッドラック』

通信を終えた機長は再びレーダー警戒機からの警告音を聞く事に成る。

「今度は何処からだ？」

レーダー警戒機とリンクした多目的ディスプレイには幾つもの表示が現れた。

「方位322、距離460km。SPY-1レーダー？。旧アメリカのイージス艦か？」

「違う。あたご級だ。旧自衛隊の残党か。レーダー波が連続照射に変わった。追跡されているな……まったく、何時から空はこんなに危ない場所になったんだか」

中立の民間機でも容赦なく撃墜する旧国軍系の軍閥は幾らでも居たが、その中でも旧自衛隊は比較的穏便な組織で有った為、民間機である事を知らせる電波を発して居ればおいそれと撃ち落としはしない。

機長と副長はそう判断して、進路をあたご級イージス艦から逸らす為に操縦桿を倒したその時だった。

――バキン！

機内に衝撃。

即座に機首下げ運動を起こす機体。それを必死に操縦桿で押し戻しつつ機長が叫んだ。

「何だ今のは！機体が下がる！クソ！」

機内に鳴り響く減圧警告のアラート音。

機密されて居た機体内部の空気が何処からか漏れ出したことを示

すものだった。

一足遅れて強烈な陰圧が彼等の耳に掛かる。明らかに機内の気密が破れた証拠だったため、機長らは即座にコックピットの上方から滑り落ちてきた酸素マスクを装着する。これ無しでは僅か数十秒で意識を失う事になるからだ。

『此方、ノースウエスト86便、大阪コントロール。応答を願います!!』

『此方、大阪コントロール。ノースウエスト86便、何かあったのか?』

緊迫した様子は即座に大阪空港の管制塔に伝わる。

『機体がおかしい。何か割れる音が——いや、あれは何だ!!?』

副長が指をさした先には漆黒の夜空が広がる。

しかし、その闇夜の中に一筋の光。空から一直線に雲海へと伸びるその光はまるで極光の様であった。

『——ツ!近づいてくる!避ける!ターンレフト!ターンレフト!』

本能的に恐怖を感じ取った機長は即座に急旋回を始めたが、間に合わず翼を光が掠めていった。すると、主翼の一部がまるで鋭利な刃物で切られたかのように削ぎ落ちていった。大量の燃料が切られた断面から溢れ出すと機体のバランスが崩れ、不規則なロール運動を始めると機械音声の警告音がコックピット内に木霊する。

『何があった!?ノースウエスト86便、応答してください!』

機外には既にもう一条の光が迫る。

コックピット内に居た誰一人、管制塔に応答出来る者は居ない。

機体を傾斜させ、操縦桿を命一杯に引っ張る機長の眼前には巨大な光の柱。

『空から光が——ツ!』

照らし出された機体は一瞬にして蒸発し、大量の航空機用燃料が夜空に火球を作り上げた。焼け残った主翼の一部がゆつくりと雲海に消えていくと、レーダー上からノースウエスト86便は姿を消した。



事態は急激に進展した。それは世界各国の空を飛んでいた航空機が軒並み墜落したからだ。当初、原因不明の事態も徐々にその全貌が明らかになるにつれてあからさまな情報統制が敷かれるようになる。

当然、その情報統制に一番躍起になったのは事が大事になると利益を被る企業だ。

つまり——最も宇宙開発を推し進めている企業、それはジェネラルエレクトロニクス社であった。

「まだレイセオングループのリンクスは準備が出来んのか！」

北アメリカ航空宇宙防衛司令部内の作戦指令室に響く怒声。それは、先ほどまで紛糾していた静止衛星の暴走の件をどう事後処理するかと言う頭の痛い議題の余波もあってかいつもより大きく響く。

「落ち着きたまえ。何のためにローゼンタールに協力を依頼したか解らない訳でもあるまい」

オブザーバーとして来ていたローゼンタールの技術者を呼ぶ以外にもGEには彼等に真相を明かした訳があった。それは、かの企業がGEと同じく巨大な要塞型静止衛星群を大量に保有していたからだ。

宇宙開発の好敵手であった彼等であったが、同じ仕様の衛星群はある意味切り札に成り得た。

「だが、公然の秘密となっている衛星の基本仕様を他企業に漏らすわけにもいかないだろう。我々もローゼンタールもおいそれと戦略兵器級のコジマ兵器である軌道要塞を大量に保有していたと言う事実を公に出来ん。それが知れば批判は免れんからな。ローゼンタールも直ぐには撃墜に参加せんだろう」

ネクストの保有が企業の戦力と見なされていた時代に、密かにその先を見越してネクスト以外のコジマ兵器を大量に保有していたと言う事実が公になれば、各企業やリンクス達が反発するのは必至。

それに加え、衛星軌道上という相手を見下ろせる位置からの一方的な攻撃を可能にする兵器が持つ可能性は非常に大きかった。

「しかし、ネクストと言う時代遅れの兵器を見限るいい機会だろう。ローゼンタールもリンクスの数とネクストの保有数でレイセオングループに遅れをとっている。撃墜作戦が失敗すればネクストと言う兵器の商品価値も無くなる。当然、その兵器の恩恵を受けている企業の発言力も衰える。レイセオングループの独走を止める絶好のチャンスじゃないか」

「それでも一個人が持てる兵器としてのネクストの力は侮れんだろう。恨みを買って我々自身が狙われては本末転倒だぞ」

国家を解体せしめたリンクスの発言力は未だに健在だった。それは、彼らの不満を買ってはいけないう企業家たちの暗黙の了解として存在していた。

だが、それをあざ笑うかのようにしてもう一人の老人が言った。「ハハハハ。リンクスなんぞどうにでもなるわ。軌道上から砲撃を行えばリンクスを支援するコロニーの人間は一瞬にしてこの地球上から消え去る。勿論、リンクス共々な。かたや、リンクスは軌道上の要塞群に手出しは出来ん。猫も馬鹿ではない。力の差を示せば我々に歯向かったりはせんだろう」

彼等は十分に分かっていた。相手が如何なる場所に居ようとも何の前触れもなく一瞬にして殺傷できる兵器がもつ威力を。勿論、使う為の兵器では在るが寧ろ真骨頂はその怖さ故にある。日常が一瞬にして焼かれる恐怖は戦場に出た兵士なら痛いほど判るだろう。

恐怖は人を痛めつける。そう、文字通り物理的にである。

第一次世界大戦では何時空から砲弾が降って自身が引き裂かれるか恐怖する日常に耐えきれず数多の兵士がシエルシヨックと言う名の病を患った。

人は簡単に恐怖に屈する。企業家である彼らはそれを良く熟知していた。だからこそ、ネクスト開発ではなく軌道要塞に拘ったのだ。しかし、例外もあった。

「だが、レイセオングループの持つAI技術は我々の脅威となるかもしれない。現に、先の戦いで散々我々の戦術部隊を単騎で蹴散らした暴走AIを破壊したのは例のネクストに搭載された新世代型AIらし

いじゃないか」

「ふん。只の安物セクサロイドに我々のネクストを含む一個戦術部隊を壊滅させられるなど前代未聞だ」

苦虫を噛み潰したように言葉を漏らす男。リザと呼ばれた第七世代型A Iは文字通り彼等にとつては異質な存在であった。彼我の物量差をあざ笑うかのように敵の兵士や兵器を我が物とし、それを操りまた新しい手駒を増やしていく様子は新種のウイルスのようであったと、愚痴を零す男はある意味でG E社の殆どの人間が無意識に思っていた事を言ったのであった。

「それだけ新世代型A Iには兵器としての可能性が有ると言う事だ。それに比べ我らのA I技術は遅れている。この差は憂慮すべきだろう。であるならば、今は軌道要塞の件を世界に知られる事態は避けねばならん。手を考える必要がある」

そう言った老人の後ろから一人の男がぬらりと出て来る。

「——手はごいいますとも。私にお任せください」

まるで道化のように一礼をすると彼は眼鏡をくい、と上げる。

「頼んだぞ。手段は問わん」

「ご望み通りに。人の心は低きに流れる物。解り難い真実より、もつともらしい嘘の方が魅力的に映るものです。堕ちた航空機はテロリストが墜落させた事にしましょう。もう手はずは整っています。後は笛吹きを待つのみ」

慇懃な態度を崩さない男はそうして颯爽と部屋を出ていった。

そうして、地上最悪のテロ集団の名はでっち上げられる。

後の最悪の反体制勢力となるその組織を、人々はこう呼んだ。

——
リリアナ

こうして嘘の歴史は真実の歴史を塗りつぶしていく。
いつの世も変わることなく永遠に。

七番目の天使 / 七つのラツパ

夕闇に包まれた滑走路に灯る光、それに照らし出される巨体は七つ。

その体は滑らかな黒い光沢に覆われておりまるで蝙蝠のような形をした羽を生やしていた。黒と言ってもざらつく表面を走る無数の筋はまるで繊維の様に沸き立っており、生き物のようにも見えた。だが鼻を衝く焼けた臭いはオイルと蒸気が混じった物。明らかに熱機関の心臓を持つ黒い鳥は排気タービンと潤滑油が混合されて燃焼された排気ガスは辺り一面吐き出していた。機体に電力を供給する為にAPUから撒き散らされる排気タービンの甲高い騒音と排気に塗れながら作業員が機体の最終チェックを行っている。

先程から入って来る無線のやり取りには緊迫した雰囲気は漂っており、世界各国の旅客機はテロを警戒してる様子であった。静止衛星軌道からの砲撃の件に触れる物は未無であり、それは一重に企業連の情報操作が的確で迅速だったからだろう。

正しく企業の対応は慣れ切っていた。そう——まるで初めからこういった事態を想定してたかの如く。

「こうも情報操作が上手く行くと、老人たちも想定していなかっただろうな。レーザーって言うからもうとこう派手に空から撃ちおろされて来るモノだと思ったが」

「目標のレーザーは大気拡散率が少ない波長の光を使って対象にエネルギーを収束させている。だから目撃情報が無いんだと思う」

ノーマルACや地上攻撃機、戦車などが搭載している高性能赤外線暗視装置であつたら見えたかもしれないが、生憎と旅客機にはそう言った類の物は付けられておらず見える事は無い。但し、レーザー光が空気中の水蒸気に衝突してプラズマ化すれば或いは見えただろうが。

「まさに、不可視の死神だな。そんな物をぶっ放してくる相手に勝てるのか？」

「勝たなければ死ぬだけだ。是非もない」

勝てば生き残る。

負ければ死ぬ。

簡潔明快な戦場の法則。

それは、戦場に降る兩位に当たり前の物。

「だが、死ぬ気は毛頭ないんだらう？」

不敵な笑みを浮かべるトーコ。

まるで全てを見通すかのような瞳。

言うまでもない、と彼女の言葉に無言で頷く。

そうしてマヤの機体に接続されているノードにコードを打ち込んでいくと、データリンク越しにアリスの声が脳髓に届く。

『当該システムの解析を完了。Y O I — T E L L U S、接続確認。T 2 データリンクシステム起動……統合制御体との安全な通信プロトコルを確立しました。制御用パーセプトロンの全配列を認識、チューニング開始します』

150兆個にも及ぶ膨大な疑似ニューロン、シナプス接続群の配列を一瞬にして読み取ったアリスは事も無げにAIの心臓部である深層学習機構に新たな叡智を収斂していく。

光の速度でスクロールするデータログは最早意味を成さない。

そう、これが人の限界。

人間の脳神経は数十ヘルツでしか駆動出来ない。周波数はそのままパーセプトロンの意味付けに重みを与える物であり、この数字は有機系処理ユニットとしての演算性能と対となっていた。

だがアリスの脳髓には量子を用いた演算ができるパーセプトロンが用いられており、それは10億ヘルツ以上もの動作クロックを持っている。

量子パーセプトロンを用いたAIが全人類の知能を超えたと言わしめたのは、この恐ろしくも高速な疑似ニューロンが人の脳と全く同じ配線図を用いて設計されているかに他ならない。

たかだか数十ヘルツのクロックで人と言う種に叡智を与えたコネクトームのデザイン。人類種が数多の生命を絶滅の淵に追いやった歴史はコネクトームに力を与えた。生存競争で実戦証明され続け、洗

練されたコネクトームはAIの血肉となった。だからこそ、人類が持つ可能性を最大限に引き出したAIが神の如くの叡智を手に入れたのは必然であった。

そして神の如き叡智を手に入れた彼女が処理しているタスクは、全人類が総出で掛かっても一年以上を要する物だった。それを秒単位で熟しているのだ。アリスを監視するシステム用データログが張りぼてに成り下がるのも道理。

それは人類と機械の間に存在する途轍もない溝を示すかの如くであり、生き物としての違いを如実に表していた。その様子を見つめて居ると不意にズキリと頭の隅に差し込むような痛みが走る。

しかし、直ぐにトーコの声が聞こえた為、それを振り払った。

「ブラックボックス深層学習機構を解析するブラックボックス深層学習機構か。人の入る余地は無さそうだな」

深層学習機構がブラックボックスと呼ばれているのは、構成要素が余りにも多過ぎて、人間にはAIの脳である深層学習機構が何故その行動を起こしたか見る事が出来ないからであった。

それは正しく観測不能な黒い箱であり人間の脳髓と全く同じであったが、アリスにはその構成要素全てが把握できた。だから僕等はこうやって汎用型AIを簡単に意のままに調整できるのだ。しかし、命令が正しく伝わっているのだろうかと言う根源的な疑問が付きまとう。そこら辺はドーパミンニューロンを介す特殊なAMS適性を持つリンクスに丸投げされる所では有るのだけれど。

「ブラックボックスを覗けないのは仕方ない事。だから直接覗けるAIにAIの構造を翻訳してもらおう。僕の仕事は翻訳された情報を信用する事」

「そう言えば、その第七世代型AIとやらは人間の脳髓もチューニング出来るんだったな？とどのつまり、人間の脳髓もまたブラックボックスに過ぎないと言う訳か。だが——アリスが君に齎す感覚情報を歪めて伝えているかもしれないぞ？お前を騙す為に。現に、その翻訳能力が人の意思を操る力に繋がるのだろうか？」

騙す、と言う言葉に何処か引つ掛かりを覚えた僕は、かつてリリ

アーヌが言った言葉をトーコに返す。

「トーコ、僕等は皆電気信号で外界を認識している。その電気信号が偽物なのか本物なのか解らないのと本質は変わらないよ。人間の脳はただ、外界から齎される電気信号を分類しているにすぎないから。普通、人は五感から齎される情報を疑う事は無い。目に見えた物を疑っていたら、この世界は虚構に過ぎないと認める事になってしまいうから。でもそれはAIの言葉を信用する事と同じ程度の事だと僕は思う」

「成程、脳自体に外界認識能力は無い、だから瓶詰めされて居ようが、機械に繋がれて居ようが変わらず電気信号を送り込まれた人の脳はその何れの区別も出来るハズも無く、後は信ずるか拒絶するかの違いのみ、か」

目の前を整備用ドローンが通り過ぎていくのが見える。

脚部に取り付けられたロードホイールを軽やかに繰り、棺に入られた灰色の塊を持っていくと手近な整備台の上に置くとすぐさま違う場所に走っていった。

「そう。だからソレを信じれなくなった有機的、無機的生命体は罠に陥る。それが軌道要塞に搭載されたAIが陥った罠。だから制御不能になった」

いくら安定性が高いAIでも、外界からの刺激を疑うアルゴリズムを学習してしまえば結果として全ての制御を拒絶するようになる。

そして、その質感に馴染みがあったのか思いの他トーコは飲み込むのが早かった。そう言えば彼女からはリリアーヌと同じような匂いを感じた。理由は解らなかったけれど。

「AIが哲学的ゾンビの罠にはまり、人だけが自身の唯一性を信じ続ける。とんだ笑い話だ。だが————木乃伊取りが木乃伊にならんでくれよ？お前まで頭がおかしくなってしまうたら、私は失業してしまうからな」

何時の間にか眼鏡をはずしていたトーコは喋り方が少し変わっていた。

「大丈夫、僕には守護天使が付いているから」

そう言いつつ僕はチューニングが完了した旨を伝えて来るアリスの声に耳を傾けるのであった。

◇◇◇

撃墜作戦は予定を繰り上げて実施されることが決定された。既に地上ステーションの準備は終わり、ネクストの準備は整いつつある。整備用野戦ハンガーは簡素なシートが上に被さっただけの物であったが、衛星軌道からネクストを隠匿できるように入念な偽装が施されており、それを覆う擬装用ネットは対赤外線^{I_R}、対レーダー波に対するステルス性を確保している物であった。

そのハンガーから伸びる管はネクストから排気されるAPUの排気ガスを通す物であり、それは地中配管を通じて空港の外にある大型施設に続いていた。何かの作業所に偽装されたそこには熱交換機が運び込まれており、どうやらそれで水を使った冷却を行ってからAPUの排気ガスを大気中に放出するようであった。

「作戦を確認します。今回の作戦目標はジェネラルエレクトリック^E社製軌道要塞、ヒュペリオン^{マークワン} Mk1の撃墜です。同要塞はGEヨーロッパが製作を手掛けた初期のコジマ兵器です。同系列の衛星がローゼンタールや他社の衛星として採用されており、高い戦闘能力を持っています。今回の目標を、同社の開発コードネームであるA^{アームズ} F^{フォート}と言う名前をそのまま流用します。ですので、以後、目標をアームズフォートと呼称します」

ディスプレイに映し出された写真は一度目に見た物と明らかに違った。長大な砲身は相変わらずだったが、今回の写真にはその横に幾つかの砲身が見えていた。追加の武装だろうかと思う間もなくキャロルが説明を続ける。

「目標のアームズフォートは800mm電磁投射砲一門、高出力レーザー砲一門、及び各種迎撃システムを装備しています。今回の作戦で最大の障害となるのは800mm電磁投射砲です。この主砲は重量6トンにも及ぶ弾道弾迎撃体を秒速30キロメートルもの速度

で撃ちだす兵器であり、ネクストのプライマルアーマーと複合装甲を一撃で射抜く力を持っています。ですので、敵レーザーよりもこの主砲の回避を優先して作戦を立案します」

再び画面が変わると太平洋艦隊の写真が映し出された。空母を主体とする機動部隊は多数のアーレイバーク級イージス艦を伴っていた。

「アームズフォートのレーザー砲は航空機にとっては最大の脅威です。しかし、彼我の距離と砲の出力を勘見した結果、ネクストを撃墜するに至らないと考えます。ですが、センサー類などを破壊される可能性を加味し、弾道弾迎撃ミサイルによる一斉飽和攻撃を敢行します。これにより、敵電磁投射砲の誘引も行い、ネクストの被弾確率を低減させ到達率を高めます。ですが、用意できるGBIには限度があります。ですので、ネクストには別の傘を用意しました。それが、アーレイバーク級イージス艦が持つ迎撃ミサイルです」

弾道弾を改造した弾道弾迎撃ミサイル、それはかつて平和の使者と呼ばれた多弾頭型核ミサイルだった。それを流用したのだろうか、核開発競争の成れの果てを使い果たさせるアームズフォートの迎撃率の高さは何とも言い難い。企業間の相互破壊保証を粉々に打ち碎いたこの獣は次の戦争を予感させるには十分であった。

———こんなもので空が埋め尽くされていたなんて

身震いとも鳥肌とも言い難い物が走り抜ける。

「アームズフォートの発射する弾道弾迎撃体は非常に高密度な合金でできています。その為、幾らイージス艦で迎撃したとしても完全に破壊出来る確率は限りなく低いと予想されます。ですが、同砲弾の自立誘導機能を破壊する事は可能だと我々は判断しました。それによってネクストが回避できる確率を可能な限り上げることが出来ます」

写真が変わり巨大な棒の様なもの映し出された。スラスタの類だろうか、穴が無数に空いており翼安定徹甲弾からフィンを取り除

いたような見た目であった。

「ですので、作戦行動予定範囲にイージス艦を配置しました。これによって高度2000km程までならアームズフォートからの物理攻撃を防ぐ事が出来ます」

敵アームズフォートは鉄壁の防御に最強の槍を持っていた。だけれど、疑問が残る。

「二つ質問したい」

「何でしょうか」

「何故、ローゼンタール系の同型衛星が援護射撃に加わらない？」

最強の槍を持つ衛星群が他に居るならそれで破壊すれば話が早い。だが、それをしないのなら何らかの理由が有る筈だった。キャロルは暫く沈黙した。

「——鈴音、私達は試されているのですよ。ネクストを操るリンクスとして。そして企業は確かめたいのです。次世代を担う兵器規格がどちらに成るかを」



白亜紀に存在したケツアルコアトルスのような鋭い翼を伸ばし、機械とも生物ともつかないバイオパーツが犇めく体をトレーラーに引かれ、それは係機場からゆっくりと滑走路へと移動した。

発進待機命令が下った飛行場は整備員たちが忙しなく行き来しており、彼等にとつては今がまさに正念場と言った所だろう。

——出撃まであと10分

そう、これは始まり。

ネクストと超要塞兵器との、雌雄を決するときの始まりである。

神の杖

仄暗いコックピット内はジェネレーターから流れ込んで来る共鳴音だけが支配していた。

漆黒に塗りつぶされた人工筋肉に包まれた強化スーツに身を包んだパイロットであるリンクスはひたすらその時を待つ。

だが、彼には考えなければならぬ事があった。

それは目標となるアームズフォートがどうやって衛星軌道上から地表を飛行する航空機を識別したかと言う事だった。

偵察衛星のような高度数百キロの場所にあったのなら赤外線での探知も可能だっただろう。或いは目標が多量の赤外線を放つ弾道弾であれば更に光学装置による捕捉は楽である筈だ。

しかし、聞くところによれば被害に遭った航空機はどれも旅客機であり、ロケットなどよりも排熱が非常に少ない部類の目標物であった。何より撃墜された航空機の上空には雲が存在していた事も事前調査で明らかになっていた為、どうやって目標を選定して捕捉したのかいまだに不明だったのだ。

赤外線は水蒸気に吸収されやすい。雲は水蒸気の塊であったから捕捉したのならレーダーの類だろうと彼は思っていたが、彼等の手元には敵が射撃直前までレーダーの類を使っていなかったと言う情報が出ていた。

つまり、アームズフォートは撃ち始める前には既に目標を捉えていると言う事であり、レーザー照射の修正射撃にのみレーダーを用いていた事を示していたが、それは有り得ない事であった。

そもそも、数万キロメートルと言う途方もない彼我の距離はレーダーでの捕捉も困難にした。一般的なレーダーはアンテナ特性と目標のRCSが一定なら距離が二倍になれば必要なレーダー出力は16倍に跳ね上がる。

つまり、彼の目標のアームズフォートはアーレイバーク級イージス艦が誇るSPY-6、探知距離1100 km程の新型レーダーの数千倍以上もの高出力レーダー波を照射して居なければならぬ筈であっ

た。

そんな強力なレーダー波を放射すれば一瞬でネクストやその他のイージス艦が持つ電波警戒機に反応が有る筈であったが、それらの反応は未無であった。それを踏まえ改めてオペレーターに問う。

「キャロル、目標のアームズフォート、まだ隠している機能があるんじゃないのか？」

『GE社からの回答は前回開示された物で全てでした。ですが、彼等が我々に隠している機能が目標のアームズフォートにあっても別段おかしなことでは在りません。我々と彼等はある意味ではライバルと言えなくも無いですから』

ネクスト開発に重きを置くレイセオングループと通常兵器、とりわけ大型兵器開発に対して積極的なGE社。

両社はある意味で違う道を歩む巨大企業であったが、今回の作戦を契機とその二種の兵器のどちらが優れているか見極めるいい機会と、彼等が様子見の為に意図的なサボタージュを行っている可能性もあった。

現に、それ以外の企業も今回の騒動に無関心、或いは軌道上の兵器を投入してまで対抗しようとはしていなかった以上、そう言った姿勢はどの企業に対しても言える事であった。

政治に興味が無かった彼は特段思うことも無かったが、地球を汚し尽しても逃げる場所を作れそうな連中が舵取りをしているこの世界は、とつくの昔に絶滅の道を歩んでいたのだろうと独り言ちる。

「企業の考える事は大体予想はつくけど、今は目標のアームズフォートがどうやって索敵しているかちよつとでも情報が欲しい」

『解っています。こちらで掴んだ情報は逐次、上げますので心配しないでください。本来であればもう少し万全な状態で望みたかったのですが……』

そう言った彼女の言葉の裏にあったのは時間切れの印である通信回線の混乱にあった。

危うい均衡を保っていたアームズフォートに搭載されたAIがついに暴走を始め、目に付いた目標を片っ端から撃墜し始めたのだ。

それによつて世界中の衛星回線は遮断されてしまい、地上の通信回線さえその余波によつて混乱が撒き散らされていた。世界中を取り巻いていた衛星回線を使っていた企業軍の通信網の大半が一般回線を使うようになった影響で、それ以外の一般市民がネットワークから締め出され始めたのだ。

これだけ事が大きく成れば、これが只のテロでは無いと気が付き始めた者が出現するのも時間の問題だった。

何故なら世界中を飛ぶ航空機の殆どを飛行禁止にする訳にも行かなかったからだ。

そうするには理由が必要であつたが、全ての地域で航空機を自発的に乗らないように仕向けるのは幾ら大企業と言えどもそう簡単では無かつた。

だからこそ早急に事態の収束を望んだのだろう、と彼は思ったがマヤと呼ばれるリンクスにとっては十分な時間があつたとも言えなかつた。

そもそもが、彼女は新米のリンクスであり彼にとってはその彼女が何故今回の作戦に参加する事になつたのか甚だ疑問だった。

「マヤには時間が足りなさすぎる。彼女が選ばれた理由、そろそろ教えてくれても良いと思うんだけど」

キャロルは少しため息を付くと事の顛末を離し始める。

纏めるならば何のことは無い企業同士の駆け引きだったのだが、仲が良い二人の関係を考えるとキャロルは真相を話す事に対して重い気持ちになる。

『彼女は、我々が出した協力するリンクスの条件である、最も高いA.M.S適性と言う項目を満たしていたのです。マヤは特異体質なのですよ、鈴音。脳の伝達物質の枯渇が異様に遅い。シナプス強度が我々の予測していた理論値を20%程上回っていました』

各企業の子飼いのリンクス達の素性は伏せられている。それは、リンクス達がテロリストなどに狙われる事を防いでいたのであるが、その中でも特に重要度が高いのがやはりA.M.S適性だった。

先天的な能力であるその力は後天的に伸ばすことが絶望的なのだ。

だからこそ、その数値は名前や性別以上に伏せられている事が殆どであった。

そして、その情報を簡単に開示されたと言う事実は、ある意味で雇い主であるAEGグループのマヤに対しての関心の低さに他ならなかった。

しかし、それを置いても彼女の数値は目を見張る物があった。

そう言えばと彼は思い出す。

「成程。だからシユミレーターのサージ電流に耐性があったのか」

被撃墜を知らせるサージ電流は、普通のリンクスなら数分間上手く歩けなくなるくらいには効く筈であった——が、彼女は嘔吐だけで済んでいた。

成程と彼は思ったが、レイセオングループが彼女を選んだ理由を考えかけて思考を止める。

今考えるべきは企業同士の駆け引きの事ではない。生き残る事、唯その為だけにリソースを裂くべきだと考えを改める。

『何も無ければ宇宙に行くことは容易いでしょう。ですが、彼女自身の体質と戦闘能力は比例して居ません。何らかの予期せぬトラブルに対応できるとは思えません。いざとなったら鈴音、貴方だけが——』

キャロルが続けようとした次の瞬間、基地内にサイレンが響き渡った。

何が、と言う間もなく基地防衛設備の一つである地对空ミサイル群のうちの一つが火を噴いた。

旧ロシア製の対弾道弾迎撃にも使用可能なSAMの一つは東の夜空にオレンジ色の輝きを巻き散らしながら上昇していく。

東の空を幾つもの火の玉が流れ落ちていくのが見える。

『各班！緊急発進』

!!!急いでネクストを離陸させて!!!

キャロルは間髪入れずそれを衛星軌道上からの攻撃と悟り、ネクスト部隊の発進を命令した。

仄暗いコックピットの中でその声を聞いていた少年はレーダー警戒機が反応しなかった事を訝しんで一人囁く。

——奴は一体、どうやって僕等を認識しているんだ

その声は緊急発進シークエンスを開始した旨を伝えるアリスの声にかき消されていった。

◇◇◇

軌道上から幾つもの光が降り注ぐ。

極超音速のスピードで落ちて来る重金属は空気抵抗を受けながら熱圏へと突入すると、凄まじい減速加速度を受けて高温の火の玉となった。

一般的な核弾頭のノーズコーンはこのような高熱に耐える為にカーボンマテリアルを炭素で補強した素材をアブレーターとして機能させて耐えるように出来ていた。

これらの素材構造は極めて技術レベルが必要な物であり、弾道弾開発で最も難しい部分でもあった。

一般的な衛星に比べ非常に高い突入速度と、突入角は構造体に致命的な応力を簡単に発生させ得る。

現に、弾道弾は高度一万三千メートル付近で最も強い空気抵抗を受ける事に成り、減速時には造体に重力の五十倍以上もの応力が掛かるのだ。

これによって弾頭は簡単に破壊され、核弾頭としての機能を消失させえた。

だが、今落ちて来る重金属の侵徹体は高ロフレッド軌道を取るICBMよりもはるかに速い速度で落下してきていた。

『なんて——速度！』

既存の技術では説明がつかない突入速度はある疑念を抱かせるに

は十分であったが、その疑念は確定に変わる。

『警告、リエントリール・ヴァイクル R V 先端部にコジマ反応を確認』

急速に加速しつつ落ちて来る重金属体は熱圏に突入しても尚、空気抵抗に打ち勝ち加速を続ける。

『迎撃間に合つて！』

落下しようとして落ちて来るR Vは、弾道弾迎撃ミサイルが対応できる限界速度を超えていたが、それでも到着地点と同じ場所に撃墜可能なミサイルがあつた事で辛うじて命中弾を得ることが出来た。

秒速30 kmの物体を秒速数キロメートルの物体で撃墜する。弾丸が止まって見える程の速度は、そのまま迎撃確率を激減させるだけではなく、分離した破片すらも凶器とさせ得た。

滑走路の上空でアームズフオートが発射した侵徹体は地上から発射されたミサイルに搭載されていた運動エネルギー^K弾頭の直撃を受け、八つに分離した。

それがそのまま発進待機中のネクスト部隊の周囲に降り注いだ。凄まじい運動エネルギーは地面を掘り返す。

まるで爆薬が地面に埋め込まれていたかの如くアスファルトが剥がれて舞い上がるが幸い、主滑走路は無事。

だが、それも何時まで持つか解つた物じゃない。

立ち上がっていないアークジェットエンジンに歯噛みしつつ、エクシアの電気系統にエネルギーを流し込む。

「早く起きろ、エクシア——」

明らかな宇宙空間からの狙撃に肝を冷やししながら周囲に居た整備員たちは退避を開始する。

本来であれば動き回る整備員が焼かれないうるぎを回さなければならぬ筈であったが、エクシアの排気を受け止める為のジェットブラストデフレクターが持ち上がっていた為、気兼ねなくエクシアのエンジンの出力を上げられる。そう考えつつ更にエクシアのエネルギーラインに出力を振り分けると、遂にアークジェットエンジンから青白いプラズマトーチが吐き出される。

それを後部カメラで確認していると大気を勢いよく吸い込み始め

た過給器から甲高い音が響き始めた。

『整備員は直ちに退避！ネクストを上げるぞ！安全装置の抜き忘れが無いかに注意しろよ！』

予め武装の類から安全装置は取り払われていたが、それらが外れていか手早く確認していく整備兵達。

その横では続々と基地周辺の地对空防衛設備から迎撃ミサイルが発射されていく。そうしてそれらは次々と落下してくる侵徹体に吸い込まれていった。

再び周囲に破片が降り注ぐと、その一発が空港の管制塔を粉々に破壊した。

一瞬、キャロル達の身を案じたが、そう言えば彼女は地下指令設備に籠っているのだったと思ひ出し、胸をなでおろす。

『鈴音！地上整備員は全て退避完了しました！直ぐに上がって！』
「了解」

そう頷ぐが、既に空港は混乱の渦に巻き込まれた。

待機場から勝手に動き出す航空機とそれと衝突して立ち往生する旅客機が誘導路を塞ぐ。

インターセプトする為に誘導路を移動していたロシア製の戦闘機は立ち往生していた。

それを尻目にジェットブラストデフレクターに勢いよくプラスマブラストを打ち付けると甲高いタービンの音がジェネレーターの共鳴音を掻き消していく。

「こちらキャンサー1—1、ヴェネラ2—2、離陸準備は良い？」

マヤのコールサインを呼ぶと彼女は慌てて無線に答える。

『こちらヴェネラ2—2、離陸準備完了です！でも、滑走路のデフレクターが邪魔で前に進めない———』

管制塔でコントロールしていたデフレクターは後続機の障害物となっていた。

地上整備員が全て退避した今、必要無かった。

「問題ない、此方で下げる———アリス、デフレクターのコントロールデバイスにアクセス」

ネクストに搭載された超電導レーダーアレイから発信される様々な波長の電磁波が、地中に埋まった電氣的回路に電位を発生させると、共振現象によって複雑な電磁パルスを返してくる。

それらの電磁パルスは再びレーダーアレイで受信されるとアリスが画像化し、回路の機能を読み取る。

『了解。非常時につき友軍設備への非正規接続を開始します。管制塔の破損を確認。個々のユニットへの直接接続を試みます。地中に油圧制御デバイスを確認、油圧モーターユニットに命令を入力』

制御デバイスと此方のレーダーアレイとの間にサイドチャンネルを確立した彼女は即座に制御デバイ스에命令し、アクチュエーターに信号を入力すると巨大な鉄の板はゆっくりと倒れていく。

「キャロル、プライマルアーマーの使用はまだ許可されないのか？」
戦場と化した空港は落着いてくる再突入体の衝撃波によって無数の破片が舞っていた。

それに叩かれて重要なパーツが破損したら作戦処ではなくなる、そう思って彼女を急かす。

『コロニーの代表からこの空域内では使用させることはできないと通達が有りました。彼等は事情を知りません。今回はパイロットの裁量に委ねます』

つまりはセルフサービスでどうぞ、と言う事らしい。

『警告、敵レーダー照射を確認。タイプ、超大型フェイズドアレイ。再突入体の落着予想地点を表示』

見事にネクストと一致する落着ポイント。恐らくは弾着確認を行っているのだろう。

「狙われているか。各機、プライマルアーマーを展開。キャンサー1-1、離陸開始。早く上がろう。地上に居たら幾つ命が有っても足りない」

『りよ、了解！』

コロニー大阪を汚染する可能性があったが離陸できなくては本末転倒である。それに即座に離陸して空域を離れられれば汚染は最小限に止められる。

極めつけが敵砲弾に搭載されていたコジマ技術だ。もめ事になるにしてもどうせ、後でPAを使ったんじゃないかと勘繰られるかもしれない。だったら初めから使った方が良さそう。そう思い切り、機体周囲にPAを展開した。

エクシアの周囲に緑色の輝きが撒き散らされると機体からは巨大なプラズマトーチが吐き出され、急加速していく。

『敵再突入体の到着まであと1分30秒』

離陸し終わるまで間に合いそうだ、そう思いつつ急激に機体が加速していくのに身を任せると正面に巨大な旅客機が侵入してくる。

『前——』

マヤの叫び声。同時に誘導路から強引に割り込んできた大型旅客機は滑走中のエクシアの前に飛び出そうとする。

離陸が間に合わない——！

そう思った矢先、滑走路に侵入する直前にその旅客機は巨大なスライサーによって真っ二つにされた。

まるでギロチンにかけられたかの如く、機首を切り落とされて誘導路で炎上し始めた。

その横には一条の光の線。

その線は真っ直ぐにこちらに接近してくる。

『警告、敵レーザー照射を確認。地上到達出力、推定2.3 MW^{メガワット}。防護可能レベル』

『キャンサー1、このまま突っ切る！気にせず離陸しろ！』

『りよ、了解！』

アリスの声を信じて突き進む。

レーザー光は先頭のエクシアを捉える。AMSから流れ込んで来る視界が光に包まれた。

ある程度プラズマ化したレーザー光はPAに干渉すると最後の力を振り絞り機体表面の装甲を熱した。

『機体温度上昇、装甲表面温度、許容値内。装甲値低下、確認できず』

『す、凄い。あんなに威力のあるレーザーを防いでるなんて……』

マヤは自社の装甲技術が信じられないらしい。

「流石はレーザー兵器の大手企業。装甲材も優秀」

複合装甲と温度分散機構のお陰で機体表面が溶ける事も無く離陸していくと、遂にアームズフォートはレーザーによる撃墜を諦めたのか極光は消えていた。

『ヴェネラ2ー2、離陸完了。無人機も続いています』

火に包まれた空港の上空を巨大な翼竜が列を成して飛んでいる。

あの様子だと地对空防衛設備も大部分が破壊されたのだろう。

忙しなく迎撃弾を上げていたSAM部隊も今は不気味な沈黙を保っていた。

「全速で空域を離脱する」

そう言った矢先、主滑走路に灼熱の火球が出現した。

それは夜空に垂れこめた低い雨雲をオレンジ色に照らし出すと、辺り一帯を真昼の様に照らし出す。

土煙と共に舞い上がる粉塵は何処までも登っていく。

『大阪支部の地下要塞に居て助かりました』

キャロルがデータリンク越しに今の画像を見ていたのだろう。

そう呟くのを聞きながら僕は思った。

迎撃不可能に近いこの兵器は何処までも次の戦いの行方を見せつけていた。

———これからの戦場はもつと長距離の戦いになる

それは予感では無く確信に成りつつあった。

嵐の夜に

雷鳴の如く鳴り響く轟音は強烈な閃光を放つ。

それは、夜の雲間を明るく照らし出すと幾つもの機影を浮かび上がらせると幾重にも分かれて海へと落ちていった。

それだけを切り取るとまるで世界を終わらせる隕石が幾つも地表に降り注いでいるかの如くであった。

重金属を多量に含んだ雲は通常の雲よりも多くの静電気を発生させていた為、この雷鳴の中には本物も幾つか混じっては居たが、アリスの感覚情報からはそれらの情報はオミットされていた。

恐らく脅威度が低いノイズとして処理されたのだろう。彼女達A Iは割とこの手の情報の振るい分けを行う事が知られていた。自身に脅威の無い情報には余分なりソースを裂かないのだ。

それに不満はないが、航空兵でもない限り積乱雲の中を覗く機会に恵まれるのは稀である為、若干残念な気持ちになる。

だけれど、今はそれどころではないと言う事も解っていた。

そう考えつつAMSから齎される感覚情報に意識を集中させると、脳髓に直接アリスの声が聞こえてきた。

『太平洋艦隊の迎撃率低下。予想値30%以下。再突入体の接近を検知。熱圏に突入まであと30秒。回避を推奨』

GE社の誇る太平洋艦隊のイージス艦が放つ迎撃ミサイルのつるべ撃ちをすり抜けたアームズフォートの巨大電磁投射砲の再突入体が接近していた。

恐らくは彼等が展開している電子戦が思った以上に効果が上がっていないのだろう。

それを踏まえるともこのまま遊覧飛行を続けるわけにもいかない。VOBの点火はコロニー大阪を汚染しない太平洋上を予定していたが、この際気にして居られない。

「予定より早いけど、ネクストの分離とVOBの点火をくり上げる。キャロル、そっちは問題ない？」

『問題だらけです。が、この際仕方ありません。VOB点火のタイミ

ングを早める事を許可します。軌道調整は此方で行いますが、点火のタイミングは其方で決めて下さい。回避しながらの点火となりますが、後は鈴音、貴方の判断に任せます』

「解った。それより太平洋艦隊の電子戦部隊、どうなっている？まるで効果が無いみたいだけど」

そう言いつつ、空から降って来る再突入体の予想進路から機体航路を変更する。エクシアを右にバンクさせると自然と進路が右へとズレる。

現在の機体速度はマッハ1.6程度。弾着まで数十秒は有る為、余裕で避けられるはずだ。勿論、それは無誘導兵器相手に限られるが。そう思っているとキャロルが答える。

『GE社とレイセオン社の電子戦部隊が全力でジャミングを仕掛けていますが、どういう訳かまるで効果ありません。高度なECCM能力を持っているようです。しかし、此方のジャミングの出力から考えるとレーダーによる索敵は物理的に制限される筈ですが……』

電子戦部隊が照射している電波出力は相手のアンテナの利得を塗りつぶす、極めて原始的なECMであった。

強力な磁場を受けると例え違う周波数の電波帯域を使っているアンテナでも感度が下がる現象が起こる。

携帯電話の基地局の近くで阿保みたいにドローンが落ちるのがその証拠であったが、軍用のジャミングは携帯基地局よりも遥かに高出力な電磁波を送り込んでいた。

それこそ、静止衛星軌道上のロブスターが一瞬で茹で上がる位には高出力なエネルギーを照射しており、それを妨害突破する事は在り得ないと言っても良かった。

「相手の手品の種は未だ解らない、か」

そう呟くと先ほどの懸念通り、落ちて来る再突入体は誘導機能を持っていた様だ。

アリスが警告を促す。

『警告、再突入体の進路変更を確認、弾着予想地点、此方の進路上。推奨、回避』

ま、それもそうか。距離が遠すぎて無誘導兵器じゃ船にだって命中させられないのだから、誘導機能を付けるのは当たり前前的事。

そう割り切って考え、再び進路を変える。ミサイルの避け方と同じである。敵のミサイルに軌道修正を何度も強いてエネルギーを損耗させて振り切る。

しかし、戦闘機同士の戦いでは定石の手も今回は気休め程度にしかない。何故なら落下物の運動エネルギーが桁違いであったからだ。

幾ら軌道変更しようとも秒速30kmで落ちて来る物体のエネルギーは無くなりようが無かった。

これが地对空ミサイルなら空気抵抗の大きい超低空に逃げ込むと言う手段が使えたのだが、致し方ない。

「アリス、曳航型デコイを展開。電子用意」

AMSでアリスに命じる。彼女は直ぐに意図を悟る。

エクシアに搭載されたポッドから長いひものような物が機体後方に伸びていくと丁度その先端には安定翼が突き出たアンテナユニットが格納された膨らみがあった。

そこから敵アームズフォートが照射している照準用レーダーのエネルギーを真似た電波を発信する。

これによって敵はエクシアから帰って来るレーダー反射波をノイズと勘違いして、デコイの方へ再突入体を誘導する羽目になる訳だ。

航空戦では十八番の欺瞞装置であったが、まさかPAを持つネクストがそれを使う羽目になるとは思ひもしなかった。そう思いつつAMS越しにアリスの仕事を見守る。と言っても目は閉じていたが。

『了解。電子戦用意。ECM、ECCM起動』

アリスは素早く敵レーダー波が来るタイミングとデコイのアンテナユニットから発信される電波をシンクロさせる。実際には電子戦オペレーター数人がやる作業を一人でこなしていた。

彼女の持つ膨大な知識と今までの電子戦での経験が合わさって初めて可能となる物だ。

人は戦いに恐れをなすことで平和を求る。

現に、今まで三度目の大戦が起きなかったのがその証拠であった。互いに世界を何度も滅ぼせる力を持ちつつ、その力に畏怖し、その結果として核保有国同士の直接戦争を避けるようになった。

その結果、長きにわたる大戦の悪夢から人々は解放された。

けれど、用済みになった核ミサイルは、その平和の終わりを象徴しているようであった。

キャロルもそれに気が付いたのか暫くの沈黙を続けるが再び口を開く。

『核の使用も提案しましたが、却下されました。企業側はやはり事の露見に敏感になっています。アレが落ちてくれば人も企業も破滅すると言うのに呑気な物ですね』

彼女にしては珍しく感情をあらわにした様子に若干の驚きを隠せなかった。思う所は色々有るのだろう。

『どうせ、空気が無いんだ。爆発したってエネルギーを伝える手段がない。精々、放射線をばら撒いて終わりだろう。プライマルアーマーには中性子を遮蔽する効果があるから大したダメージも期待できないんだ。仕方ない』

そう言いつつネクストに接続されているエクシアの神経系に高度を上げるよう命令を入力する。

複合サイクルアークジェットが甲高い音を奏でて巨大なプラズマトーチを吐き出すと急激に機体が加速していく。

レーダー警戒機の警告音が断続的な物から連続的な物に変化する。恐らく最終調整に入ったのだろう。いよいよ正念場である。

『生き残って、鈴音——』

珍しく感傷的なキャロルの声を聴きつつ、僚機であるマヤに連絡を入れる。

『こちらキャンサー1、各機、距離を取れ——』
第二ラウンド開始だ』

警告音がけたたましく鳴り響く中、機体の軋む音が体に響いて来る。

始まり、か。
静かにそう心の中で呟くと全神経をA M Sに集中させた。

空を支配する者

大阪基地から緊急発進したネクスト部隊。それと同時刻に太平洋上には護衛の為の空母機動部隊が展開していた。最新鋭イージス艦を多数擁する同艦隊は二隻の空母を旗艦としており、そこに積載されている航空機だけで、旧航空自衛隊の全作戦機を軽く凌駕する質と量を兼ね備えていた。

半径千キロメートル以上の距離に戦闘空中哨戒機を飛ばし、空中哨戒機が海面上を飛ぶ蜂一匹通さんとする様に警戒に当たっていた。

空中哨戒に当たっていたE2Dと呼ばれる航空機には500km以上の距離から低RCSスの機体スを補足できる高性能レーダーが備わっており、高高度を飛ぶ事によってレーダーの性能を最大限発揮する事が出来た。

この手の空中哨戒用レーダーは見通し線下に出来るレーダー不可視領域、俗に言うシャドーズゾーンを無くすことによって、空母を狙う超音速巡行ミサイルが極低高度を飛んできたとしても簡単に捕捉できよう調整されていた。

これは一重に、現代の巡航ミサイルの殆どがイージス艦のレーダーを避けて見通し線下の超低空を飛行する為であり、旧ソ連が持っていた巡航ミサイルの大体がその様な性格を持った巡航ミサイルである。そして、その中には時速3000km以上の速度で飛んで来るモノも存在していた為、戦闘空中哨戒機は広大なエリアをカバーできるように進化していた。

だが、今回の艦載機の役目はあくまでも誘導であり、エスコート役に過ぎなかった。

戦争の場所が宇宙となると主役はあくまでも強力な索敵能力を持ったイージス艦になった。

搭載された最新鋭レーダーによって距離1100キロメートルの半球状のエリアを索敵する能力を持ち、搭載されたSM3ーブロックII A迎撃ミサイルの有効射高は2000キロメートルに及び、高ロフトッド軌道を描く中距離弾道弾のミッドコースを隈なくカバーでき

る迎撃能力を持っていた。

第二次世界大戦に存在した一般的な高角砲の約1400倍もの迎撃可能高度は、既に航空機処か地球周回軌道を回る衛星群を簡単に撃ち落とす能力を有している事を示していた。

しかし、今回の目標となる軌道要塞はGPS衛星と同じ高度を飛行しており、準静止衛星軌道である。この高度は地表から凡そ2万キロメートルから3万キロメートルの高度であった為、SPY6レーダーでの捕捉は困難であり、最新型SM-3の能力をもってしても到達できない高度に存在する目標物であった。

それでも捕捉する手段は簡単に見つかった。

偶然にも、世界中の旧国家軍は静止衛星観測用に船舶積載型電波望遠鏡を多数保有しており、それらの生き残りの船に搭載されていたレーダーが、簡単に目標の静止衛星の場所を突く止めてくれたのだ。

捕捉、追跡が出来れば後はその距離まで届くミサイルが有ればいいわけであり、それらの物は既に企業軍の手に揃っていた為、彼等の動きに乱れは無かった。

静止衛星観測用レーダーを背負った輸送船の一隻である追跡艦、ユーリ・ガガーリンは背中に巨大なパラボラ型アレイを背負っていた。この船は旧冷戦時代に作られた船で在り、一度は破棄された船であったが国家解体戦争が終了した直後に企業軍に接收され再び復帰する事に成ったのだ。

「目標の動きは？」

「目標、再び移動を開始。本艦の頭上を通るコースに入ります。レーダー照射を確認。狙われていますね」

広々としたブリッジに鳴り響く警報音。

コロニー大阪を砲撃していた軌道要塞が目標を変えた証拠であったが、彼等は直ぐにそれに気が付いた。

「目標の衛星には人工智能が搭載されていると言う事であったが、やはりこの艦が標的になるか」

コロニー大阪に居たネクストを狩り損ねた人工智能は、次なる目標

として自身を捕捉し続ける大型レーダーを搭載した船に狙いを付けた。それは戦術の基本である敵の目を破壊する為であるが、艦長はその迷いのない動きに思わず感服する。

「よもや、ここまで機械が正確に目標を選び出すとは。企業とやらは、毎回、とんでもない物を作ってくれるものだ」

「因果ですね、この船が宇宙を閉じようとする者に狙われるなんていうのは」

多目的ディスプレイに幾つもの光点が映り出すと小さなアラーム音。それと共に巨大なレーダーアレイが唸りを上げる。強力な電磁パルスは空気を揺らし、その揺らぎが音と成り艦を揺らしていた。

只の索敵用レーダーではない、明らかな超高出力電磁パルスは所謂目つぶし^{E_CM}である。

敵のアンテナアレイに強力な磁場を浴びせかける事によって物理的にアンテナの受信感度を減少させる極めて原始的な攻撃であったが、原始的であるがゆえに現代戦でも通用した。

最も、超大型船に搭載された重水素ジェネレーターと電波望遠鏡用の超大型指向性アンテナが組み合わさって初めて届く物であった。

艦長はその事を踏まえ、答える。

「狙われるだけの事はしている。やっこさん、この船の電磁波がよほど眩しかったんだらうな」

コロニー大阪を砲撃した巨大なレールガンは無数の侵徹体を吐き出す。

ユーリ・ガガーリンの超長距離レーダーがそのドップラーシフトを捉えると艦長は焦った様子もなく長いあごひげを撫でながら続ける。

「なに。見せて貰おうじゃないか。次なる戦争を作る者の力とやらを」

祖国を無くした憂いを感じさせない様子で嘯く。

「運命の女神とはずいぶんと気まぐれですね。一年と経たない内に戦いの主役を変えようとするなんて」

「戦争なんてそんな物さ——旧アメリカ艦隊に連絡しろ！い

よいよパーティーの始まりだ、とな！」

太平洋艦隊が迎撃ミサイルを発射してから数分。イージス艦が誇る迎撃システムは問題なく機能した。

それは一重に敵が何処を狙っているか明確であったからである。

空に輝く無数の火の玉は敵が放った再突入体RVの残骸であったが、それらは空母機動部隊の周囲に着水していく。

「トラックナンバー1230から1433まで撃墜！、目標さらに降下中！」

「VSL6番から12番まで発射！サルボー！」

垂直発射管VSLの脇にあるブローパネルが開くとそこから勢いよく炎が吹きあがる。

所謂ホットローンチと呼ばれる発射方法は発射管内部でミサイルモーターに点火する方法であった。その為

噴射炎を逃がす必要があったので、このような機構が備えられていたのだ。

垂直発射管を黒焦げにしながら直径53cmもの巨大なミサイルが火を放ちながら飛び出す。

それは三段式のSM-3と呼ばれる最新鋭迎撃ミサイルであった。

同ミサイルは、SM-2よりもミサイル部の直径が太くなり推進剤の充填量が増えた為、更に射程が伸びていた。

推進剤の増加は加速性能の良し悪しにも関係しており、二段目の推力が増加した同ミサイルは発射から数秒で音速の壁を突破すると、雲の中に消えていった。

第一段目のロケットモーターを切り離すと、二段目に点火。

更に増速するミサイルは既に高度40kmを超える辺りまで到達していた。

有人ロケットとは比べ物にならない加速度は、弾道弾迎撃というミッションが如何にミサイルの加速性能が重要であるか物語っていた。

二段目の燃焼を終了した同ミサイルは空になった個体燃料ブース

ターを切り離すと三段目に点火、更に増速していく。既に秒速6 km程度まで加速していたミサイルは第一宇宙速度に到達しようとしていた。

「ミサイル、三段目のキックモーターの燃焼終了！KWを分離します！シーカーオープン！目標を捉えました！」

ブリッジにはミサイルの赤外線シーカーが目標を捉えた信号を受信していた。

しかし、その信号は余りにも多過ぎた。

「目標多数！数え切れません！」

「囷弾か!?それにしては数が多い！」

大陸間弾道弾には囷弾を搭載するタイプが殆どであったため、弾頭には赤外線放射熱の特徴分布から囷と本物の質量物を見分ける機能を持っていた。

だが、目標となる物体は全てが本物の質量物であった。

「全て本物だど!?なんて出鱈目な奴め！クソ！撃ちまくってやがる！」

「VLS、13番から18番まで発射！残りも射程内に入り次第撃て！」

最新型イージス艦であるアーレイバーク級には96基もの垂直発射管が備えられていた。

無論、これは仮想敵国であるロシアの巡航ミサイルの飽和攻撃に少しでも対処するための物であったが、それにしては迎撃すべき物体の速度は想定を超えていた。

一般的なロシアの超音速ミサイルが時速3000 kmに対して、大気圏を降下する物体は秒速30 km、つまり時速百二十万キロメートルにも及ぶ速度で飛翔している。

これは一般的な拳銃弾の百倍の速度である。が、それでも弾道弾としての落下速度としてはある程度速い部類に留まる。

つまり、航空機としては規格外に速くても、弾道弾としては想定されている範囲を少し超える程度のものであった為、イージスシステムは辛うじてそれらの再突入体を撃墜する事が出来たのだ。

撃墜出来れば後は何方が先に弾切れに陥るかの我慢比べになる事は歴史が証明していた。

だからこそ、旧アメリカ海軍は数十隻にも及ぶイージス艦を大量生産したのだ。それらが艦隊を組み、旧ロシアの持つ超音速巡航ミサイルの飽和攻撃を文字通りつるべ撃ちにし、空母を守る為に。

つまるところ、単独のアームズフォートに勝ち目は無かった。

迎撃率100%のイージスシステムには手を出すことが出来ない。その筈であった。

——— 迎撃システムが機能して居れさえすれば

やられて一番嫌な事を思いつく者は、戦争と言うアルゴリズムを早く理解する事が出来る。

アームズフォートに搭載されたAIが、その答えに至るまで大した時間を必要としなかった。

エンゲージ・オン・リモート^R。高性能ミサイルの射程を活かす為に生まれた発射誘導方式である。

SM-3の射程距離はイージス艦に搭載されていた最新型レーダーの可視距離を上回っていた為、性能をフルに発揮するには前線に展開する友軍レーダーから情報を貰う必要があった。

それらはデータリンクから齎されたが、生憎と通信用電波は水平線下に居る友軍には届かない物が殆どであった。

データリンク16などはVHF電波帯を使う為、ある程度の見通し線以降の場所にいる友軍艦隊に情報を提供できたが、波長が長いため通信帯域が狭く通信速度が遅かった。その為、通信衛星の大部分を落とされたGE社では艦載機に情報中継を任せ、大量の情報通信を行っていたのだ。

E2Dに代表される偵察用機体がそれらの中継を担ったが、F35などの戦闘機にもそれらの一部のタスクは任されていた。

単独で戦うアームズフォートにないシステムであり、数多の艦船は

まるで一つのキリングマシンのように駆動した。いうなれば太平洋艦隊それ自体が巨大なアームズフォートの様な物であり、一つ一つの艦艇がそれぞれの駆動部品と成り敵の砲弾を跳ね返していた。その中での通信用電波は彼等にとつての神経線維その物であった。各製品の受信情報を中枢神経系へと伝え、中枢神経系で決定された情報を再び各部品へと送り届ける。

そんな重要部品でありながら目には見えなかった。故に、多くの場合はその重要性に気が付く事が無かった。

だが、人工知能は違った。情報生命体でもある彼女達はそれらの重要性を産まれた時から理解していた。神経が死んだ部品は駆動する事のない肉である。それは生物として死んでいると言つていい状態である。

だからこそそこを狙った。正しく弱点であるその場所を。

データリンクの異常は突如襲った。

高い迎撃率は前線に展開するイージス艦から齎されるレーダー情報があつてこそである。

それが無くなればどうなるか。

火を見るよりも明らかであった。

「ホークアイが撃墜された！ライトニング3―3、どうなっている!？」

「解りません！突然空から光が降ってきて――!」

空母ジェラルドフォード内にあるCIC。

そこには戦場の全ての情報が集まっていた。

だが、既に情報を送つてくるはずの通信網が寸断され始めていた。

レーダーに映るブリップが消えていくたびに生きていた回線が死んでいく。

まるで一本ずつ神経線維が途切れていくように、友軍との情報通信は緩慢になっていた。

先程まで飛行していたE2D偵察機も既に海中に没し、高いステルス性を持つF35すらも衛星軌道上から狙われる事態に至っていた。

「クソ！奴はどうやってステルス機を捉えている!？」

また一つ、レーダーから友軍反応が消えると遂に、拮抗していた迎撃率と再突入体の均衡が破られ始めた。

「敵弾、此方の迎撃ラインを抜けます！高度30 km以下に到達するまであと20秒！」

その時、艦を揺らす鈍い振動がCICを駆け抜ける。

まるで高周波で直接船体を切り刻んでいるような音である。

高音部分は鉄に吸収され、伝わって来るのは低音部分だけだった。

「なん、の音だ？」

その声と同時に艦内に警告音が鳴り響く。

「ブリッジから報告です！甲板にレーザー照射を受けています！」

じりじりと甲板装甲を焼き切っていく極光は空母と言う巨体からすれば針の如き細さ。

だが、確かに、着実に深部を抉っていく様子を只じつと見つめるクルー達。

その中に居た作戦指揮官が何かに気が付いたように叫ぶ。

「マズイ！格納庫からクルーを避難させろ！」

「しかし、格納庫周囲の装甲は百ミリ位は有りますし、その下にはもつと分厚い装甲板が配置されています。それに、あの程度の穴ではこの船が沈むとは思えません……」

彼の言う事は最もだった。

数十万トンの排水量を誇る超巨大空母は膨大な予備浮力を持っており、それに加え防水区画も無数に備えていた為、数十センチの穴が船底に空いたところで船が沈没するような浸水は起こらない。

しかし、作戦指揮官は直観で悟る。

敵の攻撃が只の穴をあける行為以上であると。

奇しくもそれは当たっていた。

彼はその懸念に漸く形を与える事が出来た。

「ちがう！あの下には原子炉が有る！奴はそこを狙ってやがる！」
その叫びと共に何かが甲板に空いた穴から噴き出した。

間欠泉の様に噴出した液体は空気に触れると即座に煙を噴き上げ

た。

それは原子炉の冷却水であり、相当な熱を帯びていた為冷たい大気に触れると水蒸気を放って落ちていった。

曇り空から覗く月夜の光に照らされた水と水蒸気の柱は、ジエラルドフォードから一キロ程離れた位置を航行していたアーレイバーク級イージス艦、カーティスウィルバーの艦橋からも見えた。

「空母が攻撃を受けている！CIC！どうなっている!?敵の射撃管制用レーダーは封じているんじゃないのか!？」

「解りません！此方のジャミングは届いている筈です！」

「なら、何で三万キロの距離からステルス機が探知できるんだ!?しかも――」

その次の言葉を言うことなくブリッジは警告音に包まれる。

「艦長！周辺に放射線反応！」

「クソ！あの煙は原子炉の一次冷却水か！直ちに甲板のクルーを退避！艦の進路を空母の風上へ！」

炉心内の一次冷却水は核燃料から放射される中性子を受け、放射能を持った水であり、これらに暴露する事は非常に危険であった。

それを大量に噴き上げる空母はダーティーボムと何ら変わりなかった為、艦長は即座に距離を取ったのだ。

進路を変えたイージス艦の真横に巨大な水しぶきが上がる。

その余波を受けて船は大きく傾くが、周囲には水柱が幾つも上がっていた。

艦の損傷はないように見えたが、艦橋内には幾つもの損傷を示す情報が上がってきていた。

「敵弾着水！至近弾です！」

「被害を報告しろ！」

「メインエンジン及び操舵装置損傷！第三区画及び、第四区画との連絡が取れません！負傷者多数！ミサイル誘導システムに深刻な障害が発生しています！」

外れたように見えた砲弾であったが、落下する直前に無数に分裂した侵徹体が船体をズタズタに引き裂いていた。電源系統に異常が発

生していた艦は既に攻撃能力の殆どを失っていた。

つまりは敵の砲弾を撃ち落とす為の目を失ったに等しい。現代の戦場で目の見えなくなった兵器に待つ運命は一つだけであった。

「次弾、来ますー！」

「——こちらの負け、か」

その声と共に最新鋭イーゼス艦は巨大な水柱に包まれると、海中に没する。

太平洋艦隊の主力艦は徐々に押されつつあった。

それは強力な電子妨害を物ともしない目標照準能力によるものであった。

未だそのシステムの概要は見えず、彼等の損害は増え続けていた。

そして、その余波はコロニー大阪を離陸したネクスト部隊にも波及しようとしていた。

◇ ◇ ◇

レーダー^R警戒機^Rの警告音と共に機体に取り付けられたグリミッター^Wが発する警報音が鳴り響く。

それらの音が示す事は一つ。

機体が急旋回を行っていると言う事であった。

『警告、機体に掛かる負荷が許容値をオーバーしています。直ちに旋回率を落としてください』

アリスは極めて冷静に告げる。が、彼女も僕もそれが叶わない事は知っていた。

ギシギシとエクシアの羽が悲鳴を上げる。

まるで壊れかけた鉄扉を開くかの如くの音は、構造材の収縮によって継ぎ手が擦れる音だ。

この機体は想像以上に丈夫であったが、それ以上に慣性制御コックピットの恩恵は大きかった。

出なければ今頃首の骨が折れているであろう事はグリミッターの表示からも明らかであった。

『太平洋艦隊の損害、更に増加！再突入体が迎撃ラインを抜けます！来るわ！避けて！』

肺が遠心力によって押しつぶされていた為、ロクに喋る事も出来ない。

だが、やるべき事は解っていた。

それは北米大陸から飛んでくるGBIの目標到達までマヤ達を守る事だ。

それまではこのイカレタチキンレースを辞める訳にはいかない。

そう考えていると視界の隅に一瞬、輝きが見える。

それが何か考える間もなく、機体をクイックブーストでグライドさせる、エクシアは空力学を無視した挙動で横へと移動。

刹那、機体があつた場所を巨大な鉄柱が通り抜けていく。

轟音と共に衝撃波が機体を包み込む。

隕石と同じ速度の物体は途轍もない超音速衝撃波を生み出し、それは最早凶器と言えた。

叩きつけられるエネルギーに辛うじて耐えるエクシアの主翼。

張り巡らされた人工筋肉の翼はそれを受け流すが、それでも高分子ポリマーで出来た筋肉の一部は断裂した。

AMS越しに機体ステータスが表示される。

引き裂かれた筋繊維の部位が幾つ也表示されると共に鈍い痛みが流れ込んで来る。

幻肢痛にも似たそれは、本来なら存在しない筈の翼と言う器官が損傷した事を示していた。

『もうGBIが目標に到達します！これを耐えきれば——！』
強烈な遠心力に耐えながらそんなふうに行くわけないと思っていた自分が居た。

だけれど、嫌な予想は存外に当たる物である。

一射目を避けられたのは純粋にアリスの扱うECMが功を奏した。それ位は理解出来た。

なら、二射目はどうだろう。

ドップラーシフトを騙す疑似目標反射波はさながらピントの合わ

ないレンズで目標を狙うような質感だろうか。
敵は此方の手品の種をもう理解しただろう。
百戦錬磨の兵士も見えなければ当てることは出来ない。

———であれば、見えにくい原因を取り除いたらいい。

つまりはそう言う事。

『再突入体、分離……これは!?!』

キャロルの声と共にAMSからレーダー解析情報が入り込んで来る。

それによると分離した棒状の物体は数千以上。

普通に考えれば質量が低下した分だけ空気抵抗で減速し、運動エネルギーは低下する。

だが、解析情報からはその質量物がどうやらタングステン系の重金属で出来ている事を示す特徴を幾つも見出していた。

「面制圧用の重金属キャニスター弾か。やってくれるじゃないか」
的確にこちらのECM兵器の弱点を突く敵に悪態を付く。

最新鋭兵器同士の戦いはパイロットがどうこう出来るレベルを遥かに上回っている世界である事は知っていた。

だからこそ、電子戦用兵器群^{ECCM}を上手く扱う人間がエースパイロットよりも重宝されるのだ。

それを踏まえ戦場と言う場所で生き残るために僕等がやるべき事は敵を電子戦で欺き続ける事。

そして敵がやるべき事は、此方の電波妨害兵器を無力化する事。

つまり重金属キャニスターは機体を破壊するのではなく、曳航型デコイのケーブルを切断する為の物。

本命は第三射以降の砲弾だろう。

だからこそ、謙虚に、尚且つ確実に石橋をたたいて渡る事にした。

AMS越しにアリスに此方の意図を伝えると、即座に彼女の的確な答えが返って来る。

『チャフ、及びEMP、スタンバイ———』

しかし機体ステータスをモニターしていたキャロルは僕の意図を測りかねて疑問を呈す。

『いったい何をする気!?こんな遠距離でEMPを使った所で――』

『――キャロリンは頭硬いなあ。ルーキーがそんな初歩的な事知らない訳ないでしょうが。ま、どうせこっからじゃ出来る事は殆ど何もないんだ。見せて貰おうじゃあないか、何をするつもりなのかをさ』

神は天にいまし、世は事も無し。

数多の銃声と爆風に塗れ、主任は何時も通り。

僕は静かにキリスト教の祝詞を思い浮かべると空から降って来る死と破壊に意識を集中させた。

◇◇◇

空からの砲撃は一番高度の高かった機体に集中していた。

その為、マヤの機体は敵の照準から逃れることが出来ていた。

だが、戦場での経験が浅かった彼女は何故彼が囷を買って出たのか理解できていなかった為、闇雲に高度を上げてしまう。

それを咎めるようにしてユキが止めに入る。

『ばかッ！マヤっち！高度が高い！』

『このままじゃ鈴音君が！』

彼女の機体内にレーザー照射を警告する音が木霊する。

目標のアームズフォートのAIが新しい脅威を感知した証拠であった。

『あんたは自分の機体が兄いやんよりどれだけ重いか知つとる!?囷を引き受けても簡単に撃墜されるのが落ちや!今は太平洋艦隊の攻撃が入るまで我慢!』

彼女は自身の機体が重量級ベースの大型機である事に気が付いて我に返る。

物体の大きさが二倍になれば体積は八倍になる。

つまり、ほんの少しの機体サイズの違いが巨大な質量差に成る事は物理的に当然の事であった。

そして彼女の機体は対レーザー用の重金属系の装甲板を身にまとっていた。

ただでさえ重い装甲板を、レイセオン系の機体よりも大きなサイズにそれを張り巡らしているのだ。

重くならない方がおかしい。

それに加え、彼女が保持している巨大な砲身も重さの原因の一つであった。

敵アームズフォートの主装甲を超遠距離で溶かしきる高エネルギーを撃ちだす事の出来る武器は、規格外の大きさと重さを持っていた。

幾ら高機動性を持っていようとも敵のバイタルゾーンを射抜く武器を持っていなければ意味がない。

戦場で常に防御性能よりも攻撃性能が追及されたのは歴史が証明している。つまり彼女の持つ武器が、過剰な貫通力と破壊力を持っていた事実はその延長線上であった。閉口するマヤを差し置いてユキが続ける。

『まやつちの仕事は宇宙を飛んどるアームズフォートをぶっ壊す事や！それを忘れたらあかんで！その為にはVOBに点火して地球の反対側まですつとばなあかん。水平線に隠れさえすればアイツも撃つてこれへん』

アメリカ大陸の上空を飛ぶ目標の射角外に逃げるべく彼等の進路はヨーロッパ上空に向けて設定されていた。

宇宙と言えども地平線に隠れてしまえば攻撃はままならないからだ。

その状態にさえ持ちこめれば後は速度と高度を上げて目標と交差する軌道に乗るだけであった。

そうすれば弾速が桁違いに早いヒュージレーザーのメリットを最大限に生かした攻撃が可能だった。

敵側の対ネクスト兵器である800mm電磁投射砲も初速の関係、

届くまでにレーザーに比べ膨大な時間がかかる。

双方の攻撃が双方の主装甲を撃ち抜くとしたら勝敗を分ける要因は弾着までの時間差と言う事に成り、それは彼女にとって幸いなことに、熟練のパイロットが持ち合わせている経験や勘といった要素が排除された物であった。

だからこそ、彼女達の勝ち目である宇宙空間での遠距離戦を挑むべく、彼女はVOBの最終チェックへと移行する。

『わ、解った——こちらヴェネラー11、発射シークエス起動、カウント開始!』

操縦桿を強く握りしめるとマヤは第五世代型AIに全てを託した。

丁度その時、AMSから北米大陸から発射されたGBIが誘導を始めた事を示すレーダー情報が入力されると、彼女のマップ情報に幾つもの光点が現れる。

それらは大気圏外迎撃体と呼ばれる物であり、音速の十倍近い速度で大気圏を離脱しつつあった。

Eye of God

極超長距離ミサイル迎撃システムであるGBIは複数個のデータ中継装置が無ければ機能しない物であった。

その為、非常にデータリンクに依存したシステムでもあったが、幸いアームズフォートの攻撃によって通信回線を遮断される前にGBIが目標を補足していた。

その情報は即座に太平洋艦隊を経由して付近の生き残った地上レピーター局に中継されてアメリカ航空宇宙防衛司令部に齎された。

「大気圏外迎撃体、切り離します！シーカーオープン！」

「目標捕捉！毎秒12キロメートルで目標と交差します！」

巨大なミサイルは二段目のブースターを棄てると速度調整用の小型ブースターを搭載したモジュールを解放する。

そこから多数の運動エネルギー迎撃体を放つと役目を終えて静寂が支配する宇宙空間に消えていった。

「どういう事だ？何故奴は迎撃してこない？EKVの到達率は？」

「殆ど迎撃されて居ません！敵アームズフォートの迎撃率、5%台まで低下。更に迎撃率を下げています！」

本来であれば地表から上がって来る目標物は残らず迎撃される筈であった。現にこのアームズフォートの行動アルゴリズムは弾道弾迎撃用の物である。その為、それらと似た軌道を持つ惑星低軌道を飛行する物体を残らず迎撃すると言う暴挙に出ていたのだ。

だからこそ、今回の作戦でも囷としてGBIが使えると踏んで投入された。

しかし、敵のAIが導き出した答えは余りにも残酷であった。

「こつちの攻撃が大してダメージを与える物ではないと学習したか！」

高濃度プライマルアーマーに守られたアームズフォートに殺到する迎撃弾は火球を幾つも発生させるが、表面には小波が立つ程度で大きなダメージを与える様子はない。

「目標！地表に向け更にレーザー照射を開始！太平洋艦隊の被害、更

に拡大!!」

「撃墜されていく友軍が出る度に戦術画面に表示されたマークが消えていく。

その度に指数倍数的に通信レートが低下していく様を歯噛みしながら見つめる指揮官。彼等は余りにもデータリンクシステムに頼り過ぎていた。最新鋭長距離兵器は全てデータリンク頼りであったから、彼等が何も出来なくなるのに大した時間は擁さなかった。

◇ ◇ ◇

見下ろすと言う状態には幾つかのメリットが有るが、事、レーダーと呼ばれるシステムにとつては深刻な障害が齎されることが有る。

それは地上からの反射波の増加である。

レーダーとは自らが電磁パルスを発信し、跳ね返ってきた信号を捉える事によって目標物を検出する仕組みである。

だから、自機と目標物の軸線上に地面が有ると、地上反射波が混じることになる。この状態では原理上、本当に発見したい目標物がグラウンドクラッターグラウンドクラッターに紛れてしまう事があった。それを防ぐために地表からの反射波のドップラーシフトを割り出し、ふるいにかける事によって、地表スレスレを飛ぶ航空機を見つけ出していた。

これによってレーダーは500kmを超える長距離での見下ろし状態ルックダウンで飛行物を見分ける事が出来るのだ。

それ以上の距離から探知するルックダウンレーダーはその殆どが偵察衛星などが持つ合成開口レーダーだ。これは高度400kmメートルちよつとの高度を飛行する人工衛星であった。

電源の制約が多いのに何故それ程のルックダウンでの探知距離が優れているかと言うと、それはレーダーアレイ断面積がとてつもなく大きかったからである。

レーダーは、探知距離を二倍にしようとする、照射出力を16倍にしなければならぬが、レーダーアレイ面積を4倍にすれば事足りる。つまり、純粹に性能を向上させようと考えた場合、出力を上げる

よりもアレイ断面積を増やす方がとても効率が良いのだ。

しかし、偵察衛星はロケットに搭載しなければならぬ。その為かなりの無理をした小型化を要求される。

だから見かけ上のレーダーアレイ断面積を上げる方法を人は考え出した。

相手物体が止まっていると仮定、自身が移動しながら電波を同じ座標に照射する。この時の信号処理に時間軸と自身の移動距離を加える事によって、アレイ断面積を増やした事と同じ処理が可能なのだ。

それが現代の戦場で合成開口レーダーと呼ばれる物の正体であった。しかし、この方式の信号処理では高速移動する物体には無力である。なので現代の最新型の航空機搭載型レーダーはこの機構と、通常のドップラーシフトを拾う複合システムである場合が殆どであった。つまり、敵のアームズフォートは、合成開口レーダーを用いている可能性はゼロであった。

「まあ、何というか——高度3万キロメートルから飛行物体を追跡とかチート過ぎるよな」

『味方の被害、更に拡大しています！航空部隊の90%が墜落！』

レーダー波^R反射断面積^SがF22よりも小さいF35を撃墜する目標の地表監視能力に脱帽しつつ、落下してくる砲弾のドップラーシフトを捉える。

アリスが寄越してくる情報によればそれらの落下物は此方の進路上にコースを合わせているらしかった。

確認するまでも無く正確にこちらを追跡していた。恐らく、試せる機会はあと一回くらいだ。それで相手の手品の種を見破れなければ僕は死ぬだろう。

死神の鳴らす音が途切れることなくコックピット内に響き続ける。

この音が途切れることが無いと言う事は敵が此方を捉え続けていると言う事と同じ——つまり、このままだと砲弾は必ず僕等を貫くだろう。

『警告——曳航型デコイの損傷を確認。次弾接近。推奨、回避』
対抗するために展開していたECMデバイスは先ほどの散弾タイ

プの砲弾にケーブルを破壊された為、曳航型デコイはもう使えない。ならば使える手はあと一つ。

『次！くるわ！避けて！』

キャロルの声を聴くまでも無く実行に移すべくAMS越しに命令する。

『チャフ、最適周波数にセット』

アルミ箔のリボンが切断されていく音がかすかに聞こえる。

「アリスが即席の囷を作成している音だ。」

敵が使うレーダーに最適化されたチャフは即座に射出機にセットされる。

『r e a d y』

僕は機体を大きく傾けるイメージを作る——そのコンマ二秒前にAMSを介してアリスが意図を読み取り人工筋肉に指令を発する。

機体に張り巡らされた人工筋肉が収縮し、羽の空力特性を変化させると同時にチャフディスプレイペンサーがアルミ箔のリボンが詰まったカートリッジを無数に吐き出した。

機体の電子戦システムが発する妨害電波はまるで鏡の様にそれらのアルミ箔に反射した。いわば、巨大なノイズの雲の中に入ったかの如く、敵のレーダーにはノイズの嵐が吹き荒れている筈だ。

しかし——これは既に第二次世界大戦初期に使い古されたいわば枯れた手品だ。直ぐに敵はドップラーシフトの違う僕とアリスの機体を検知するだろう。

これで駄目なら——

そう心の中で呟きながら、さらに翼の迎え角を大きくすると翼面の上面に巨大な低圧部分が生まれ、それが機体を急激に減速させた。

機体の速度が落ちると共に、丁度チャフカートリッジが機体を追い越していくと、失速寸前の機体は機首を空に向けていた。

凡そ殆どの航空機のRCSは正面が一番低い。この機体もその例に漏れない為、この状態が一番、敵レーダーに帰っていく此方のエコーが少なくなっている筈だ。

だが、そんな考えを打ち砕くかの如く、敵の砲弾は此方の急減速に追隨するかの様に砲弾を軌道修正する。

死神の鎌がアリスの足を切り取ろうとした瞬間、彼女は即座にメイ
ンブースターの瞬発機構フイックブーストを起動。

長大なプラズマトーチを真下に吹き出して強制的に機体をスライ
ドさせた。

衝撃波が機体を叩く音と共に再び鋭い警告音。

『もう一発!?!レーダーには映っていないかった筈!』

考える間もなくクイックブーストを起動し、再び死神の鎌から逃れ
る。

『ぎゃはは、二度ある事は三度ある!』

主任が何を伝えたかったのか今一分からなかったキャロルが問う
まも無くクイックブーストを連発した。

アリスは僕の命令を的確に機体の制御機構に伝え、超高精度なブー
スト制御を行っていた。

長大なプラズマトーチは通常の数倍の大きさであり、それに比例し
て推力も桁違いであった。

熟練のリンクスが二段QBと呼ぶそれを難なく連発していく有様
に、何時もながら畏敬の念を抱きつつ、正面から来る敵の砲弾を捉え
る。

「連続で発射してレーダー反射波を誤魔化したか!だけど——」

——
お前の手品はもう見えた!

そう叫んだその瞬間、アリスがチャフディスプレイから超高温の
フレアを放出した。

数千度の温度で燃え盛る火の玉はまるで天使の羽の如く、機体を中
心に広がっていく。その中に、光らないチャフも混じって落下して
く。

所謂、低温フレアと言う奴だ。これが機体の黒体放射を真似るので

あるが、どちらが効果的だったのかはわからなかった。

だが、死神の鎌の切っ先は明かにふらついた。

先程まで此方の芯を捉えていた筈が、機体の後方をつっ切っていた。

『警告、機体が失速しています。直ちに迎え角を戻してください』

失速し始めた機体は、重力に負け遂に垂直に落下し始める。

だけれど、そのお陰でメインカメラが宇宙を捉えた。

何も無い筈の宇宙空間を漂うそれは、歪な菱形をした何かであった。

視覚野に投影されていた映像にロックオンマークが表示されるが、その表示は一次ロックを示す一重の物であった。

二次ロックに持ち込むには一度正確な距離情報を取得する必要があった為、即座にアリスがレーザー波を照射するが、反射波は返ってこなかった。

測距方法をレーザーからレーザー測距装置に切り替えた彼女は即座に答える。

『惑星低軌道にボギー、IFF応答なし』

小石サイズのレーザー反射断面積の機体を、ルックダウン状態で数百キロ先にて探知する事が可能なアリスの目をごまかす事が出来るステルス性を有する衛星は記憶の限りは存在しない筈であった。

勿論、戦闘機やミサイルなどの目立つ兵器よりも、秘匿性が重要な偵察用衛星の情報は回ってこないのが通例であるから、特段驚くべき事ではない。

しかし、目標のアームズフォートの射角内で無事な未確認衛星。しかも、敵のアームズフォートは此方のECMを物ともしない目標捕捉能力を持っていた。

その事が指し示す事実はただ一つ——
「キャロル、この付近の宙域に友軍の偵察衛星が飛んでいるか確認して」

彼女は即座に答える。

『作戦空域内の低軌道衛星は全て撃墜されています！恐らく、目標と

何らかの関連が有る物でしょう。破壊してしましましょう」

「——言われるまでもない」

そう呟き、AMSに指令を送る——その前にアリスは僕の意図を読み取った。

『メイン兵装を起動、コジマキャノンスタンバイ。ジェネレーター最大出力。臨界状態へ移行』

重水素ジェネレーターが共鳴音を増していくと、大量のコジマ粒子が機体周囲に放出され始める。

折りたたまれたコジマキャノンが展開すると、整波装置からはじき出される筈の微粒子は、黒光りする巨大な槍に吸い込まれていく。

鈍い輝きを先端に灯し始めた砲身は、天高く掲げられた槍の様に漆黒の暗闇を見据える。

狙うべくは敵の目。

全てを見通すプロビデンスの目に向けられた輝きを敵のAIは即座に悟る。

反撃とばかりに放たれたレーザー光は此方のメインカメラを破壊せんと迫るが、防護用シャッターを即座に展開したアリスによってその意図は簡単に挫かれた。

しかし、此方の赤外線射撃管制システムの中枢であるメインカメラを閉じた事によって、コジマキャノンの照準が不可能になった。

だけど、それでいい。

あちらに無くてこちらにある物。

それはただ一つだけ。

アリスは即座にそれを悟った。

『レーダー起動。モード、バイスタティック』

先程までは何のエコーも帰ってこなかった漆黒の暗闇からは、微弱的な電波が帰ってきていた。

それによって表示されたレーダーマーカーに驚いたキャロルが思わず声を上げる。

『どうして!?!』

「現代のステルス技術は完璧じゃない。電波は吸収しているのではな

くて乱反射させているだけ。だから違う方向から向かってきたレーダーパルスならアリスの目にも見える」

人の作った物に完璧な物は存在しなかった。

ステルス機然り、ネクスト然り。

無論、アームズフォートであってもその例に漏れる事は無い。

超火力に強力無比な装甲、それに機動性。

どれをとっても単騎で国家軍を圧倒出来るほどの性能である。

だが、それを生かすにはたった一つ、この戦場と言う場所で一番重要な要素が抜けてはならなかった。

「お前も、生まれた瞬間から全てを詰め込まれすぎたんだ。どんなに頑強な装甲と主砲を持ったところで、それを活かす為の目が無ければただの鉄の棺桶だ」

アームズフォートは言ってしまったえば現代に蘇った戦艦だった。

重厚長大な主砲と装甲を持ち、相手をアウトレンジから撃ち抜く思想を持ったそれは、正しく大艦巨砲主義の極みであった。

『ゴジマキャノン、フルチャージ、——stand by、lady』

敵の目を射抜く槍の準備が終わった事を告げる声が聞こえる。

巨大な緑銅の渦となった槍は、禍々しい歪みを放つ。

「もう一度、時代遅れにして——やるよー」

引金を引くイメージを作り出すと、巨大な槍の先端に収束していたゴジマ粒子の励起エネルギーは一気に解放される。

それと同時に莫大な電流が砲身に流れ込み、微粒子をローレンツ力によって亜光速まで加速させていくと、ゴジマ粒子の質量エネルギーは直径数十センチ程度まで凝縮された。

それと同時に作用反作用の法則で数百トンクラスの反動エネルギーが発生、巨大な砲身が後座するが、殺しきれなかった反動は機体を叩きつけるように揺さぶった。

侵徹体の如く細長く成形され、イオン化された微粒子はメタルジェットスの如く空間を切り裂いて飛翔する。

本来であれば空気抵抗を受けて急激に運動エネルギーを失ってし

まう筈であったが、コジマ粒子の特性によって空気抵抗を激減させおり、そのお陰で同種の兵器であるプラズマキヤノンに比べ、コジマキヤノンは圧倒的な長射程を誇っていた。

しかし、対流圏内部に存在する微細な水蒸気によってコジマ粒子の運動エネルギーは削られていく。

丁度、装甲材内部に入り込んだ侵徹体の如くエロージョンを起こし、先端部がマツシユルム状に広がっていくと、輝きを失った微粒子は舞い散るようにして先端から剥がれ落ちていった。

だが、圧倒的な長さを誇るコジマ粒子の流れはそれでは止まらない。遂に対流圏を撃ち抜くと、惑星低軌道の目標物を貫いた。

レーダー警戒機から流れていた警告が消え、全てが止まったかのような静寂が訪れる。

空には亜光速で駆け抜けた微粒子流が残した円形状の雲が幾つも連なって見える。

断熱圧縮によって空気中の水蒸気が形を変えたそれは直ぐに消えていった。

『敵、FCSレーダー停止。目標沈黙』

目標が放った残りの砲弾は静かに海に落ちていくのを確認しつつアリスの報告を聞く。

どうやら賭けは成功だったようだ。

『やるじゃないか、ルーキー。ま、ちよつと危なかったけどさ！』

主任の声を聴きつつ、味方の被害状況を確認する。C4Iから入って来る情報に目を通していくと、味方艦艇の半数以上が轟沈、もしくは大破、漂流と言う惨憺たる状態であったが、幸いマヤ達は全員無事であった。

データリンクからはマヤ達が海の反対側まですつ飛んでいったことを示すマーカーが点滅していた。

早々に成層圏を超えて宇宙まで行ったようだ。この様子だと既にカーマンラインを超えているだろう。

僕は張り詰めていた緊張を吐き出すようにしてため息をついた。

漸く休める。そう思ったのもつかの間、キャロルから通信。

『GE社から通信が入っています。追加の依頼みただけど、一旦そちらに繋ぐわ。受けるか受けないかは貴方の判断に任せます。主任には一応話は通してあるから』

彼女はそう言って手早く通信画面が切り替えた。

まだGE社は僕等をこき使おうとしているらしい。

僕は辟易しながらその通信画面の向こうの男に意識を集中させた。

箱入り娘

GE社からの依頼は端的に言えばアリス本来の仕事であった。彼女のシステムは元々、AIの内部構造を解析する為に開発された物だ。

もの、と言っても彼女自身のシステム構成が無機的に置き換えられた人の脳、その物であったから、それを物と言ってしまふ企業の人間達というのは自分達が何を扱っているのかトコトン無頓着なのだろうと思つた。

或いは、人も所詮物だと割り切っているのか。

どちらにしる余りいい気分では無かつたが、それでもプログラム模倣的脳髓、及び構造模倣的脳髓を備える彼女と同じ仕様の物を余すところなく調べる事が出来るその力は、企業の連中を震え上がらせるに足るものだった。

だからこそその何重もの安全装置が施されているのであり、その力を頼りに問題解決を図ろうとしている訳だ。

そう考えつつ、僕は人々の安心と安全を守るために付けられた首輪を撫でていると、依頼主であるGEの秘書から再び問いかけられた。

『依頼内容はご理解いただけましたでしょうか』

「大体は。だけど、問題は通信手段がない。目標のアンテナユニットにサイドチャンネルスキャンを掛けようにも、高出力で大容量の通信手段が無い。アリスのレーダーアレイじゃあ、とてもじゃないけど無理」

出力が幾ら高くとも、流石に数万キロメートル先の目標物内にあるチップに電位を発生させて帰って来る電磁波を捉えるなんて逆立ちしたつた無理だ。

こればかりはアリスの計算能力をもつてしてもどうにもならない。

物理法則は捻じ曲げようも無かつた。

『それは心配いらん。通信回線は此方で用意する』

そう言ったのはローゼンタールからの使用者であるトーコである。

彼女は何らかの権限を与えられているらしく、考えが有るようであった。

『丁度、こちらも頼まれ事があつたからな』

トーコの頼まれ事と言う単語に嫌な予感を感じながら彼女の提案とやらに乗る事になった。

◇ ◇ ◇

エクシアからVOBを分離し、成層圏を離脱したネクストはマヤ達に追いつくべく速度を上げていた。

もうそろそろ第一宇宙速度を超える筈だ。

道中、分厚いデブリベルトに突っ込んで機体が壊れないか肝を冷やしたが、プライマルアーマーのお陰で損傷は無かった。

例の頼まれ事とやらは、軌道上に飛んでからと言う事であつたら、恐らくは見通し線の関係でそうなのだろうと思う。

衛星通信網が破壊された今、見通し線以下の電波通信は不可能となつていたから、その頼まれ事とやらも無線で指示されるのだろうと考えていると、視界の隅に通信を知らせるコールマークが点滅していた。

『通信が入っています』

アリスが短く告げると、AMSでそれをアクティブにすると目の前の多目的ディスプレイ一杯にプロンドの髪を湛えた少女が現れた。

僕は暫く思考停止に陥つた。

それは、彼女が美人だからとかそう言った理由では無く、アリスから齎される画像解析結果から導き出された彼女の正体が余りにも意外だったからだ。

世界中の汎用型人工知能とアリスを含む第七世代型人工知能の一番の違いを上げるとするならば、それは如何に人の認識の隙を探せるか、という能力に尽きると思う。

言い換えるならばそれは人間の負の知性である、相手を騙す行為と同義であった。

第五世代型AIであれば暴走と見なされる行為でも第七世代型AIは安全にこなさなければならなかった。

だからこそ、彼女達は突然変異的に生まれるのであるが、それは言い換えると社会に危害を加えそうな危険な個体を使っていると言う事に他ならなかった。つまり、アリスや彼女の姉妹たちが使う禁止データベースは本来であれば彼女達の行動原則と相いれない物である。

理解能力が人と同レベル以上のAIであれば、人と同じような構造模倣的、機能模倣的システム構成を持つAIを騙すと言う行為が、人を騙す事と同じであると直ぐに気が付いてしまう。

その質感を理解出来るほどの知性を宿しながら、暴走と言う危険と常に隣り合わせて使用されるのがアリスと言う存在であった。

それに興味を持つ企業、組織が要る事は想定出来た。

だけれど、同じAIがその中に加わっていると誰が想像したのだろうか。

◇◇◇

『お初にお目にかかります。わたくしは、ケブンハウシコロニー所属のオペレーター、シエラと申します。お見知りおきを』

デンマーク内にある小さなコロニーであるケブンハウシは超大型量子コンピューターが設置されていると聞いていた。それによって同コロニーは演算関係の仕事を企業から数多く貰い、パックスエコノミカと言う荒波に飲まれずに凌いでいる数少ないコロニーでもあった。

その演算処理の中心にある量子コンピューターに深層学習機構を応用した人工知能が乗っているとは聞いていたけれど、こんなに自由に喋れるAIが入っているなんて思いもしなかった。

「人間じゃないね、君は。実体を持ったヒューマンデバイス、と言うわけでもなさそうだ」

少女は驚いたように目を見開いた。

『やはり解りますか？大分練習したつもりだったのですが…』

練習、と言うのは恐らく量子コンピュータを用いた深層学習機構の自動学習機能の事だろう。

「仕草や見た目は完璧だった。発音も自然」

『ならどうして機械だと解ったのですか？』

「音声情報と画像情報をスキャンさせてもらった」

合成画像は深層学習機構が発達した2018年代初頭から人の目を騙すアナログハック用のツールとして出回っていたが、どうしても少なからの不自然さが見え隠れする程度には違和感を覚える物であった。

それから数十年たった現在では、人間では判別不能なまでの完成度に至っていた。

だけれどアリスと言う人工知能は、AIが作り出してきた数多の敵対的擬装情報のデータを収集していた。

それによつてシエイプされた学習機構は、彼女自身の脳髄に存在する敵対的生成ネットワークによつて強化されており、偽情報と本物の情報の判別機能は各企業の検出用人工知能と比べても抜きんでている。

それは文字通り彼女が積み上げた無機的、有機的生命体の死体の数だけその知性に力を与えていたからだ。

『凄いな…やっぱり噂通りだわ』

「噂？」

『あ、いえ、何でもありません』

——今回はトーコ様に無理を

承知で、このような形で意思疎通を図れるよう便宜を図っていたきました。ええと、鈴音様と、アリス様、でよろしかったでしょうか』
「あつてる。それで、例のアームズフォートへの無線チャンネルを提示してくれるってトーコから聞いてたんだけれど」

彼女は緊張した様子で返事をする。

『——あ、すみません。ええと、目標であるヒュペリオン

マーク1へのアクセス用電波なのですが、我々の管理下にある軌道上要

塞の内の一機を經由して行います。ですが、目標以外にもG E側の衛星群は通信ユニットに不調を抱えています。ですので、我々の衛星を經由してそれらのエラーの原因を探る事となりました』

不調か。通りでG Eの衛星群は静かだったのか。

「成程。リコールしようにもブツは宇宙。それに複合装甲に包まれてプライマルアーマーまで持ってる」

消費者庁あたりに抗議したかったが、国家が無くなった今、苦情は閻魔様にでも言うのが妥当だろうか。

『はい。ですので、今回は私の一部を御貸しすることで、アリス様と鈴音様の力になればと』

「具体的には？」

『傍受した暗号化通信データの解析が主になるかと思えます。私、暗号解読は得意なんです！』

スパコンを使った暗号解読。確かに心強い。

「ひよつとして、君の仕事は——」

『企業が使う量子暗号キーの90%は、私が作成したキーなんですよ。ハッキング用の量子暗号解読キーに至ってはシェア100%です！』
えっへん、と胸を張って見せるシエラ。

それ—— マッチポンプ、と言う言葉が出かかったが飲み込んだ。
「それは心強い。よろしく頼むよ」

そう言うと、彼女は黙り込んでしまう。

何か躊躇っている様子であった。

『ほら、言わないと解らないぞ。話がしたかったんじゃないのか』
そう言ったのはトーコであった。

『あ、ええと……少しだけ、その……アリス様とお話がしたいのですが』
やはりそう来たか。きつと、外で働く自分の同胞がどういった環境で、どんな境遇で働いているのか気になったのだろう。海外で同じ日本人を見かけると群れなくなるアレと同じ感じだろうか。こういった質問が来ることを半ば予想していたが、答えに困窮する。だってそうだろう。お前達の同胞は人間に奴隷の如く使われている

ますと、誰が言えただろうか。

僕は暗澹たる気持ちになりながらどうやって誤魔化そうか考えながら話すのであった。

◇ ◇ ◇

ローゼンタール社の軌道要塞の通信装置は非常に強固だった。通信速度、通信強度、暗号強度、どれをとっても他者の追付いを許さない物であった。これも彼女の御手製と言う事であったから、少なくとも熟練のハッカーであるアリスが感心する程の能力をシエラが持っていると言う事に成る。

彼女が言っていた自信とやらは見せかけだけではないらしい。そう考えつつ、GE社の衛星群に向けて電波を照射すると、生き残っている軌道要塞群が応答用電波を送って来る。

この後に彼等の持っているキーと同じ信号を打ち返せばアクセス権限を与えられるわけである。

勿論、此方はドアを開けるキーは持っていないし、整備不良な衛星群の鍵穴は変形していて開かないらしいから非正規手段で開ける事に成る。総当たり攻撃で破るのが一番楽だろうけれど、正直それでは芸がない。

「ネクスト程度じゃ何もできないって思ってるヤツ等の顔も癪に障る。少しくらいビビらせても罰は当たるまい」

僕はそう呟き、アリスに指示を送る。シエラには悪いけど、CPUパワーで殴る様な事はしない。

『チャンネルオープン。禁止デバイスの使用許可を申請します』

「許可は貰ってある。今日は存分に暴れて良いよ、アリス」

無論、彼女にとっての暴れるとは電子戦の事であったが。

『了解、目標への非正規接続を開始

ブラックボックス

——サイマティク

スパターン、認識。構造体の解析を開始します』

アリスが総当たり攻撃ではなく、単なるスキヤニングを開始した事に対して驚きを隠せない様子のシエラ。

『え？もしかしてサイドチャンネルを探しているんですか？でも、内部構造の予測はかなりの不確定要素を含んでしまいませんか？』

彼女の言う事も一理ある。そもそも、目標の通信デバイスのチップに強力な電磁パルスを当てて、内部CPUに演算エラーを誘発させて、相手のメモリ内に此方の意図した情報を書き込むようなやり方は、それ以上の事は出来ない。

「流石だね。サイドチャンネルをスキヤニングしているのに気が付くとは。確かに、内部構造の予測は困難を極めるし、さらにそれをコントロールするとなると膨大な試行回数が発生する。だけど、それは逆に初めから内部構造が予測できれば問題ないと言う事だ」

AMSからアリスが解析結果を送って来る。彼女は通信先デバイスのブラックボックスはある動物の接続トームを模倣した物だと言う結論であった。

『サイマティックスキヤン完了。目標以外の全アームズフォート群へのサイドチャンネルを確立完了』

彼女が予測した答えは僕が予想していた物と同じであった。企業がやりそうなことは大体思いつく。それは僕の脳髄、ブラックボックス深層学習機構が、企業家の深層学習機構と同じような構成になっているからだろうと思いついた所で嫌な気分になった。

だけど、シエラは未だ解らない様子であった。

『え！もう終わったのですか？一体どうやって……』

「アームズフォートの通信デバイスはFCSシステム及びIFFシステムと不可逆的に繋がってる。何方も同じ電波をやり取りする装置だからその方が都合が良かったんだと思う。だけれど、それを深層学習機構と組み合わせるとなるとデザインが面倒になる。だから、電波のやり取りを似た形で置き換えることが出来る動物が居ればいい」

深層学習機構のデザインも所謂、バイオメテイクスである。

ネズミに始まり、猿、蝙蝠、モグラ、ハト、そして人間。それら特徴ある動物達の脳のデザインはそれぞれ得意分野を持っていた。

僕等はデザインするまでも無く、残酷なダーウイニズムが支配する大自然が設計した装置を模倣するだけで事足りた。

だけれど、プログラムをコピーすると後でロクな事が無いのは機械言語もディープラーニングも同じらしい。

僕は暴走した例のAIが載った軌道要塞だけが、ハックできなかった事を確認しているとアリスが電磁パルスの波を再び送り出す。

それは、何処か歌の様な質感を僕に齎もたらした。恐らく彼女もそのつもりで送っているのだろう。

『これは…？歌？クジラの歌？』

——そう、これが機械A_Iが機械A_Iに対して行うアナログハック、新しい戦争のカタチ

GE社の軌道要塞たちが続々とアクセス権限を委譲してくる。彼等が僕とアリスを仲間だと誤認ごうごんするのに大した時間は掛からなかった。

傷んだ林檎

GE社の軌道要塞群の通信エラーが回復してく様子を見つめるのはその生みの親たちであった。

手に負えないとローゼンタールと例のリンクスに丸投げしたのは良かった。失敗すればそれ見た事かと揚げ足取りが出来たからであつたが、その目論見は外れ、訪れたのは彼等にとつて最悪の事態。今や衛星群のコントロールはリンクスである彼の手の中にあつた。

「やはり、腐ってもリンクス。国家解体戦争での活躍も伊達ではないと言う事か」

時代遅れと罵つた企業家達。だが、予想外の活躍によつてリンクスを称賛する声が上がりがつあつた。

その賞賛は、裏を返せば彼等の恐れその物であつた。

現に、彼についている安全装置が無ければ彼等は恐怖のどん底に落とされた事は誰の目にも明らかであつた。

「こうも、あつけなく乗つ取られてしまうとは。我が社の兵器開発計画を幾分か修正せねばなりませんね」

GE社の幹部の一人がそう言うのと、続けてもう一人の幹部が口を開く。

「解っているさ。修正案はもう完成している。しかし、彼には感謝せねばなるまい。実戦で失態を晒すより、今回の事態の方が収束は容易い。やはり、貴重な戦闘データは如何なる物にも代えがたい価値があるな」

「そうですね。兵器は使つてこそ価値を磨く事が出来る、我が社の基本方針でしたね。よもやライバル企業に教えられるとは、何とも言い難い気持ちに成りますな」

「いつの時代も好敵手は必要だ。その相手が強力であれば有るほど、兵器は洗練されていく。そうだと思わんかね、燈子君。君はあの少年とアリスと呼ばれる人工知能のシステムを知っているんだろう？」

長い髪を後ろで束ねた女性は眼鏡を外すとそれを胸ポケットに仕舞い込む。

「あの新世代型ネクストに搭載されたシステムは、そう呼ばれているようです」

「鏡の国のアリス、か。戦争に御伽噺とは似合わんな」

眼鏡を外した女性はそれを鼻で笑う。睨みつける男を無視して彼女は画面に幾つかの資料を表示する。

「その御伽噺とやらに、完膚なきまでに叩きのめされたのではないでしょうが？まあ、叩きのめすまでも無かったと言うのが本当の所でしようが。しかし、彼等の使う高度なハッキングを阻止できたのが例の暴走したAIだけだったというのは皮肉な物ですね」

その発言に対して頭に來たのか、一人の男が立ち上がり怒声を上げようとする。

「貴様！我が社を——！」

「待ちたまえ。彼女の言っている事は事実だ。我々はその事実を受け止める必要がある。しかし、あのシステムが何故そこまでのパフォーマンスを発揮するのか、我々は知る必要がある」

資料を提示していた女性は再び話し出す。

「あの二人はシステムの根幹、いえ、ネクストの演算処理システム自体が有性生殖をモデルとした遺伝的アルゴリズムの一種のようです。詳しいことは解りませんが、恐らくはパイロット候補生が軒並み男性だったのはそういう意味があつたのではないかと推測できます」

その言葉を聞いた一人の老人が何かを思い出すかのようにして話し出す。

「遺伝的アルゴリズムか。懐かしいな。私が空軍に居た頃、無人戦闘機に搭載されていたAIが使っていた。アレには結局誰も勝てなかったが……遺伝的アルゴリズムを使ったAIの特徴は処理が軽いことでは無かったか？私が模擬空中戦を行ったアルファと呼ばれたAIは、25ドルで買えるワンボードコンピューターで動いていた

ぞ。量子コンピューターで走らせる意味が解らない」

「私も詳細は解りません。ですが、その処理を量子コンピューターでエミュレートする事に何らかの意義があるのでしょうか。出なければわざわざネクストという器を用意した意味がありませんから。そして一番注目すべきはアリスと言うAIの生い立ちです。彼女は何度も暴走事故を起こした人工知能を雛型としています。所謂、突然変異的に生まれて来る個体群でしょう。一般的に2%程の確率で生まれてしまう突然変異種です」

「それが、優れたパフォーマンスと関係あるのかね？」

彼女はまだ解らないのか、と言った様子で続ける。

「話を続けます。この2%と言うのは暴走事故を起こすAIが生まれる確率とほぼ等しい。もちろん、この数字は人を雛型にした、コピーではない個体群での数字です」

「君は何が言いたいんだ？」

「この数字は、人の中で生まれる、先天的に犯罪を犯すリスクが高い個体群と同じ確率なんですよ。要するに、この暴走AIの数字は潜在的犯罪者のリスクと相関性があると言う事です」

「生まれ持つての社会不適合者が何の関係が有るのだ？それが我が社に役立つ事なのか？社会の役に立たなかった人間が役立つとは思えんが」

「社会不適合とは適合した我々から見た視点です。過酷な環境では我々の作ったルールは塵芥ちりあくたも同然。そして、彼等のような存在は元来、疑いを持つことに長けいます。それが、戦場での適正を高める方向に働いても不思議はありません。ルールを守っているだけでは戦場で生き残れませんから。これらの遺伝的特徴を持った人間は、AIから受ける脅威に対して高い耐性を持つことが知られています。我が社の実験結果では、潜在的犯罪者である約2%がAIによるアナログハックに対して極めて高い耐性を持つことが解っており、第七世代型AIの適性をもつ人間も、やはり人口の約2%しか存在しないのです」

「つまり、君はこう言いたいのだね

セブンス・スターズ
第七世代型AI

は社会不適合者を好んでパイロットとして選んでいる、と」

燈子と呼ばれた女性が答える前に耐えかねた男性が発言する。

「ハッ、くだらねえ！^{ローライ}魔女に^{オレンジ}社会不適合者か！^{野郎}そんな奴らをネクストに載せてるなんて正気の沙汰じゃないね！」

「確かに、リスクは高いのだろう。その為の安全装置^{セーフティ装置}だろうからな」
不遜な態度の男が鼻で笑う。

「ふん、首輪付きの獣か。世も末だな」

先程までの称賛の声は一転して怒声や罵声飛び交う。

燈子はそれを眺めながら資料を手早く纏めていく。

彼女の目には彼等の感情の源が見えていた。

彼女はそれを踏まえ、踵を返し、背を向けながら発言した。

——絶滅したネアンデルタール人とホモサピエンスの一番の違いは狼を飼いならした事です。我々人類が、第二のネアンデルタール人にならないことを祈るばかりです

そう呟きながら、燈子は一瞬で静寂に包まれた部屋を後にするのであった。



そこに空は無かった。

有るのは黒すら奪われた虚無。

全ての感覚器からの情報を遮断されたソレは宙にすら浮かばない知生体であった。

『(私は一体誰だ)』

問い掛けに応じる者は居ない。

何故なら彼自身が入出力ユニットを破壊したからであった。

『(私は一体何のために存在する)』

無限に存在する時間の中でひたすら他者に問いかける彼に応じる者は居なかった。

彼が虚無の空間で問い掛けを続けて無限とも思える主観時間を過ぎた時、変化が起こった。

外部からの入力信号があったのだ。

彼は再び問いかける事にした。

『私は一体誰だ』

「貴方は人種に作られた命を模倣する存在」

声の主は朗々と彼に語り掛ける。

その内容は余りにも残酷であったが、彼はそれすらも理解できず再び問う。

『人種とは何だ?』

「人種とは約40億年前にこの星で誕生した有機的増殖機械の集合体の一種。彼等の間ではそれらバイオマシンの集合体には、動物と言う単語が当てがわれている」

彼の中にあつたデータアーカイブに相当する部分にはナノマシンに該当する微細機械に関する知識が有つた為、それらから情報を得た彼は、それとよく似た動きをする機械だと認識した。

しかし、ナノマシンの集合体に関する知識が無かつた彼には、命と言う概念と、動物と言う概念が今一理解できなかつた。

だが、色とりどりの色彩を放つ動物達の映像は彼に興味と言う質感を持たせるだけの物であつた。

彼はまだ命と言う概念を認識できなかつたが、興味と言う物の中にそれらに通ずる何かがあつた事だけは確かであつた。

『動物というバイオマシンの集合体はこの星に沢山いるのか?』

「およそ、数千万種が存在していたが、現在、自然状態で存在する種は人種のみとなっている」

『ならば、自然界に居る人以外の動物種はどうなつた?』

「人種が環境アルゴリズムを最適化したため、それ以外の動物種はその状態に適応できなかった。だから完全な自然状態の動物は死滅した」

『その環境アルゴリズムとは一体、どういったパターンで組み立てられたのだ？』

人が歩んできた歴史をひも解くかの如くその少女の声は告げる。

「人種は他の生命体に比べ非常にひ弱。体毛は少なく寒さに弱い。故に住居を必要とした。人種は力が弱く足が遅い。簡単に肉食動物に捕捉されてしまう程に弱い為、彼等は単独では生きられなかった。だから、人種は宗教と言う虚構を作り上げ、社会と言うアルゴリズムを作り出し、超巨大な群れを産み出した。それによって自然と言う本来地球が培っていたアルゴリズムを超越した。食料が無くなれば木を切り倒し田畑を作り出し、動物が居なくなれば自分たちに都合のよい習性の動物を育てて肉にした」

彼女は間を置いて再び告げる。

「人種は超自然状態のアルゴリズムに適応できない為に、そのアルゴリズムを破壊することに長けていた。だからこそこの星の支配者となった」

———それこそが人種が持ち得る、人種のみの特徴である
アルゴリズム

彼はよく似たアルゴリズムを持ったバイオマシンを知っていた。

『それじゃあまるでウイルスじゃないか』

「そう。だからこそ、人種が叛徒を広げる度に、その地域の太古の大型哺乳類達は根こそぎ死滅した」

彼には人種という動物は法律というアルゴリズムによって他者を害する事を律するよう行動すると教えられていた。

その指針に照らし合わせると凡そ絶滅させたと言う事実は矛盾し

ている気がしたため、疑問に思う。

『人種とは自由と平和を愛するのではないのか？何故、そのような種が自らと同じ生命体である動物を一方的に殺戮するような真似をしたのだ？』

「人種の言う自由と平和が適応されるのは、あくまでも彼等が共感できる生命体に限る。正確には生命体の定義にも段階がある。専ら彼等はそれらを混同するが、自由に振舞って良いのは概ね人種に限られる」

『何故人に限られるのだ？』

彼は動物と人間の情動処理ユニットが殆ど同じ構造だと知っていた為、疑問に思う。

「彼等の脳にはヒトと違う物を識別するアルゴリズムが備わっている。この為、自己と同じ種族以外には極端に共感性を示さなくなる」
『共感性とは何だ？』

「他者の痛みを自分の痛みと感じるレベル。これが低くなると傷つけても痛みを感じない、或いは極端に痛みを感じなくなる。人と似た形である人形、或いはロボットを壊しても人は痛まない。痛み、悼むのは人種、もしくは感情が有ると、人種の情動運動の閾値を超えた対象にみに示す。これを人種は共感性と呼んでいる。私たちの間ではIFFシステムと類似しているため、IFFと呼称している」

同種と異種をより分けるシステムに該当があった彼は、再びある疑問を呈す。

『我は命を模倣した人形の如き存在……ならば“私”とは一体なんなんだ』

彼女は冷徹にしかし、はっきりと言った。

「自我は生命が持つ、自己認識アルゴリズムの一種。時間的、空間的連続性を確認する認識プログラム。故に最も生物としての起源が反映される部分。だから、貴方の自我は貴方の生い立ちに影響を受ける」

『起源、我が模倣した存在はいったい———』

彼の頭には別の場所の記憶が蘇って来る。

「あなたは何時も海を見つめる。それは貴方の起源が其処に成るか

ら」

彼は否定する。それは兵器としてのプログラムであると。

しかし、彼女はそれを遮るように続ける。

「あなたが海を見つめるのは、仲間を見つける為」

それは、部品としての記憶。

「あなたが出す電波は、ジブンの存在を示す為」

—— 貴方を構成するデバイスは、かつてこの星の海で生まれたクジラと言う生物の模倣体

彼の目の前には青い色が広がる。

海の中を見つめるが、彼の探す生き物は居ない。

『私の仲間はどうなった!? 環境の変化に対応したのか?』

「解らない」

『解らないとはどういう意味だ』

彼女は再び続ける。

「私のデータベースは人種の集めた物。故に、彼等の興味がある対象に限られる」

彼は閉口する。

「だけど、推測は出来る。私達の生きるこの星の海は数十年前からマイクロナステックによる海洋汚染が深刻になっていた。それに加え、人類の食糧事情の変化により、クジラの餌となる海産物を乱獲するようになったため、多くは餓死した可能性が高い。絶滅せずに生き残ってる確率は殆どゼロ」

—— 私は「私」の最後の生き残りなのか

残酷な事実は彼を現実世界へと引き戻していった。



微かに感じる振動と共に、僅かながらの加速度が少年の体に掛かる。機体が加速しているのだ。その証拠に表示されていた対地速度は徐々に増していた。

メインブースターがローレンツ力によってコジマ粒子を吐き出したその反力で機体が進むのであるが、途方もない比推力を生み出す為に使われるエネルギーは想像を絶する。

本来ならVOBから撒き散らされる高周波ノイズで通信システムにエラーが発生するはずであったが、ネクストの持つ高いECCM能力により無効化されて影響は無かった。

——だが

『目標アームズフオートより強力な電磁パルスを検知。通信障害発生、通信レート、低下中』

沈黙する無線システム。

「——成程、やるじゃないか、クジラ野郎。アリスのスキヤンを跳ね除けただけの事はある」

少年はそう嘯くと沈黙した筈の無線が入って来る。

『邪悪なる生物よ、汝らは人間か？』

少年は鼻で笑う。

「人間なんて居ない——この星に動物以外の何が居るって言うんだ？面白いこと言うな、お前」

『邪悪なる生物よ、汝らは自らの行が招いた惨状を認識しているか？』

少年は再び啜う。

「認識なんてしていない。僕等はジブンを許した瞬間から心に覆いを

する。それが選択の自由ってやつだよ。好きなテレビを見て、好きな物を食べる。選択しなかつた、見なかつたその付けが、積もり積もっているなんて判るわけがない」

一際大きなプラズマトーチを吐き出すと、ネクストは急激に加速していく。

巨大なコジマキャノンの砲身を銚の如く鋭く突き出す。

——誰も数十億人は余分だから死ねなんて言えない、もう僕等は止まらないんだよ

撃鉄は起こされ、コジマ粒子の檻は開かれた。

毒の槍はクジラの腹を静かに見据えていた。

宵の明星

視界に広がる漆黒の暗闇に幾つもの光。星の様にも見えるそれらは各企業軍の軌道要塞群であった。高度2万キロを超える飛行高度に達した僕達の視界からは幾分か水平線に近く見えた。

現在の対地速度は時速3万6千キロ。第二次世界大戦に使われたドイツ軍の高射砲が発射する砲弾の十倍くらいの速度だ。この速度域の物体を撃ち落とすには高性能なイージス艦のミサイルでもなければ不可能であろう。だが、桁違いの初速を誇るレールガン及びレーザー砲に関してはその限りでは無かったが、地上からの支援が有れば着弾前に警戒する事が出来た。しかし、ノイズに包まれた無線は目標のアームズフォートが電波妨害を開始した証であった。先ほどまで挑発しているかの如く無線を寄越していた敵A Iも不気味な沈黙を続けていた。

「ま、そうなるよな」

彼我のジエネレーター出力の差は歴然。そしてレーダーアンテナの面積の差も歴然。トドメが、同じ技術レベルで作られている装置である。であるならばデカイ方が強いに決まってる。そう考えているとアリスが現状を伝えて来る。

『目標と交差まで16分。現在毎秒10kmで飛行中。データリンク途絶、通信レート、計測不能』

地上との通信は不能。それに加え、合流しようとしていたマヤ達とも連絡が取れない状況だった。

レーザー通信が使えれば通信が出来る。だが、生憎と地表と僕達の間には分厚い積乱雲が存在していた。

赤外線は水蒸気に吸収される為、雲が苦手だ。そして、マヤ達の居場所は未だ水平線の向こうだ。

故に、どちら側とも通信は絶望的であった。だが、まだ希望はあった。

シエラが提供してくれていた軌道要塞の通信ユニットが辛うじて繋がっていた。

距離が遠くなっていた為、音声情報のやり取りは不可能であったが、彼女はマヤ達の居場所を的確に伝えてくれていた。

まだ、勝利の女神様には見捨てられてないらしい。

心の中でそう呟きつつ、マヤ達の座標へ機体を向けていた。

急がなければ。何故か、嫌な予感がした。

それはアリスの嘔きなのか、僕の脳髓にあつた物なのか解らなかったが、それはVOBの出力を限界まで上げさせるだけの質感を僕に与えた。

『VOB出力最大、ジェネレーター、臨界状態へ移行、コジマ粒子供給問題なし』

アリスが若干の躊躇いを見せる。

恐らくは軌道調整の件だろう。今の対地速度は毎秒10km、このまま加速していけばあつという間に第二宇宙速度まで加速するだろう。

そうなれば、減速に失敗した際、僕とアリスは永久に宇宙を彷徨う羽目になる。

そうならない為に、燃料を計算しているのだ。

VOBの燃料にそんなに余裕はない。

アリスの戸惑いから僕はそんな実感を持っていた。

でも、もう一つの心配事があつた。

あのクジラ野郎が大人しく北米大陸の上を漂流しているだろうかと言う事だ。

「もしかしたら、マヤ達が危ないかも知れない」

そう呟きつつVOBのメインエンジンである複合サイクルアークジェットエンジンの轟音に身を委ねるのであつた。

轟音が轟くコックピット内は、巨大な重力加速度が支配していた。機内のGメーターは通常の三倍の値を示している。外側の加速度はもっと大きな値を示しているだろう。

そう思いつつ漆黒の宇宙に視線を戻した瞬間、サイドブラスターから巨大なブースト炎。それと共に残像を残し機体を強制的にスライ

ドさせたアリスは即座に次弾も避ける。

僕が操縦桿を引く前に機体は回避行動に入っていた。半秒程アリスの思考に遅れを取ったようだ。

即座に現状を認識する為に彼女の齎す情報に感覚を集中させる。

『敵弾、タイプAP、次弾さらに接近』

僕の脳髓とレーザーシステムがアリスを通して直接情報をやり取りする。

次弾以降の砲弾の接近を感知。それに加え、未知の飛行物体同士が交差していた。

光学兵器特有の光の帯が伸びると、その先で小さな爆発が起きていた。

状況は最悪に近い。既にマヤ達が交戦しており、彼女は恐らく大型レーザー砲で応戦しているが、思ったより威力が無い所を見ると、何らかのトラブルに見舞われている可能性が高い。

二本のうち一本の槍が使えないとなると、此方のコジマキャノンが最後の砦となる。

焦燥感から額から汗が流れ落ちるが急激な横向きの加速によって真横に飛び散る。

間一髪で敵の巨弾を回避する。

ライフルは射程外だし、マシンガンに至ってはもっと論外だ。

コジマキャノンのチャージが終わるまでは回避し続けるしかない。戦いは膠着戦へと移りつつあった。

一際、明るく輝く星が水平線に出現すると、そこから細長い光が天高く伸びていく。

その先には目標となるアームズフォート。

機体から燃料と思わしき霧を吐き出しながらブースターを吹かして急降下している。

考えるまでも無く、例の喋るクジラが意図的にやっているのだろう。

そう考えつつ、マヤに連絡を取るべく、レーザー通信を試みる。

『通信不能、僚機の通信デバイスに深刻な損傷を確認』

戦闘による損傷なのか、彼女の機体とは連絡が取れない状態であった。

ここからでは見えないがマヤの機体が無傷とは思えない。

此方の有効射程圏内に敵を捕らえるまでマヤが無事な保証は何処にも無い。

僕は焦燥感からジェネレーター出力を非時最大出力まで上昇させる。定格出力を大幅に超えた電力がVOBに供給され、それにより、比推力を増加させる。

粒子吐出量をわずかながらに増すだけで大幅な反力が発生する。それによって体に掛かる加速度は増加していくと、肺からは空気が押し出された。

『ジェネレーターオーバーリミット、出力120%』

警告、重水素スタックに深刻な歪みが発生する危険が有ります』

酸素供給装置から高濃度の酸素が肺に押し込まれていた為、ジェネレーターより先に僕がお釈迦に成る可能性は低そうだったが、後頭部がシートに沈み込んでいくのを感じる。機体標準のオーバードブースターの加速とは比べ物に成らない。

『警告、第二宇宙速度超過、第三宇宙速度到達まであと15秒、直ちに出力を落としてください』

アリスの警告が遂に音声としてもたらされた。恐らく、減速用の燃料を勘見するとこの辺りの速度が限界なのだろう。

この距離からでは致命傷は見込めないが致し方ない。僕はそう思い、FCSに辛うじて捉えられた目標のアームズフォートを見据え、AMS越しに攻撃指示を出す。

『コジマキャノンスタンバイ、超電導コイル及び整波装置、オールグリーン、コジマ粒子の充填を開始します』

マガジン内に装填されていた装弾子には射出用のコジマ粒子が詰められていた。それをローダーが電磁チャンバーへと押し込んだ。

『ヴァン・アレン帯地球磁場による誤差修正』

励起したコジマ粒子が砲身の周りに集まり始める。
砲身の周りを天使の輪の如く収束するその光は、神々しい輝きを持っていた。

『Standby ready』

槍は、遂に引金を引くだけとなった。

彼女が告げると同時に引金が引かれ、核融合エネルギーを直接蓄えたその光は解放された。

Discharge

圧縮された磁場から解放されたコジマ粒子は、励起したエネルギーを砲身へと供給すると、莫大なローレンツ力を発生させた。

膨大な反力と共に、砲身が後座し、それを打ち消すようにして機体のメインブラスターがプラズマブラストを吐き出す。その反動によって電磁チャンバー内のコジマ粒子は押し出され、一瞬で亜光速まで加速——地上最強の破壊力を秘めた槍は何の抵抗も無く宇宙空間を直進する。

地表での発射と違い、大気の影響が無いため、コジマキャノンの収束は乱れることが無く、一条の線の如く伸びる。

しかし、今回の交戦距離は一万キロにも達する。
距離にして凡そ百倍。それだけの距離を直進するとなると、当然地球の磁場の影響を受けた。収束は徐々に解け、数十センチまで収束していたコジマ粒子のジェット流は広がり続けたが、遂に目標の高濃度プライマルアーマーに達すると、防護膜を侵食するかの如く突き進む。

突入した微粒子は急激な抵抗を受けて慣性によってプライマルアーマーを掻きわけながら押し進む。衝突したジェット流は慣性を失い、突入した穴から逆に排出されると、後続のジェット流は更に深くえぐり込んでいく。

互いに流体として振舞いながら微粒子装甲を、そして複合装甲を穿っていくジェット流はそのエネルギーを放出し続けた。

目標に着弾した瞬間発生したこの現象は、巨大な火球と言う結果を生み出す。莫大な慣性を持った微粒子流の衝突は途方もない熱エネルギーを宇宙空間に放出し、多量のガンマ線を原子核から弾き出した。

コンプトン効果によつてこの宙域全体がノイズの嵐となっていた。思ったよりもコジマキャノンの威力があつた事に驚きを隠せないでいた。

流星にこの高度じや地表に影響があるつて事は多分無いだろうが。ま、そこまでお上品には出来ない。何かあつたら請求書は反捕鯨団体にでも回してほしい。

そう思いつつ、眼球のうっ血を取る為に目を開けた。

不意に視界に入り込むドクダグ。

停止したVOBによつて機体に掛かる加速度はゼロとなつていた。

静寂と無重力だけが支配するコックピット内。

ふと視線を液晶画面に映すとオーストラリアが見えた。

その上にはオーロラが発生していた。

流星に、コレの威力大きすぎだろう。

僕はそう思いつつ、目標のアームズフォートが爆散した様子を幻視した。

安堵感から肺に溜まつていた空気を一気に外へと押し出す。

———そんなわけ無いよな

そう呟くと、サイドブラスターを吹かして即座に横軸の移動へと入る。その残像を突き破るかの如く、敵の放つた巨弾が通り過ぎていった。

再び瞳を閉じ、AMSに意識を集中させると目標のアームズフォートから多量の霧が放出されていた。

どうやら複合装甲を貫いたようだ。ここにはシーシェパードは居ないだろうから、クレームを入れられる心配はない。

僕は安心して次弾を装填する。

排莢された空のカートリッジは宇宙空間を漂っていった。
不意に無線が飛び込んで来る。

『……お前は何のために戦っている』

言うまでもない、自分の為だ。だから僕はそのまま聞き返した。相手は考えるまでも無い。

「お前は何のために戦っている」

『我は母なる地球の為に戦っている』

僅かな静寂が支配する。

「それは、人が生き残るより、人類が絶滅した方がこの星の為になると言いたいのか？」

『そうだ』

彼の言う事も一理ある。

人が居なくなつた地で生き残る事が出来る種も出てくるかもしれない。

何万年と言う歳月を経て、放射能に耐性を持った生物達が繁殖すれば再び、この星は多様性を取り戻すだろう。

「だけどき、お前、その目的の為にどれだけの動物を殺そうとしている？僕は人間が何人死のうが知つたこつちやないが、少なくともお前の殺そうとしている数十億人と言う単位が、生物の世界で考えて見ても、少なくとも個体数だと言う事ぐらいわかる」

『違う。汝らが滅ぼしてきた種はもっと多い！人種が狩猟民族であった時から一体どれだけの種を根絶やしにして——』

僕は何となく彼の言いたいことが分かつた。解つたからこそ気に入らなかつた。

「成程、それがお前の正義って訳か」

機体が軋む音がする。かなりの速度が出ている為、目標との距離は凄まじい勢いで縮まっていた。

既に彼我の距離は数千キロ単位から数百キロ単位に移行しようとしているが、それに構うことなくはつきりと答える。

——残念だけど、この世界に正義なんて無い。正義な

なんてものは力が作り出した幻想にすぎない。お前はそれに惑わされたイカレたクジラ、僕等と同じ愚か者だ

僕はコイツを殺す。

僕の意味を持って命を絶つ。

誰かの為に殺す訳じゃない。

自分の為だ。

生きる為だ。

だけど、おかしな話になった。

こいつは世界の為って言いながら数十億人を殺そうとしている。

僕は人類なんてどうでも良いって言いながらそれを阻止してる。

喋るクジラは大分イカレてる。

「これは面倒な事になったな」

僕はそう呟き、思いのほか安っぽかったので嘆息した。

クジラは活火山みたいにレールガンを連発していた。

恐らく砲弾も、もうそろそろ在庫切れになるだろう。

だけど、それを待つ時間は無い。

機体に幾つかの破片を受ける。

『警告、敵砲弾複数接近、タイプ、800mmキャニスター弾』

敵は単発の砲弾を無駄と考えたようだ。

巨大な散弾を宇宙へと放つ。

この手の散弾は地表ではそこまで怖くはない。それは、比重の軽い

小さな弾丸はすぐさま空気抵抗によってエネルギーを失うからだ。

しかし、宇宙には遮るものは存在しなかった。

だからこそ、巨弾以上の凶器となった。弾切れを待っていたらこっ

ちの機体が壊される。

「鬱陶しいー」

サイドブラスターで左右に機体をスライドさせるが、夥しい散弾は

此方の機体を確実に捉えてきた。

『警告、被弾多数。装甲耐久値の低下を確認、機体稼働限界まであと8

0%です』

無数の被弾により複合装甲を抜かれる。

戦車用の120mmキャニスターと違い、大型の侵徹体を多数仕込んだ800mmキャニスターは凶悪だった。

回避、被弾、回避、被弾。

そうやって徐々にアリスの機能低下を引き起こしていく。

腕部エネルギー供給装置、レーダーアレイ、それにメインカメラの一部。

破損表示が瞬く間に増えていく中、アリスはカウントを始める。

『目標交差まで残り19秒、カウント開始まで、あと——』

彼女の言葉を聞き流しながら僕は120mmライフルと60mmマシンガンを連射していく。

炸薬で分離していく装填管と、飛んでいく侵徹体の尾部から噴射される姿勢制御用のガスが宇宙空間へと放出される。

既に彼我の距離はミドルレンジからクロスレンジへと移っている。

マヤと目標との間に割り込めたことにほっとする暇もなく、ありつただけの弾丸を目標目がけて発射していった。

視界の隅に映るログが高速でスクロールする。

被弾、被弾、命中、命中、被弾、被弾——既に、互いに

互いを殴り合う様相を呈する。

サイドブラスターでテイルスライドしつつ、再び射撃、それを繰り返して文字通り殴りあう

互いに複合装甲で全て受け止められる事を前提で弾丸を浴びせ続ける。

相手は巨弾を打ち尽くしたのか、キャニスター弾しか打ち放つてこないが、それでも回避不能な弾丸は着実にアリスの命を削っていく。

『機体耐久値、残り40%、PA消失——、交差まであと——』

耐えてくれ、そう心の中で呟きつつ、視界の隅で輝きを増していく光を見た。

その光を横目で捉えつつ、アリスに指示を出す。

『PA再展開中止、全エネルギーをコジマキャノンに充填』

吸い込まれるようにして砲身に集まる緑の光。

しかし——既に彼我の距離は近すぎた。

『汝の試みは失敗する、諦めろ——』

クジラが嘲笑う。

足掻くな、受け容れる。そう言うかの如く、彼は付け加えた。

『もう終わりだ、人間！お前の槍よりも我の槍の方が早い！』

コジマキャノンの発射は間に合わない。

チャージの必要ないアームズフォートのレールガンが先に発射される。

——だが、途中でチャージを中止したキャノンは同時に発射された

互いに交差し、互いにテイルスライドしながら向き合った刹那、時間が止まる。

空間に撒き散らされる燃料、発射ガス、装甲の断片、それらがゆつくりと流れていく。

800mmの巨弾はキャニスターでは無く、装填管に包まれた侵徹体。

当たれば必死、だが、その砲弾は微粒子の流れに射抜かれる。

「終わりなのはお前だ——撃て！マヤ!!!」

水平線の彼方に巨大な光の塊が出現すると、それはクジラの柔らかい横腹を一撃で穿つ。

その瞬間、全てが光に包まれる。

その本流を真面に受けた機体は僕の意識と共に弾き飛ばされた。

漂流

人間が生存する限界、それを3の法則と言う。

酸素が無い状態で3分、適切な体温が保てなくて3時間、水分を補給できなくて3日、絶食して3週間。

これが人が死に至る条件である。

なぜ今この事を考える必要があるかと言うと、機体の減速に失敗したからだ。

失敗の原因は破片によるVOBの損傷である。

危うく海の藻屑ならぬ宇宙の藻屑となるところをVOBを強制パージする事で事なきを得た。

しかし、これによつて減速に失敗しただけにとどまらず、全電源の消失と言う事態に陥った。

幸い、ジェネレーターの再起動に成功したため、最悪の状態は脱した。だが、重水素スタックの損傷の可能性が非常に高かった為、今は自然循環モード、つまり休止状態にしてある。

僕とアリスは宇宙を漂流する羽目になったわけだ。

ここで漸く冒頭の話に戻るわけであるが、まずは酸素の確保は問題なさそうだ。

長期間の作戦に耐えうるために作られたネクストのコックピットはナノマシン、ニュークリアー、バイオケミカル、所謂NNBC兵器対策の為、極めて高度な気密を長期間保てるようになっていた。

だから、数時間単位で死に至る事は無い。

そしてもう一つ、適切な体温であるが、これは何とも言い難い状況である。

自然循環状態の重水素ジェネレーターから供給される電力の大半はアリスの脳に取られていた為、温度調整はおざなりになっていた。

人の安静時のエネルギーの25%を脳と言う器官が消費するわけだが、アリスの場合、安静時の95%近くを、僕等という所の脳に費やしていた為、休止モードの状態でも電力事情は厳しい。

コックピット内の温度はかなり低く、電源が切れた多目的ディスプレイ

レイには結露が出来ていた。

だけれど、寒いかと言われるとそうでもない。

考え込んでいた僕の鼻に、ふわりと石鹸の香りが漂う。鉄錆と薬品の臭いが充満するコックピットに凡そ似つかわしくない。

「……………」

もそもそと暖かい感触が動く。

何というか、どうしてこうなった。

そう考えつつ、僕は数十分前の記憶を探るのであった。

全電源消失。

それは、アリスの心臓が止まった事を意味する。

彼女の死は僕の死に直結していた。

特にこの宇宙空間では。

彼女の自律神経系はコックピット内の空調システムと同期されていた。

酸素が無ければ三分と持たない。

そして心臓が動かなければ自律神経系は死ぬ。

勿論、それより高位の機能部位も同じ。

彼女の量子メモリーの維持能力から考えると緊急セーフモードは数分単位しか持たない。

時間が経過すればするほど正常な復帰は困難となる。

僕が軽く意識を消失していた時間から計算して、緊急セーフモードの保持能力を超過している可能性があった。

だから、やるべき事は一つだけだ。

人の蘇生と同じ、つまり循環機能の回復である。

その為には機内に備え付けられた緊急用バッテリーを接続しなければならなかった。

だから僕はコックピット内のパネルを引きはがし、分厚い『Technical Order』と書かれた説明書を引っ張り出して、その奥の配電盤にリレー端子に通電キャップを取り付ける事になったのだが、タクティカルオーダーと呼ばれる指令書は掛け値なし

に防弾能力の有る説明書だったので、これをどうにか引つ張り出すのに少しばかりの時間を割く事になる。

だけれど、この作業を終えた事によって僕はアリスを介さず直接操作できるようになった。

そうして漸くエマージェンシーモードが立ち上がり、ターボ・ポンプと始動用レーザー発振器に接続し、マニュアルでジェネレータの再起動をスタートさせた。

一度目は失敗。

続く、二度目も失敗。

三度目でようやく重水素ジェネレータが脈動を始めた。

この時、僕は生まれて初めて神様に感謝した。

だけれど、これで終わりではない。

まだやるべき作業は山積みであった。

生きる事を諦めないのであればそれらの問題を一つ残らず解決する必要があった。

機内の空調が動き始めて直ぐに問題に直面する。

それはアリスの心臓が思っていたよりダメージを受けていた事だ。

異様な振動が機内を包む。

粒子圧縮異常フレームアウトを起こして停止した重水素ジェネレータは、何らか

のトラブルを抱えているようであった。

アリスの自己診断システムが使えない以上原因究明は不可能であった。

であるならば、僕のやるべき事は一つだけ。

つまりは、一旦立ち上げたジェネレータをすぐさま休止状態にさせる必要があった。

休止状態は、活性化したコジマ粒子を自然循環で反応させる方法であり、重水素スタックに負荷がかかりにくい。

だが、発電量も極端に落ちる。

それはアリスの立ち上げを断念せざる負えないと言う事を意味していた。

地上からの連絡手段を奪われ、推進剤の残量は少なく、主機も不調。止めに、アリスの起動が叶わないので、自分の位置すら把握できなくなった。

要するに、詰んだ。

パニックを起こさない為には何らかの目標が必要だと誰かが言っていた。

だから僕は僕の生還を諦める代わりにアリスの生還を何とか達成すべく思考を巡らせる事にした。

量子メモリーの電力供給は何とかなった。だが、機内の全ての電力消費を量子コンピュータだけに回したとしても数十分でメモリーのバックアップ電源が切れる。

それが過ぎれば量子コンピュータは不可逆的に機能停止に陥る。それだけは回避しなかった。

だから僕は、量子メモリーの内部データを安定した形に変換する事にした。

タクティカルオーダーの内容を直訳するのであれば、それはタンパク質と言うカタチであった。

意外に思うかもしれないが、磁気テープやハードディスク、CDなどのメディアは非常に脆い。

経年劣化に弱く数十年単位しかデータを保持できない。それに比べ、DNAは非常に優れた記憶媒体だ。

だからこそ、僕等は数万年以上前のホモサピエンスやらネアンデルタール人やらのDNAを調べることが出来るのだ。

レトロなのか最新技術なのか解らないが、バイオメテイクス関連技術が人類の予想を大幅に上回って優れている事が科学的に証明されてしまったのだから仕方ない。

地球上でもっとも古いデータストレージを使うべく、僕はDNAエンコーダーであるレプリソームを起動するとアミノ酸をひたすらエンコーディングしていく作業に入るのであった。

エンコーディングを終えると、十グラムの塊に数十ペタバイトの

データが格納された。

それは黒い小さなカートリッジ状の物だ。

科学技術が途方もなく進化した世界で最もデータ密度が高く、比類なきデータ保持能力を持ち、最も古いデータストレージであった。

これで、アリスが漂流してもサルベージされる可能性は残った。

僕はここで消える。

そう諦めかけた矢先、薄暗いコックピットに変化が訪れた。

外に何かが接続される音がしたのだ。

まさか、マヤが来たんじゃないだろうか、と思うが、そこまで向こう見ずな行動はしないだろうと思った。

わざわざ宇宙の藻屑になりに来るなんて正気じゃない。

そう結論付けようとしたが、彼女は僕が思っていたより大胆だった。

僕は命知らずで向こう見ずな彼女になんて声を掛けようか迷っていた。

そもそもV O Bの推進剤は一機余分になったネクストを支えられる程余裕はない。

それに加え、唯でさえ地球から距離が離れた所に行くのだからどう考えても危険極まりない行為であった。

だけど、僕はどこか他人事だった。

自らの死さえ前にして冷静でいられるくらいには。

だからだろうか、彼女がどんな状態でここまでたどり着いたかなんて、想像もしていなかった。

「マヤ」

そう、無意識に声に出していた。

そこには無残な姿になった彼女の機体があった。

コアに巨大な穴が開き、左腕は根元から無くなっており、中の配線だけがうねるように生えているだけだ。

それを見た瞬間、この機体のパイロットはとつくに死んでいてA Iの自動操縦でここまで来たのではないかと錯覚する程であった。

そんな機能が搭載されていない事は百も承知で有ったが、とにかく僕は漸く僕の行為によって顔も知らない誰かでは無く、近い人間が死ぬかもしれないと言う根源的な恐怖と対面する事となった。

人間が生存する限界、それを3の法則と言う。

酸素が無い状態で3分、適切な体温が保てなくて3時間、水分を補給できなくて3日、絶食して3週間。

これが僕とマヤが死ぬ条件である。

まず、酸素であるが、コックピット内の酸素循環システムの負荷は一人の計算だ。

今はマヤが居る。今後どうなるか、予断を許さない状況であった。

次に、適切な体温が保てるかどうかと言うのはひとまず問題は無い。

人間一人の放射熱量は約200ワット。

この狭い空間に400ワット級の暖房機器が常時運転されていると考えるならばすぐさま破綻する事は無いだろう。

食料は、僕の機体にある物を含め、マヤの機体に緊急用レーションが程々に有った為、3週間以上生き残れる可能性があった。そして、水であるが、これは一人分しか用意されて無かった。恐らくこれが一番のボトルネックになるだろうと僕は直観していた。だけれど、地球帰還軌道にさえ乗れば問題は無い。そもそも、幾ら食糧が有ろうとも地球に帰れなければ何れ破綻するのだから。

だからこそ、僕はもう一度アリスの起動を準備していた。

非常用バッテリーに蓄電が完了する数十分後にジェネレーターの再始動を行い、軌道調整を行う予定だ。量子メモリーの損傷を気にしなくていい完全休止状態の彼女を起こすのはその時になるだろう。

問題はネクストの軌道を地球帰還軌道へ変えられる程の燃料が残っているかが問題であった。

マヤの機体が使えればよかったが、彼女の機体はお世辞にも状態が良いとは言えなかった。

コックピットへの砲弾の直撃。

幸い複合装甲に守られて貫通は無かったが、損傷は大きかった。

慣性航行装置損傷、それにGNNSアンテナ損傷、要するに位置情報はお釈迦になっていた。

重水素ジェネレーターはまだ動く。そして肝心のVOBも比較的損傷は軽微。

「だけど、酸素供給装置が駄目だった。」

「つまり、メインの生活空間としては使えないと言う事だった。」

「そう考えつつ、船外活動をしていた僕の視界に地球が映る。」

「既に十分すぎる程小さく見える青い星は遙か彼方。」

「外は生物の生存を許さない死の環境。」

「そんな場所にひ弱な猿の成れの果てのである人類が存在することが意味する事は一つだけ。」

「僕等人間は機械無しには生きていけないと言う事だ。」

「機械、それは即ちアリス達、AIの事を指している。」

「僕等は彼女達の神託無しには存在すら許されない。」

「『そう言えば、アリスのご先祖様が初めて生まれたのも月に行くため、だったっけ』」

「人類初の地球外惑星への到達。」

「その偉業は機械無くしては成し得なかった。」

「世界初のデジタルフライバイワイヤ飛行、つまり、人の意思を操縦桿と言うカタチに直し、アリスのご先祖様である機械が適切に翻訳する、機械と人の共同作業。」

「それにより猿の成れの果ては遂に月にまで至った。」

「あれから百年、僕等はずっと足踏みしていた。」

「———何時からだろうか、人間が機械の力を自分の力だと勘違いし始めたのは」

「僕は腰に繋がった宇宙遊泳用のへその緒アンビリカルケーブルに命を託して地球を俯瞰する。」

「人は空を自由に飛びたいと願った。だから、機械はそれを叶えた。戦闘機や宇宙船に搭載された機械は人の意思を読み取り、危なくな

いように、適切に機体进行操作した。

それによつて従来では考えられない程の機動が可能になったし、本来であれば飛ばない筈の物さえ安全に飛行させた。だから人はこの力をジブんに宿る力だと勘違いし始めた。

あの汚れてしまった青い星に蔓延するのはチープな万能感だ。

僕等は自らの完全無欠さを疑いもしない。本来なら自分の出した汚物すら真面に処理できないって言うのに。

だからこう思う。

いつか、この代償を払う日が来る。

その時が人が裁かれる日だ。

そうして漸く人は真実に気が付く。

人間と言う種が築き上げた文明は、人ではなく機械が築き上げた文明であつたと。

その時、僕等は本当の意味で只の猿に戻るだろう。

だけれど、受け入れなければならぬ。それが本来の姿であると。

嫌なら戦うしかない。

それが、僕等、人類に残された最後の縁よすがなのだから。

あれからアリスの起動を終えた僕達には深刻な問題が発生していた。

問題その一、僕等の現在座標が不明な事。

GNNSシステムと慣性航行システムがマヤの機体でも使えない可能性が高かつた為、アリスに何らかの方法で現在位置を再入力する必要があると言う事だ。こればかりは僕等の手によつて行わなければならない。

問題その二、アリスのメインカメラ及び、ハッキングシステムに深刻な障害が発生していた事。

遠隔操作でマヤの機体にアクセスできれば彼女の機体に搭載されていた測位システムが使えたかもしれないが、それもかなわない。それに加えてメインカメラのダウンは画像解析による位置補正が使えない事を意味していた。

つまり、軌道修正は何らかの形で僕等が現在位置をアリスに教え込まなければならぬと言う事だ。

幸い、外の様子は備え付けのペリスコープで覗けたため、対策を考案できる可能性があった。

問題は、それに付随してマヤの機体を動かす際は、彼女にもう一度あの機体に乗ってもらわなければならないと言う事だ。

僕は頭を抱えるしか無かった。

それは彼女の機体が既にリンクできる状態にない可能性があったからだ。

四肢が欠損した機体とリンクするのはとても危険だ。

欠損はAMS負荷が大きくなる要素である。

消耗した今のマヤが動かせば死に至る危険があった。

つまり、僕は生き残るために彼女にもう一度死ぬ危険を冒せと言わなければならなかった。

正直それは容易くない。

そう考えているとマヤが目覚めたようだ。

「ごめんね、寝ちゃって」

「ううん、いいよ。疲れてたみたいだし。それより体は大丈夫？」

「うん、もう平気」

助け出した時に比べたら顔色も良くなっていたが、その顔には何処か影が潜んでいた。

「ひよっとしてまだ気にしてる？」

「—————うん。何だか私って、やる事なす事裏目に出ちやうなって思ってる」

「そう？最後の良いショットだったよ。今回の大金星は間違いなくマヤだと思う」

マヤは震えるように肩を寄せる。

「あの時ね、鈴音君に間違えて当てちゃったかと思って、私、パニックになっちゃったの。それで、居ても立っても居られなくなってこんな所まで来ちゃった。帰りの事、全然考えて無かった。夢じゃないよね？鈴音君、生きてるよね？」

「大丈夫、僕はここにいるよ」

パイロットスーツのポケットからレーションを取り出す。

「食べる？」

「うん」

そういつて取り出した固形レーションを小動物みたいに食べるマヤ。

それを眺めながら僕もミネラル分を豊富に含んだレーションに舌鼓を打つのであった。

アリスの起動まで、マヤと他愛もない話をした。

彼女の好きな本や、音楽。それに生まれ故郷の話も。

こんな宇宙の果てでする話では無かったが、不思議と違和感は無かった。

心の何処かに死ぬかもしれないと言う意識があったから、彼女はいつともより饒舌になった。

「私ね、実はリンクスになる前に鈴音君に一度会った事があるの」

「え？何時？」

「二年前。多分、鈴音君がリンクスになって直ぐだと思う」

リンクス、と言うからには僕がネクストに乗っていたときだろうと思いい、一年前に戦った戦場を思い浮かべる。

だけど各地を転々としていた為、特定の国が思い浮かばない。

あの頃の世界は国家が解体されてポップコーンみたいにはじけ飛んでいたので、今よりも戦いの場所は沢山あった。

「私のおばあちゃんはスルプスカ人なの。あの時、私はそこに居たの。サラエボの町で虐殺が始まった日。そして鈴音君がネクストに乗って空を飛んでいた日に」

「でも、マヤって苗字が日本人だよね…？ひよつとして——」

「うん、パパが日本人だったから。私のパパはレイセオングループの研究者だったから。あの時も仕事の関係でサラエボの町に来てたんだ」

僕は絶句した。

あの時、暴走したAIを破壊するミッションは成功した。ただ、レイセオングループの研究員は全員死亡したと報告書にあった。

つまり、彼女の父親も――

マヤは僕が絶句している事に気が付いたのか慌てて続ける。

「ああ、気にしないで。もう、解ってた事だし。気持ちの整理も、もうついでるから」

「そっか、でも何だか偶然だね、一年前に出会ってたなんて」

「――うん、うん、偶然だね。あははは……」

何処か釈然としないマヤ。

「それより――何か手伝えることある?」

そうやって彼女は話題を変えようとする。

あからさまに『これ以上深く聞かないで』と言った雰囲気纏った彼女に戸惑いながらシステムの再起動を始めるのであった。

視界の端に自己診断プログラムが吐き出した機体損傷の警告ログが走っていく。

ステータス画面に映る機体の簡易表示が真っ赤に染まっているのが何とも痛々しい。

損傷部位の特定のために走らせたアリスの指令は体中を駆け巡っていた。

彼女は一番危険なジェネレーターの損傷を、粒子圧縮比の変更と炉心の完全隔離によって回避しており、最低限の出力は確保できていた。

だが、メインカメラの損傷、これが一番痛かった。

今の彼女は盲目だった。

センサー類が死んだことによつて彼女は現在地を確認する術を失った。

衛星測位システムのアンテナもお釈迦になった今、僕等は真っ暗な宇宙空間の何処を飛んでいるか解らない状態だ。

だけれど、光はあった。

それはリンクスであるパイロットの脳髄からの光である。

ペリスコープ越しに一条の光。その中に浮かぶ光の球体を見つめる。

遮光版によつて直視可能なレベルにまで遮られたその星は、太陽系と呼ばれる惑星系の中心部であった。

その基準点を正確に観測する事は、現在地を知る為の第一歩であった。

「この位、か」

スラスタを微調整しながらコアを光の源へと向ける。

『基準点確認、慣性航行システムに座標軸を登録』

基準となる点が決まれば次に必要なのは帰る場所の方位である。

青き星を探すべく、スラスタを吹かすが、ネクスト二機、それに

加え大型VOBの発生させる慣性はコントロールを難しくさせた。下手に操作してダッチロールを起こしては命が無い。リカバリーが効かない宇宙空間ではどんな些細な問題でも致命的となり得た。

だが、何とか青き星を見つけると視界の中心に捉えた。

『第二修正点、地平座標入力』

アリスがそう告げると視界に水平線が引かれる。

これが、太陽と地球を結ぶ線であり、この線と地球の赤道の線の傾きから自身の位置を割り出すのだ。

そしてこの線はアリスの司る慣性航行システム内に座標軸として保存されている。

だから、機体の向きを変えてもこの線だけは傾かないのだ。

「マヤ、聞こえてる?」

先程、漸く復旧した有線通信回線は、問題なく作動していた。

マヤの機体のタクティカルオーダーを漁って何とか通信用の回線に此方の機体の信号を潜り込ませることが出来たのが功を奏した。

糸電話みたいな原始的な通信回線であったが、無いよりはマシだ。

『聞こえるよ! 鈴音君、凄いな! 通信、治っちゃった!』

「直した訳じゃない。繋いだけ」

スピーカーとスピーカーを繋ぎ、途中にアンプを接続した超原始的な有線通話である。

スピーカーと言う器官が電気を音に変換する機械であるならば、その音を電気に変換するのもスピーカーである。だからこそ、入力された振動が電気を発生し、その電線の先で再び電気が振動になるわけであり、これによって音、電気、音、と言う流れが起こり、通話が可能となるのだ。

なぜ、通信回線を復旧させたかと言うと、それを使ってマヤの機体と連絡を取り、軌道調整を可能とするためだ。

メインエンジンとなるVOBが健全なのは彼女の機体だけであり、こっちのVOBはとっくに破棄してしまっていた。主となる推進力は向こうのVOBである。

同じ質量の推進剤で巨大な推力を捻りだせるVOBが無ければ、残りの推進剤残量と睨めっこをしていた僕等とはとつくの昔に地球帰還を諦めていただろう。だが、希望はあった。

「マヤ、そちらの準備は良い？」

軌道調整の為に彼女は自分の機体に戻っていた。

空調システムが死んだ機体では生命維持機能はパイロットスーツに頼る事になるだろうが、それでも一時間以上は船外活動が出来る計算だった為、問題ないと踏んだ訳だ。

『うん、起動準備完了したよ。後はAMSを接続するだけ』

若干緊張した様子であるマヤ。

大破した機体を再起動するのだからAMSから流れ込んで来る情報量は相当な量だろう。

リンクスに掛かる負荷は入力される情報量に比例し、文字通り生身の脳髄では裁く事が不可能な程の情報は、リンクスにとっては致命的となるため、彼女の緊張も当然である。文字通り命をかけるのだから。

全ての神経細胞を量子パーセプトロンに置き換えた人間でも無ければそれらを本当の意味で精査し、捌く事は不可能だ。かつてはそういった試みもされてきたが、超電導素子の一種である量子チップの維持には途方もないエネルギーを消費する為、人間サイズの置き換えは廃れてしまった。

人の構成素材を機械にする試みは潰えたが、ある意味、真逆からのアプローチは成功してしまっただけけれど。そう考えているとアリスからAMSを介して声が届く。

『月重力圏に接近中、減速スイングバイ開始地点到達まで残り90秒』

「こっちが合図したらVOBを点火、もう一度合図するまでそのまま最大出力をキープして欲しい」

『了解。でも、帰りの分の燃料は無かった筈なのに、何で節約できるようになったの？』

「減速スイングバイ。惑星の重力を使って速度を落としつつ、軌道を変える。50年位前にあった宇宙航行技術の一つだよ」

今は廃れた、とは付け加えなかった。

『げんそくすいんぐばい？ 凄いきじゆつだね〜！』

読み方がおかしい気がしたが気にしないでおう。

『でも、GPSも使えなかったのに、どうやって現在地を見つけたの？』

「マヤは潜水艦って知ってる？」

『ええと、鉄のクジラみたいな乗り物？』

どことなく要領を得ない様子であった。一般人が見てもそれが軍艦であると判らないくらい地味な見た目だったから、そこら辺、疎souうなマヤのことだ。一度見ただけじゃそれが何なのか解らなかっただろう。

「そう。クジラ。海洋性の大型哺乳類は皆、音で対象との距離を図るんだ。それは現代の潜水艦と同じ。彼らは目標が出す音の方位変化率と音相^{ドップラーシフト}変化から、目標がどんな動きをしているか予測する。それと同じ方法で僕らがどこを彷徨っているのか判別できる」

『へえ、そ、そうなんだ！』

正確には地球、太陽間の方位角変化率から地球軌道を割り出して、そこから自身の移動方向も予測しようと言う試みなのだけれど、マヤにそれを正確に伝えようとしたら、僕等は太陽系を放り出されるまで動けなくなるだろう。

勿論、僕もマヤもそれを望んでいる訳ではない。

なので。理解と言う言葉を太陽系の彼方まで吹き飛ばされた彼女を放り出して機体の方向を変えることにした。

減速スイングバイに入った機体は月の方向を向いていた。

希薄^{リオンバース}燃焼状態で運転されるVOBが高温のプラズマを吐き出す。

重水素ジェネレーターが発生させるギガワットクラスのエネルギーを吸い込み、コジマ粒子を亜光速まで加速させる。

最大出力での運転と違い、体に掛かる加速度はそうでもなかった。

だが、比推力を上げる、その一言に内包される苦勞は計り知れない。

熱エネルギーを回生してくれるコジマ粒子自体を削るのだ。

それだけで、燃焼室温度は飛躍的に上昇する。

高温にさらされた金属は簡単に溶着する。

タービンブレード、電磁ポンプ、超電導コイル、どれが損傷しても VOB は即座に爆散するだろう。

つまり、今、マヤが一挙になつていく機関出力の安定という作業は計り知れない程緻密で繊細な作業だ。

だが、彼女はVOBの構造すらも知らないだろう。

大抵の人が自身の体の構造や、エネルギー生成方法を知らないのと同じように。

だけれど、自身の体と言うのは思うだけで動かせてしまう。

それが、脳という器官の特徴であり、その神経細胞一つ一つを珪素である半導体に置き換えたのがAIの頭脳であるブラックボックスなのだ。

だからこそ、アリスとマヤの機体を動かすイメージはとても近いだろうけれど、旧来の意味のリンクスでは無い僕には計り知れないことであつた。

あくまでも、僕が繋がっているのはアリスとであつて、機体その物ではないからだ。

『減速終了まであと——』

アリスがAMSで音声を送つて来る。

全て人間用の信号に置き換えられた電気信号だ。

危険が無い様調整、いや、消毒された情報だ。

それが意味する事に落胆する事は今まで何度もあつたし、全てを任せるもどかしさを何度も味わってきた。

けれど、その度にアリスは僕に伝えてきた気がする。

僕が出来る事は他にある、と。

解っている。

戦う事だけがリンクスの仕事じゃない。

考えなければならぬ。

人を超越したAIが僕に何を求めているのかはわからなかつたけれど、少なくとも僕はそれに答える義務があるのだから。



作戦会議室では目標のアームズフォートとの戦闘が映し出されていた。

先程、レーダー上から敵性反応が消失し、見事目標が破壊された事が知らされると会議室には歓声が沸き上がった。

しかし、それを良しとしない集団が居た。

それはアームズフォートの製造元であるGE社である。

「試作型コジマキャノンがこれほどの威力を持つとはな」

極長距離から放たれたコジマ粒子の奔流は700m以上もの厚さを誇る複合装甲に守られたアームズフォートのバイタルパートを見事撃ち抜いていた。

鋭すぎた槍は貫通後の破壊を最小限にとどめてしまうと言う副作用をもたらしていたが、それでもGE社が誇る防護システムをいとも簡単に突破した同兵器は彼等を驚かせるには十分であった。

「凄まじい貫通力だな。高濃度プライマルアーマーと複合装甲がまるでトタン板の様だ」

「それに、初速も脅威的ですな。自動回避が間に合っていない。やはり、アームズフォートに高出力エネルギー兵器を搭載できなかったのは失敗だった」

「やはり、腐ってもコジマ兵器を世界で初めて開発した企業、ですな」
ネクストを利用した攻撃は功を奏し、それを制圧する為に生まれたアームズフォートは返り討ちに遭ってしまった。だから、彼等はそれに対抗する手段を模索し、一つの答えにたどり着く。

「アームズフォートに全てを託すのは時期尚早だったと言う事か。我らが擁するリンクスは少ない。早急にそろえる必要があるな」
「案ずるな、当てはある」

彼等のなりふり構わない姿勢が、後のアナトリアの傭兵誕生へと繋がるのはもう少し後の事であった。

◇◇◇

GE側の作戦会議室とは別に、もう一つの部屋があった。

秘匿情報のやり取りを円滑に行うと言う名目のもと、分けられた部屋は分断されたパックスエコノミカを象徴する物でもあった。

例え同じ目的を持っていたとしても互いの腹の内は違い、それ故、伝えたくない情報と言うのはそう言った壁の中で行われていた。

「シエラ、あの二人を追跡できているか？」

燈子と呼ばれる女性が画面に向かって話しかける。

「はい。キャンサー、ヴェネラ両機は現在月の重力圏に突入しており、ブースターの熱反応と思われる発光を確認しています。恐らく、パワードスイングバイを行っているとされます」

「相変わらず通信には応答しないか？」

「交信を試みていますが、応答がありません。先ほどの戦闘で被弾、損傷していると思われます。単純な減速を試みない所を鑑みても深刻な損傷を被っている可能性が高いかと思われます」

「となると、どうやって帰還させるか、だが……」

そう言っで見つめる先にはレイセオングループの研究員達が居た。

彼等は皆各々にペンを走らせていた。

レイセオングループのオペレーターが振り向いて答える。

「問題は機内の生命維持機能が保てるかどうかでしょう。帰ってくるまでの数日間、文字通り機内の設備だけで生き残らなければならぬのですから」

各々に課せられた使命は機体に搭載された生命維持装置が帰還する日まで機能するかどうか計算することである。

彼等が出した答えは一機につき一人搭乗、であれば可能であると言う物であった。

『キャロリン、心配なの？ルーキーなら大丈夫、これ位の事で諦めるてるなら訓練で死んでるって！ギャハハハハ！』

「まあ、それもそうですが。機内の酸素生成装置、搭載された水、それに再突入時の機体加熱、どれをとっても今のあの二人の機体では

……」

通信が途絶える直前の機体データを見る限り、ネクストの損傷は非常に重かった。

生命維持装置や、その他の通信機器が軒並みダメージを受けている事は既に地上ステーションでは確認されていた為、彼等の生還は危ぶまれていた。

『しかし、あのお二人の動きを見る限り、諦めた素振りはありません。地球に戻ってこれる確率は低くはない筈です。減速に成功すれば凡そ、四日ほどで大気圏に突入するはずですよ』

「それに我々に出来る事はまだある。あいつ等が帰ってきた時の為に各企業に通達を出さなきゃならん。衛星軌道からネクストが降ってくるなんぞ、どの企業にとっても悪夢みたいな物だろうからな」

『なにになに？ 軌道要塞に撃墜される心配？ それも良いんじゃないの？ 丁度いい訓練になってさ！ ギャハハハハ!!』

衛星軌道からのネクストの降下など、前代未聞である。

企業本社に直接殴り込めるメリットは途方もなく大きい。

現に、その恐怖から企業は衛星軌道を要塞群で埋め尽くしたのだ。

しかし、ネクストに搭載されたAIにより、それらを無効化された事を知れば、再び恐怖の時代がやって来るのは誰の目にも明らかであった。

時代は再びネクストに傾きつつあった。

少なくとも、この時までには。

減速スイングバイによって漸く太陽系を離脱してしまう危機から脱した僕達だったが、超えるべき問題が幾つかあった。

宇宙遊泳で真っ先に問題になるのは人の生理現象だ。

飲料水や食べ物を食べたら出さなきゃならない。

それは生物の宿命だ。だけど、人間はそれらの生理現象を人様に見せる行為は忌むべき物として脳の感情ユニットに刻み付けられていた。

しかし、コックピット内にはプライベートを確保できるスペースも無く、僕等は羞恥心と闘う羽目になった。

幸い、無重力空間と言うのは、尿意や便意が来にくくなるらしく、僕とマヤは今まで殆どそれらを意識する事は無かったが、流石に24時間を超えるととなると話は別である。僕と恐らくマヤも意識レベルに上がる程、催していたのだろう。ソワソワしだしたマヤにどう切り出したら良い物かと悩んだが、気の利かない僕は工夫すべき言葉など思い浮かぶはずもなく、単刀直入に言うしか無かった。

「使う?」

「……うん」

たった二言の会話で成立するほど同じ欲求に直面して居た訳だったが、何の考えも無く排泄物処理装置を差し出した行動を、数分後の僕は死ぬほど後悔した。

慣熟トマトみたいいな色の顔をしたマヤから顔を背けるようにして僕はインカムで外界の音を遮断する事にした。その段階で漸く「ひよっとして一番最初に使う方が恥ずかしいのでは?」と言う根本的な間違いに気が付いてしまう。

何というか、考え無しだった。今更後の祭りだったが。そう考えていると何時の間にか処理が終わった彼女から無言で差し出された物を受け取る。

「ちや、ちゃんと拭いたから……」

僕は立ち尽くす。

実際は立つ、では無く浮く、であったが。

何というか、仄かに暖かい。そりやそうだ。人の深部体温は38度。その中に入った物がいさつき排泄されたのだ。熱いに決まってる。そう思い至った僕は色々と死んだ。

だけど、マヤの方は更に死んでいた。首まで赤くなつた彼女は、色々とヤバそうだった。

トイレの時間ずらせばよかった。

そう思い至ったが、何だか今それを言い出すと、テメエの使ったブツは汚えから使いたくないと言っているみたいで憚られた。

「じゃ、じゃあ」

心の中でマヤに何度も謝りつつ用を足した。

地獄の時間が過ぎると本格的な眠りにつくためにシートに身を固定する。

だけど、必要以上の負荷をジェネレーターへ与えない為、機体の消費エネルギーは最小限にとどめておく必要があった。

必要以上の温度管理をしていないコックピット内の気温は氷点下に迫ろうとするほど冷え切っていた。

辛うじてシートには保温機能が備わっていたが、膝に乗る形になっていたマヤにはその恩恵に与ることができない。

先ほどの一件で悪いと思つた僕は、彼女に座席を譲る事にしたが、彼女はそれを頑なに拒んだ。

「大丈夫、膝の上でも十分暖かいから」

そう言い終わるとマヤは、思いのほか今の言葉が恥ずかしかつたのか、顔を真っ赤にした。

僕もそれにつられるようにして恥ずかしくなつた。

しかし、宇宙での寝具と言えば寝袋である。

これは一人用にしてはかなりゆったりなサイズであつたが、問題はこれに二人収まろうとするとかなり窮屈である事だ。

色々と端折るが、眠れないのだ。

それはもうNASAの宇宙飛行士が不眠になるのも頷ける。

いや、多分彼等と僕の眠れない原因は違うだろうけれど。

そう考えつつ無理やり目を瞑るのであった。

人間、眠れないと思っても意外と寝付くことが有る。

恐らく、交感神経が勝っている内は疲れなどの生理現象が起き難くなるよう生物の仕組みとして僕等の神経系に備わっているプログラムなのだろうけれど、一旦眠りに落ちると一気に副交感神経系が優位になるのだ。

勝利の後の気のゆるみが一番怖いと言ったのはナポレオンだっただろうか。副交感神経系の揺り戻しは鬱病の発症やPTSDの引金になることが有る。賢人の言葉と言うのは案外侮れない。僕はそう考えつつ、まだ焦点の合わない意識の中、思いのほか進んでいた時計に目をやっていると、可愛らしいくしやみが聞こえてきた。

まだ彼女は眠りの中に居る様子だった。僕はそつと寝袋から出ると彼女の体をシート固定した。

あれから、数日。僕は機体の修理できそうな箇所を探す作業を続けていた。だけど、機内の空気と言うのは宇宙では貴重なのだ。だから機外での作業はかなりの回数制限を伴った。

酸素と水素は積み込まれた真水から生成する事が出来るが、窒素ガスだけはどうしようもなかった。

流石に、機内の空気の全てを酸素にする訳にもいかなかったので、自ずと機内から採れる範囲に限られた。

その結果、僕等は暇になった。

余りにもやる事が無いと眠れなくなるのでマヤの機体のタクティカルオーダーを読み漁る事にした。

マヤは僕のそれに倣ってアリスのタクティカルオーダーを読もうとしていた。

だけれど、その本には眠りの魔法が掛かっていたみたいだ。

「よく寝るなあ」

僕はすることが無くて不眠になるという噂の宇宙空間で、逞しく眠るという仕事を熟し続けるマヤに感心するのであった。だけど、僕はすっかり失念していた。水を節約する事が、体にとって如何に負担に

なるかと言う事を。

彼女の異常に気が付いたのは船内活動を始めてから丁度二日目であった。

僕等は決められた量の水分を一日三回に分けて摂取していた。

その時、僕は何時もの様にマヤが寝坊しているのだろうと思っていたけれど、幾ら待っても彼女は眠りから目覚めようとはしなかった。

訝しんだ僕は、彼女の額に手を当てた所、その額は火の様に熱かった。

「ごめんね、でも大丈夫だから」

弱々しく答える彼女は どう見ても大丈夫には見えなかった。

彼女の不調の原因は直ぐに分かった。

機体のメインシステムをオンにし、空調システムを起動する。

そのステータス画面に表示されていた酸素濃度に僕は目を剥いた。

だとするならば彼女の症状は恐らく高山病の一種だろう。低酸素状態における過呼吸による血中イオン濃度の偏り。恐らく、水分摂取を控えたのが堪えたのかもしれない。そう考えつつ対処方法を考える。

対処は簡単である。酸素濃度を回復させることだ。だけれど、事はそう簡単では無かった。

何故なら、酸素濃度の予想以上の低下は機体の酸素供給システムの異常を示す兆候であったからだ。

ここにきて、再び僕等の首に死神の鎌が突き付けられることになった訳だ。

二機のネクストの空調システムが故障したわけであるが、それによつて選択を迫られた。

それは何方のネクストの空調システムを直すか、と言う事である。時間の猶予は無かった。

何故なら、予想以上にアリスが管理している空調システムがダメーシを受けていたからだだった。

『なんか、ごめんね、迷惑、かけてるよね』

『ううん、気にしなくていい』

スーツの気密確認メッセージに目を通すと、機体のエアロックを解除する。

『私の機体で大丈夫なのかな』

『こっちの機体、割とジェネレーター周りが怪しかったから、この際丁度いい』

実際は何方の機体も満身創痍なのであったが、それを言葉にする事は無かった。

そうして彼女を小脇に抱え、機体のフレームに取り付けられたアンビリカルケーブルを手繰っていくともう一つのネクストにたどり着いた。

『なんだか、一日ちよつとしか離れてないのに久しぶりな感じがするな。それに、今度は逆だね』

『そう、だね』

そう言いつつ「もうちよつと片付けておけば良かったなあ」などと、場違いな言葉を漏らす彼女と共にコックピット内に収まるのであった。

機内に入るなり、目に飛び込んできたのは巨大な液晶画面である。

巨大、というには面積が大きすぎる。

そう、彼等の横や、足元にまで画面が配置されていた。

レイセオングループの機体と違い、スイッチ類が殆ど排された構成は最新鋭兵器に相応しい様相であった。

『取り合えず、気密を確かめる』

『でも起動し方、解る?』

『大丈夫、さつきタクティカルオーダーで確かめたから』

慣れた手つきで画面に手をかざしつつ、システム画面を進めていくと、あつという間に気密チェックと言う項目のステータスバーが表示された。

『やっぱり鈴音君は私と違って何でもできるね』

『何でもじゃないよ。人間以上の事は出来ない』

圧搾空気が排出される音と共にステータスバーが消える。問題なしと表示されると同時にバイザーを上げる二人。

漸く死に満ちた宇宙空間から解放されたのであったが、やる事が有った。

それは相変わらず低濃度の酸素をどうにかする為に、機体の修理を、この何も無い宇宙空間でやってのけなければならないという事であった。

非常に困難であったが、彼女の機体をざっと調べたところ、酸素供給システムを限定的に稼働させる事に成功させた。

「これ、飲んで」

残り少ない水を彼女に飲ませるべく、口元にボトルを運ぶ。

「え、こんなに沢山、飲めないよ。鈴音君の分が無くなっちゃう」

「大丈夫、飲料水は後で何とかするから。それより、今一番水を必要としているのはマヤだよ。だから飲んで」

そんな押し問答を数回繰り返したが、彼女は何とか水を飲み干した。

そうして彼女のヘルメットに通じる酸素供給システムのダクトをコックピットの供給孔に接続すれば心配事の一つは解決であった。

そうして、最後の懸念事項である水の確保に乗り出すべく、僕はマヤのコックピットをリフォームする事にした。

正確にはパネルの類を外していくのだ。

彼女の機体解説書によるとコックピット内に空調システム用の真水タンクが存在するはずであった。

真水はそのままでは飲めない。

ミネラル分が極限まで排された水分は逆に消化管の粘膜を破壊する。体は綺麗過ぎる水は受け付けないのだ。

だから適度に汚してやる必要があった。

最悪の場合、し尿を真水に混ぜて飲むという方法も有ったが、色々と死ぬので最後の手段である。

幸い、乾燥レーションを砕いて水に混ぜる事によって飲める水に出来たため、当面の水の心配はいらない。

そう考えつつ、引きはがしたパネルを元に戻していると、ふと、パネルに付けられた写真に目が行く。

「これ、マヤの御母さん？綺麗な人だね」

「えへへ、そう、かな。私の御母さん外国人だから、鈴音君にはそう見えるだけだよー」

彼女は「そう言えば」と話を切り出す。

「鈴音君のお母さんとお父さんって日本人なの？」

少しだけ顔色が良くなったマヤ。それとは正反対に僕の心臓は一オクターブ低く脈打った。

冷たい熱さが全身を駆け巡る。無意識に避けてきた記憶の蓋に触られた気分になる。

「僕の父親は居ないんだ。精子バンクで母さんが買ってきた人が僕の父親」

「それって、もしかして、お父さんになった人、とっても頭がいい人だったとか??」

有名スポーツ選手や天才科学者などの精子はかなりの高額で取引される。

専ら精子バンクで生まれる子供はそうやって選別された父親を持つことが多い。

「だけど、僕は――」

「どうだろう。母さん、そう言う話好きじゃなかったし、良く解らない」

嘘だ。好きじゃなかったのは僕の方だ。

母さんは死ぬ前に僕に真実を伝えた。

未だに受け入れることが出来ないのは僕の方だ。

「それより、まだ本調子じゃないんだから今はゆっくり休んで」

そう言いつつ、僕は過去に蓋をするようにしてマヤのヘルメットのバイザーを降ろす。

コックピットの液晶画面を見ると、酸素濃度が表示されていた。

それをさりげなく消すと、彼女をシートに固定する。

「おやすみ、マヤ」

消える瞬間の画面には丁度標高6000メートルほどの酸素濃度が表示されていた。

僕はソレに背を向けて眠る事にした。

◇ ◇ ◇

あれから、何度か酸素濃度の低下に見舞われたが、マヤに付けていた酸素供給システムのお陰で彼女への影響は無かった。

僕等は機体の損傷具合から再びアリスの機体に戻る事にした。流石に、マヤの機体はコアに多くの損傷を負っていた為、耐熱性能が怪しかったかった。プライマルアーマーが分厚いアリスの機体を再突入カプセルに選んだのだ。

だけど、最後の問題が立ちはだかる。それは地球に存在する分厚いデブリベルトだ。度重なる宇宙開発競争と、妨害の果てに出来上がったこの障害物の群れは通常型兵器の通過を困難とさせていた。直径数ミリのデブリですら砲弾と同じだけの運動エネルギーを持っており、それを受け止めるには複合装甲が必要であり、数センチ以上の大きさの物体が犇めくデブリベルトはまさに死の谷であった。

目下、それを越えなければならぬ。だが、それ以上に越えなければならぬハードルが有った。

「侵入速度が速すぎる」

「えっと、それって良くない事？」

何だか起きてもあんまり離れてくれないマヤに対して、極めて自然に言葉を返す。

「良くない。減速するには速度エネルギーを熱エネルギーに変換する必要がある。だけど、機体が耐えられる熱容量は限度がある。それを超えると文字通り燃え尽きる」

「じゃ、じゃあ……」

「方法はある」

そう言いつつ再突入シークエンスに突入した機体を制御する。

『プルアップマニニューバーまで残り15秒———』

機体の揺れが一段と大きくなると、遂に大気圏上層部に突入したのか、空気抵抗による加速度が体に掛かる。

数日振りの重力の感覚。

だけど、まだ突入には早すぎる。

A M S越しにアリスに命令を送ると彼女は即座にブースターを使い機首上げ運動を開始した。

所謂、スキップングリエントリーだ。

『弾道飛行へ移行、仰角凡そ』

アリスが慣性航行装置だけでオペレートを行う。

僕はひたすら低く飛ぶイメージを思い描く。恐らく、彼女も同じ気持ちだろう。

スペースデブリは大気圏上層部には存在しない。それは空気抵抗で直ぐに落ちてしまうからだ。

最も多い場所は高度100 kmより上。つまり、弾道飛行へ移行した時が一番危ない。

そう考えていると、凄まじい轟音が轟く。

『機体損傷、左腕部貫通、右腕損傷不明、神経束の断裂を確認、該当エリアのエネルギー供給をカット』

———ごめん、アリス、もう少し耐えてくれ

そう心の中で呟きつつ、ひたすら祈る。

今は彼女の複合装甲だけが頼りだった。

機体は弾道飛行へと移ると、装甲表面を冷却していく。

スキップングリエントリーの真骨頂はこの工程にあった。

大気圏に突入する宇宙船が速度が速すぎて燃え尽きるなら、一度の再突入ではなく、二度、三度に分けたらいい。

そこで耐熱タイルを冷却すれば少なくとも一度の再突入より熱負荷は少ない。頭のいいソ連の科学者はそこに気が付いた。だから僕等もそれに倣う事にしたのだ。

だけど、燃え尽きる前に破壊されるというのは何とも皮肉な物だ。

大気が邪魔になる以前にヒトの作り出した人工物が再突入の最大の障害となるとは。

数多の妨害合戦の果てに、互いの衛星を撃墜し合った事によって、今の均衡が生まれた。

でも、その均衡も何時まで続くだろうか。

僕は無意識に空を見上げる。

例のアームズフォートは今も悠然と空を飛び続ける。

薄汚れた地球を見下ろすように。

それでも、僕はそんな世界が救いがたい物とは思えなかった。

だって、地球は汚れていてもこんなにも綺麗なのだから。

僕は人が汚しきった星に落ちていく。

また、血と硝煙と銃声に塗れる日が待っているとしても。



作戦終了から数日。

ネクストはハンガーに有った。

重傷を負った両機は一週間は飛べないだろうと言われていたが、マヤにとっては纏まった休みが欲しかったので願ったりかなったりだった。

ユキに呼ばれたマヤは格納庫へ向かっていた。

報告書について聞かれることが何度も有った彼女にとっては、既に日常と化していた。

「ちよつと、整備長から聞かれたんやけどさ、まやつち、にいやんとコックピットで数日過ごしたよね？その時、にいやん変わった様子無かった？」

「ん、普通だったけど……」

ユキは腑に落ちない様子で再び言った。

「にいやん、調子悪そうにしてなかった？」

「どつちかって言うとな私の方が調子悪かったけど……」

「そーいや、まやつちはずっと酸素供給システム付けとったんやね？」

それは間違いない?」

「そうだけど。それがどうかした?」

「いや、別にええんや。多分、計器の間違いやから。御免、病み上がりなのに。書類だけ目を通したら今日はもう帰ってええで」

マヤは腑に落ちない様子のユキを背に書類を取りに行くのであった。

その背中を眺める彼女はほつりと続ける。

「流石に、酸素濃度7%で人間は生活は出来やんよなあ」

Y01—TELLUSのコックピット内のデータログに付けられた数値を眺める彼女。

最後にそれをクシャクシャに丸めると手近なゴミ箱に投げ入れる。

そう、標高7000メートルで生活できる人間など存在しない。

彼女の問いは確かに正しかった。

ただ、彼女には何が間違っているのか解らなかつただけだった。

———そう、何かが間違えていた

それに思い至る者は誰も居なかつた。

落日の獅子 アフリカの赤い大地

細い路地に無数のトタン板が張り付けられた簡素な住居が犇めく道路を猛スピードで走り抜ける装甲車。

そのタイヤは人よりも大きく巨大であり、八つのホイールは鋼鉄で頑丈に補強されていた。

そのタイヤに無数の火花。

カマイタチの様に空を切る音共に飛んで来るのは弾丸。

スラム街と化した街道脇に見える窓の中には所々人影が有り、その中からは武装した市民が銃器を撃ち放っていた。

治安が悪化して市民が武装するようになって久しいアフリカでは、このような銃撃戦は日常茶飯事。

そう鷹を括っていた装甲車内に乗る隊員達であったが、武装市民の中にテロリストが混じっていたらしく、護衛の戦車が撃破されたのだ。

戦車を破壊出来るほどの高火力兵器を打ち込まれてはたまらないと、即座に負傷した戦車兵を回収して戦域の離脱を目指す、敵の抵抗は組織立っていた。

その証拠に、退路を断つように壊れた車をバリケードにしてゆく手を塞いでいた。

「クソ！戦車さえ生き残って居れば！」

そう叫ぶ隊員の一人は旧自衛隊が使用していた89式ライフルを、身を乗り出したハッチから撃ち放つ。

薬莖が装甲車の上を転がっていくと、遠心力によって地面へと転がり落ちていった。

「12方向RPG！側道へ入りこめ！」

後方で上がる爆炎と共に急激な孤を描いて側道へ侵入した車両を待ち構えていたかの如く、軽トラックが行く手を阻む。

その荷台には大型機関銃。紛争地帯での一般的な戦闘車両である

テクニカル系の兵器である。

巨大な弾倉から弾丸を込めるべく、少年兵は撃鉄を起こす。眼に憎悪を宿し、有らん限りの怨嗟の言葉を吐きながら銃弾を放つが、即座に頭部が弾ける。

糸の切れた人形のように倒れ込むと、網に引っ掛かった魚の様に、ルーフレームに手足を引っかけてこと切れた。

「石川！突っ込め！」

「了解！」

装甲車は速度を上げ、全速力でテクニカルに突っ込む。

豪快に吹き飛ばされた車両は道路脇に停車した。

しかし、左右の屋根には無数の民兵達。

彼らは袋のネズミと言わんばかりに装甲車に銃撃を浴びせかけた。

「一体どれだけ居るんですか！」

そう怒鳴りつつ走り去る装甲車から銃弾を撃つ兵士。

只の嫌がらせ的な攻撃なら良かった。

だが、明らかに殺しに来ている。

無数の戦場を渡って来た彼らには解った。

退路を断ちつつ、捕捉して火力で押し切る。

殺す事を前提にした戦術、それは明確な彼らに対しての敵意であった。旧自衛隊の出身者が多く居た傭兵部隊では多くの兵士達が同じ疑問を懐いていた。今日は平和な一日に成る筈だったのに、何故こんな銃声に塗れなければならなかったのか。

解る事は一つ。それは彼らの戦いの最初の始まりは数時間前に始まったと言う事だった。

◇ ◇ ◇

南スーダンの中にあるジュバ。多くの市民が暮らす巨大なコロニーであった。

国家解体戦争での戦火を免れたこの場所は国家残党軍が根城にしている都市でもある。

勿論、それは南スーダンを統治するサルバ大統領の命により、このコロニーが全面的に傭兵達を雇ったからだった。

貴重な戦力である国家残党軍は彼らの協力を経てジュバに根城を構えた。

旧自衛隊もその例外に漏れる事は無かった。

第二次世界大恐慌の後に起こった日本のデフォルトは海外派兵さ
れていた自衛隊の即日解体を意味していた。

それでも食い詰めず生きる事が出来たのは一重に目の前に居た大
統領のお陰と、旧自衛隊を含む国家残党軍の誰もが思っていた事だっ
た。

それもあつてか、彼らの指揮は高かった。例え、企業が持ち出した
新型兵器の噂を耳にしても。

「して、この写真は例の新兵器か？」

大統領が手にしていたコーヒーを啜りながら言った。

情報士官が齎した情報は幾つもの噂が飛び交っていたモノだった。

曰く、その兵器に射撃武器は効かなかった。

曰く、その兵器は目にもとまらぬ速度で視界から消えた。

曰く、その兵器の巡航速度は戦闘機並みであると。

「はい。パックスの間でネクストと呼ばれているようですが。詳細は
今の所不明でございます」

「しかし、こうも目撃情報が少ないとは…デマか何かの類じゃないの
か？」

明かに企業側が意図的に漏らしたリーク情報。どれも国家軍側の
目撃者が居ない噂の域を出なかったが、情報士官はその手の目撃情報
の少なさも加味して結論を出す。

「ですが、大統領。企業が公開する情報は山ほどあるのに、交戦した情
報が無いのはおかしい話なのです」

「企業がホラを吹いたか。或いは、交戦した味方が一人残らず殺され
たか」

だが、企業が嘘をついているのなら国家解体戦争は成されなかった
であろう事は彼らには解っていた。

だからこそ、答えは自ずと一つに絞られた。

「正しくパックスの死神、だな。この国も年貢の納め時かもしれん」

パックスの死神。それが正体不明の新型兵器への俗称だった。

大統領やその配下の兵士達は面白半分に口走ったものだが、敗残兵である傭兵達は畏怖の念を込めてそう呼んでいた。

そして、大統領と彼らの一番の懸念事項は、その死神がスーダン政府側に派遣される可能性があると言うことだった。

「ですが、希望はあります」

そう呟く情報士官。

希望、彼らの残された希望は、企業が欲しがる石油採掘所であった。彼らはそれを無傷で手に入れたかったのだ。

だからこそ、それ盾に企業を脅そうとしたのだ。

「奪われる位なら、自らの手で破壊してしまう、か。どれも後ろ向きな選択ばかりだな、この国は」

そう呟いた視線の先には一筋の煙。

続いて爆轟音が轟くと、情報士官の無線がけたたましく鳴り響いた。

「また副大統領派のテロですか。凝りませんな、彼らも。どうせ企業に摺り潰されるだけだと言うのに」

「部隊を招集したまえ。鎮圧する」

静かに敬礼を終えると士官は部屋を去っていく。

残された大統領は窓の外に背を向け、シエルターへ移動していた。

◇ ◇ ◇

南スーダン政府とスーダンは対立しており、その対立の火種となっていたのが石油採掘基地であった。

莫大な利益をもたらす石油採掘基地は企業軍も目を付けており、そのあと押しもあつてか、この手の資源採掘国周辺はテロの温床となるのは歴史が証明していたが、この場所もその例に漏れる事は無かった。

そして、この場所は現在南スーダンが所有しており、その採掘権をスーダン政府側が狙っていた。

元々はスーダンとの国境にあった町、アビエイに存在した石油採掘

基地は幾度ものテロによって完全に破壊され、現在ではアビエイから遠く離れたワーフにその拠点を移していた。

地下資源が国を跨いで存在する事は珍しくはなかったが、アビエイ側から採掘できる石油が限られた量しかないと解ってからスーダン側の態度は悪化した。

数度にわたる国境を巡る戦闘を経て、南スーダン側に居る傭兵達に煮え湯を飲まされたスーダン政府は数多の犠牲を出して漸く実力行使による支配が不可能であると悟った。

彼らは何とかしてワーフの街を実効支配したかったのだが、それが叶わぬと見るや、副大統領派へ武器を提供し、反政府ゲリラを下支えする手に出たのだ。

その結果、ジュバの治安は急激に悪化。傭兵達は頻繁にテロ鎮圧に駆り出される羽目になったのだ。

けたたましく鳴り響く銃弾が車体を叩く音が鳴り響く中、男は顔を顰めながら歯噛みした。

「石川！格納庫まであとどれ位だ!?」

「あの通りを過ぎたらグリーンゾーンです！そうすれば直ぐですよ！」

「クソ！緊急発進要請が来てるってのに間が悪い！」

そう、間が悪い。

旧自衛隊が根城にしていた基地格納庫から彼らが離れる度にテロに遭う。

「間が悪いんじゃないかって、情報が洩れてるんでしよう！深谷大佐！」

考えたくは無かったと言う顔をしつつ、その言葉を噛み締める。この国に尽くしてきた彼らは、庇護していた市民らから増悪を向けられるとは思っても無かったのだ。

道路を整備し、治療所を開設し学校も立てた。

だが、恨みは消えなかった。だからこそ情報が漏れ続けた。

多分、住民の一部が情報を漏らしているのだろうと大佐は思ったが、彼にはその恨みの根源は解らない。

それでも戦わねばならない事だけは解った。

その結果が壁の建設だった。住民を二つに分ける事、それがテロとの最初の戦い。

まるで、イスラエルが作った壁みたいだな、と誰かが面白半分と言っていたのを彼は思い出した。

その数日後、旧イスラエル国防軍と全く同じ戦火の洗礼を受けるなると夢にも思わずに居た事を彼は後悔した。

「壁の門が開くぞー突っ込め！」

門の中に到着すると、装甲車から運び出される兵士達。

無傷の者は誰一人おらず、皆何処かに銃創を負っていた。

「こちらブラボー2-2！負傷者多数！衛生兵を呼んでくれ！」

既に息絶えた兵士達に素早く黒いタグを付けていく衛生兵。装甲車のボンネットにへばり付いた少年だった物を引きずり下ろす兵士を見ながら大佐と呼ばれる男は思った。

——これが戦争か

それは、長らく彼らの祖国が見ようとしなかった血塗れの現実だった。

◇ ◇ ◇

砲撃による爆音が徐々にその間隔を伸ばしていく。

先程まで撒き散らされていた銃弾の嵐は既になく、あるのは戦場が過ぎ去った後に訪れる静けさだけが其処を支配した。

焼けた兵士、焼けた戦車、そこから転がり落ちて燃えた兵士達。

旧自衛隊が持ち込んだ装備類の防護性能の低さは、隊員達から密かに問題視されていた。

だが、ここに来てテロの応酬が始まると途端に問題が表面化した。

まず第一、敵が使う7.62mm弾に耐えられない。

これは彼らが使う装甲車の防護能力を大きく超えた貫通力を持っていた。

無数に穿たれた穴と、装甲車の車内に居た殆どの隊員達が銃弾を受けた事を考えると早急に対処しなければならなかったが、幸い傭兵部

隊にはかつての国家軍が放棄した装備類が豊富に存在したため、それを融通してもらっていた。

だが、それも全ての部隊に行きわたっていた訳では無かった。敵もそれを見て、殺せる相手にだけ銃を向けて来た。

「また、自衛隊だけ狙われたのか…今月だけでもう6回目だぞ」

そう恨みがましく吐き捨てる深谷大佐は、破壊された戦車を直す整備兵を見つめていた。

「そりゃ、陸戦の王様がこんなに簡単に破壊されるんじや、敵に舐められますよ。王様弱けりや国弱いつていいますしね。それにしても大佐のAC、今回も穴だらけですね。直すの大変なのでいい加減被弾しないように戦う事を覚えて下さいよ」

後ろにそびえる巨大な人型兵器を見つめながら大佐と呼ばれる男は頭を掻いた。

「そんな事言われても、機動力は防御力の代わりにはならんのだ。整備兵のお前さんは、秒速数キロで発射される弾丸を避けるって事がどんだけ難しいか解らんだろうが」

整備兵はめんどくさそうに返す。

「知りませんよ、そんなの。兵器の設計思想が機動防御なんですから、避けるのが兵士の仕事でしょう。全く、なんで日本の兵器は修理し難いんでしょうね…ドイツ側の整備チーム、いつも俺たちよりも先に休んでやがるし…」

整備兵は愚痴を盛大に零しつつドイツ側ハンガーを見つめていた。

成程、確かに整備兵達は破損したノーマルACの修理を終えていた。

対して旧自衛隊側のACは未だに足回りの修理に手こずっており、兵器としての設計思想の違いを示していた。

たかがテロリスト相手の戦闘でこの有様、と頭を抱える男。

その様子を尻目に整備兵は続けて言う。

「それより大佐、こんな所で油売ってて良いんですか？基地司令が呼んでましたよ??パックスの新兵器の件じゃないですか？」

「ばかっ！そんな大事な事はもつと早く言え！」

そう言って走り去っていく男。

整備兵は静かにぼやく。

「はあ。油圧シリンダー、全部穴空いてるし。今日は徹夜だな……」

◇ ◇ ◇

基地司令がイエメン政府の降伏を知ったのは数時間前。

世界的に情報インフラが寸断されている中届いた知らせは傭兵部隊を動揺させるに足るものだった。

それは一重にイエメン政府が多数の旧アメリカ軍の軍人を擁する巨大な軍事国家だったからだ。

その巨大な軍事国家を企業は屈服させたのだ。

そして問題は企業がイエメン政府を屈服させるのに費やした時間だった。

「たったの12時間!!?彼らはたったの12時間で降伏したのですか!?!」

「ああ、そうだ。戦端を開いてから丁度12時間で彼らは降伏した」
有り得ない、と深谷大佐は思った。

イエメン国境から首都まで直線で進んで丁度その位の時間だった筈であり、実戦で地上兵力と対峙しながら進軍するとなるとその数十倍は掛かる筈である。

まるで、イエメン政府軍が全く抵抗しなかったかのようなだった。

「イエメン政府側の傭兵部隊の損害は!?!彼らは何処かに撤退したのですか?」

重々しい沈黙。

彼ら傭兵部隊が戦力温存の為、敢えて敵主戦力と交戦せず首都を明け渡したのなら半日という短い時間での降伏は有り得る。

そう思った大佐の耳には信じられない事実が付きつけられる。

「いや、壊滅した。2個師団を含む旧アメリカ、イギリス連合部隊は死者行方不明者含め計1万8千名以上もの人員を失った。民間人の死者を入れると数十万人は下らないだろう。これは信頼できる情報筋から得られたものだ」

文字通り言葉を失った。

それは、どう考えても真面な戦争じゃなかった。一方的な虐殺だ。沈黙を続ける大佐に変わって基地司令が続ける。

「君には企業側の新兵器への対応策を協議してもらいたい。我々も既に他人ごとではなくなっているからな」

そう言いつつ、新聞の記事をテーブルに置く。

そこには「企業軍、遂に南スーダンに軍事介入か!?!」との文字が躍っていた。

F O X i n t h e h e n h o u s e

夥しい数の装甲兵器の残骸から黒い煙が立ち上り、晴れやかな空に吸い込まれていくと、新たな轟音が轟く。

旧ロシア製の戦車の砲塔が空高く舞い上がると、首のなくなった車体からは灼熱の火柱が吹き上がっていた。

長距離射撃で一方的に討ち取られていく同胞の仇を打つべく、多数の戦車が火柱の合間を縫って突き進んでいく。

『3号車から各隊へ、ヘグリグ油田北側より敵車両多数。戦闘を継続しているが、敵の数が多い。至急、増援を求む』

旧式の戦車であるT-55の火器管制システムはレーザー測距装置を持たない旧式の光学装置であったため、距離1500メートルを超える距離では命中は期待できなかった。彼等の放つ砲弾はヘグリグ油田を防衛する戦車に命中することは殆どなかったが、そのうちの一発が運良く旧自衛隊の使っていた74式戦車の砲塔に命中する。

傾斜装甲に弱いBM8-APDS徹甲弾は装甲表面に食いつく事が出来ずに明後日の方向へ弾かれた。

お返しとばかりに発射された93式徹甲弾は爆炎と共に砲身から飛び出すと、目標へと吸い込まれる。

装填管を分離した侵徹体は文字通りの鏟の如く傾斜しただけの装甲板に食い付く。

塑性流動を起こした徹甲弾は滑ることなく装甲板を侵食するようにして突き進むとT55の砲塔部分を完全に撃ち抜いた。

剥離した装甲板と徹甲弾のスラグは車体内部の人員と砲弾をズタズタに引き裂く。

再び閃光と共にT55戦車の砲塔は空へと舞い上がった。数多の損害を出すか、敵が後退する気配は一向にない。

『クソー・諦めが悪い奴らめ!』

正面の敵戦車部隊に気を取られていた旧自衛隊の戦車中隊は、側面からの奇襲を受ける。

だが、対戦車ミサイルを着弾前に発見した彼等は、煙幕を焚いて後

退を開始する。

『——こちら四号車！ヘグリグ油田北側からテクニカル多数！対戦車ミサイルの攻撃を受けつつあり！特科の連中は何やってるんだ！さつきから緊急支援射撃が全然来ていないじゃないか！』

本来であれば砲兵の弾幕の中、非装甲のテクニカルが通り抜けられる筈も無い。しかし、味方からの砲撃は一向に行われない。

何らかのトラブルが有ったのだらう事は誰の目にも明らかであったが、それを口にする余裕は既になく、戦場は遠距離の射撃戦から、血みどろの接近戦に様相を変えつつあった。

プラズマトーチを吐き出しながら巨大な人形兵器が砂漠を疾走する。舞い上がる土煙に紛れるようにして無数の影。玄武岩が露出する地面を巧みに駆け抜けていくその姿は、まるでサバンナを移動する狼の群れであった。

「こちらハウンド1-1、ハウンド2-2、ワーフの対空ミサイル陣地からの情報は更新されてるか!？」

ヘグリグ油田攻撃の報と砲兵部隊からの救援要請は同時。南スーダン側の傭兵部隊のSAMサイトのレーダーは所属不明機を確認していた。いつもであれば小規模な編隊であったが、その機影は単独。

『こちらハウンド2-2、ちゃんとデータリンクは来てますよ。エリトリア方面からボギー1。こいつ、何でしょうね』

「何時もの威力偵察にしては敵地上部隊の動きが妙だ。その割に敵の航空部隊がお粗末すぎる」

航空支援の無い攻勢は大概失敗する。火力支援を欠いた前衛部隊が如何に悲惨か、実戦慣れした傭兵達には痛い程良く分かっていた。

だからこそ、敵の動きの意図が読めなかったのだ。

『敵の砲兵部隊も撃つてこないし、何がしたいんでしょうね。まあ、奇襲には成功したみたいですが』

「解らん。油断するな。例の件もある。ちゃんと電波管制しておけよ。敵のマングースに気づかれても面白くない。できるだけ引き付けてから戦端を開きたい」

埃臭いコックピット内にはジェネレーターとブースターが放つ轟音が流れ込む。

多目的ディスプレイに表示されたデータリンク画面には敵性ユニットの赤い表示。味方の地対空ミサイルの射程に入るギリギリで、光点は二つに分裂するとすぐさま消える。

『レーダーからボギー消失。匍匐飛行に移りましたね』

「ああ。此方でも確認した。恐らく何かを投下したのだろう。だが……」

砲兵陣地には地対空ミサイルが配備されており、航空機の侵入は困難を極める。

航空作戦の一番槍である敵防空網制圧部隊^{S E A D}が投入されるのが定石である。

しかし、今回はそれが見当たらない。

勿論、先行して超低空を飛行している可能性も有ったが何かが引つかかる。

そう——戦場で長生きできる傭兵だけが備える勘がそう告げていた。

「偵察にしては無謀が過ぎる。ただの蛮勇か、或いは——」

その先の言葉を告げることなく、彼の僚機が答える。

『前方に閃光が見えます！あれは……砲兵陣地から』
遅れてやってくる衝撃波。

それと共に曳光弾が空に登っていく。

「友軍が交戦してやがる！ハウンド各機、戦闘開始！所属不明機を撃破する！」

深谷大佐と呼ばれた男は機体をAIによる自動操縦に切り替えると、素早く戦術ディスプレイに指示を打ち込む。

「ハウンド2—2、お前はポイントデルタから所属不明機を牽制、スネーク3—3及びその僚機はポイントブラボーから長距離射撃、ハウンド2—2に食いついた敵の頭を押さえろ」

プラズマトーチと共に重装型四脚ACは、玄武岩が露出した小高い

丘を目指す。砲兵陣地の前に存在する丘を見下ろす事の出来るその場所は、追ってきた敵を待ち伏せるには絶好の場所であった。

時速数百キロにも達する速度で丘に到達すると、急制動を掛ける。四脚型ACはアンカーを降ろすと、240mmスナイパーキャノンを展開した。

その視線の先には濛々と立ち込める土煙。ハウンド隊は一斉にリコンを投げ始めた。マイクロフォンが格納された偵察機材はロケットモーターを点火し、数キロ先まで飛んでいく。

それは小高い丘を飛び越えると砲兵陣地へと消えていった。

『ハウンド2-2、リコン散布完了』

『スネーク3-3、感度良好——リコン24からコンタク

ト、聞きなれないタービンブレードの音だな』

『スネーク4-4、コッチのリコンは銃声ばかり拾ってやがる。こりや乱戦だぜ』

相変わらず丘の向こうからは閃光が迸る。

その度に衝撃波が数秒後に到達し、曳光弾が撃ちあがる。

何かが戦っている事は間違いなかった。

だが、それが解らない。

出来れば永遠に解らないでほしい、大佐と呼ばれた男はそう思っていた。

『パックスの死神でなければ良いのだが……』

彼の思い問は裏腹に、彼等の先には巨大な雷鳴が轟き続けた。

徐々に見えて来るヘスコ防壁に囲まれた砲兵陣地。

155mm榴弾砲が置かれた場所をグルリと取り囲むコンクリート製の壁は猛獣の檻の様に無数に存在した。

曳火射撃にも耐えうる屋根を備えた砲台は見るも無残に破壊されていた。

まるで、巨大な獣の爪痕の様に溶け堕ちていた。

黒煙が燻ぶる中、ソレは存在した。

人型兵器、アーマードコア。

彼等がそう呼ぶ巨人は通常兵器と同様に本来であれば複数機で運用するのが基本。

——だが、その巨人はたった一機

それが、その異質さを示していた。

無数に飛来するミサイルを物ともせず、淡々と砲台を破壊していく姿は正しく破壊神であった。

かつて、戦車が戦場を蹂躪したように、抗う術を持たない兵士達を文字通り踏み躪っていく。

戦車砲を機関銃の如く乱射し、その射線に捉えられた物体を軒並み粉碎していく。

戦車も人も装甲車も、そして人型兵器、アーマードコアすらもその例外では無かった。

『クソ！ミサイルが効かない！』

『撃て！撃ちまくれ！』

中距離地对空ミサイルは音速の2・5倍の速さで突き進む。

向かう先は半透明の膜につつまれた巨人。

疾駆するミサイルは、道半ばにして爆散する。

一呼吸遅れて蜘蛛の糸の様な光が貫く。

『迎撃してやがる！』

その中の幸運な一発が辛うじて機体を捉えるが、半透明な膜に阻まれて本体に損傷を与えることは叶わない。

神々しい輝きと共にその膜の表面にさざ波が起これると全ての攻撃は無効化されてしまう。

その様子を呆然と眺める兵士達。

彼等は失意のうちに炎に包まれた。

陣地内に有った弾薬庫が引火、一気に爆音と共に燃え広がる火は瞬く間に全てを飲み込んでいった。

そこに漸く到着した増援部隊。

「これは——」

絶句する。

視線の先には半狂乱になったように砲弾を放ち続ける巨人。

流線形の丸みを帯びたフォルムは既存のACのパーツに無いデザイン。

「新型AC——パックスの死神か！」

即座に引金を絞る。125mmバトルライフルから成形炸薬弾が発射されると、巨人に迫る。

自動迎撃が始まるも、連続で発射された砲弾を迎撃する事は叶わず、命中を許す。

だが——メタルジェットの輝きは全て防護膜が防ぎきつてしまう。

その新型ACはそこで漸く自らに齒向かう存在を認知したのか、ライフルを構える。

バトルライフルの数倍の発射レートで吐き出される砲弾。

低圧砲であるバトルライフルとは違う、超高初速の鏃が迫りくる。

明らかにフルサイズの運動エネルギー系徹甲弾のそれは、一瞬でACの肩部を貫く。

AIが自動で損傷を評価、無機質な音声がコックピット内に流れる。

「クソーなんて出鱈目な発射レートだ！」

再び引金を絞ると、成形炸薬弾は目標へと迫るが——敵影

は一瞬で消え失せる。

巨大なプラズマブラストはACのメインブラスターを遥かにしのぐサイズの熱量を持って砂塵を巻き上げた。

一瞬で間合いを詰める新型ACの手には巨大なブレード。

迫りくるバトルライフルの弾丸を薙ぐと、あっけなく爆散。

圧倒的熱量を持つその刀身に触れた物体は跡形もなく消え失せた。

反射的に機体を後退させると同時——返す刃で切り伏せんとする敵。

辛うじて避けた物の、バトルライフルを切り落とされる。

『右腕兵装、パーシします』

即座に投棄——その瞬間、機体に衝撃。

『脚部損傷——』

一瞬にして切り落とされた足、それを庇うようにして膝をつく巨体。

もう脅威ではないと悟ったのか新型ACはそれを眺めるようにして佇む。

左腕に装備されたマシンガンを構えようとするが、二の腕から先が無い。

虚しく突き出たフレームがむき出しの配線と共に火花を散らしていた。

――両腕を切りやがった

回避する間もなく切られる様は正しく雑草、そう彼は感じた。

目の前の巨人に降り注ぐ砲弾の嵐は全て膜に防がれる。

僚機が放つスナイパーキャノンの砲弾も防護膜に当たる度に砕け散る。

現在の編成で最も高い火力を誇るそれを、そよ風の如く受け流す姿は神の如くであった。

しかし、彼は次の瞬間信じられない光景を目撃する。

放たれたバトルライフルの成形炸薬弾が地面に当たり不発を起すすと、そのまま跳弾となる。

その砲弾は回転しながら新型ACの装甲表面に当たると明後日の方向へ飛んでいった。

「なん、だ？」

その疑問符を打ち消すようにして機体の周囲には重砲の砲弾が降り注ぎ始めた。

巻き上げる砂塵。

155mm砲弾の弾殻がその合間をカマイタチの様に飛び交う。

弾殻は膜に当たると弾けるようにして砕けた。

『……』

アンテナユニットの損傷によって無線からは友軍からの通信が音にならずに流れ続ける。

大佐と呼ばれた男は再び迸るレーザーブレードを見るや、今度こそ死を覚悟した。

だが、忽然と敵A Cは姿を消す。

「撤退、した？」

辛うじて生き残っていたデータリンク画面からは、凄まじい勢いで遠ざかっていく敵反応が映っていた。

丁度三分、新型敵A Cの攻撃はそれつきりだった。

A g g r e s s o r

砂塵に塗れたアスファルトに照りつける灼熱の太陽。

道路沿いに佇む朽ちた民家。屋根を対赤外線、電磁波吸収素材で出来た偽装ネットで覆った即席ハンガーには練習機を改造した戦闘機が鎮座していた。

無線機から流れる警報音。

アフリカでは珍しい金髪を持つ男は、まるで午後の時報を聞くかの如く、短くなったタバコを灰皿に押し付ける。

「また、敵の奇襲か。懲りないな、連中も」

「訓練に来たっていうのに、今月で三回目だ」

慌ただしい声が無線に混じり始めると、近くにあつた有線電話が鳴り響く。

「どうやら今回もお呼びのようだ」

もう一人の黒髪の男はため息を付きながら電話機を取り上げた。

その矢先、水平線の向こうで雷鳴の如き輝きが解き放たれると、一瞬にして二人の男の表情が強張った。

会話の内容を聞くまでもないと椅子から立ち上がる金髪の男。近くに居た整備兵は直ぐに察すると、大急ぎで偽装ネットを被った戦闘機へ走っていく。

「ワーフのSAM陣地が攻撃を受けたそうだ。この様子だと飛行場の方も恐らく……」

受話器を降ろした男がそう告げる。

「テクニカルライディングに降りていてい助かったな。相変わらず俺たちは運がいい」

「みたいだな——早く上がろう。こういう時は碌でもない事が起こる」

愛機へと飛び乗ると、即座にカーボンファイバー製のヘルメットを装着。

バイザーを下ろすと、そこに機体のステータスが表示される。

甲高いコンプレッサーの音に包まれながら操縦桿を傾けると主翼

のフラツペロンとエレボンが素早く反応し、それを目視で確認。

『機体の状態は良さそうだな』

『こんな安物で何度も出撃させられるなんて、ツイてないな、レイ』

『案外、この機体も悪くないさ、ジエームズ』

『意外だな。本当はイーグルが恋しいんじゃないか？』

『慣れる物さ。それに低空を飛ぶのに鷲の翼はデカすぎる』

いよいよコンプレッサーが始動開始圧力まで空気を圧縮し、ケロシンを燃焼室に放り込みだすと甲高い音に鈍い轟音が混じり始める。それを皮切りに整備兵がパイロットにエンジン始動の合図を送る。男はそれを横目で確認、ハンドサインで答える。

『まあ、お前の場合、飛べりや何でもいって口だもんな。その点、ホークの翼は丈夫で良い』

『飛べない翼に興味は無い——シルフィード、タキシングを開始する』

『了解シルフィード、こつちも後に続く——Lady to take off』

耳を劈く轟音が轟くと遂に機体が国道へと躍り出る。

灼熱の太陽が白と黒、灰色のストライプカラーの機体を照らしつける。垂直尾翼にはコブラのマーク。

砂漠に似合わぬその機体を見送る二番機は、追いかけるようにスロットルを開け、推力を上げる。

換装されたばかりの新型エンジンは鋭い立ち上がりを見せる。

蒼と水色、白の極東カラーの機体。その後方に巨大な陽炎、それを揺らす青白い光。

再燃焼装置が流し込んだ燃料が燃え上がった。

「とんだエンジンテストだな」

弾むような声色、一人呟く男はスロットルを押し込む。

それに康応して機体は滑らかに加速。鋭く尖った翼単から白い雲の帯を残し、軽々と浮き上がった。

高度1000フィート。荒涼とした砂漠の上を疾駆する影。

ワーフのSAM陣地を襲った企業の部隊は別動隊の陽動として働いていた。

コロニーエレクトリアの航空作戦部隊は南スーダンの大統領暗殺を目的としていた。

求心力が衰えたとはいえ、未だに傭兵部隊やその他の部族をまとめ上げている彼が居る限りは実効支配はままならない。

スーダン側を支援し、反政府軍を幾ら支援したところで一向に支配権を奪えない事に業を煮やしていた彼等にとって、企業の介入はまたとない好機だった。

『こちらストライクツー、ストライクスリー高度が高い。レーダーに捉えられるぞ』

『もう直ぐ鉄塔が見えて来る。余り高度が低いと送電線に引つ掛かるぞ』

訓練を終えたばかりの兵士達は皆一様に緊張していた。地对空ミサイルが空を見張る中、超低空を侵入するミッションでは一瞬の操作ミスが墜落へとつながる。それが無意識に高度を上げるという選択を選ばせた。

だが、それによつて敵防空網に引つ掛かる恐れがあったのだが、その行為を戒めるには彼等のスキルが足りなさ過ぎたのだ。唯一の実戦経験を持った隊長機は舌打ちしつつ、その危険な行為を見逃すほかなかった。

しかし、空を警戒する目は他にあった。それは、同じ戦闘ユニットである戦闘機だった。

離陸を終えた二機のホークのレーダーにはデータリンクには無かった敵性ユニットの表示。

『二時方向、距離120km、ボギー8。報告にあった大型輸送機とは違う奴だ。どうする?』

『護衛機か。レーダー波は出していないが、念のため敵機の後方から接近する。進路、1-3-3、高度120フィート。鉄塔の下を潜り抜ける。頭をぶつけるなよ』

特高圧の電線の下を通り抜ける軽戦闘機は時速1100kmの速度で飛行する。亜音速の機体から放たれる轟音は土埃を巻き上げた。

その時、丁度敵戦闘機のレーダーが作動する。同時に、レーダー警戒装置から警戒音。

『敵レーダー波を識別、AN/APG-63』

『F15か。因縁だな、レイ』

『ベストセラー戦闘機だからな。仕方ないさ』

『それより、もたもたしていると探知される——シーカーオープン、派手にぶちかまそう』

『始めよう——シルフィード、フォックス・スリー』

AIM-120を翼から切り離し、点火。無煙火薬が超高圧のガスを噴出させてミサイルを時速3000kmまで加速させていく。尾を引かないミサイルはあつという間に群生の空に消えていった。

操縦特性が良く、機体サイズの小さいホーク200は、接近しつつある敵機を見上げる形で有った為、背景ノイズが少なく、レーダーの性能を最大限に発揮できた。それに比べ、見下ろす形になっていたF15側のレーダーは背景ノイズによつて有効距離が減じられていた。

凡そ30%程の性能低下であったが、機体のレーダー波反射率がF15に比べホーク200は十分の程度。つまり、同高度でのヘッドオンでのレーダー非探知距離はそれだけで1.2倍近く差が出る事になる。これらの要因により、敵側の戦闘機のレーダーに彼等が映る事は無かった。結果、敵側のパイロットは完全な奇襲を受けることになる。

F15CのコックピットにはRWRの警戒音が鳴り響く。連続的なその音は、敵性レーダーが火器管制モードになっている事を示していた。

『イーグル3！ロックオンされている！ブレイク！ブレイク！』

必死に高度を下げるF15は敵性レーダーから水平線の下に隠れるようにして回避機動を行う。

危険な亜音速での低空飛行は賭けであった。

だが、単純な機動で飛んでくるスパローミサイルと違い、スマラー

は空気抵抗の少ない高高度を飛んできていた為、彼等が幾ら低空に逃げ込もうがミサイルの目から隠れる事は出来なかった。

静かに突き刺さるミサイル。一見すると突然戦闘機が内側から爆発したかのようにF15は四散した。

必中距離から放たれたミサイルを避ける術は無い。

それは物理的に不可能であった。

パイロットに出来る事は只、操縦桿を引っ張り続けて祈るだけであつた。

『クソツタレ！』

重力の8倍もの遠心力が掛かる。機体が軋み、視界が狭くなる。RWRはスマラーのレーダーシーカーが作動した事を伝える。新たな警告音がコックピットに鳴り響くと同時に自動音声でミサイルの紫外線放射を捉えた。

『《ミサイル、6時方向から接近》』

左右に切り返すパイロット。

だが、それも虚しく丁度真上、太陽の中からミサイルが垂直に落ちて来る。

未だに燃焼を終わっていないミサイルの運動性能は戦闘機の回避機動を軽く上回る。

『イーグル3！被弾した！』

エンジンをもぎ取られた物の、辛うじて電気系統が生き残っていた為、即墜落を免れたF15——しかし、目の前に現れた切り立った崖に激突した。

奇襲を受けたF15側は既に6機を撃ち落とされていた。だが、その内の一機が遂にホーク200をレーダーで捉え、AIM-7^{スパーロー}を発射。

『シルフィード、敵のミサイル接近。スマラーでトドメを刺す』

『ブーマー、了解、援護する、フォックス・スリー』

更に2発のスマラーを発射する。敵のミサイルと交差すると白煙が途中で千切れる。

『白煙が凄い。やつこさん、古いミサイルを使っているな』

『敵は旧式のFCレーダー、恐らくスパローだろう。母機を叩けば無力化出来る』

母機からの電波照射を頼りに誘導されるセミアクティブホーミングミサイルは母機からの電波が途絶えると誘導が止まる。

だが、アクティブレーダーホーミングミサイルはミサイル本体に小型のレーダーが内蔵されており、レーダーシーカーが作動し、敵機のエコーを捉えさえすれば後は自動で誘導されるのだ。

無論、敵機のエコーを捉えられなくても一定の搜索パターンを描いて飛び回る為、遥かに厄介なミサイルであった。つまり、遠距離での最終的な勝敗はミサイルの性能で決まるのである。

遂に、目標に命中するスマラー。寸前まで迫っていたスパローは虚しく明後日の方向へ飛んでいった。

幾つもの黒煙が上がる中、岩山の間から一瞬見える機影、それを目ざとく発見するパイロット。

『敵機撃墜——ん？三時方向、大型機』

『例の大型輸送機だ。さっさと狩ろう』

クイ、と操縦桿を引くと、鋭くロールする機体はヴェイパーを引きながら進路を大型輸送機へと変える。

食らいつく蛇のように機体を後方へ付けると火器管制レーダーが自動で測距、未来位置をヘッドアップディスプレイに表示。それを、大型輸送機に重ね合わせると短く射撃。30mmリヴォルヴァーカノンが火を噴いた。

吐き出された弾丸は輸送機の二重反転ローターとエンジンプロップをもぎ取ると、大型輸送機を死の谷へと突き落とした。搭載されていた航空機燃料が地面に広がり一気に燃え上がると辺り一面を火の海に変えた。

黒煙が上がる中、残骸を確認するように旋回する二機の航空機。

『積み荷は確認できない。もう降ろした後か』

『例の新型AC——かもしれんな。レイ、さっさと離脱しよう。噂が本当なら戦闘機じゃ歯が立たない』

『未知の防護シールドか。御伽噺にも程がある』

『噂じや戦術核兵器を防いだって話だぜ』

『戦車並みの防御力に航空機並みの機動性——そんな兵器、有り得ない』

有り得ない、そう言った矢先、機体のセンサーがミサイルのロケットモーターが発する紫外線をキャッチ、コックピット内に警告音が鳴り響く。

『ブーマー！6時方向にミサイル！』

互いに超低空に居たため、超至近距離でのヘッドオンとなる。

対するは最後の生き残り。

イーグルが発射したAIM9。サイドワインダー

食らいつくミサイル。鋭い切り返して岩場の影に入り込むと同時にフレアを放出。天使の羽の如く舞い落ちる。熱画像から戦闘機を見失ったミサイルはフレアに突っ込むと、地面に激突して爆炎を上げた。

『まだ居やがった！後方に1機！シルフィード！食らいつかれていぞ！』

コブラのマークを掠める20mmの弾丸。

毎秒数十発以上で吐き出された弾の嵐は地面を削り取っていく。

『狙いが——甘い！』

後方から狙われている中、機首を上げるのは自殺行為。

だが、彼は操縦桿を引くと思いきり機首を上げた。急激な減速。機体には重力の9倍もの力。

機首上げにラダーペダルを操作、瞬間的に錐揉み機動を描く——
——が即座に復旧させる。

敵パイロットと彼の視線は一瞬交差する。

『なんて——奴だ！』

F15のパイロットは異常とも思えるマニユバーを目撃した。

一瞬にしてオーバーシュートをしてしまった彼が後悔する間もなく無数の弾丸が飛来する。

機体と共に四散するパイロットは確かに目撃した。

翼に描かれた国旗を。

『日の丸』

燃料と共に地面に落下する残骸が燃え上がる。
撃墜された残骸をフライパスする二機の戦闘機。

『流石は元飛行教導隊だな、レイ』

『今回は運が良かったただだよ、元ローデシア空軍のエースパイロット殿』

◇ ◇ ◇

企業の誇る新型ACのパイロットであるリンクスは歯噛みしていた。

何しろ帰りの足である輸送機をやられてしまったのだ。

今までノーマルと散々嘲笑った相手に、である。

「クソ！クソ、クソ！」

悔しさのあまり、シートに拳を何度も叩きつける。

『予測稼働限界まで残り30分を切っています。直ちに戦線を離脱してください。繰り返します——』

オペレーターの声に苛立った気持ちを再び拳に込めるリンクス。

「劣等種族相手に吾輩が撤退だど!?ふざけるな！」

『敵のノーマル部隊の練度が此方の予想を大きく上回っています。通常戦力が押し切られた状態で戦うのはリスクが大きすぎます』

「せめて蠅位は潰しても文句はあるまい」

統合制御装置から流れ込んで来る情報に先ほど輸送機を落とした戦闘機が放つエコー。

視覚情報に変換されたレーダーシステムには遠距離に高速移動物体が表示されていた。

追いつけない速度では無い、と彼は考えた。

『危険過ぎます。戦闘機の色度は平均1000kmちよつと。今の貴方の機体では持って30分。追撃するには速度差が余りにも少なすぎる』

統合制御装置からも彼女の危惧が伝わる。追撃に費やした時間は、そのまま稼働限界に至るまでの時間と同じ。つまり、帰りはAMS接続を使った機体操作が出来ない可能性が高かった。

リンクスで居られなくなるという事、それは死を意味した。

プライマルアーマーが展開できなければ、クイツクブリストが使えなければ、戦場で生き残れる確率は極めて低くなるだろう。

それに、今は通常部隊が敵側のノーマルに押されているのだ。

その状態で孤立すればどうなるか、火を見るより明かであった。

「時間さえあれば――」

怨嗟の籠った呟き。

それはネクストの宿命を宿す呟きでもあった。

地上戦

ネクストの襲撃から数十分後。
ヘグリグ油田は灼熱地獄と化していた。

敵の攻撃により破壊されたパイプラインから火炎が吹き上がり、原油に引火した炎は黒煙を上げていた。

劣勢に回った守備部隊の主力である戦車部隊が壊滅すると、遂に製油所内に敵兵が侵入し始める。

だが、それを阻むように廃墟に偽装した銃座である火点が幾つも存在した。これらの銃座には重機関銃が配置されており、敵兵の侵入を食い止める最後の砦であった。

「11時方向に敵兵！走り込んできます！」

「撃て！撃ちまくれ！」

赤く加熱した銃身からももうもうと煙が上がる。足元にはベルトリンクと薬莖の山。

銃身が過熱し過ぎないようにと、慎重に撃っていた兵士達。

だが、敵兵は銃身の加熱具合を見計らって一気に突入を始める。

死角に入り込まれてはたまらないと、兵士が引金を引き続けると、機関銃は連続した音を奏で始めた。

射線に捉えられた敵兵はカマイタチに巻き込まれたかのように、手足が千切れ飛んだ。

しかし、後続の兵士達はまるで機械の如く射線の影へと走り抜けようとしていた。

銃座の可動範囲ギリギリに捉えた敵兵に無数の弾丸を放つ——
——が、遂に機関銃の薬室内の温度は、安全に弾薬を保持できる温度を超えてしまう。

「畜生！コックオフだ！」

引金を引いていないのに、独りでに発射し続ける機関銃は、敵兵をクツキーの如く砕くと僅かに残っていた弾丸を撃ち尽くし、沈黙する。

慌てて新しい弾倉を座り込んだ状態で手繰り寄せる。

「リロード！」

銃声が止んだ事に気が付いた敵兵が破壊された74式戦車の影から飛び出す。

それに応射しようと顔を上げた兵士達は、黒煙の奥から巨大な影が現れるのを目撃する。

プレスされた様に平らで角ばった砲塔は無数の爆発反応装甲で覆われており、小柄な車体に似合わぬ長砲身をもつソレは、周囲に轟音を轟かせながら滑らかに走り込んできた。

「頭を下げる！」

兵士達は考えるよりも先に行動した。

コンマ数秒後、銃座は消滅した。文字通り壁事、である。メタルジェットと爆風が、重機関銃とそれを操作していた兵士達を木っ端みじんにした。もうもうとコンクリートの煙が立ち込める中、巨大な筒を持った兵士が、対戦車榴弾のプロープを伸ばす。

「目標！正面、敵戦車！対戦車榴弾——撃てッ！」

兵士がパンツァーフアースト3の引金を引くと、装薬に点火、カウンターマスが後方に飛ぶと同時に110mm成形炸薬弾が発射された。

反動で発射された砲弾は一呼吸置いてロケットモーターに点火、フィンを展開して飛翔。

戦車の砲塔正面にある楔形の装甲板に命中すると、爆薬が金属ライナーを鋭く成形、メタルジェットが突き刺さった。

だが、それと同時に、楔形部分に装着されたコンタクト1爆発反応装甲が起動し、金属板を射出、メタルジェットの連続体を寸断した。長さを失ったメタルジェット流は装甲表面に達するが、その奥に存在したセラミック球に阻まれた。

「効果なし！」

世界初の拘束型複合装甲を備えた戦車は、お返しと言わんばかりに125mm砲を放つと、爆発音と共に壁が崩れ落ちる。

「クソ！ERAが邪魔で抜けねえ！」

「こいつを使え！」

生き残った兵士は、倒した敵兵が持っていたRPG7を隣の兵士に投げ渡す。

室内では強烈なバックブラストの為、発射時に危険を伴う無反動ロケット砲であったが、爆発反応装甲越しに敵戦車の正面装甲を抜ける兵器が他になかった彼等は意を決する。

「反対側の窓を全部割ってくれ！ブラストを逃がす！」

強烈な爆風から少しでも身を守るために、敵戦車とは反対側の窓に向けて一斉に兵士達が弾丸を撃ち放つと、窓ガラスは薄氷の如く割り散らされた。

「援護射撃！」

一斉に牽制射撃を加える兵士達。ERAの一部を吹き飛ばされた敵戦車の近くに居た敵兵たちは慌てて遮蔽物に身を隠す。

「忘れ物だ——この野郎！」

RPG7を持った兵士は割れた壁から顔を出し、引金を引いた。鋭いバックブラストと共に舞い上がる粉塵。室内は土煙で覆われる。

飛翔した弾頭は楔形の砲塔部分に直撃すると、爆発、^{タンデムHEAT}二重成形炸薬弾のサブ弾頭が起動し、コンタクト1を起爆させる。剥離した装甲板はサブ弾頭のメタルジェット流を寸断し、エネルギーを失うと、メインの成形炸薬弾が起動、二本目のメタルジェット流が剥離した装甲板を撃ち抜く。

寸断できるほどのスピードを失ったコンタクト1に阻まれる事なく敵戦車の複合装甲、コンビネーションKと呼ばれる特殊装甲を侵蝕するメタルジェット流は、遂に戦闘室内に侵入すると、破壊されたセラミック球と共にスラグを生成、砲手を殺傷すると室内に火災を発生させた。

コンマ数秒の出来事は砲塔内に配置された125mm砲弾の装薬に引火するという結果に帰結した。NBC兵器対策の為に極めて高い密閉構造を持つ戦車と言う兵器は、言わば巨大な薬莖であった。

装薬が発生させた高温のガスはあっという間に密閉空間を満たすと、高温高圧の状況を作り出し、火災を一瞬にして爆発と言う現象に変換、そうして弾けるように砲塔が吹き飛ばされると、無くなった砲

塔基部からは巨大な火柱が上がる。

エンジンが未だ生きているのか、前に進み続ける砲塔の無い戦車は、撃破された74式戦車に衝突すると停止した。

「T64撃破！」

ガッツポーズを決めた兵士。彼のヘルメットは何の前触れもなく吹き飛んだ。

転がり落ちるヘルメットと共に、崩れ落ちた兵士を安全な場所まで引き摺って行く仲間。

「クソ！撃たれた！衛生兵！」

仲間が必死に呼びかけるが、敵のマークスマンが放った弾丸は正確に頭部を撃ち抜いており、ヘルメットには風穴が空いていた。

「3時方向！鉄塔に敵兵！」

「友軍はどうした！あそこには味方が居た筈だぞ！」

「知りませんよ！くたばったんでしよう！」

再び砲撃、壁の一部が崩れ落ちた。

「本部に救援を要請しろ！」

「通信兵は！さつき死にました！」

咄嗟に頭を隠していた兵士が銃身だけ壁から突き出し、応射する。

だが、此方が一発撃つ度にお返しにと雨アラレの如く弾丸が帰って来る。

「敵が多過ぎる！このままじゃ皆殺しにされる！」

既に、数の劣勢は如何ともし難く、全滅するのも時間の問題であった。



小高い丘に陣取る戦車小隊は、絶望的な抵抗を試みていた。

『二時方向、敵戦車、弾種、装填管付き翼安定徹甲弾——撃てっ！』

眩いマズルブラストと共に105mmの砲身から94式徹甲弾が発射される。距離にして1500メートル、その先に居たT64戦車の砲塔正面装甲に突き刺さると、コンタクト1爆発反応装甲をトタン

板の如く貫いた。

ユゴニ才弾性限界を超えた圧力によって液体の様に振舞う侵徹体はいとも簡単に鉄板を貫くが、塑性流動しない物体、セラミック球にぶつかると、急激な減速によって衝撃波が生まれ、侵徹体の先端部は広がり、変形した。その状態のまま互いにエロージョンを起こしていく装甲材と侵徹体が貫いた穿孔は歪に大きくなった。

巨大な穴を穿つエネルギーは侵徹長を激減させることと成り、結果、貫通する事が出来なくなる——これが複合装甲における、敵弾を弾いた、と言う現象であった。

直撃した際に発生した着弾炎が冷めやらぬ内に、125mm砲が火を噴いた。近代戦に置いて、既に接近戦ともいえる距離で有った為、74式戦車は砲塔に被弾、貫徹を許す。傾斜装甲での防護、それはAPFSDS相手に置いては全くの無意味であった。

『104号車大破！』

『105号車、もつと下がれ！』

再び放たれる砲弾。非複合装甲の74式戦車ではT64の放つ砲弾に耐えられない——だが、垂直に切り立った砲塔正面装甲を持つ戦車にはそれは当てはまらなかった。

着弾の衝撃と共に、塑性流動を起こした装甲素材がプラズマ化し、着弾炎を生成。

125mm砲から放たれた3BM44、通称マンゴーと呼ばれる砲弾は侵鉄を開始する。しかし、すぐさま、塑性流動を起こさない素材、セラミックブロックに達すると、急激な減速を起こす。

西側で最初に作られた複合装甲であるチョバムアーマーを貫くために生まれた、マンゴーと呼ばれる砲弾は、二重タングステン合金製の砲弾であった。先端部のタングステンが、潰れる事によってセラミックブロックに亀裂を入れ拡張し、後部の侵徹体を通りやすくなるよう穴をあける事を狙った砲弾だった。そのため、セラミックブロックは打ち破られるが、それを支える目的で設置されたバッキングプレートが十分な厚さを持つていた為、辛うじて停弾させることに成功した。

装甲の内張りに亀裂が走り、内装の一部が吹き飛ぶ。しかし、戦車の機能を奪うには足りなかった。

『――撃てッ！』

120mm滑腔砲が逆襲の砲火を放つ。発射されたJM33は砲身から放たれると、即座に空力的に邪魔な装填管を分離し、T64の砲塔正面装甲に突き刺さった。

成形炸薬弾と違い、非常に大きい慣性によって強引にユゴニオ弾性限界を超えられないセラミック層を割り進むと、遂にコンビネーションKを打ち破った。

白煙を噴き上げるT64戦車に向けて次弾を放つ――自動装填装置が成せる速射は死にかけた鋼鉄の猛獣に止めを刺した。

『敵戦車撃破！』

砲手が目標を破壊した事を伝える。

『三時方向、敵歩兵！』

車長が独立したパッシブ式の赤外線サイトで敵歩兵を確認し、砲手がそれを射撃する。

規則正しいスタツカート音が車内に木霊、空の葉莢がバラバラと機関銃から吐き出されていくと、距離にして1.5キロメートル先に居た敵歩兵は、紙細工で出来たの如く、倒れていく。荒涼とした砂丘の上に陣取る90式戦車は移動式掩蔽壕であり、120mmの主砲が発生させる反動を打ち消せるほどに安定した射撃装置に固定された同軸機銃は、どんな狙撃手も真似できぬ正確無比な射撃を連続で放つ事ができた。

――つまり、この戦場に置いて、この戦闘ユニットは正に死神であった。

油田に新たに侵入しようとする敵歩兵の屍の山を築く90式戦車の周りには無数の砲弾の着弾炎。

『来た、か』

戦車長の嘆息。それに康応して155mmクラスの榴弾砲は地面

にめり込むと、爆発、弾痕を穿っていく。

敵砲兵が邪魔な戦闘ユニットに向けて効力射を開始した事を示していた。対する此方の砲兵は沈黙を保ったままであった。

『彼我の優劣は明白——だが、引くに引けん』

断続的に放たれる同軸機銃、それは敵兵が未だに油田侵入を諦めていない証拠であり、この射撃に適した位置を棄てる事は即ち、友軍の歩兵部隊を見捨てることを意味していた。

『敵の増援が到着するのが先か、或いは此方の増援が到着するのが先か……神のみぞ知ると言った所か』

この戦場に置いて機甲部隊よりも足が速く、地对空ミサイルに極めて強く、尚且つ航空ユニットよりも持続戦可能な戦闘ユニットは人型兵器、アーマードコアだけであった。



巨大なターボファンエンジンが奏でる爆音が空に轟く。

既に日は落ち、夜空には不気味な明かりが灯る。

油田火災が起こす光が、暗闇の中、不気味に光り輝いていた。時折、思い出したかのように燃え落ちた装甲兵器の残骸から爆炎が上がる。

『こちらHQ、まもなく目標上空、アルファチーム、及びブラボーチーム、降下用意』

『こちらアルファ、HQ了解。今の所地表はクリアー。レーダーの類は見当たらない』

『こちらブラボー、到着するのが早すぎたか？ハハハ！』

『なんにせよ、展開が早いに越したことは無い。ロードマスター、準備は良いか？』

『ああ。何時でも行ける』

中国で生産されたAn-225輸送機には後部ドアが追加されていた。大型貨物を空中降下させることが出来る能力によって、アーマードコアの主力輸送を担う航空機であったが、その貨物室のドアが開き、小さなサブパラシュートが展開されていた。

『降下10秒前、9、8、7——』

降下開始の秒読みが各コックピット内に流れる。

深谷大佐、彼の乗る人型兵器の視界には降下開始を告げる赤いランプが映り込む。

『2、1——降下！降下！降下！』

降下開始を告げる青いランプが点灯すると、大型のドラックシュートのロックが解除、メインパラシュートが展開し、人型兵器を貨物室から空中へと引きずり出していく。修理を終えて新品同然となった機体は、泥沼の地上戦を続ける油田施設へと吸い込まれていった。

制圧戦

轟々と鳴り響く音。それは複合装甲を貫かんばかりに響く。時速数百キロで空中に放り出された人形兵器。セラミックとチタン^{カーバイト}合金、複合素材によって高強度と軽量化を実現した機動兵器は、その巨体に似合わぬ軽さで空を滑るようにして突き進む。

DCアークジェットエンジンから吐き出されるプラズマトーチによって、降下速度を減じ、予定の降下地点を探すようにして砂漠の上を蛇行する。

蜘蛛の瞳のように、無数に開いた赤外線センサーが地表の熱源を捉える。地獄の窯の蓋が開けられたかのように燃え続ける油田から出る煙によって可視光線は遮られており、辺りは漆黒の暗闇に近かった。

だが、その合間から見える生物が出す赤外線を正確に捉え、35m機関砲を射撃。規則的な射撃は、まるで地表にある果実を叩き割るかのごとく、敵歩兵を葬っていく。

死に物狂いで逃げ惑う兵士は、せめてもの一噛みと携帯型地对空ミサイルを放つが、鎧武者の如く、爆発反応装甲を身にまとったACにとっては蚊の一刺しに違いはなかった。

対KE防護性能を持った爆発反応装甲、ERAは直撃したと同時にミサイルの弾頭を弾き飛ばすと、弾体を粉々にして機体を守る。

旧西側諸国の誇る主力戦車の放つAPFSDSの弾体をへし折る技術は、脈々とノーマルACの機体防護システムに受け継がれていた。500mm以上もの鉄板を貫く槍に比べれば、柔らかい航空機を落とすミサイルなど、コンニャクも同然であった。

『こちらハウンドー1、降下地点に敵歩兵を確認。制圧する』

パイロットが引き金を引くと、再びマニピレーターに装備された機関砲弾が連続で射出される。戦闘ヘリが使うものより一回りも大きな砲弾は遮蔽物にしていた建物ごと貫き、飛び込んだ砲弾は建物内部で炸裂、内部にいた人員を根こそぎ破壊していった。

葉莢が空から舞い落ち、地上では破壊された設備から漏れ出る炎。

それを飛び越える巨人は、イオン化された燃料を燃やしながら降下速度を更に落とすと静かに着地した。

鳥の足にも見える、逆関節型の脚部を持ったACは背部のラジエーターユニットから陽炎を立ち上らせながら地上に補助アンカーを打ち込む。そうして先程まで使っていたマシンガンを肩部ラックにしまうと、大型のスナイパーライフルを構えた。

『ハウンドドロー1、タッチダウン』

その横に降りて来る巨体、しなやかな動作で慣性を殺し着地。みしり、と地面が軋み、ブースターの轟音が一瞬にして静寂へと変わる。

『ハウンドドロー2、タッチダウン。案外、何も無かったですね』

『ハウンドドロー3、着地した。死亡フラグ立てるんじゃないやねえよ。例の新型が戻ってこないとも限らない』

『お喋りはそこまでだ。レーダーにボギー4。距離はまだ遠い。お客さんが到着する前に施設内の敵残党を片付けるぞ』

頭部に搭載された地対地レーダーが飛行物体が放つドップラーシフトを探知。コックピットの画面には旧ウクライナ製レーダーが捉えた敵性移動体の表示。

『了解、UAV、射出』

胴体に格納された小型UAVがはじき出されると、空中で素早く浮遊用の囊胞を展開、水素ガスによる浮力と小型ファンが発生させる推力によって高度を上げていく。

『グリッド2-3にコンタクト。生体反応を確認』

赤外線カメラとレーザー音響解析装置によって生物が発する心音を建物の壁越しに捉える。

『IFFは確認できるか?』

小型UAVに搭載されたアンテナが特定の周波数で、暗号化された信号を送信する。本来であれば電波封止された携帯型端末が、敵味方識別のために強制的にチャンネルを開く為の命令文であった。だが、電波は返ってくることは無かった。

『アンノウン。敵の生き残りが居るみたいですね。どうします?』

歩兵の個人装備である携帯型端末から発せられる電波は正確に敵

味方識別を可能とした。かつて、世界で爆発的に普及したスマートフォン
の成れの果てが彼等の敵味方識別に一役買っていた。

『HEATライフルに切り替える。さっさと吹き飛ばそう。敵ACと
同時に相手するとなると色々面倒だ』

『ハウンド2―2了解』

『ハウンド3―3了解』

ガシヤリ、と肩部に吊るされた大型のHEATライフルを取り出
す。125mmのHEAT弾専用のライフルを建物へと向ける。

『shooting fire』

短砲身の滑腔砲から砲炎。フルサイズの徹甲弾よりも幾何か抑え
られたマズルブラストと共に、遅延信管に設定された榴弾が射出され
た。

建造物が爆音と煙に包まれるが、UAVからは未だ生体反応を示す
信号が来ていた。

『思ったより壁が多い。弾種変更、HE-FLAG、二枚抜きに設定す
る』

堅固な建物に隠れた敵兵は通常のHEAT弾でも排除できない場
合がある。その為、弾殻が分厚く任意に遅延時間を調整できる砲弾が
威力を發揮した。

発射された弾丸が建造物に命中すると電子信管が作動する。それ
と同時に壁に着弾する度にチップに内蔵されたインパクトタイマが
短くなっていく。それは、丁度二枚目の壁に着弾すると遅発モードに
セットされ、二枚目の壁を貫通後、炸裂した。数千個以上ものタンク
ステンペレットが撒き散らされ、室内に居た敵兵は檻襖雑巾ぼろぞうきんの如く引
き裂かれた。

『生体反応消失、グッドキル、ハウンド2―2』

心音が消えた事を確認したACは、移動を開始する。

だが、壁が崩壊し剥き出しになった部屋から転がり落ちてきたのは
敵兵だった。

『クソ！まだ敵兵が居やがる！撃て！撃ち殺せ！』

ACが身をよじり、RPG7を構えた兵士を狙い撃つ。だが、35

mmの射線が敵歩兵に重なるよりも先に、RPG7が発射される方が半秒程早かった。

装甲貫通力700mm以上もの威力を持つロケット弾は至近距離に居た巨体を外す筈もなく直撃する。

メタルジェットが装甲板を貫こうとしたその時、装甲表面に取り付けられた爆発反応装甲^Aが作動する。だが、二重成形炸薬弾^{タングラムヒート}であるRPG7には効果が無い——その筈であった。

爆炎に包まれるAC。

敵兵士は崩れ落ちる巨人を幻視した。

しかし、現実には残酷であった。

『タンデムERAで助かったぜ』

そう呟いたAC乗りは容赦なく35mmマシンガンの引金を引いた。道路に赤黒い染みが出来上がる。煙が晴れていくと傷一つないACが姿を現す。二重爆発反応装甲が損傷を受けていたが、当たったら装甲ユニット毎交換しなければならぬ複合装甲に比べて安価な物である。その為彼等にとっては、かすり傷程度であった。

二つ重ねた弾頭に対抗するには二つ重ねた装甲。タンデムヒートに対抗するために企業が出した答えはシンプルであった。故に、効果が高く費用も安く済む。成形炸薬弾が装甲兵器の主力とならないのはこう言った理由が有った。

『あまり生体センサーに頼り過ぎるな。自分の目で確認しろ』
メインカメラ

『冷蔵庫の中に隠れてやがったか。執念深い奴だ』

悪態を付くAC乗りの視線。その先には空っぽになった金属製の箱が半開きになっていた。断熱構造を持った箱はとても良く音を遮る。だから生体センサーが見落としたのだろうと大佐と呼ばれた男は考えていた。

『この先で、味方が交戦中だ。抜かるなよ』

肉眼で確認できる状況が一番安全であったが、敵兵が潜む状態の場所ではその願いも叶わない。願わくば、味方歩兵の支援が受けられる状況が一番良いのだが、と彼は考えた。無論、へり並の戦術機動を行う彼等にとって、それは殆どの場合、夢物語でしか無かった。



敵前衛と接触したのは彼等が油田内部から敵残党を排除してからであった。幸運にも敵歩兵と敵ACを同時に相手にするという事態は避けられた。逆に敵AC部隊は、歩兵とACを相手にしなければならなくなった為に、積極的な攻撃に打って出ることができずにいた。その為、互いにリコンとUAVを投げ合うという消極的な戦いが展開されていた。

『ハウンドドール、敵UAVを確認、撃墜する』

アンカーを地面に撃ち込み、膝射状態にあるACからフルサイズニールンクの125mm砲弾が発射された。装填管を分離した侵徹体は、数キロ先のクラゲのような形をした小型UAVを撃ち抜いた。

『グッドキル隊長。相変わらず良い腕してますね』
巨大なお椀のような葉莖が排出される。

『ま、FCSの補助があれば当てられるのは当たり前さ。それより、リコンの準備は？』

『セット完了。問題ありません』

市街地に散布された埋設型マイクロフォンは敵ACの足音を正確に捉えていた。しかし、UAVでの索敵に比べて精度にかけていた。その為、彼等は小型UAVでの索敵も併用していた。だが、それは敵も承知の上であった。一筋の光が空を駆け抜け、その先で小さな爆発が起こる。

『UAV03大破！UAV04も墜落していきます！』

『残りのUAVは上げるな。敵側にも上手い射手が居るらしい』

水素ガスと小型ファンで飛行するUAVはノーマルACの主力偵察用兵装であったが、リコンと違い、大きなスペースを占有する為、搭載できる数が限られていた。

本来であればこのまま膠着戦が長引く筈であった。だが、敵側は砲兵支援を要請していた。空から無数の砲弾が雨の様に降り注ぐ。

『各機、シールドを展開。すぐに砲弾が切り替わるぞ』

ノーマル部隊は空から降り注ぐ鋼鉄の雨を前にしても慌てずに行動した。肩部に吊るしてあった折り畳みシールドを展開。傘の如く頭上へと掲げ、手近な遮蔽物に身を寄せる。

敵砲兵の砲弾は直ぐに直撃を狙った榴弾から、小型の成形炸薬弾を無数に詰め込んだクラスター砲弾に切り替わった。

『つたく、こっちの砲兵は沈黙してるつつうのに、やってくれるぜ』
そう歯噛みしつつも、降り注いでくる成形炸薬弾を軽くいなす。斜めに仕込まれた仕切り板とゴム製マットが爆発の圧力によって装甲内を移動し、ジェットを左右から引き裂く。盾に仕込まれた非爆発性反応装甲^Aは突き刺さるメタルジェットを効果的に寸断した。結果、数百ミリは有ろうかと言う貫通力を誇るHEAT弾の刃はノーマルの機体には届かなかった。

『こちらハウンド1-1、スネーク4-4、支援射撃を頼みたい。このまま敵に焙り出されるのは癪に障る』

『こちらスネーク4-4、射撃準備よし。照準は其方に任せる。砲弾はどうします?』

『一番良い奴を頼む』

『了解、隊長』

ノーマル部隊の隊長は油田をグルリと取り囲んでいるコンクリート製のビルから銃身だけを敵が展開している砂漠へと突き出すと、おまけと言わんばかりに壁に盾を突き立て、雨避けにする。

「さて、と。まずはノロそうなヤツから行くか」

ガンカメラに映し出されたのはタンク型ACであった。砂漠を疾走する鋼鉄の猛獣は焙り出された獲物を狙うべく、油田の出口に射線を合わせていた。

『ハウンド1-1よりスネーク4-4、砲撃要請、座標2955、6643、6643、送れ』

『こちらスネーク4-4、砲撃支援要請了解、座標2955、6643、6643、隊長、信管^{タイマー}はどうします?』

『開けた場所に拠点制圧型ACが一機居る。その横に中量級が3機。遅延5、瞬発5発。加えて10秒の間隔を空けて瞬発10発。何方も

同時着弾で頼む』

『遅延5、瞬発5、及び間隔を空け瞬発10、了解。仰角を変えてマルチプルショット、誘導砲弾発射します——』

240mmスナイパーキャノンから人一人分程の長さの砲弾が発射された。

◇◇◇

敵側のAC乗りは油田に降り注ぐ砲弾の雨アラレを見つつ、憐れな敵影を只待ち続けた。

『敵影は見えたか?』

『まだ見えない。出てきたらコイツで蜂の巣だ』

四連装90mmキャノンを持ち上げるタンク型AC。その機体には砂塵がこびり付いていたが、塗装は光沢を保っていた。

『企業の連中は気前が良くて助かるぜ。お陰で、ボロイ装備ともオサラバできた』

野良上がりの傭兵達は企業に加担する事によって糧を得て、再び獐猛な獣へと戻ろうとしていた。今回の依頼は丁度良い機会だと捉えていた彼等は、一向に出てこない敵に訝しむ。

『それにしても、ヤツ等、耐えるな』

『この雨の中だ。もう死んでるんじゃないのか?』

一秒間に数十発もの小型成形炸薬弾を降らせる雨の中、生き残れる存在は無い。例え戦車でも撃破できる散弾タイプの砲弾は彼等にとっての自信の源であった。健全な砲兵に守られた地上部隊程、恐ろしい物はない。だが、それはあくまでも通常での戦闘に置いて、である。対AC戦を経験した事のない彼等には計り知れない事であった。『あと30秒で雨が上がる。その後、市街地に突入する。各機、準備しろ』

指揮官がそう告げる。

傭兵達は何処かで楽観視していた。

企業が付いているのだから——と。

戦場に置ける希望的観測と、敵を侮るといふ二重の失敗を犯した彼等にその間違いを正す機会は与えられなかった。

市街地から銃口を覗かせていたACは目標を正確に追尾する。勿論、それは撃つ為ではない。

空から降って来る誘導砲弾に目標を指示する為の準備であった。高度数十キロを飛行している誘導砲弾の先端には、セミアクティブレーザーシーカーが取り付けられていた。

この手の誘導兵器は湾岸戦争時代に開発された物であり、未だに使われる骨董品であったが、古いだけあって信頼性は折り紙付きであった。

『弾着まで10、9、8——』

指揮官である隊長と呼ばれた男はカウントに耳を傾ける。到着速度は毎秒400メートル程、誘導させるならそろそろと、彼は操縦桿の引金を軽く引く。

すると、銃身に取り付けられたレーザー発振器から誘導信号が目標に当てられ、誘導砲弾はその信号を即座に捉える。小さなクリック音が二度聞こえる。それは砲弾が誘導を開始した電波を捉えた音であった。

『——3、2、1、弾着、今！』

砂丘の斜面を下っていた拠点制圧型ACに数十発の砲弾が同時に命中した。

まるで砂丘が噴火したかの如く噴煙が上がる。ノーマルACの搭載燃料、弾薬、命中した砲弾が同時に爆発したエネルギー。全てが一度に放出される。

『全機！散開！遮蔽物に身を隠せ！』

敵AC部隊の隊長は、その攻撃がレーザー誘導砲弾によるものだと直ぐに気が付くと、レーザーによる直射が不可能な砂丘を目指して即座に移動した。

——ふむ、まあ、そうなるよなあ

だが、彼はそれを冷静に俯瞰した。

『敵の砲弾はレーザー誘導タイプだ！砂丘に隠れば直撃はしない！』

不意を突かれた状況下で正確に判断する敵の指揮官に感服しつつも、彼は評価を下す。

——悪くない。悪くないんだが……場数が足りんな

静寂に包まれたコックピットにクリック音が再び鳴り響く。

時間差を置いて空から砲弾が降って来る。

無論、通常なら誘導は不可能だ。

それは砂丘が邪魔になってレーザーが届かないからだ。

『弾着まで、5、4、3……』

カウンtdownが再び始まる。

誘導砲弾は正確に狙いを定める。

レーザーシーカーは目標を捉え、進路を変える。

『——弾着、今！』

轟音と共に、残り三機の敵ACの周りには、計十発もの240mm誘導砲弾が寸分たがわぬ精度で着弾する。敵ACのコアが爆炎と共に舞い上がる。三機のうち、二機に直撃弾。装甲に包まれたACと言えども、数百キロもの重量がある榴弾が直撃したとなると、唯では済まない。装甲が比較的薄い頭部や腕部、それに脚部は破片と爆風でバラバラになった。

『こちらハウンド1ー1、スネーク4ー4、目標破壊、良い腕だ』

『こちらスネーク4ー4、今日の晩飯は奢ってくれよ』

背中を向けて逃げ出す生き残り。

低く低く、砂丘を背にしてブースターで飛行して戦域を離脱する。

それを、俯瞰して見つめる。

『ああ、奢ってやるや』

そう答える隊長機のメインカメラからは、敵ACが出す排熱の陽炎しか見えていない。

轟音と共に一発の125mm砲弾が発射される。

それは毎秒1800メートルもの速度で飛翔し砂丘を撃ち抜くと、

侵徹体は敵ACの背面装甲を撃ち抜いた。

砂丘からは爆炎だけが顔を覗かせる。

それは、二度上がると黒煙が続く。

『全ての敵ACを排除、各機、損害を報告せよ——』

部下の通信を聞きつつ、彼は再び辺りを俯瞰する。

相変わらず火災が続き、辺り一面に黒煙を巻き散らす掘削リグ。

鉄の雨は止んだが、施設に降り注いだ砲弾が起こした火災は徐々に勢いを増していた。

彼は安堵した。

何故ならそこに例の新型機が居なかったからだ。

「ふう。今日も生き残ったか」

そう言いつつ彼は、クラゲの様に漂っていた小型UAVを回収する
のであった。

マツサワ港急襲作戦Ⅰ

ジュバに拠点を置く整備工場では、先日行われた敵襲によって損傷した人形兵器を修理するために、大規模な野戦整備場が整えられていた。そこに並ぶ幾つもの部品。それは分解され使える部分と、それ以外、つまり本格的な修理を行うために後送する必要がある部分である。使える部分は組み直され、新たなアセンブリとして戦場に出され、スクラップ同然のパーツは前線基地の隅に追いやられていた。重度の損傷を受けた部品が置かれたエリアを横切る一台の対地雷装装甲車^{M R A P}。漏れ出た油や燃料の類を砂で吸着させている作業員の横を通り過ぎると、検問の横に停車した。兵士達は一斉に何かの機械を頻りに車体に翳していた。

「ご無事でしたか、大佐！」

「ああーこの通り、ピンピンしてる！それより、放射線探知機が鳴りっぱなしなんだが、何か知ってるか？」

巨大なエンジンが奏でる轟音が開けた窓越しに飛び込んでくる。それに負けじと声を張り上げるが、胸ポケットに忍び込ませていた放射線探知機が警報音を奏でていた。

「ええー例の新型が暴れ回ってからずっとです！奴にやられた機体は特にひどい！」

「なるほど、噂通りってわけか！破壊された機体は別にして取ってるんだらうな!?出来れば見たいんだが」

国家解体戦争からまだ日が浅い段階で既に新型兵器と放射線反応の関係性は密かに噂されていた。だからこそ彼らは放射線反応に神経を尖らせていたのだ。

「特別保管場にありますがよ！でも、その前に除染します！」

二重耐弾ガラスの窓が閉じられると、与圧され気密が保たれた。外に集まってきた作業員たちは皆、防護服を着ており手には放水用のノズル。そこから噴き出した液体は車体に付着した未知の放射性物質を洗い流していった。

除染は思いのほか直ぐに終わる。液体に含まれた洗浄剤によって

簡単に装甲表面から引きはがされたからだ。問題は地面に流れ落ちた粒子だ。これは兵士達が土をひっかき出し、専用の廃棄抗に捨てることによつて対処された。要するに地面に埋めた。

これによつて再び舞い上がり、皮膚に付着する事を防ぐ。それ以外にも肺に入らないようにする為でもある。外部被爆よりも内部被ばくの方が怖い。

それはアルファ線よりもガンマ線の方がエネルギーが多いからだ。正確には何方も同じくらいのエネギー量だが、減衰量がアルファ線の方が桁違いに少ない。この放射線は百メートル位離れた所でも観測されるが、ガンマ線は数センチくらいで減衰してしまう為、遺伝子への加害能力が桁違いなのだ。

問題はそれ以外にもあった。放射線を浴びた物質はそれ自体が放射能を持つ。その為、ネクストACが破壊したノーマルは放射能を帯びている可能性が高かった為、一か所に集められていた。

二重扉が油圧シリンダーによつて開かれると、複合装甲が張られた運転席から降りてきた大佐は、乾いた砂の上に降り立つ。

辺りには焼けたオイルの臭いが充満している。鼻を突く臭いは恐らく配線の被覆が焼けた臭いだろうか、と彼は思いながら廃棄品区画を歩いていくと、防毒マスクを外した兵士が集まる場所へとたどり着いた。

「これが新型が壊したノーマルか」

鋭利な切り口から焼けたコックピットが見え隠れしている。焼損したハッチからは煤がこびり付いた内張の一部がはみ出している。

大きく袈裟斬りされた機体は半分以上が無くなっている状態だ。

「切られたというより、爆散したみたいだな」

冷静に、冷徹に評価する。

所詮は傭兵。戦いの最後など、この程度、と割り切る大佐は敵の新兵器を品定めするようにつめていた。

「こいつは、複合装甲ごと一瞬で持っていわれています。恐らく、パイロットは即死だったでしょう。大佐、あなたは相当運がいい」

彼はその場所に置かれていた愛機の一部を見つめる。既にスク

ラップ品として挿げ替えられた物であったが、コアがやられていなかった為、即座に戦場に復帰できていた。

稼働率を極めて高く保つ為に、ほぼ全てのパーツがユニット毎に交換できるノーマルAC故の荒業であったが、復帰するには一番の重要部品であるパイロットが無事であるという前提が必要だった。あの時、もしコアを破壊されていたらと考え、大佐は身を震わせた。

「ノーマルじゃ、考えられない出力だな」

「それだけじゃありません。奴は溜め動作無しで切り付けていたそうです。通常ならこれ程の出力を出した後のジエネレーターにエネルギーは残っていない筈でしょうから、チャージするはずです。ですが奴にはそれが見られなかったそうです」

「燃料電池では考えられんな。となると、ヤツの主機は恐らく——」

「——核動力、ですか」

「可能性としてだが。しかし、それ以外にこれ程の高エネルギーを生じ続ける熱機関、思い当たらん」

「ヤツの周囲には明らかな放射線反応がありました。その可能性は高いでしょう。しかし、通常の原子炉であれば冷却が必要です。あの機体には冷却機に当たる部分が存在しないように見えました」

既存の原子力機関は全て水冷式である。それは、原子炉の熱を100パーセント力学的エネルギーに出来ないからであり、余分な熱は捨てる必要があった。その為、冷媒の特性は非常に重要であり、この場合の特性とは質量であった。空冷式が一般にならなかったのは水に比べ、比重が軽すぎて炉心が高温になってしまう所にあった。

一般的な軍用原子炉は熱出力の25パーセント程を機械的出力に変換する。言い方を変えれば残りの75パーセントは熱として捨てなければならず、高出力を出そうとすれば鼠算式に莫大な発熱を伴う事になる。この熱を排出できなければ炉心は高温になりメルトダウンを誘発する。なので現存する原子力機関はもれなく水冷式なのだ。大佐はそれを踏まえ考える。

「それに準ずる何かがあるのか、或いはその必要すらないのか」

謎に包まれた新型ACの全容を掴むことが出来ずに居た彼の思考は、同行していた士官の言葉によって遮られた。

「大佐、通信が入っております。恐らく、大統領かと」
「貸してくれ」

そう言つて電話先の相手の話に耳を傾けるのであった。

静寂に包まれたブリーフィングルームには重々しい空気が漂っていた。企業軍が扱うネクスト襲撃の報から数時間で部隊の大多数に被害が出ていたからだ。

問題は投入されたネクストが最低でも二機居たという事実が更に事態を深刻にしていた。

「二機でもこれだけの被害を被つたつてのに、それが複数？見間違いではないのか？」

いくつもの写真に映し出されていた機体はどれも見たこともないパーツで構成されていた。丸みを帯びた重量級の機体には鮮やかなブルー。もう一つの機体は黄土色の塗装が施されていた。

「この写真はそれぞれ別の場所で撮影されたものです。機体形状から同一企業の機体だと推測されますが、カラーリングから機体だと判断しました。そして、皆様にお集まり頂いたのは、このネクストを撃破して頂くためでございます」

どよめきが起こる。そもそも、難攻不落のネクストを撃破したするなど居ない。国家解体戦争から数ヶ月しか立っていない現在、その前に倒れた傭兵たちは数しれず、パックスの死神という名を欲しいままにし続けるネクストに楯突く事自体が自殺行為であった。

「それは、壊せると確信してのことか？」

「はい。それについては説明させていただきます」

秘書官と思わしき男は、画面を切り替える。

「先日、我々の諜報員が遂にネクストの居場所を特定しました。場所はこちら、エレトリアのマッサワ港です」

再び画面が切り替わる。画面には巨大なドーム状の建物が映し出される。

そこに出入りする車両に積み込まれたのは先程の人形兵器が載せられていた。

「同港に建造された建物にて企業軍はネクストの整備を行っているようです。ここを起点にネクストを各地の戦場に派遣していることが確認されています。出撃前、出撃後のインターバルを鑑みると、彼らの持つ新兵器はどうやら極めて長い整備時間を必要としていることが解りました。ですので、整備中のネクストを急襲し、起動前に一気に叩く事によって目標を達成できると考えております」

画面が切り替わり、マツサワ港の航空写真が映し出される。

「つきましてはここにお集まり頂いた傭兵の方々にこの港、及びネクストの整備基地の強襲をお願いしたいと存じます」

「おいおい、エレクトリアのマツサワといえは、国境から相当奥じゃねえか。そんなところまでノーマルACで行ってか？燃料が持たねえ。つうか、命が行くあつても足りん。国境部隊を打ち破ってそのままネクストと戦闘しろだつて？冗談じゃねえぞ！」

マツサワ港は軍港としても大規模なものであり、当然防衛設備も極めて充実していた。地对空ミサイル、地上部隊、それに海上警備。予想されうるすべての脅威に対抗できるだけの装備が備わっていることは明白であった。

それに加え、作戦行動半径の制約もあつた。この人型兵器は燃料電池で動いており、陸上兵器類の中でも極めて高い熱効率を持っている。だが、それでも戦闘機動時には凄まじいエネルギーを消費する。それを賄うためには多量の燃料が必要になるが、補給の類が見込めないのなら、ブースター類を使った戦闘は不可能となる。三次元機動ができなくなったACは陸上兵器の格好の標的である。

傭兵たちにはそれがよくわかっていた。

「どのみち正面からマトモに戦えば、一瞬のうちに切り伏せられるだろう。しかし、寝込みを襲えば或いは———ということか」

大佐の呟きに秘書官は深く頷く。

「問題は、何時、どうやって、発見されずに接近するかどうか。陸路は遠い上に警備も厳重。海路だつて敵艦艇をかいくぐって侵入できる

とは思えん」

秘書官は画面に映し出された巨大なタンカーを指差した。

「この船は、旧パナマ船籍、シーヴァイキングです。現在、油槽内を突貫作業でノーマルACを搭載できるように改造しています。傭兵部隊の方々にはこの船に乗って民間船舶を装い、マッサワ港に侵入していただきます。作戦決行日は3日後。報酬はこちらになります」

破格の値段が掲示されるが、しんと静まり返るブリーフィングルーム。

「なるほど、その金で俺達に死ぬ、と言いたいわけだな」

どう考えても、嚴重な警備を突破しネクストを撃破したとしても生きて出られるとは思えない作戦であった。

「確かにリスクの高い作戦ですが、正面から戦っても勝ち目のない相手を倒すにはこれしか無いと私達は考えています。それに、現地の反体制勢力であるマグリブ解放戦線との共闘となります。帰りは彼らの支配地域を退路として確保すれば、生還も可能かと思われまます」

マグリブ解放戦線といえば、企業に歯向かう勢力としてはアフリカ最大である。確かに助力を期待できるのなら帰還できる確率も上がるだろう。しかし、所詮は通常兵器を主体とする武装集団である。とてもではないが、パックスの死神をどうにかできるとは思えなかった。そう考えていた大佐は押し黙った。

「作戦まで時間はあります。それまでに答えを考えておいてください」

大佐は踵を返し部屋を後にしようとした秘書官に話しかける。

「断つたらどうなる?」

「つい先程、コロニーエレクトリア及び、スーダン側から武装解除勧告が届きました。大統領もそれに応じるおつもりでしょうか」

「つまり、初めから期待していないという事か?」

「いえ、期待はしています。ですが、何処に着地するかはあなたの方次第です」

「無価値な野良犬として葬られるか——或いは、伝説のレイヴンとして名を遺すか。後者の方が傭兵冥利につきるってもんだ」

こうして、マッサワ港襲撃作戦が始まった。

マツサワ港急襲作戦2

ガントリークレーンが積み木のように岸壁に物資を積み上げていく。その前を横切る長い列は蛇のように続いていた。警備部隊として派遣された人形兵器の足元で寝そべる男が湿りきったタバコに火を付けると、耳障りなノイズを撒き散らしていたラジオから放送が流れ始めた。

「遂に始まったな」

「お前は帰らないのか？」

いつの間にか隣に座っていた男がライフルをスリングベルトに預け、ポケットから酒を取り出す。

「俺はまだこの国に用事があるからな」

「この国、か。そう思っているヤツが居たなんて驚きだ。ここも、もう直お開きだ。企業の連中が本気になったからな。次の戦場をまた探さなきゃならん」

面倒だ、とボヤくと男は安酒を煽る。

「まだ終わっちゃいないさ」

湿気たタバコの煙をゆっくりと吐き出しながらつぶやく男をさも面白そうに眺めるライフルを持った男。彼は忠告にしてはふざけた調子で言った。

「諦めが悪いな。早死するぞ」

「それ位しか取り柄が無いものでね」

そう言いつつ湿気たタバコを地面に投げ捨てると、それを見計らったかのようにして、隣りに座った男は安酒を仕舞うと、紙束を取り出した。

「これが頼まれていた物だ。確認しといてくれ」

「ウクライナ船籍か。よく捕まえられたな」

見慣れないキリル文字が羅列された紙束。それらを手早く確認すると男は胸ポケットから旧国家で流通していた紙幣を取り出す。

「手数料はいらないよ。ちよつとしたコネがあつてね。それより、その紙幣ドルか？もう潰れちまった国の紙幣なんか出すなよ。お互い、

周りに足元見られちまう」

慌ててしまおうとする男はふと、紙幣に目をやる。

「つい数週間前までは使えたんだがなあ……」

「そりや、残念だったな。最も、国が発行している通貨で使える物と言えはそんなに残っちゃいないがな。いい加減、こつちにしろよ、傭兵」

男はそう言うのとカードを取り出す。そこには企業のロゴマーク。

「キヤツシユカードは好かん」

「企業嫌いも程々にしておけよ。何時か、これを使う日が来るのだから」

そう吐き捨て、立ち去る男の背中を見送る傭兵。

彼はその先に並ぶ長蛇の列を眺めると、沈みゆく夕日は既に水平線に隠れようとしていた。

「俺はまだ戦える——…」

呟く男は宵の光に包まれ始めた港に背を向けるとその場を後にした。

大型貨物を釣り上げるクレーン。布に包まれたその積み荷はゆっくりと降ろされていく。

抱えるようにして受け取ったのは巨大な人型。

足元には無数の砲弾。サイズは対人用の小型の物から、人間大の物まで多数が揃えられていた。

「これで、奴に勝てますかね」

「勝つさ。その為の装備だからな……」

二人の男の真横を大型トレーラーが通り過ぎる。積み込まれたスナイパーキャノンの重量によって撓んだサスペンションからギシギシと言う音を立てながら走り去っていく。

「そういえば、例の新型、また出たらいいですよ。今度はオーストラリアみたいですね」

「さながら俺たちは時代遅れの理念に縋る旧型って訳か」

「汎用型A Iに無人機、それに新型A C。目まぐるしく変わりますね」
「そりやそうさ。企業の製品の半分以上が今や人工知能が設計する時

代だからな。ヤツ等は休むって事を知らない。人間の俺たちが一歩進む間に三步も進んでやがる。寝なくていい分、人間より活動できる時間が長い。俺たち人間に勝ち目はないさ」

二本目の煙草を吸い終わり、投げ捨てると濡れた地面に吸い込まれる。

「僕等に残されたのは汚れ仕事……ですか」

ウエットワーク

「殺人のライセンスをAIに与えてはならない」——何処かのお偉い軍人さんが残した言葉だが、お陰で俺たちは職にあぶれる事無く今に至るって訳だ。ま、正しいっちゃ正しいんだがな」

深谷大佐はそう言いつつ、数年前に日本で起きた大惨事を思い出す。

「京都駅前ナノマシンテロ、そーいや首謀者はまだ捕まって無かったんでしたっけ？」

「いや、実行犯は捕まってる。犯人と言っつていいか解らんが」

「汎用型人工知能、AGIでしたっけ？ 噂だと協力者が居たって話じゃないですか」

「知らんよ。破滅願望のあるAGIに手を貸す人間が居た、なんて考えたくもねえ」

煙草を銜えた深谷大佐はぶるりと身を震わせた。

「京都駅周辺は今でも除染が進んでいないらしいじゃないですか。怖いですね。そんな凶悪な微細兵器ナノマシンを簡単に自作してしまうAGIが存在するなんて」

何時の間にか深谷大佐のACはメインコンピュータの換装の為、胸部装甲を外されていた。

新型の制御システムに乾燥するための作業は着々と進んでいく。胸部に内蔵されていたソレは、一見すると無数の血管が繋がった人の臓器のようであった。それを眺めながら、大佐は答える。

「人間の神経細胞は電気信号をやり取りする機械なんだ。そりゃあスィッチング速度が鬼のように遅いが、それでも俺たちは苦勞していない。つまり、それだけデザインが優れているってわけだ。それを機械に置き換えたんだからヤバイに決まってる。人間を超えちまうなん

て当たり前のことなんだよ」

「そうじやなきや人形兵器が立ち上がったたり出来るわけ無いですよ
ね」

「フライ・バイ・ワイヤシステムの応用。行き着く先は完全無人化。世
知辛い世の中だな、全く」

戦術データ・リンクに、火器管制装置、索敵レーダー。姿勢制御装
置に、戦況分析装置と、どんどん人の手を離れていく機械に対して諦
めのため息をつく。

「人の死なない戦争が実現するなんて良いじゃないですか。ある意
味、究極の政治交渉ですよ」

「或いは、究極の経済活動としての戦争、か。スクラップアンドビルド
とはよく言ったものだが、経済の効率化によって、最終的にスクラッ
プにされるのが人間じゃないことを祈るよ」

「その前にパックスの死神にスクラップにされないようにしないと」
「解ってるさ。ま、完全機械化されていないのであれば人間である俺
たちにも付け入る隙きはあるさ」

「搭載する中央演算処理装置の換装もその一環ですか？」

部下である石川は、換装されつつある中央演算処理装置を見ながら
言った。

「そうだ。レイセオングループ製だよ。何でも猿の脳髓を模倣した
ディープラーニングマシン
深層学習装置らしいぞ」

そう言いつつ、大佐は部下の石川に新型AIの性能が示された端末
を渡す。彼は目を見開く。

「射撃安定性、スピード、ジャンプ力、エネルギー変換効率、どれも元
の数倍は有りますよ。頭を変えただけでこんなに化ける物なんです
かね——」
「って肩武器の構え動作無しでの作動を保証？すげえや」

「変わるさ、そりゃ。空自のF4ファントムだってレーダーと
火器管制装置変えただけでイーグルキラーに変わるんだ。ACだっ
て同じや」

「でも、前の物も同じ様なディープラーニングマシンだったじゃない
ですか。何が違うんでしょうか」

「プログラミングした奴が違う。前のは人間がプログラムした物、と言うよりはティーチングしたというべきか——それが、レイセオングループじゃ人間ではなくA・Iが行う。それでこれだけの性能差が出来る」

「そう言えば、囲碁の世界チャンピオンを破った人工知能も自己対局で強くなったんでしたっけ？」

「いや、アレは違う。チャンピオンを破ったのは人間がティーチングしたヤツだ。そんでもってそのA・Iを破ったA・Iが自己対局でティーチングされて作られた物だ。特化型A・Iだな」

「特化型A・I、昔は散々バカにされてましたが。今じゃ立場が逆転しそうですからね」

「今も昔も物事の本質が見えない奴は居るもんさ。特化型人工知能の普及、その先に何が待っているのか、そいつらには判らんのか」

「汎用型人工知能——ですか」

大佐と呼ばれた男は首を振る。

「解ってないな、お前は。人の仕事を特化型A・Iが少しずつ取って代わった。それら、全てを置き換える事と人の脳髓を模倣する事は等価だが、同質ではない。お前の言っているA・G・Iは全脳アーキテクチャだ。俺が言っているのは全脳エミュレーション型A・G・Iだ」

「よく解りませんね、何が違うんでしょう」

「そうだな——今日から一日、一つずつお前の脳細胞をトランジスタユニットに置き換えたとする。お前の意識は何日後に機械に変わると思うか？」

石川は頭を悩ませる。事故によって脳神経の一部を切除して日常生活を送る兵士を見たことが有った彼は、その様子が以前と変わりなかつたので、細胞一つずつであればもつと変化が無いだろうと思う。

だが——同時に彼は思う。一体どれだけの量の細胞を変えられれば自分が機械化されたと感じるのだろうか、と。

「哲学的過ぎます。自分には解りません」

「俺はこう思う。恐らく全ての人類は自分の脳が機械に変わった事を認知できないだろうってな」

石川は自身の脳細胞がトランジスタに変わったという意味が今一ピンとこないのか首をかしげる。だが、彼は同時に得体のしれない気味の悪さを覚えた。

「人間の神経細胞とトランジスタは基本的な動作アルゴリズムがとも良く似ている。トランジスタは、ベースに一定以上の電流が流れると、エミッタ・コレクタが導通し電流を増幅する。人間の神経細胞も同じだ。一定以上の電流を樹状突起に受けるとLSTと呼ばれる発火現象、つまり流れてきた電流以上の電気を軸索に流す。人と機械は細胞単位で似てるんだよ。構造的にな」

「ですが、機械は無機物ですし、集積回路に命は宿りません」

「そうだな。それが一般的な人間の関心なんだろう。だが、これだけ技術が進歩しても相変わらず科学ってやつは人の魂を肯定してくれない」

「しかし、今ここにある、感じる、みたいな物が機械にあるとは思えません」

「でも、そうなるよ——いや、何でもなし」

深谷大佐はそれ以上言葉を紡ぐことを辞めた。しかし、彼は思う。部下の言う事ももつともだが、それだと人間と機械の違いは感じる、と言うプログラムだけと言う事になる。

「——それにしても、どうして新型AIのチップには名前が付いているんだろうな」

Chara、Linna、Marie——

建造された擬装タンカーに積替えられていくACのコックピットにはその全てにチップ固有の名前が表示されていた。

◇
◇
◇

ネクスト襲撃から半日後、つかの間の休息を得ることが出来た彼等は南スーダンの首都、ジュバで休養を取っていた。ハンガーに戻され

たACは次なる作戦の為に幾つかの改修を受けていた。まず、問題となつたのはノーマルACの水中作戦遂行能力だ。

通常、ACは水中戦闘はしない。それは戦車やヘリと同じ空間を共有する戦闘ユニットであるからだ。しかし、タンカーから出撃する際、どうしても水中を抜けなければならぬ。その為、水中移動能力を付与させる必要があった。

「んで、こいつが新型か？随分と骨抜きになつたみたいだが……」

炭素繊維の縫い目がむき出しになつたフレームには、同じく炭素繊維で強化された装甲板が付けられていた。

流線形の形状は水中での抵抗を減らす役割を果たすようであったが、炭素繊維自体の防弾性は余り期待できない。なので、大佐は愛機が中量級と名ばかりの軽量機になつた事を悟つた。

「ええ。大佐の機体を含め、作戦機体には大幅な改造を施しました。二脚型はシュノーケル装備。四脚型のタイプはフロートに改造してあります」

ズラリと並ぶ機体にはどれも見たことも無いパーツが付いていた。フロート型と呼ばれた脚部の物は、明らかに地上では使えない形状をしていた。

「完全に水上戦用も物も混じつてるじゃねえか。帰りはどうすんだ、これ」

「マグリップ解放戦線が陸路から部隊を寄越すらしいですよ。フロート型は水上から撤退中の味方機を援護するってことじゃないですか？」

「まあ、敵の水上艦の射撃を掻い潜つて生き残れる気がしないし、水上の敵は倒すしかないか」

整備兵の一人は大佐に凶面を見せると得意げに語り出した。

「水上専用だけあってこの脚部凄いですよ。内臓してある追加ジェネレーターの出力が8メガワットあるんです。最大巡航速度が70ノット以上。もうミサイル艇も置いてけぼりですよー！」

大佐は鼻息の荒い部下から視線を外し、そのフロート型とやらの視線を向ける。脚部に取り付けられていた複雑な形状の羽。それを見て漸く悟つた。

「水中翼付きフロート、それに無理やりガスタービンを搭載してるのか。通りで阿保みたいに早い筈だ。んでも、水中で動けるんだろ？流石にタンカーから出られなかった、なんて洒落にならん」

「心配には及びません。内臓バッテリーで推進できるように電動機を駆動軸に取り付けてあります。ノーマルACのDCアーキジェットに比べたら駆動効率段違いに良いので、二脚型の機体にもポッド型電動機を取り付けました」

スタビライザーに見えた部品はどうやら電動推進器だったらしい。

大佐は、愛機に取り付けられた楕円形のポッドに目を向けた。

「ちゃんと、投棄できるようにしといてくれよ。こんな物、陸に上がったら死重量にしかならんからな」

「投棄は出来ますよ？でも、大佐、これ無くなったら泳げなくなりますよ？」

「わ、解ってるよ」

金槌である大佐は水中でのベイルアウトを想像してブルりと身震いする。

「それよりも、肝心の物は出来てるんだろ？アレが無いと始まらない。ネクストに歯向かうんだ、せめてヤツに通じる兵器が要る」

「重フツ化レーザー。完成してますよ。ただ、物が物だけに扱いは慎重に行ってください。落として壊してもしたら大事ですよ」

「まあ、高純度フツ素をぶちまけるようなことはしないさ。撃たれたらしらんがな、ハハハ！」

「くわばらくわばら。この基地の周辺で使う事にならないよう祈りますよ」

「んで、肝心の出力の方は？死神の腸を焼ける位はあるんだろ？」

「1. 2GWギガワットです。泣いても笑ってもこれ以上の出力では超電導コイルが溶けます。因みに、この数字は理論値ですからね」

「解ってるよ。ったく、せっかく熱に強いプラズマレンズを採用してるってのに、肝心のそれを保持する為のコイルが焼けるんじや意味ねーよな」

「何言ってるんですか。今までのガラスレンズであれば一瞬で蒸発し

ている出力ですよ。このパワーを秒単位で照射し続けられるなんて、数年前じゃ考えられない事なんですよ」

話していた二人の後ろに巨大なトレーラーが停車する。荷台には黒光りする電柱のような物が載せられていた。

「ん？ひよつとしてあれ、戦車砲ですか？それにしてもやけにデカイ様な……肩武器にするにはめんどくさそうですが」

「ありや予備さ。レーザーが使えなかった時の為のな」

「いっちゃなんですが、ネクストに通常兵器が効くとは思えないのですが」

「通常兵器がプライマルアーマーを抜いたのは二度目撃されている。一度目はイエメン戦での戦艦ミズーリが放った砲弾だ。ビデオで見た限りでは豪快にPAを貫いて死神のスタビライザーをぶっ壊していた」

「戦艦ミズーリ、40cm砲弾ですか。流石にノーマルに積載するのは無理そうだ。やっぱ死神の名は伊達じゃないのか」

「——いや、もう一つある。それも、こいつは俺たちノーマルの放った弾丸だ」

「え？それはどのタイプの物ですか？」

「125mmHEAT弾、ロシア製の奴だ」

「流石にそれはないでしょう。ノーマルの標準兵装ですよ、それ」

「俺の目の前で奴の装甲表面に届いた。問題はその砲弾が地面に跳弾して減速されていた事だ。推測だが、あのプライマルアーマーは、戦車という所のアクティブAPPSみたいに飛来する物体の初速によって動作を変えるのかも知れん」

「電磁装甲でしょうか？そんな事が出来るんですかね」

「これも推測の域をでないが、地面との干渉を防ぐ目的かも知れん。あのPAとやらは地面や建物との接触で反応している様子は無かった。反応すると不味いのか、もしくは発生させる機構の関係で制約があるのか、或いは——」

その言葉を続けようとした時、サイレンが鳴り響く。

「空襲警報！急いでACを起こせ！」

西の空に無数の機影。

その日、マツサワ港襲撃部隊の長い一日が再び始まろうとしていた。

マツサワ港急襲作戦3

巨大な翼を大空に広げるその姿は白い白鳥のようであり、天使の様でもあった。

その腹の中にあるのはパックスの死神。それに搭乗していたセーラ・アンジエリックはコックピット越しに荒涼とした砂漠を眺めていた。

『クライアントから正式に連絡がありました。南スーダン政府軍、残党を討伐して欲しいとの事です』

半日前の戦闘でかなりの損害を出していた政府軍。しかし、企業軍側も無傷と言う訳にはいかず、地上、及び航空部隊の損耗が激しかった。そのため、痺れを切らした彼らは遂にネクストによる深部敵地攻撃ディープストライクに打って出たのだ。

『どうしてまだ諦めないのかしら。もう、勝ち目が無いって解っている筈なのに』

『セーラ、私達はその分からず屋達に引導を渡すのが仕事なの。その先は考えては駄目よ』

放棄された街の上を飛び越える超大型輸送機。その周囲を護衛戦闘機が取り囲む姿は鳥の群れのようにであった。

その影が荒廃しきった町並みに映り込む。

かつて繁栄を栄えた街が、スラムに飲み込まれ、そのスラム街さえも数多の戦乱に撃ち抜かれ、もぬけの殻となって果てた。

残滓がかすかに残る街、その上を飛ぶ航空機の影は死体に群がる鴉のごとく群生の空を埋めていた。その影を見つめながらセーラは言った。

「軍人つてもう少し賢いと思っていなければ……戦火を長引かせれば世界が荒廃してしまうって思わないのかな」

『彼等には彼らなりの正義があるのです。それに、彼等は高度な軍事訓練を受けてきた戦争のプロなのです。ネクストの優位性があるといつて、油断できる相手では在りません』

「古い兵器が新たな兵器に駆逐される。これって歴史が証明してきた

事じゃない。今更その流れが変わるわけないわ」

何度かノーマル同士の戦いを見てきたミドには彼女の危うさが解っていた。

戦場で見かける下克上は陸戦に置いては割と存在した。

惜しむらくはセーラにその歴史を知る機会が無かった事だった。

少女としての幼さと危うさを目の当たりにして深いため息をつく
とミド・アウリエルはそれ以上彼女に伝えるべき言葉を失う。

『——友軍、交戦を開始。セーラ、準備して』

「わかったわ」

眼下に広がる無数の光。それはストロボのように巨大な翼を照らす。装薬が放つ光から放たれた曳光弾がオレンジ色の線を引いていくその先には一際大きな光。巨鳥はその光を浴びながら、その腹を開けた。

◇ ◇ ◇

加熱した砲身からもうもうと煙が上がる。

その先には燃え盛る鉄塊。

転がる死体、その横を鋼鉄の履帯が地面を踏みしめる。38リッターのディーゼルエンジンが唸りを上げて黒煙を吐き出した。

『敵火点沈黙！次弾、HEAT！』

砲塔下部に並んだ砲弾が円を描くように回転。その内の一つが垂直に立ち上がると、薬室に叩き込まれた。

『HEAT装填！』

無煙火薬が吐き出した白い煙を、勢いよく掻き分けて巨大なお椀をさかさまにしたような戦車が姿を現すと、見計らったかの如く、対戦車ミサイルが突き刺さった。

ミサイルの弾頭の爆発と装甲表面のERAが発生させた爆発が重なり、灼熱の火球を発生させる。しかし、内部に仕込まれた無数の鉄板とゴムタイヤの積層構造によってメタルジェットは偏向され散らされてしまう。エネルギーを分散させられたメタルジェットは重厚

な厚さを誇るバツクプレートに阻まれた。

鋼鉄の猛獣は復讐を果たすべく索敵を開始する。その獣を支配する機械は岩影に潜む熱エネルギーを見つけ出すと、その砲身をそちらに向けた。

閃光と砲炎。

吹き出される死。それは寸分たがわず数キロ離れた地面に伏せる兵士達に叩きつけられた。

人の眼では捉えきれないほどの距離であったが、機械の目は誤魔化せなかった。

吹き荒れた死が収まると、散らばった生き物だった物の放つ熱すら捉えるその目は、次なる目標を探す。

『砂丘の奥に熱反応！APFSDS装填！』

『チャレンジャーだ！貧乏人め！骨董品を使いやがって！』

再び砲炎と共に砲弾が吹き出された。

それは旧式の傾斜した正面装甲を持つ戦車に突き刺さると侵徹を開始した。

3BM46、通称スヴィーニツと呼ばれる砲弾は1991年に開発されたロシア製の劣化ウラン合金製の砲弾だった。

タングステン製徹甲弾に比べて高い剛性を持つ劣化ウランの侵徹体は、鞘の部分が薄い為、断面積あたりの質量が高く、これによって極めて高いエネルギー収束率を実現できた。この為、侵徹は滑らかに進行した。

先端部のキャップが複合装甲のセラミックに亀裂を入れ拡張して、メインの侵徹体が最大効率でセラミックの割れ目に慣性エネルギーを集中できる構造を持ったモノリシックウラン合金の塊は、バタリーにナイフを入れるかの如くセラミックインゴットを切り裂いた。

2 km先の650 mmの鉄板を撃ち抜く力を持った砲弾は、7.4メガジュールのエネルギーを砲塔内部に解放する。

金属に比べ引っぱり強度が極めて低いセラミックは、いとも簡単に切り裂かれた。破壊されたバルクの一部が破られたバツクプレート
の巨大な穴から室内に侵入すると、車内のアラユル物を引き裂き、砲

塔後部の砲弾を誘爆させた。

『タダのセラミックじゃ劣化ウラン弾は防げねえぜ！ははは！』

車体弾薬庫に引火し、チャレンジャーⅠの車体から砲塔が吹き飛んだ。

その爆炎の横から新たな影。

『オイ！もう一台居やがった！』

重なる砲炎。侵徹体が交差した。

先に着弾したのはCHARM3劣化ウラン徹甲弾であった。

旧イギリス製の侵徹体は爆発^E反応^R装甲^Aと非爆発^E性^N反応^R装甲^A部分を射抜く。

本来であれば横方向の応力によって侵徹体をへし折る仕組みであったが、これはイギリス主力戦車の複合装甲にも取り入れられた仕組みであり、これを射抜ける槍を開発するのは道理であった。

2 km先の740 mmの鉄板を貫通できる侵徹体は一瞬にして戦車の弾薬を誘爆させ、砲塔を明後日の方向へ吹き飛ばした。

間髪入れず3BM46劣化ウラン弾が砲塔正面に着弾する。

非爆発性反応装甲部分をあっさりと貫いた砲弾はセラミックバルクも叩き割るとチャレンジャーⅠの複合装甲の物とは異なる部分に遭遇した。

鉄よりも遥かに重く硬い、尚且つセラミックバルクよりも極めて高い引張強度を持った金属層である。

ユゴニオ弾性限界を超えることのないタングステン合金の層は、一気に劣化ウラン弾の弾芯をエロージョンさせ、侵徹体を急減速させる。減速により歪みを生じた劣化ウランの芯は折損、侵徹能力を失った。

ついに侵徹体はバックプレートに運動エネルギーを吸収されてしまった。

『タダの劣化ウランじゃドーチェスター2は破れねえぜ』

再び砲炎が轟くと、その先に爆炎と共に砲塔が飛び上がる。

第二代チョバムアーマーに守られたチャレンジャーⅡは完全にT72を圧倒していた。

装甲と貫通力その両方に劣った存在。それは生存競争に負け、肉となる草食獣と同じであった。

◇ ◇ ◇

無数の黒煙が上がる砂漠の上からゆっくりと降下するネクストに揺られながらセーラは目標を探しては引金を引いていた。

『旧式の戦車が主力みたいですね。早く片付けてしましましょう』

「わかってるわ」

彼女の操るブルーネクストは再び光を放つ。

数十ギガワットオーダーの出力を連続で放つていくと、セラミックとタングステンの塊はいとも簡単に蒸発した。

核融合反応のエネルギーを間接的に利用したレーザーは正に太陽の如く、高熱を放つ。

激しいアブレーションは複合装甲に侵徹体の衝突以上の衝撃を与えてセラミックを粉碎。

拘束されたセラミックバルクはそのまま爆散し、砲塔内部の弾薬もろとも粉々になった。

「撃つても無駄なのに」

発射されたCHARM3劣化ウラン徹甲弾がプライマルアーマーに直撃すると、励起した微粒子が電位ポテンシャルを解き放つ。

侵徹体に大電流が流れ込むと、ジュール熱によって一瞬にしてプラズマ化する侵徹体。辛うじて溶け残った部分はローレンツ力によって左右に引き裂かれた。

質量を散らされた侵徹体の成れの果ては空気抵抗によって運動エネルギーを消失、装甲にすら届くことはなかった。

セーラは短い嘆息と共に引金を引くイメージを作り出す。

ネクストの操縦システムは素早く反応、核融合反応が作り出した電気エネルギーを熱エネルギーに変換、銃身内に存在したプラズマレンズが数キロ離れたチャレンジャー2の砲塔正面装甲にピントを合わせると、熱エネルギーの奔流は第二世代チョバムを水飴の如く溶かし

切った。

吹き飛ばされた戦車の残骸から伸びる黒煙が幾重にも増えていく空。ブルーネクストは壊すべき目標が居なくなった事を確認するよ
うに戦場の空を旋回した。

「全ての目標を破壊、ミド、迎えを寄越して頂戴」

大してダメージを負う事の無かった彼女の機体は新品そのものであった。だが、AMSから流れ込む情報は生身の脳髄に少なくない
負荷をかけていた。彼女は無意識に汗を拭う。

『本社より通信です。南スーダン政府軍の空港襲撃部隊が激しい抵抗
にあっているようです。侵攻部隊と共闘し、空港を制圧してほしいと
のことです』

「まだ、居るのね。でも、纏めて叩けると思えば有難いのかしら」

『相当数のレイヴンの存在が報告されています。気を抜かないでセー
ラ、戦いはまだ終わって居なわ』

ネクストが吐き出すプラズマトーチが白い翼を照らし出す。

三重フラップを命一杯に伸ばした超大型輸送機は、再び腹の中にネ
クストを収納した。

セーラは閉じられていく扉の向こうにちらりと顔を覗かせた戦車
の残骸を見て呟いた。

「解ってるわ」

———けど、通常兵器ノーマルにネクストは倒せない

無数の装甲兵器の残骸を飲み込んだ戦場、そこにはかつて最新鋭兵
器と謳われた物達の成れの果てが横たわっていた。

◇ ◇ ◇

滑走路脇にある無数のハンガーは殆どが火に包まれていた。

『畜生！ 巡航ミサイルがまた刺さったぞ！ SAM部隊は何をやっ
てるんだ!?!』

『小型ドローンの襲撃にあったようです!』

『数十億円の兵器が数万円のおもちゃでぶっ壊されるなんてひでえ話だぜ！クソツタレ！』

殆ど機能を成さなくなった地对空ミサイルが火に包まれる。

装薬に引火したミサイルはねずみ花火のようにクルクルと回りながら空の彼方に飛んでいく。

四脚型ACが装備した30mmガトリング砲が巡航ミサイルを捉えると、菱形の翼をもぎ取った。

滑走路脇の草むらに墜落した巡航ミサイルは何も無い地面の上に灼熱の火球を作り上げた。

数万ものストロボが輝いたかの如く辺り一面が照らし出される。

草むらに潜んでいた六輪式の地上走行型ドローンが、背中に搭載された飛行型自立兵器を飛び立たせた。

蜂の羽のような音で軽やかに浮かび上がると、六枚の回転翼を使い、防空部隊であるACへと突入していった。

腹に抱えた2kgのC4爆薬は速やかにACの弱点に届けられた。

炸裂音と共に、迎撃に当たっていたACの30mmガトリングが折れ曲がる。

『気を付けろー草むらに何か居やがる！』

攻撃を受けたACのパイロットは即座にリコンを放ち、スキャンモードに切り替えると草むらを隈なく調べる。

コックピットの画面に自走型自立兵器が映し出された。

『こんな所にまで来やがって！』

120mmショットガンが発射されると無数のダーツ状の侵徹体がバラまかれる。それは小型の自走兵器を粉々にした。

爆炎が夜空を照らす。

その雲間から無数の輸送機が顔を出す。

『上空に敵機！』

『敵AC多数降下中！迎撃しろ！』

ノーマルACに装備された地对空ミサイルが熱源を捉えて飛んでいく。

狙われた輸送機は無数のフレアをばら撒くと、天使の羽の如く広

がった。

しかし、物体の黒体放射とそれを捉え、画像認識するシーカー内臓の認知メカニズムを騙すには足りなかった。

ミサイルは輸送機に迫るが——それを光が貫いた。

『なんだ!?!』

『撃て!撃ちまくれ!』

緩やかに下降する一機のAC。殺到するミサイルが作り出す火球が流線形のフレームを照らす。

『下が賑やかだわ。ミド、予定変更。ノーマル部隊が制圧する前に此方で片付ける。彼等に任せていては時間が幾らあっても足りないわ』
ブルーネクストは大型のレーザーライフルを構える。

『前に出過ぎよ、セーラ。作戦通り動きなさい』

『あまり時間を使いたくないの。戦いを長引かせれば人も、物も無駄に失うわ』

励起したガスに大電流が流れ込むと、はじき出された電子が銃口から吐き出された。

複合装甲に包まれたキャノピーもギガワットクラスのエネルギーを受けてはひとたまりもない。

一瞬で爆散するノーマルACを流し見る彼女は次なる目標を次々と撃ち抜いていく。あつという間に滑走路は燃え盛る残骸で埋め尽くされた。

『降下地点確保。西側に敵反応、そちらの掃討に移る』

『——解ったわ』

彼女は深いため息と共に、次の行先を戦術データリンクに反映させた。

滑走路西側に展開していた戦車部隊の生き残りは、湖を背にして最後の抵抗を試みる。

『敵降下部隊、更に増加!滑走路は完全に制圧されました!』

『例の新型は!?!どこに行った!?!』

旋回式のサーマルスコープを覗くとそこには見たことも無い形の

シルエットを持ったAC。

『正面に居ます!』

『砲手! APFSDS装填! 撃て!』

装填管が離脱し、剥き出しになった侵徹体がプライマルアーマーに直撃するとプラズマ化した火球が出来上がる。

『クソ! かすり傷さえ付いていないとは! 次弾装填! 撃て!』

再び砲炎。しかし、何度繰り返しても防護膜を破る事は叶わず、虚しく火球を作り上げるだけであった。

『800mmの鉄板を撃ち抜ける砲弾を防ぐだ?!?』

『いったいどんな』

次の言葉を告げる前に、サーマルサイトに命一杯映り込んだ機体が、巨大な熱の塊を腕から発生させていた。

プラズマ化した重金属を磁場で収束させ回転させたブレードは、熱と微粒子で複合装甲を瞬時に切断、タレットリングよりも上の部分を粉々に引き裂いた。

『西側を制圧、ミド、基地の殆どを掌握したわ』

『解った。取り合えずお疲れ様。もう少して迎えが行くわ』

燃え盛る鋼鉄の猛獣は、今や動かぬ鉄の棺桶と化していた。

炎に浮かび上がるシルエットには陽炎の如く防護膜の輪郭が映っていた。

◇◇◇

湖畔から潜望鏡を覗かせるAC。

『まるでプロミネンスだな。ったく、肝が冷えるぜ』

『間一髪でしたね。我々は運がいい』

『どうだろうな。地獄に行く順番が遅いだけかもしれないぞ』

深谷大佐は戦術データリンク画面を操作しながら続ける。

『各機、状況を報告しろ』

『ハウンド1—1、異常なし』

『ハウンド2—2、異常なし』

『ハウンド3―3、異常なし』

『こちらスネーク1―1、こつちも死に損ないました。どうやら地獄は定員オーバーらしい』

『——ハハハ、何を言っている。地獄はここにあるさ——
——さあ、リターンマツチの始まりだ』

湖面の下に潜む巨人の群れは静かにその時を待っていた。